

福井県埋蔵文化財調査報告 第187集

糞置遺跡

—北陸新幹線建設事業に伴う調査12—

2024

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

序 文

このたび、北陸新幹線建設事業に伴って、福井市二上町において、平成28・29年度に実施しました糞置遺跡の発掘調査の成果をとりまとめたものです。

糞置遺跡は、福井平野南部の文殊山北麓に広がる沖積地上に立地しています。以前から、奈良時代の東大寺領糞置荘が設置された遺跡として知られています。そして、北陸自動車道建設に伴う昭和48・49年度の発掘調査により、弥生時代の集落遺跡も存在することが判明しています。以来、本遺跡において数度の発掘調査が行われてきました。

今回、2ヵ年にわたる本調査では、縄文時代から平安時代に営まれた各時代の集落等の一端が明らかになりました。弥生時代では、建物や方形周溝墓、護岸遺構などの様々な遺構を確認しました。また、奈良時代から平安時代にかけては、糞置荘に関する墨書土器などが出土しました。さらに、縄文時代から平安時代に至る数多くの土器や石器、木製品が出土したことも特筆できる点です。

なお、このような多種多様な遺構や遺物の多くは、当時の河川の川岸や埋没土から確認しています。当時の集落と周辺環境との関係性を理解していく上でも重要な成果といえるでしょう。

本書が、今後地域の歴史研究に寄与するとともに、各方面で多くの皆様に広く活用されて、埋蔵文化財への理解をより一層深めていただければ誠に幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行に至るまで、関係諸機関をはじめ、多くの皆様から多大なご支援とご協力を賜りましたこと、深く感謝申し上げます。

令和6年3月

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
所 長 中 川 佳 三

例 言

- 1 本書は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが、北陸新幹線建設事業に伴い、平成28・29年度に実施した糞置遺跡（福井県福井市二上町所在）の発掘調査報告書である。
- 2 糞置遺跡の調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の依頼を受けて、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターが実施し、山本孝一、中森敏晴、鈴間智子、木村茉莉が担当した。
- 3 発掘調査の支援業務は、(株)キミコンに委託した。
- 4 発掘調査は、平成28年（2016）10月3日から平成30年（2018）3月30日まで実施した。
- 5 出土遺物の整理作業は、平成30年（2018）4月1日から令和6年（2024）3月31日まで、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターにて実施した。
- 6 本書の編集は松本泰典が行い、松本と中川佳三、野路昌嗣が分担して執筆した。また、第5章は自然科学分析を委託したパリノ・サーヴェイ(株)、(一社)文化財科学研究センター、(株)イビソク、(株)吉田生物研究所、(株)パレオ・ラボから提出された成果報告に松本が加筆・編集して掲載した。執筆分担は以下のとおりである。
松本 第1～3章、第4章第1節・第2節1・2・5、第6章 中川 第4章第2節3・4
野路 第4章第2節6・7 パリノ・サーヴェイ(株) 第5章第1節（平成28年度委託分）
(一社)文化財科学研究センター 第5章第1節（平成29年度委託分）・第2節1・第6節2
(株)吉田生物研究所 第5章第2節2・第3節・第6節1（試料番号12～15）
(株)イビソク 第5章第4節・第6節1（試料番号1～10）
(株)パレオ・ラボ 第5章第5節1・2・第6節1（試料番号11）
- 7 本書に掲載した遺構・地形測量図ならびに空中写真は、(株)キミコンに委託して作成したものであり、一部改変して使用した。
- 8 糞置遺跡に関するこれまでの成果の発表のうち、本書と齟齬がある場合は、本書をもって訂正したものと了解されたい。
- 9 本書に掲載した遺物と調査に際して作成した図面・写真は、一括して福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 10 樹種同定の結果は第4章第2節の遺物観察表に掲載し、木製品の断面拡大写真は福井県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 本書における水平レベルの表示は、海拔(m)を示す。方位は真北と座標北を併用し、前者に限り「T.N.」と表記した。なお、X・Y座標値は国土平面直角座標系VIに基づく。
- 12 土層や土器の色調については、主に農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を基準とする。
- 13 写真図版の縮尺は不同である。遺物の写真図版では、「挿図番号ー遺物番号」の表記を用いた。また、木製品の遺物写真については、保存処理業者による撮影のため、一部の実測図と対応していない。
- 14 遺物実測図の網掛けは、土器・陶磁器の赤色顔料・漆・釉、石器の磨痕・被熱痕、木製品の炭化面・樹皮を示す。
- 15 須恵器の墨書資料については、宇佐美倫太郎氏（福井県教育庁生涯学習・文化財課）の協力を得た。
- 16 発掘調査ならびに本書の作成に際しては、次の方々および機関のご協力を得た（敬称略）。
伊藤正人 宇佐美倫太郎 久田正弘 福井市教育委員会 福井県未来創造部新幹線建設推進課
- 17 発掘調査には、地元の方々の参加・ご協力を得た。また、遺物整理作業は、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの整理・普及グループ職員および会計年度任用職員が行った。

目 次

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 遺跡の概要	11
第1節 基本層序	11
第2節 遺構の検出状況	20
第3節 遺物の出土状況	20
第4章 遺構と遺物	21
第1節 遺構	21
第2節 遺物	64
第5章 自然科学分析	215
第1節 土壌分析	215
第2節 塗膜分析	286
第3節 表面構造分析	292
第4節 赤色顔料分析	297
第5節 人骨の分析	299
第6節 放射性炭素年代測定	304
第6章 まとめ	313

図 版 目 次

図版第1 遺跡	(3) SI 1 周溝下層遺物出土状況（北東から）
(1) 調査区遠景（南東から）	(4) SI 1 周溝上層遺物出土状況（北から）
(2) 調査区近景（北から）	(5) SZ 1（西から）
図版第2 I 区遺構	(6) SZ 1 周溝断面C（南から）
(1) SI 1（東から）	(7) SZ 1 周溝遺物出土状況（西から）
(2) SI 1 周溝断面A（西から）	(8) SZ 1 周溝遺物出土状況（北から）

図版第3 I区遺構

- (1) SD5・6 (南西から)
- (2) SD12 (南から)
- (3) SK1断面 (南東から)
- (4) SK3遺物出土状況 (南西から)
- (5) SK5断面 (西から)
- (6) SK6断面 (南から)
- (7) SK7出土状況 (南から)
- (8) SK8断面 (西から)

図版第4 I区遺構

- (1) SR1A ③区 (俯瞰)
- (2) SR1断面A (奥側断面 南西から)
- (3) SR1A 調査区南壁断面 (北から)
- (4) SR1遺物出土状況 (南西から)
- (5) SR1遺物出土状況 (東から)
- (6) SR1田舟出土状況 (北西から)
- (7) SR1 竪杵出土状況
- (8) SR1人骨出土状況 (北東から)

図版第5 II区遺構

- (1) 調査区北半全景 (北から)
- (2) 調査区南半全景 (南から)

図版第6 II区遺構

- (1) SB1 (北から)
- (2) SB2 (東から)
- (3) SB3 (東から)
- (4) SB4 (北から)
- (5) SB5 (北西から)
- (6) SB6 (北から)
- (7) SB7 (北から)
- (8) SB9、SD3・6・7 (東から)

図版第7 II区遺構

- (1) SB3-SP32 (西から)
- (2) SD3遺物出土状況 (北東から)
- (3) SD2・6 (北東から)
- (4) SD2遺物出土状況 (北東から)
- (5) SK1遺物出土状況 (東から)
- (6) SK10断面 (東から)
- (7) SK13遺物出土状況 (南から)

- (8) SK13断面 (南西から)

図版第8 II区遺構

- (1) SR1 (東から)
- (2) SR1遺物出土状況 (北西から)
- (3) SR1遺物出土状況 (北東から)
- (4) SR1遺物出土状況 (西から)
- (5) SR1遺物出土状況 (北西から)

図版第9 II区遺構

- (1) SR1木鍬出土状況 (北から)
- (2) SR1板材出土状況
- (3) SR1縄文土器出土状況 (北東から)
- (4) SR1人骨出土状況 (西から)
- (5) SR1人骨出土状況 (北から)
- (6) SR2断面 (北東から)
- (7) SR2遺物出土状況 (北東から)
- (8) SR2祭祀具出土状況 (東から)

図版第10 II区遺構

- (1) SR3 (北西から)
- (2) SR4護岸遺構検出状況 (北東から)
- (3) SR4断面 (西から)
- (4) SR4杭列検出状況 (東から)
- (5) SR4護岸遺構断面B南半 (東から)
- (6) SR4護岸遺構断面B北半 (東から)
- (7) SR4内側杭列 (東から)
- (8) SR4護岸遺構断面E (南から)

図版第11 III区遺構

- (1) 調査区北半全景 (北から)
- (2) 調査区南半全景 (俯瞰)
- (3) SX1 (北西から)
- (4) SX1断面B (南から)
- (5) SD1北半 (南から)
- (6) SD1南半 (北から)

図版第12 III区遺構

- (1) SD1断面C (北から)
- (2) SD1須恵器出土状況 (北東から)
- (3) SD1須恵器出土状況 (北から)
- (4) SD1遺物出土状況 (俯瞰)
- (5) SD1木簡出土状況

- (6) SR1 (西から)
- (7) SR2断面B北半 (西から)
- (8) SR2断面B南半 (西から)

図版第13 IV・V区遺構

- (1) IV区下段部全景 (北から)
- (2) IV区上段部全景 (北から)
- (3) IV区SR1遺物出土状況 (南から)
- (4) IV区SR1 樋検出状況 (北から)
- (5) IV区SR1木製品材検出状況 (西から)
- (6) IV区木製品検出状況 (北から)
- (7) V区全景 (北から)
- (8) V区SX1検出状況 (東から)

図版第14 VI区遺構

- (1) 調査区全景 (東から)
- (2) SI1・2 (北から)

図版第15 VI区遺構

- (1) SI1遺物出土状況 (南東から)
- (2) SI1 炉断面 (東から)
- (3) SI1-SP2断面 (北西から)
- (4) SI1-SP11~13断面 (南西から)
- (5) SI2集石検出状況 (北から)
- (6) SI2断面B (北西から)
- (7) SI2-SP54断面 (東から)
- (8) SI2-SP58断面 (北東から)

図版第16 遺物 縄文土器 I区

図版第17 遺物 縄文土器 I区

図版第18 遺物 縄文土器 I・II区

図版第19 遺物 縄文土器・土製品 I・II・III区

図版第20 遺物 弥生土器・土師器 I区

図版第21 遺物 弥生土器・土師器 I区

図版第22 遺物 弥生土器・土師器 I区

図版第23 遺物 弥生土器・土師器 I区

図版第24 遺物 弥生土器・土師器 I区

図版第25 遺物 弥生土器・土師器 I区

図版第26 遺物 弥生土器・土師器 I区

図版第27 遺物 弥生土器・土師器 II区

図版第28 遺物 弥生土器・土師器 II区

図版第29 遺物 弥生土器・土師器 II区

図版第30 遺物 弥生土器・土師器 II区

図版第31 遺物 弥生土器・土師器 II・III・VI区

図版第32 遺物 須恵器 III区

図版第33 遺物 須恵器 III区

図版第34 遺物 須恵器・土師器 III区

図版第35 遺物 須恵器 III区

図版第36 遺物 須恵器 III区

図版第37 遺物 須恵器 IV区

図版第38 遺物 須恵器 IV区

図版第39 遺物 須恵器 IV区

図版第40 遺物 須恵器 IV区

図版第41 遺物 須恵器・土師器 IV・V・VI区

図版第42 遺物 陶磁器・土師器 IV区

図版第43 遺物 須恵器・陶磁器・土師器 IV・V・VI区

図版第44 遺物 須恵器 IV区

図版第45 遺物 須恵器 IV区

図版第46 遺物 石器・石製品 I・II区

図版第47 遺物 石器・石製品 II・III・IV・VI区

図版第48 遺物 木製品 I区

図版第49 遺物 木製品 I区

図版第50 遺物 木製品 II区

図版第51 遺物 木製品 III・IV区

図版第52 遺物 木製品(弓) I・III・IV区

挿 図 目 次

第1図 調査区位置図

第2図 発掘現場写真

第3図 周辺の地形図

第4図 周辺の遺跡分布図

第5図 基本層序柱状図

第6図 I区遺構全体図

第7図 II区遺構全体図

第8図 III・IV区遺構全体図

第9図	V・VI区遺構全体図	第47図	IV区SR1 桶実測図	第84図	I区SW1 出土土器実測図－6	第121図	II区出土石器実測図－4
第10図	I区SI1 実測図－1	第48図	V区SX1 実測図	第85図	II区SD2・3・9・10、SK1・5・6・10・13出土土器実測図	第122図	III区出土石器実測図－1
第11図	I区SI1 実測図－2	第49図	VI区SI1 実測図－1	第86図	II区SR1 出土土器実測図－1	第123図	III・IV・VI区出土石器実測図
第12図	I区SZ1 実測図	第50図	VI区SI1 実測図－2	第87図	II区SR1 出土土器実測図－2	第124図	I区出土木製品実測図－1
第13図	I区SD4～11実測図	第51図	VI区SI2 実測図	第88図	II区SR1 出土土器実測図－3	第125図	I区出土木製品実測図－2
第14図	I区SD12実測図	第52図	深鉢形土器・壺形土器・底部分類図	第89図	II区SR1 出土土器実測図－4	第126図	I区出土木製品実測図－3
第15図	I区SK1～4 実測図	第53図	鉢形土器・注口土器分類図	第90図	II区SR2 出土土器実測図－1	第127図	I区出土木製品実測図－4
第16図	I区SK5～8 実測図	第54図	I区SD5・6・12出土土器実測図	第91図	II区SR2 出土土器実測図－2	第128図	I区出土木製品実測図－5
第17図	I区SR1 実測図	第55図	I区SR1 出土土器実測図－1	第92図	II区SR2 出土土器実測図－3	第129図	I区出土木製品実測図－6
第18図	I区SR1 杭群実測図	第56図	I区SR1 出土土器実測図－2	第93図	II区SW1 出土土器実測図－1	第130図	I区出土木製品実測図－7
第19図	I区SR1 人骨実測図	第57図	I区SR1 出土土器実測図－3	第94図	II区SW1 出土土器実測図－2	第131図	I区出土木製品実測図－8
第20図	II区SB1 実測図	第58図	I区SR1 出土土器実測図－4	第95図	II区SW1 出土土器実測図－3	第132図	I区出土木製品実測図－9
第21図	II区SB2 実測図	第59図	I区SR1 出土土器実測図－5	第96図	III区SR2 出土土器実測図	第133図	I区出土木製品実測図－10
第22図	II区SB3 実測図	第60図	I区SR1 出土土器実測図－6	第97図	VI区SI1・2 出土土器実測図	第134図	II区出土木製品実測図－1
第23図	II区SB4 実測図	第61図	I区SR1 出土土器実測図－7	第98図	III区SD1 出土土器実測図－1	第135図	II区出土木製品実測図－2
第24図	II区SB5 実測図	第62図	I区SR1 出土土器実測図－8	第99図	III区SD1 出土土器実測図－2	第136図	II区出土木製品実測図－3
第25図	II区SB6 実測図	第63図	I区SR1・SW1 出土土器実測図	第100図	III区SD1 出土土器実測図－3	第137図	II区出土木製品実測図－4
第26図	II区SB7 実測図	第64図	II区SR1 出土土器実測図	第101図	III区SD1 出土土器実測図－4	第138図	II区出土木製品実測図－5
第27図	II区SB8 実測図	第65図	II区SR1 出土注口土器実測図	第102図	III区その他出土土器実測図	第139図	II区出土木製品実測図－6
第28図	II区SB9 実測図	第66図	II区SR2・SW1 出土土器実測図	第103図	IV区SR1 出土土器実測図－1	第140図	II区出土木製品実測図－7
第29図	II区SD2～7 実測図	第67図	III区SR2・SW1 出土土器実測図	第104図	IV区SR1 出土土器実測図－2	第141図	II区出土木製品実測図－8
第30図	II区SD2・3・6・7 実測図	第68図	甕形土器分類図	第105図	IV区SR1 出土土器実測図－3	第142図	III区出土木製品実測図
第31図	II区SD9、SK1・5・6 実測図	第69図	壺形土器分類図	第106図	IV区SR1 出土土器実測図－4	第143図	III・IV区出土木製品実測図
第32図	II区SK10・13実測図	第70図	高坏形土器・器台形土器分類図	第107図	IV区SR1 出土土器実測図－5	第144図	IV区出土木製品実測図
第33図	II区SR1・4 実測図	第71図	鉢形土器・蓋形土器・手焙形土器・脚部分類図	第108図	IV区SR1 出土土器実測図－6	第145図	平成28年度珪藻化石群集変遷図
第34図	II区SR1 人骨実測図	第72図	I区SI1 出土土器実測図	第109図	V・VI区出土土器実測図	第146図	平成28年度珪藻化石写真
第35図	II区SR4 護岸遺構実測図－1	第73図	I区SI1、SZ1、SD5・6 出土土器実測図	第110図	IV区出土土器・陶磁器実測図	第147図	平成29年度III区珪藻化石群集変遷図
第36図	II区SR4 護岸遺構実測図－2	第74図	I区SD8・12、SK1・4 出土土器実測図	第111図	IV～VI区出土土器・陶磁器実測図	第148図	平成29年度IV区珪藻化石群集変遷図
第37図	II区SR4 護岸遺構実測図－3	第75図	I区SR1 出土土器実測図－1	第112図	土製品実測図	第149図	平成29年度珪藻化石写真
第38図	II区SR2、SD8・10～12実測図	第76図	I区SR1 出土土器実測図－2	第113図	I区出土石器実測図－1	第150図	平成28年度花粉化石群集変遷図
第39図	III区SD1 南端部実測図	第77図	I区SR1 出土土器実測図－3	第114図	I区出土石器実測図－2	第151図	平成28年度花粉化石写真－1
第40図	III区SD1 中央部実測図	第78図	I区SR1 出土土器実測図－4	第115図	I区出土石器実測図－3	第152図	平成28年度花粉化石写真－2
第41図	III区SD1 北端部実測図	第79図	I区SW1 出土土器実測図－1	第116図	I区出土石器実測図－4	第153図	平成29年度III区花粉化石群集変遷図
第42図	III区SX1 実測図	第80図	I区SW1 出土土器実測図－2	第117図	I区出土石器実測図－5	第154図	平成29年度IV区花粉化石群集変遷図
第43図	III区SR1・2 実測図	第81図	I区SW1 出土土器実測図－3	第118図	II区出土石器実測図－1	第155図	平成29年度花粉化石写真－1
第44図	III区SR1 実測図	第82図	I区SW1 出土土器実測図－4	第119図	II区出土石器実測図－2	第156図	平成29年度花粉化石写真－2
第45図	IV区SR1 実測図－1	第83図	I区SW1 出土土器実測図－5	第120図	II区出土石器実測図－3	第157図	平成28年度種実遺体群集変遷図
第46図	IV区SR1 実測図－2					第158図	平成28年度種実遺体写真－1

第159図	平成28年度種実遺体写真－ 2
第160図	平成29年度Ⅲ区種実遺体群集変遷図
第161図	平成29年度Ⅳ区種実遺体群集変遷図
第162図	平成29年度種実遺体写真－ 1
第163図	平成29年度種実遺体写真－ 2
第164図	平成28年度木材断面写真－ 1
第165図	平成28年度木材断面写真－ 2
第166図	平成28年度木材断面写真－ 3
第167図	平成29年度木材断面写真－ 1
第168図	平成29年度木材断面写真－ 2
第169図	平成29年度木材断面写真－ 3
第170図	平成29年度木材断面写真－ 4
第171図	塗膜断面写真
第172図	蛍光X線分析結果
第173図	FT-IR分析結果

第174図	塗膜断面写真
第175図	赤色部断面写真
第176図	FT-IR分析結果－ 1
第177図	FT-IR分析結果－ 2
第178図	EPMA分析結果
第179図	蛍光X線分析結果
第180図	試料写真
第181図	人骨の分布状況写真
第182図	人骨部位写真
第183図	人骨コラーゲンの炭素・窒素同位体比と推定されるタンパク質源
第184図	暦年較正結果－ 1
第185図	暦年較正結果－ 2
第186図	暦年較正結果－ 3

目 次

第 1 表	周辺の遺跡一覧表
第 2 表	墨書土器（須恵器）積文一覧表
第 3 表	縄文時代の土器観察表
第 4 表	弥生・古墳時代の土器観察表
第 5 表	律令期の土器観察表
第 6 表	中・近世の土器・陶磁器観察表
第 7 表	土製品観察表
第 8 表	石器・石製品観察表
第 9 表	木製品観察表
第10表	平成28年度土壌分析試料一覧表
第11表	平成28年度土壌試料の土質観察表
第12表	平成29年度土壌分析試料一覧表
第13表	平成28年度珪藻分析結果一覧表
第14表	平成28年度珪藻分析結果一覧凡例
第15表	平成29年度珪藻分析結果一覧表
第16表	平成28年度花粉分析結果一覧表
第17表	平成29年度花粉分析結果一覧表
第18表	平成28年度種実分析結果一覧表
第19表	平成29年度種実分析結果一覧表
第20表	平成28年度樹種同定結果一覧表

第21表	平成29年度樹種同定結果一覧表
第22表	Ⅲ区SR 2における主要な珪藻と植物および環境と植生
第23表	Ⅳ区SR 1における主要な珪藻と植物および環境と植生
第24表	塗膜分析試料一覧表
第25表	塗膜分析試料一覧表
第26表	塗膜分析結果一覧表
第27表	表面構造分析試料一覧表
第28表	表面構造分析結果一覧表
第29表	赤色顔料分析試料一覧表
第30表	人骨観察結果一覧表
第31表	人骨コラーゲンの炭素・窒素安定同位体比分析結果一覧表
第32表	年代測定試料一覧表および処理表
第33表	年代測定および暦年較正結果一覧表
第34表	年代測定試料一覧表および処理表・年代測定結果一覧表
第35表	年代測定および暦年較正結果一覧表

第 1 章 調査の経緯

第 1 節 調査に至る経緯（第 1 図）

糞置遺跡は、福井市二上町に所在する。調査前は水田・畑地・住宅地・山林である。糞置遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、縄文時代から近世までの遺物散布地（福井県遺跡地図番号01181）として登録されている。これまでも、昭和48・49年度に北陸自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、以降は福井県教育庁埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文センターと略）によって、平成11年度の農道敷設工事に伴う発掘調査、平成14・15年度の県営圃場整備事業に伴う発掘調査、平成21年度の清水美山線道路改良工事に伴う発掘調査が行われ、近辺の二上・半田古墳群では平成29年度に北陸新幹線建設工事に伴う発掘調査が行われている。

北陸新幹線は、東京から北陸地方を経て大阪に至る路線として国の整備計画が決定され、平成27年に長野・金沢間が営業を開始し、残る金沢・大阪間のうち福井駅部は平成17年、金沢・敦賀間については平成24年に工事実施計画が認可され、同年8月に着工された。これに伴い、福井県教育庁生涯学習・文化財課（以下、文化財課）が工事の影響を受ける埋蔵文化財の取り扱いについて、事業主体である独立行政法人鉄道運輸施設整備機構（以下、鉄道機構）と福井県未来創造部新幹線建設推進課の間で協議を行った。

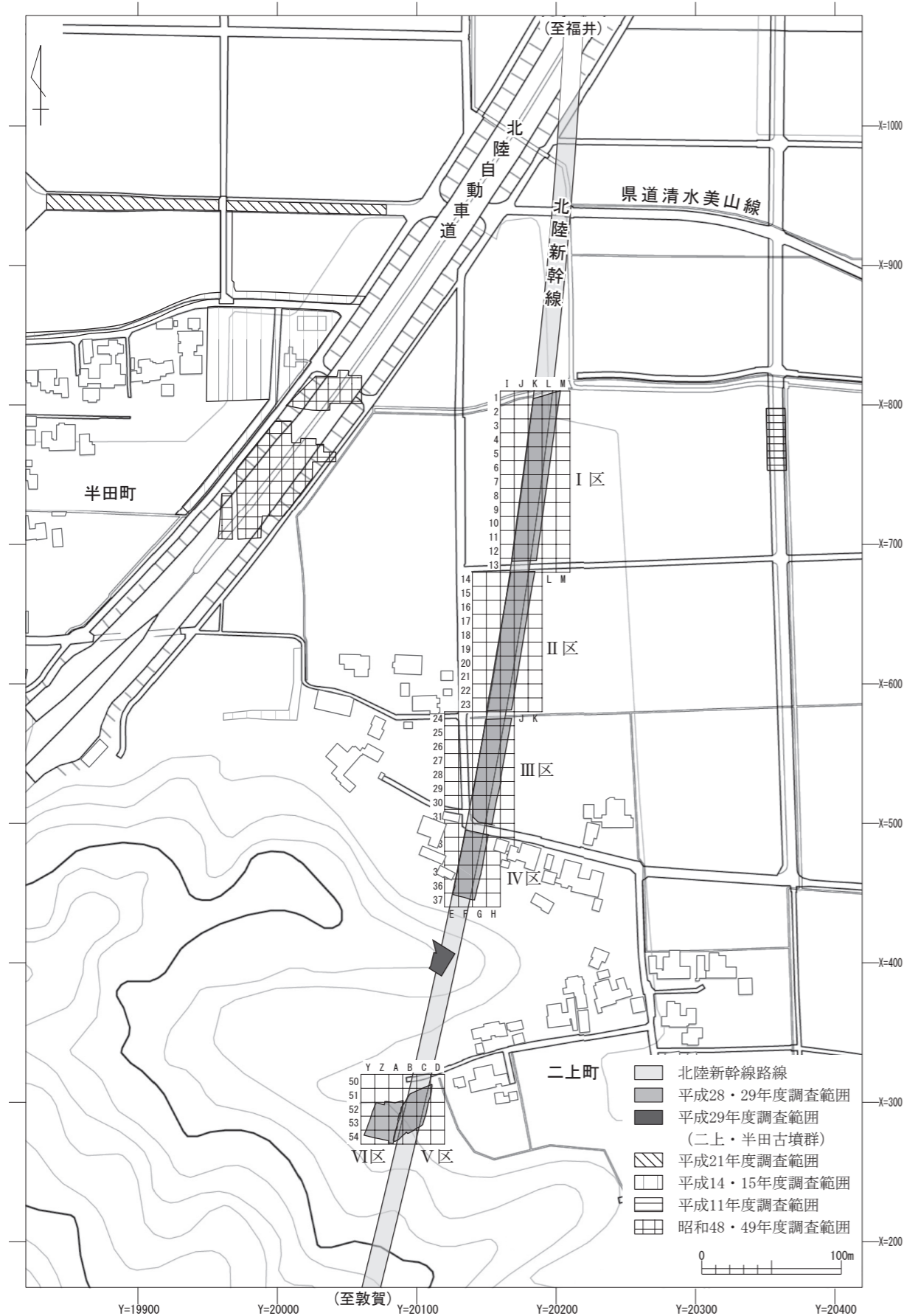
結果、埋蔵文化財包蔵地内において建設工事により直接的な影響を及ぼす箇所と、恒久的な工作物設置場所について、内容把握のための1次調査（試掘調査）を実施し、必要に応じて記録保存のため2次調査（発掘調査）や工事立会を実施すること、また、調査は鉄道機構が文化財課に依頼し、県埋文センターが実施することとなった。

糞置遺跡の1次調査は平成27年10月6日～8日、平成28年7月29日・8月3日、平成30年3月2日に行った。平成27・28年の1次調査では北陸新幹線路線と県道清水美山線が交差する地点から、2次調査Ⅴ・Ⅵ区までの範囲を対象に20mの間隔で試掘坑を40箇所設定して実施した。土層の堆積状況などから、沖積低地上に形成された微高地や河川を確認し、微高地上には弥生時代から中世にかけての遺構、河川堆積土からは縄文時代晩期から古墳時代にかけての土器や木製品が多く含まれていることがわかった。丘陵の裾部にも遺構や遺物包含層があることが判明したが、2次調査Ⅰ区より北側には遺構や遺物は確認できなかった。この結果を受けて、1次調査で遺構や遺物包含層を確認できた範囲を対象に、平成28年10月～平成30年3月の期間に2次調査として本格発掘調査を行うこととなった。

第 2 節 調査の経過（第 1 図）

1 現地調査

発掘調査は、平成28年10月3日から12月28日、平成29年3月1日から6月30日、平成29年11月1日から平成30年3月30日までの2年度にわたって実施した。調査区は、北からⅠ～Ⅵ区までに振り分けた。各調査区の調査期間は、Ⅰ区北側・中央は平成28年10月14日～12月6日、平成29年3月1日～3月30日、Ⅰ区南側は平成29年5月8日～6月28日、Ⅱ区は平成28年10月26日～12月28日、平成29年3月1日～3月31日、Ⅲ区南半（Ⅲ－2区）は平成28年11月9日～12月28日、Ⅲ区北半（Ⅲ－1区）は平成29年4月3日～5月2日、Ⅳ区は平成29年4月24日～6月23日、Ⅴ区は平成29年3月1日～3月29日、Ⅵ区は平



第1図 調査区位置図 (縮尺1/4,000)

成29年11月15日～12月28日、平成30年2月22日～3月28日である。I区からVI区までの調査表面積は、7,244㎡である。調査区には、一辺10mの方形グリッドを設定し、北から南方向に1～54、西から東方向にY・Z・A～Mの記号を付し、グリッド名とした。

調査では、地点によっては樹木伐採から始まり、表土を重機で掘削したのち、人力にて遺構検出・遺構掘削を行った。遺構図化や撮影は、委託業者による空中写真測量とドローンの全景撮影で実施し、個別遺構の撮影については随時行った。また、発掘現地説明会を平成29年6月23・24日に開催した。事務所・器材の搬出入や発掘作業員の手配、空中写真測量、全景撮影などについては株式会社キミコンに委託した。

2 遺物整理作業

本格調査で出土した遺物のコンテナ箱数は、合計213箱である。遺物整理作業は調査担当者および整理・普及グループの職員があたり、平成30年度に遺物の洗浄・注記および木製品の保存処理、令和元年度に遺物の接合および木製品の保存処理、令和2年度に遺物の復元および全体測量図合成および漆付着土器の保存処理、令和3年度に遺物の復元・実測および木製品の保存処理、令和4年度に遺物の実測および木製品の保存処理、令和5年度には遺物の実測および遺物実測図のトレースを実施したほか、原稿執筆、遺構・遺物図版および写真図版作成、遺物写真撮影を進めた。

なお、遺物の洗浄・注記は株式会社キミコン、木製品や漆付着土器の保存処理、木製品の樹種同定、年代測定は株式会社イビソク・株式会社吉田生物研究所・一般社団法人文化財科学研究センター、出土人骨の取上げ・保存処理・分析・年代測定は株式会社パレオ・ラボ、土壌科学分析はパリーノ・サーヴェイ株式会社・一般社団法人文化財科学研究センター、朱塗り盾の塗膜分析は一般社団法人文化財科学研究センター、漆塗り須恵器の塗膜分析と表面構造分析は株式会社吉田生物研究所、赤色顔料分析は株式会社イビソクに委託した。

以上の作業を経て、令和6年3月の本報告書刊行をもって糞置遺跡の発掘調査事業を完了した。

調査日誌 (抄録)

平成28年度 (2016)

- 9月26日 I区表土剥ぎ開始 (～10月1日)
- 10月3日 II区表土剥ぎ開始 (～10月7日)
- 10月14日 III区表土剥ぎ開始
- 10月14日 I区調査開始
- 10月18日 I区遺構検出
- 10月26日 II区調査開始。I区でSZ1を確認
- 11月9日 III区調査開始
- 11月16日 II区で掘立柱建物を検出
- 11月17日 III区SD1で土器や木製品が多く出土
- 11月30日 I区SI1の周溝から木製品を検出
- 12月6日 I区調査中断
- 12月19日 II区で護岸遺構を検出
- 12月28日 II区調査中断・III区調査終了
- 2月20日 V区表土剥ぎ開始 (～2月23日)
- 3月1日 I・II区調査再開・V区調査開始
- 3月23日 II区SR1河底で人骨・赤彩部材出土
- 3月29日 V区調査終了。I区で縄文土器が出土
- 3月30日 I区調査中断
- 3月31日 II区調査終了

平成29年度 (2017)

- 4月3日 III区調査開始
- 4月4日 IV区表土剥ぎ開始 (～4月21日)
- 4月24日 IV区調査開始
- 5月2日 III区調査終了
- 5月8日 I区調査開始
- 5月16日 I区SR1から木製品が多量出土
- 5月19日 IV区SR1で木製榼を検出
- 6月23日 IV区調査終了。現地説明会開催
- 6月24日 現地説明会開催 (約100名来場)
- 6月28日 I区調査終了
- 11月13日 VI区表土剥ぎ開始 (～11月22日)
- 11月15日 VI区調査開始
- 12月15日 VI区SI1・2を検出
- 12月28日 VI区調査中断 (2月中は大雪のため作業中止)
- 2月22日 VI区調査再開
- 3月6日 VI区SI1・2の埋土掘削を開始
- 3月28日 VI区調査終了



ベルトコンベア移動



遺構検出



遺構掘削



遺物検出



遺構測量



撮影前清掃



調査区全体撮影



現地説明会

第2図 発掘現場写真

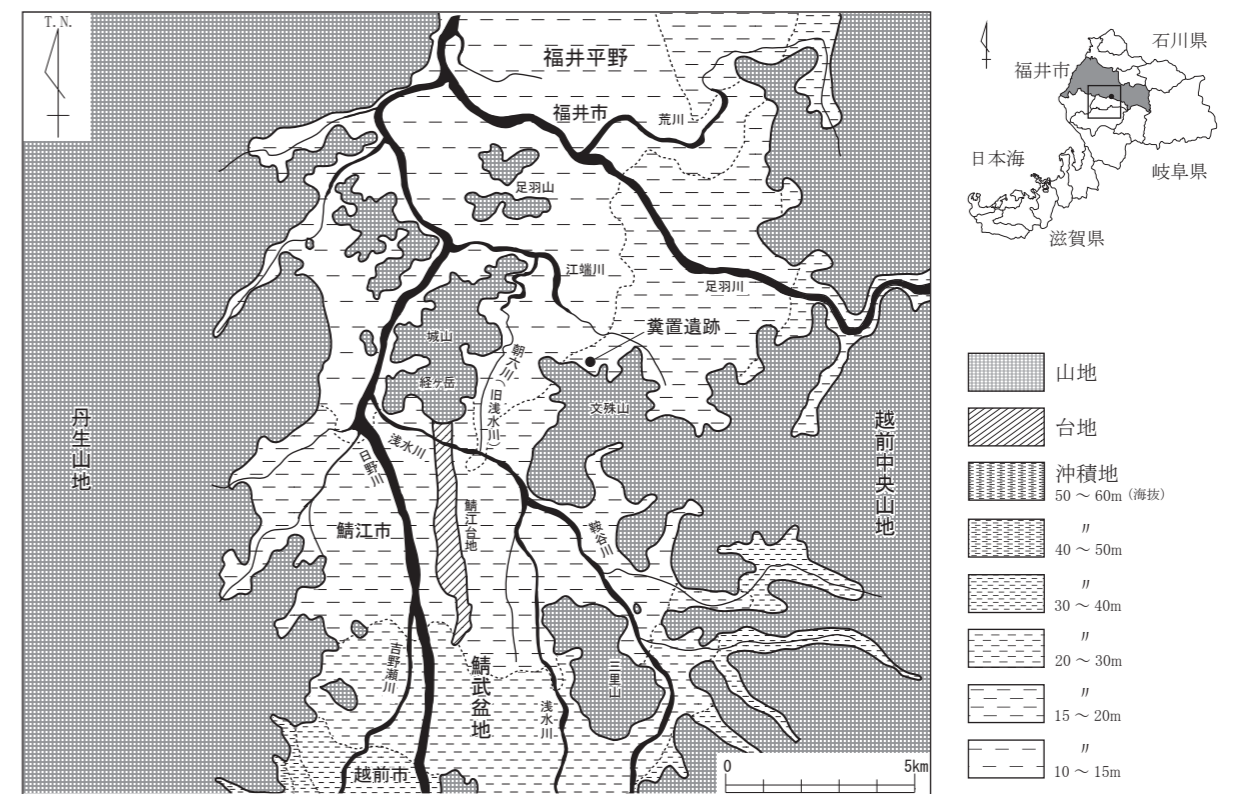
第2章 遺跡の位置と周辺の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境 (第3図)

福井県は、敦賀湾東方の木ノ芽山地を境にして、嶺北地方と嶺南地方に分けられる。嶺北地方は、沖積平野と山塊からなる地形であり、九頭竜川下流域には坂井平野、足羽川下流域には福井平野、日野川中・下流域には武生・鯖江盆地(鯖武盆地)が形成されている。福井平野は、九頭竜川や足羽川、日野川の三河川によって形成された沖積平野であり、東方の越前中央山地と西方の丹生山地の間に挟まれた福井断層の凹地に、河川堆積物が流れ込んで形成されたと考えられている。この平野は、山地から派生する洪積台地や、九頭竜川や足羽川による扇状地のほかは、緩傾斜地がみられないのが特徴である。

糞置遺跡は、福井市街南東の福井市半田町・二上町に位置する。遺跡の標高は約18mを測り、現状は主に水田となっている。福井平野と鯖武盆地は、越前中央山地から西に張り出す足羽山塊によって隔てられるが、この足羽山塊の西端にやや北方へ張り出すのが標高366mの文殊山であり、調査地である糞置遺跡はこの北麓に位置している。文殊山の北西側には、約5km離れた城山東麓まで微高地が続き、福井平野と鯖武盆地の境となっている。文殊山の東側からは江端川が流れるが、文殊山の北麓や西麓からも多くの小河川が北西方向に流れ出ており、その多くは江端川に合流する。

現在の浅水川は新浅水川と称し、城山の南を迂回して日野川に合流しているが、これは洪水対策を目的とした明治43年(1910)から大正13年(1924)の開削によるもので(福井県1998)、旧来の浅水川(現朝六川)は城山東側、浅水から南江守までを蛇行して北上し、微高地を通過して江端川に合流していた。新浅水川が流れる以前、江戸時代においては藩主の鷹狩りの地でもあったため、周辺樹木の伐採が禁止



第3図 周辺の地形図(縮尺1/200,000)

されていたため、毎年水害に悩まされ続けていたという。文殊山北麓においても、その大部分が低湿地に囲まれている。

文殊山北麓は、広大な低湿地と微高地で形成されており、平成13・14年度に実施した試掘調査では北陸本線が走る半田集落西側に広がる水田は、山麓裾まで腐食した植物を多く含む、深い沼地であることが判明している（福井県埋文2006）。一方で、半田集落とその東側に位置する二上集落の間には、現在の北陸自動車道に重なるようにして舌状微高地が存在したようであり、ここに古代以前の生活域や墓域が存在していた可能性がある。糞置遺跡は、この舌状微高地とその東西に広がる半田・二上両集落、周辺の水田域に広がる遺跡である。

第2節 歴史的環境（第4図・第1表）

糞置遺跡（1）の位置する福井平野南部には多くの遺跡が存在し、これまでも多くの発掘調査が行われている。糞置遺跡周辺で得られた発掘調査の成果を中心に、糞置遺跡周辺の遺跡の様相について、時代別に概観する。

第1表 周辺の遺跡一覧表

挿図番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	挿図番号	遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代
1	01181	糞置遺跡	福井市二上町他	集落跡	縄文～近世	28	01296	帆谷谷田遺跡	福井市帆谷町	散布地	奈良・平安
2	01182	東大寺領糞置荘	福井市二上町他	荘園跡	奈良	29	01295	二神古墳群	福井市二神町	古墳	古墳
3	01180	二上・半田古墳群	福井市二上町他	古墳	古墳	30	01178	鉾ヶ崎遺跡	福井市鉾ヶ崎町	散布地	古墳～平安
4	01198	天王金森遺跡	福井市天王町	散布地	奈良～平安	31	01179	鉾ヶ崎古墳群	福井市鉾ヶ崎町	古墳	古墳
5	01192	下蒔生田遺跡	福井市下蒔生田町	集落跡	弥生～近世	32	01276	主計中今村遺跡	福井市主計中町	散布地	—
6	01199	上六条遺跡	福井市上六条町	散布地	奈良～平安	33	01283	角原老文字遺跡	福井市角原町	散布地	—
7	01200	天王遺跡	福井市天王町	散布地	縄文	34	01284	角原中町遺跡	福井市角原町	散布地	奈良・平安
8	01191	上蒔生田遺跡	福井市上蒔生田町	集落跡	縄文～平安	35	01285	角原古墳群	福井市角原町	古墳・城跡	古墳・中世
9	01168	下荒井遺跡	福井市下荒井町	散布地	—	36	01286	角原遺跡	福井市角原町	散布地	古墳
10	01169	今市免鳥遺跡	福井市今市町	散布地	奈良・平安	37	01287	生野古墳群	福井市生野町	古墳	古墳
11	01173	今市遺跡	福井市今市町	集落跡	奈良・平安	38	01289	三本木遺跡	福井市三本木町	散布地	—
12	01177	大土呂遺跡	福井市大土呂町	散布地	古墳～平安	39	01292	南山城跡	福井市南山町	城跡	中世
13	01188	下河北遺跡	福井市下河北町	散布地	中世	40	01293	文殊山城跡	福井市文殊町	城跡	中世
14	01190	下河北藤之木遺跡	福井市下河北町	散布地	—	41	01294	文殊山古墳	福井市文殊町	古墳	古墳
15	01187	太田遺跡	福井市太田町	散布地	奈良～平安	42	01305	西袋遺跡	福井市西袋町	散布地	奈良～中世
16	01189	上河北江原町遺跡	福井市上河北町	散布地	弥生～中世	43	01303	生部横穴墓群	福井市生部町	横穴	古墳
17	01261	上細江遺跡	福井市上細江町	散布地	弥生・中世	44	01304	生部西垣内遺跡	福井市生部町	散布地	—
18	01267	徳光遺跡	福井市徳光町	散布地	弥生・平安・中世	45	01301	生部遺跡	福井市生部町	散布地	奈良～中世
19	01185	北山入道町遺跡	福井市北山町	散布地	奈良～中世	46	01302	生部古墳群	福井市生部町	古墳	古墳
20	01329	徳光大島遺跡	福井市徳光町	散布地	弥生・古墳	47	02093	般若寺跡	鯖江市別所町	寺院跡	中世
21	01186	牛若城跡	福井市北山新保町	城跡	中世	48	02091	丹羽岳城跡	鯖江市大野町	城跡	中世
22	01184	太田山古墳群	福井市帆谷町	古墳・墳墓	弥生・古墳	49	02089	南屋敷遺跡	鯖江市南井町	中世墓	中世
23	01183	帆谷遺跡	福井市帆谷町	散布地	奈良～中世	50	02088	四方谷城跡	鯖江市四方谷町	城跡	中世
24	01297	帆谷西ノ坊遺跡	福井市帆谷町	散布地	—	51	02090	大野滝ヶ花遺跡	鯖江市大野町	散布地	中世
25	01299	北山遺跡	福井市北山町	散布地	古墳～平安	52	02087	四方谷岩伏遺跡	鯖江市四方谷町	散布地	縄文・古墳
26	01300	大宅山古墳群	福井市北山町	古墳	古墳	53	01330	杓子山城跡	福井市徳尾町	城跡	中世
27	01298	北山横穴墓群	福井市帆谷町他	横穴	古墳						



第4図 周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は福井県内では非常に少なく、周辺には確認されていない。

縄文時代 上筋生田遺跡（8）では、縄文時代後期の遺物包含層が、弥生時代の基盤層下から確認されており、縄文時代後期前半の土器や石器、土製耳飾りが出土している（福井県教委1979）。四方谷岩伏遺跡（52）では、縄文時代後期後葉から晩期前半にかけての40基以上の貯蔵穴や木枠状施設が確認され、縄文時代の低湿地遺跡として多くの成果が得られた。出土した土器は縄文時代後期後葉から晩期前半の時期が中心で、土器以外には石器や編物も出土している。水漬けされた多量のトチが出土したことから、堅果類の加工場の可能性がある（福井県埋文2003）。糞置遺跡周辺の遺跡では、縄文時代晩期の遺物が散発的に出土している。下筋生田遺跡（5）や徳光大島遺跡（20）、上河北江原町遺跡（16）では、縄文時代晩期後葉の土器が出土し（福井県埋文1994・2023a・b）、今市遺跡（11）では、縄文時代晩期の土器や石器がいくつか出土している（福井県埋文2001・08、福井市教委1996）。上六条遺跡（6）では、御物石器（縄文時代晩期）が出土したといわれている（赤澤1994）。

弥生時代 弥生時代前期の指標の一つである遠賀川系土器の出土例は、嶺北地方では非常に少ないが、糞置遺跡は嶺北地方における数少ない遠賀川系土器の出土遺跡である。弥生時代中期の遺跡としては、糞置遺跡のほかに、北陸地方でも最古段階の弥生集落が確認された今市遺跡（11）がある。弥生時代中期前葉の環濠や井戸などが確認されているほか、木製の鋳未成品や玉作関連遺物も出土している。弥生時代中期後葉になると、方形周溝墓が6基検出されており、弥生時代中期のなかで生活域から墓域に変遷していることがわかっている。ただし、弥生時代後期の遺構は確認されていない（福井県埋文2008）。上筋生田遺跡（8）では、弥生時代中期後葉の方形周溝墓が複数確認されているほか（福井県教委1979）、上河北江原町遺跡（16）でも弥生時代中期の方形周溝墓が2基確認されている（福井県埋文2023b）。下筋生田遺跡（5）では、弥生時代中・後期の玉作関連遺物が出土している（福井県埋文1987）。太田山古墳群（22）では、発掘調査によって弥生時代後期の方形台状墓2基が確認されている。1号墓は南北約18.7m、東西約17m、高さ約3.0m、2号墓は南北約23m、東西約17m、高さ約4mの規模を持ち、2号墓からは管玉約500点が出土している。両墳丘墓とも、供献土器から弥生時代後期と推定されている（福井県教委1976）。

古墳時代 弥生時代後期末から古墳時代前期にかけては、糞置遺跡以外にも周辺でいくつかの集落遺跡が確認されている。上河北江原町遺跡（16）では、2条の河川によって区切られた二つの集落を確認している。一方の集落は、主に堅穴住居や平地住居で構成され、玉作りも行っていたと推定されている。もう一方の集落では、主に掘立柱建物で構成された集落が確認されている。これらの集落からは、多量の土器のほか、銅鏃や勾玉、玉作り関係遺物、礎板などが出土している。古墳時代後期の須恵器も出土しており、長期にわたって継続した集落の可能性もある（福井県埋文2023b）。徳光大島遺跡（20）では、掘立柱建物2棟や井戸などの遺構を検出し、翡翠製勾玉や玉作り関係遺物などが出土している（福井県埋文2023a）。弥生時代中期に集落や墓域が形成された今市遺跡（11）では、古墳時代前期の古墳が13基確認されている。各古墳の規模は小さいが、そのうち1基からは石釧や仿製の内行花文鏡が出土している（福井県埋文2008）。大土呂遺跡（12）では弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけての集落に関係する遺構が見つまっている（福井県埋文1995）。上筋生田遺跡（8）では、弥生時代終末から古墳時代前期の土器が溝から多く出土し、古墳時代後期では、掘立柱建物6棟が確認されている（福井県教委1979）。

周辺の丘陵上には、数多くの古墳が確認されている。糞置遺跡の南に位置する丘陵上には、二上・半

田古墳群（3）があり、古墳時代前期の円墳（直径約16m）が確認された。2基の埋葬施設が検出され、いずれも割竹形木棺と想定されている。副葬品として、鉄剣1口と管玉が出土している。糞置遺跡との立地関係から、糞置遺跡における古墳時代前期の集落を形成した集団がこの円墳を造営したと推定されている（福井県埋文2020）。二上・半田古墳群の同じ丘陵上には、西方に鉾ヶ崎古墳群（31）、南方に角原古墳群（35）、東方に二神古墳群（29）や太田山古墳群（22）があり、古墳群が密集している。鉾ヶ崎古墳群では、前方後円墳や円墳、方墳といった39基の古墳が確認されている。太田山古墳群は、先述した弥生時代後期の墳丘墓2基や古墳時代の前方後円墳2基を含む69基の古墳・墳丘墓から構成される（福井県1987）。低地部における古墳として、下筋生田遺跡（5）では、古墳の周溝と推定される遺構から、古墳時代中期の土器がまとまって出土している（福井県埋文1987）。古墳時代中・後期になると、集落遺跡や古墳は少なくなる。

奈良時代 奈良時代になると、福井平野南部では初期荘園が多く作られるようになる。糞置遺跡東方に、東大寺領糞置荘（2）、北方に東大寺領栗川荘が近接しており、さらに足羽山西方には東大寺領道守荘が広がっている。糞置荘や道守荘については奈良県の正倉院に開田地図が残っている。また、古代になるとこの地域に北陸道が通るようになり、奈良時代の越前国を考える上でも重要な地域といえる。上筋生田遺跡（8）は、奈良時代の掘立柱建物や井戸が確認されている。墨書土器や人形木製品や斎串などの祭祀具、木製壺甕が出土している。検出された掘立柱建物は小規模にとどまるが、当該遺跡は栗川荘の範囲に含まれ、かつ多量の墨書土器が出土していることから、一般の農村集落ではなく荘園に労働力を提供した集落と考えられている（福井県教委1979）。今市遺跡（11）では、7世紀後半から8世紀後半にかけての集落が確認されている。20棟以上の掘立柱建物や井戸、溝が検出されている。建物の配置は不規則であるが、大型の掘立柱建物も検出されている。溝の中の階段状遺構からは、農耕に関わる祭祀的行為（斎串や馬形、馬骨の出土）が認められた。出土遺物には、須恵器や土師器といった多量の食膳具や木製容器のほか、転用硯や墨書土器も出土している。また、手工業に関わる遺物（羽口や紡錘車、漆塗り用の容器）も出土している。このため、官衙というよりも地域の有力者が農業生産を始めとする多角的な生産や経営をするための拠点集落と考えられ、栗川荘の荘園経営に関わる遺跡といえる（福井県埋文2008）。また、古代北陸道と推定される道路も確認されている（福井市教委2016）。大土呂遺跡（12）では奈良時代の須恵器や土師器が確認されている（福井県埋文1995）。

平安時代 平安時代においては、遺跡や遺物は少ないが、周辺にいくつかの遺跡が認められる。今市遺跡（11）では、奈良時代の集落が8世紀末葉に断絶したあと、9世紀後半から10世紀初めの遺構や遺物も確認されているが、奈良時代の集落に比べると小規模にとどまる（福井県埋文2008）。大土呂遺跡（12）では、9・10世紀ごろの遺物が少量出土している（福井県埋文1995）。

中世 中世に入ると、糞置遺跡周辺の山頂や尾根上に山城が多く築かれるようになる。糞置遺跡南方の文殊山（標高366m）や橋立山（標高261m）には、文殊山山頂に立地する文殊山城跡（40）をはじめ、牛若城跡（21）や南山城跡（39）、四方谷城跡（50）、丹羽岳城跡（48）が立地している。糞置遺跡西方の城山（標高202m）には、南居城跡や冬野城跡、三十八社城跡などがある。この地域は、福井平野と鯖武盆地の境目に当たる地峡部であり、かつ北陸道が通るため、中世には防御の要衝地として多くの城が築かれている。糞置遺跡の東方約6kmには、室町時代に越前を統治した朝倉氏の本拠である一乗谷がある。この一乗谷朝倉氏遺跡は、城下町や城跡などが特別史跡、庭園が特別名勝、出土遺物が国重要文化財に指定されており、全国の中世城下町遺跡の中でも遺跡や遺物が極めて良好な状態で残されている。

先述したこれらの城は南北朝時代以降に築かれたものが多いと思われるが、室町時代には朝倉氏の防衛ラインの一角としてこれらの城が築城および改修されたものと考えられる。中世の集落としては、今市岩畑遺跡（11）で13世紀代の井戸が確認されているが（福井県埋文1999・2008）、この遺跡以外には明確な遺構はあまり確認されていない。このほかに、徳光大島遺跡（20）で13世紀代の遺物が少量出土している（福井県埋文2023a）。

近世 糞置遺跡の北約6 kmには、近世に築かれた福井城下町が広がるが、本遺跡周辺では下筋生田遺跡（5）があげられる。この遺跡では、掘立柱建物や井戸などの遺構が多く検出され、伊万里焼などの近世初期の陶磁器も多く出土している。特に茶の湯に関する遺物が多く出土しており、一般的な集落とは異なる様相を示している（福井県埋文1987）。

引用・参考文献
赤澤徳明　1994　「第4章まとめ　周辺での既往の調査成果から」『下筋生田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第22集
福井県　1987　『福井県史』資料編13　考古　本文編
福井県　1998　『図説福井県史』
福井県教育委員会　1976　『太田山古墳群』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第8集
福井県教育委員会　1979　『上河北遺跡』北陸自動車道関係遺跡調査報告書第15集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1987　『六条・和田地区遺跡群』福井県埋蔵文化財調査報告第11集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1994　『下筋生田遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第57集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1995　『大土呂遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第30集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1999　『今市遺跡（豆田地区）』福井県埋蔵文化財調査報告第42集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2001　『今市遺跡（豆田地区Ⅱ）』福井県埋蔵文化財調査報告第57集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2006　『糞置遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第90集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2008　『今市岩畑遺跡（本文編・図版編）』福井県埋蔵文化財調査報告第34集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2003　『四方谷岩伏遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第71集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2020　『二上・半田古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第171集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2023a　『徳光大島遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第182集
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　2023b　『上河北江原町遺跡』福井県埋蔵文化財調査報告第183集
福井市教育委員会　1996　『今市遺跡』
福井市教育委員会　2016　『今市遺跡2』

第3章 遺跡の概要

第1節 基本層序（第5図）

糞置遺跡は、文殊山北側に広がる低湿地と微高地に立地している。発掘調査は、事前の1次調査（試掘調査）において遺構や遺物包含層が確認された部分を対象に、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ区の地区に分けて調査を実施した。遺構番号は地区ごとに振り分けている。

Ⅰ～Ⅵ区のうち、Ⅰ～Ⅲ区は山地北側に広がる沖積地、Ⅳ区は山地裾部、Ⅴ・Ⅵ区は小尾根間の山地裾部に立地する。調査前において、Ⅰ～Ⅲ区では水田耕作地、Ⅳ～Ⅵ区は集落内の農地や山林などとして利用されていた。現在の標高はⅠ～Ⅲ区では9.2～9.3m、Ⅳ区では9.8～11.3m、Ⅴ・Ⅵ区では12～30mを測る。

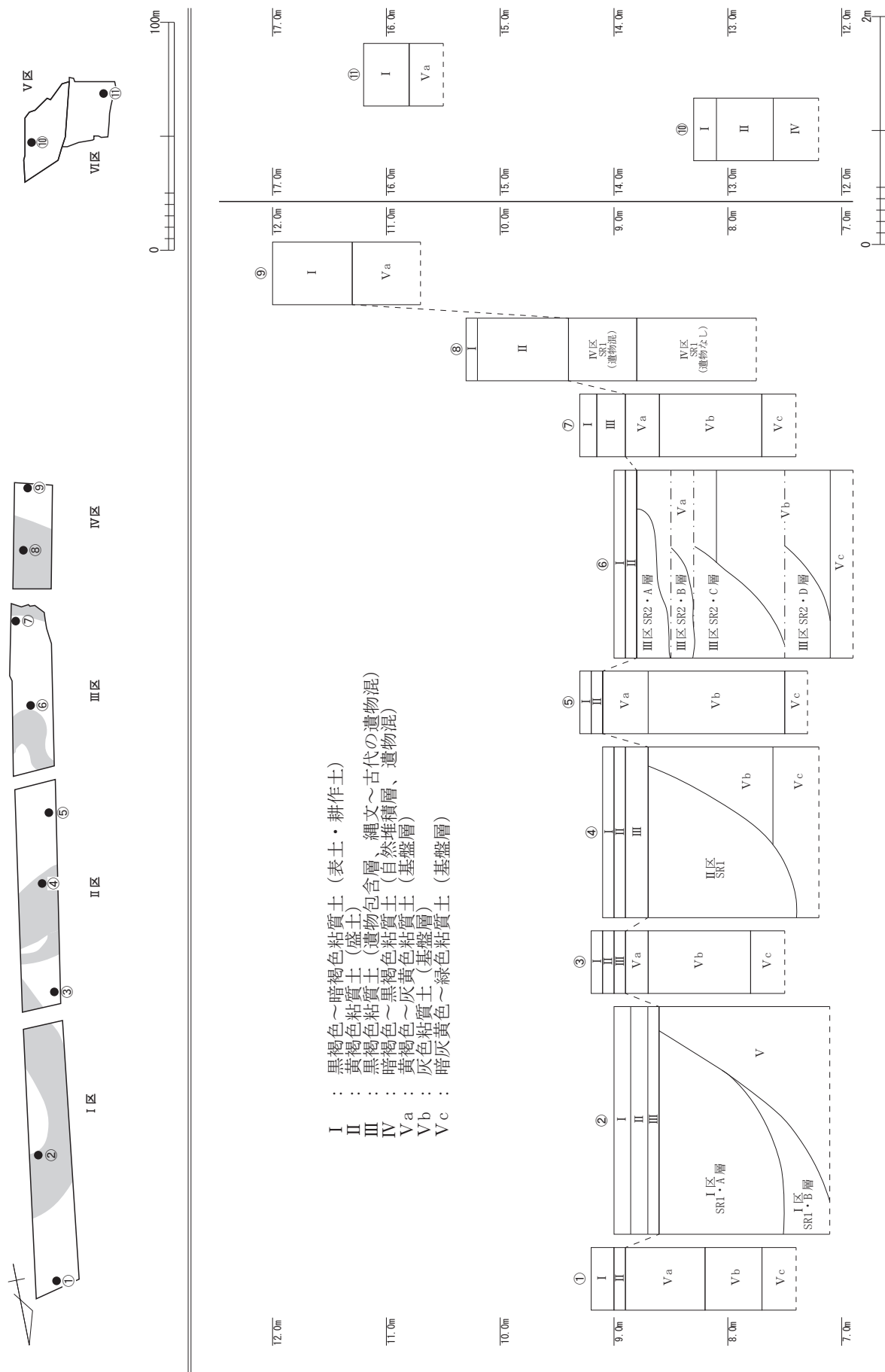
基本層序は、Ⅰ層：黒褐色～暗褐色粘質土（表土・耕作土）、Ⅱ層：黄褐色粘質土（盛土層）、Ⅲ層：黒褐色粘質土（遺物包含層）、Ⅳ層：暗褐色～黒褐色粘土・砂質土（自然堆積層）、Ⅴ層：黄褐色～緑色粘質土（基盤層）である。さらに、Ⅴ層はⅤa層：黄褐色～灰黄色粘質土、Ⅴb層：灰色粘質土、Ⅴc層：暗灰黄色～緑色粘質土に分けた。また、Ⅴ層は粘質土のほかに、シルト層や砂層が間層として入り込むことがあるが、これらの層も一括して各層に取りまとめた。基本層序柱状図は、各地区の下層断ち割りトレンチや自然流路土層確認用のトレンチのほか、1次調査の試掘トレンチの成果などをもとに作成した（第5図）。

Ⅴ層は低湿地に堆積した遺物を含まない基盤層であり、この層上に遺構面や遺物包含層が形成される。①～⑦地点においては、標高8.9～9.1mと平坦な地形を示すが、⑨地点では標高11.3mを示す。⑧地点ではⅡ層下面が標高9.4mを示していることから、Ⅲ区南端からⅣ区にかけて基盤層の標高が山地に向けて高くなると考える。また、Ⅴ・Ⅵ区の⑩・⑪地点では基盤層が標高12m以上と推定する。Ⅴa層は、厚さ20～30cmを測る。この層は多くの地区で安定して確認することができ、遺構検出は基本的にこの層面で行っている。ただ、地点によっては自然流路の浸食などによって確認できないことがある（第5図④地点）。Ⅴa層の下に堆積するⅤb層は、地点によって厚さが異なりやや不安定な堆積を示す。Ⅴb層の下にⅤc層を確認できるが、層厚は不明である。

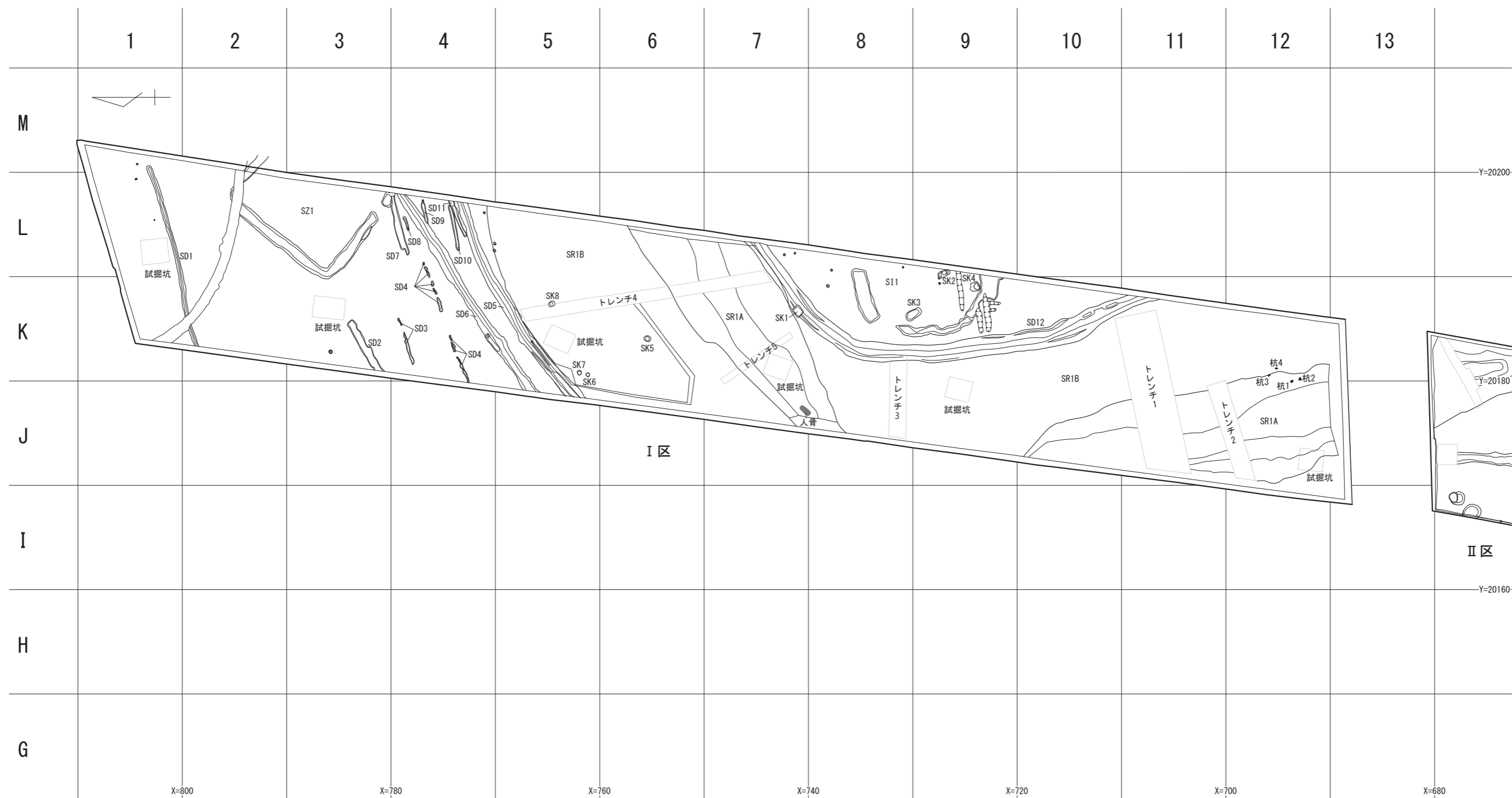
Ⅳ層の自然堆積層は、1～20cmの山石を多量に含んだ堆積物であり、粘土や砂質土など様々な土が混じりあう。山麓から崩落した斜面堆積物といえ、Ⅴ・Ⅵ区でのみ確認できる。

Ⅲ層の遺物包含層は、自然流路上やその周辺に広がる湿地状の堆積物であり、自然流路が調査面積の大半を占めるⅠ・Ⅱ区では顕著に確認できる（第4章ではSWとして出土遺物の報告を行った）。自然流路の検出は、このⅢ層を掘削した後に行っている。この層からは、縄文時代から平安時代の遺物が主に出土している。Ⅴ・Ⅵ区においても遺物を含む黒褐色粘質土（厚さ約40cm）がⅣ層もしくはⅤ層上に一部残存しているが、この地点でのⅢ層は湿地状の堆積物というよりも、斜面からの崩落土や人為的な活動によって形成されたものと推測する。ここでは弥生時代から平安時代にかけての遺物を確認できる。

Ⅱ層の盛土層は、10～20cmの厚さで均一に堆積している。①～⑥地点の平坦な地形に広がる。出土遺物から、中世以降に耕作地として盛られた整地土といえる。Ⅰ層は主に水田耕作土であり、約10～40cmの厚さで全調査区において確認できる。



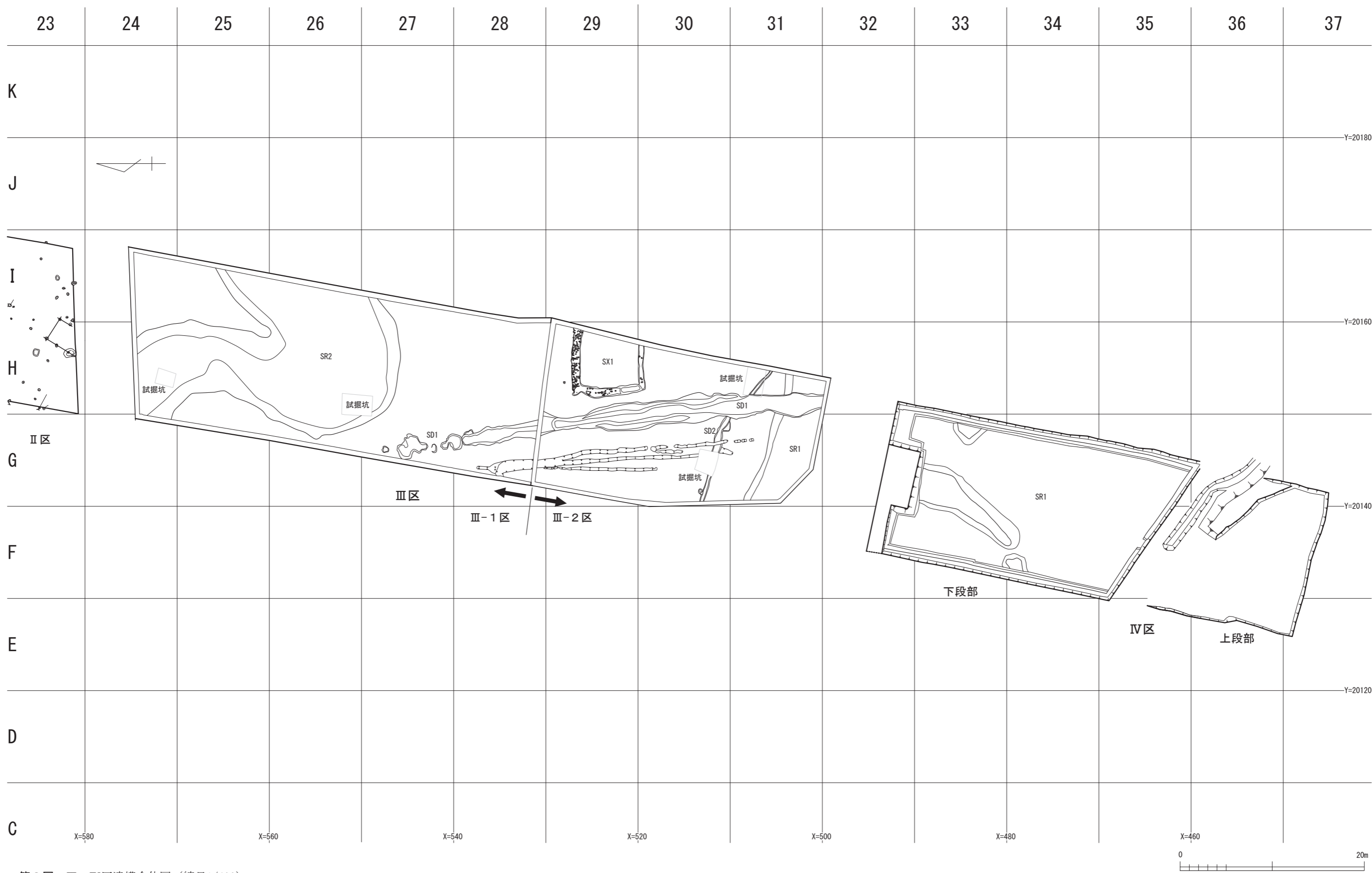
第5図 基本層序柱状図 (縮尺1/2,500・1/50)



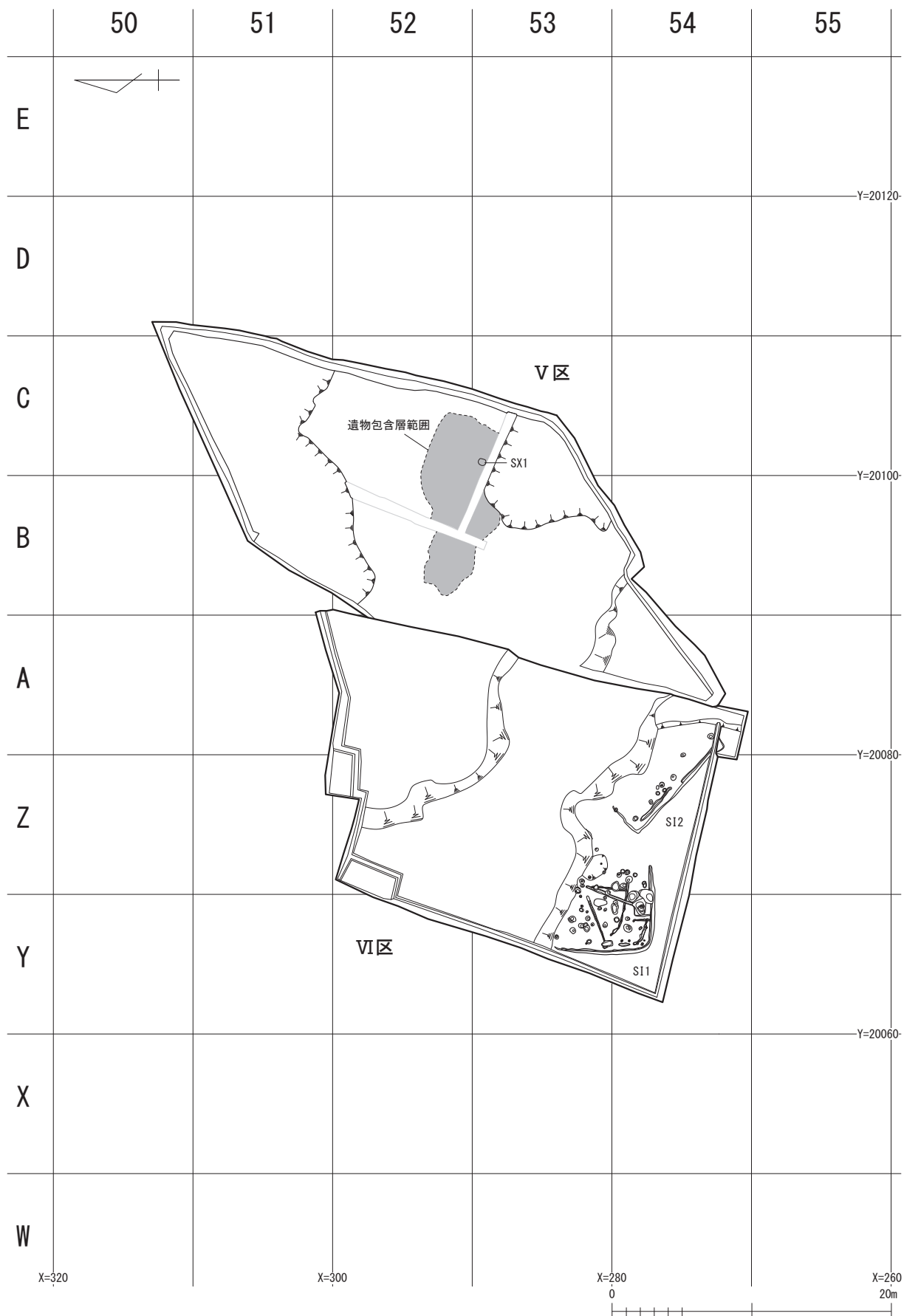
第6図 I区遺構全体図 (縮尺1/400)



第7図 II区遺構全体図 (縮尺1/400)



第8図 III・IV区遺構全体図 (縮尺1/400)



第9図 V・VI区遺構全体図 (縮尺1/400)

1次調査（試掘調査）では、I区北端から糞置遺跡範囲北限においても試掘調査を行っている。それによれば、I区北端から北方へ約200mの範囲においてもI・II・V層を確認しているが、遺構や遺物を確認することはできなかった。

第2節 遺構の検出状況

検出した主要な遺構は、掘立柱建物（SB）9棟、竪穴住居（SI）2棟、平地建物（SI）1棟、方形周溝墓（SZ）1基、溝（SD）26条、土坑（SK）24基、貯蔵穴（SK）4基、方形周溝（SX）1基、焚火跡（SX）1基、自然流路（SR・SW）8条、護岸遺構1基、杭群1基がある。

I～IV区では、先述した盛土層の存在から、中世以降の耕地開発によって遺構上部が削平された可能性が考えられる。しかし、大規模な攪乱は総じて確認できないため、遺構は比較的良好な状態を保っているといえる

I～III区では、各々1条以上の自然流路を確認している。これらの自然流路は全て蛇行しており、推定される流路方向や堆積物の土質、出土遺物の時期から、おおむね同一の自然流路と考える。建物や方形周溝墓などの遺構はこの蛇行する自然流路の間の狭い微高地に形成されている。自然流路によって高い排水性を保っていたことが、集落を形成させた要因の一つと推定する。

V・VI区においては、遺構形成時にVI区からV区にかけて緩傾斜面が存在していたと考えるが、調査時には二段にわたる削平面を確認している。削平面における不整形な法面などから推察すると、近現代における作業場などに伴う削平面であろう。VI区ではこの削平から免れた2棟の竪穴建物が確認されており、当時の居住域はこの遺構面に広がっていたと考える。V区では焚火跡や遺物包含層が一部残存するのみだが、遺物包含層上で焚火跡を検出したため、遺物包含層はあまり削平されていない可能性がある。V区北側には落ち込みや自然堆積層（基本層序IV層）を確認できることから、V・VI区における居住域の東限を示している。

第3節 遺物の出土状況

遺物はコンテナ213箱分が出土した。主に縄文時代晩期の土器・石器・土製品、弥生時代後期～古墳時代前期の土器・石器・木製品、奈良・平安時代の土器・石製品・木製品、中世の土器・陶磁器・石製品が出土している。これらの中では、弥生時代後期の土器が特に多量に出土しており、弥生時代から平安時代にかけての木製品も多く出土している。また、縄文時代の土器は比較的残りの良い土器も多く、奈良・平安時代の墨書土器も多く出土している。遺物の分布状況を見ると、縄文土器はI・II区、弥生土器はI～VI区、奈良・平安時代の須恵器はIII～VI区で主に出土しており、時代が新しくなるほど北から南へ遺物が増えている傾向を読み取れる。

遺物の大部分は、自然流路から出土し、その他に建物に伴う溝や水路として使用された溝からの遺物も多く出土している。自然流路からは、各時代の土器のほか、木製品も多量に出土している。水気のある堆積物によって木製品の保存状態が良好であったため、多量の木製品の出土につながった。自然流路を検出できなかったV・VI区ではI～IV区に比べると遺物出土量は少なかった。

第4章 遺構と遺物

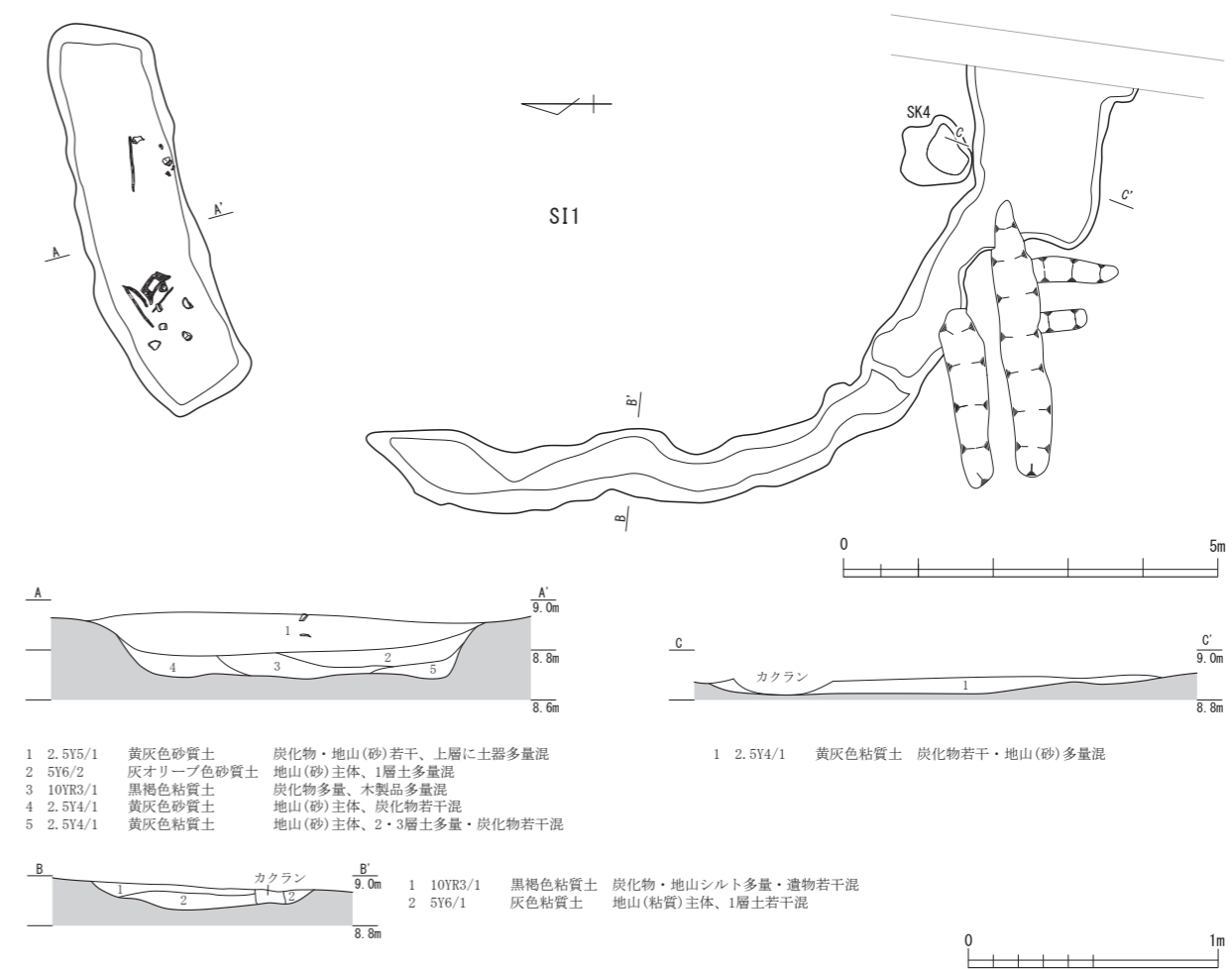
第1節 遺構

1 I区の遺構

I区からは、主に平地建物（SI）1棟、方形周溝墓（SZ）1基、溝（SD）12条、土坑（SK）4基、貯蔵穴（SK）4基、自然流路（SR）1条、複数の柱穴を確認した。SR1内からは人骨や杭群を確認している。調査区北半ではSZ1のほか、南西から北東方向に走る複数条の溝を検出した。調査区南半では、SR1が大きく湾曲しながら南から北東へ流れる。SR1東側にはSI1やSD12を検出している。この地点では建物を構成しない柱穴もいくつか確認しており、調査区東壁外にはさらに建物が広がっている可能性がある。また、第3章で先述したように、SR1直上やその周辺域（グリッド4～12列）では、遺物を含む湿地状の粘質土（SW1）が堆積する。

1) SI1（第10・11図）

K・L-8・9に位置する、周溝を伴う平地建物である。旧遺構名はSX2である。建物は、周溝のみが確認されており、柱穴を検出することはできなかった。また、遺構の半分程度が調査区壁外にあるため、全容は明らかではない。周溝南半では上部が大きく削平されているため、柱穴も同様に後世の削平



第10図 I区SI1実測図-1（縮尺1/100・1/30）

により滅失したものとする。周溝の形状は円形で、大きさは14.2mを測る。周溝は北西隅で途切れており、北側周溝は、長さ5.3m、幅1.4~1.6m、深さ26cm、南側周溝は、長さ約12m、幅0.7~2.3m、深さ10cmを測る。北側周溝は、上位から下位までおおむね黄灰色土で埋まるが、底面付近に黒褐色粘質土が堆積する。この北側周溝からは、土器や木製品がまとまって出土している（第11図）。この周溝からは弥生土器（第72図・第73図1~11）などが出土している。特に、上層からは土器（第72図18など）、下層（黒褐色粘質土）からは腰掛（第133図13）などの木製品や台石・石皿類（第117図3・4）がまとまって出土する（第11図）。建物が使用されなくなった時点で周溝に土器をまとめて廃棄したものと推定するが、北側周溝は不整形な南側周溝と比べて規格的な平面形状で、かつ一定度の深さを有するため、祭祀や埋葬のために周溝を再度掘削してそれに関連する遺物を廃棄した可能性もある。出土遺物から、弥生時代後期の遺構と推定する。

2) SZ1 (第12図)

K-3、L-2・3に位置する方形周溝墓である。旧遺構名はSX1である。方形周溝墓は、周溝のみを確認しており、後世の削平のため埋葬施設を検出することはできなかった。また、遺構の半分近くが調査区壁外にあるため、全容は明らかではない。方形周溝墓の形状は方形であり、大きさは13.4mを測る。南西周溝が調査区壁際で途切れており、土橋の可能性もある。北東周溝は幅7.1m、深さ25cm、北西周溝は幅1.0~1.2m、深さ34cm、南西周溝は幅0.9~1.2m、深さ22~33cmを測る。埋土は、上層ににぶい黄褐色粘質土、中層に暗褐色粘質土、下層ににぶい黄褐色粘質土が堆積する。北西周溝と南西周溝の暗褐色粘質土からは、1点ずつ壺形土器が略完形品の状態で出土している（第73図12・13）。いずれも弥生時代中期後葉の時期であり、方形周溝墓の祭祀に関連するものであろう。出土遺物から、弥生時代中期後葉の方形周溝墓と推定する。

3) SD4 (第13図)

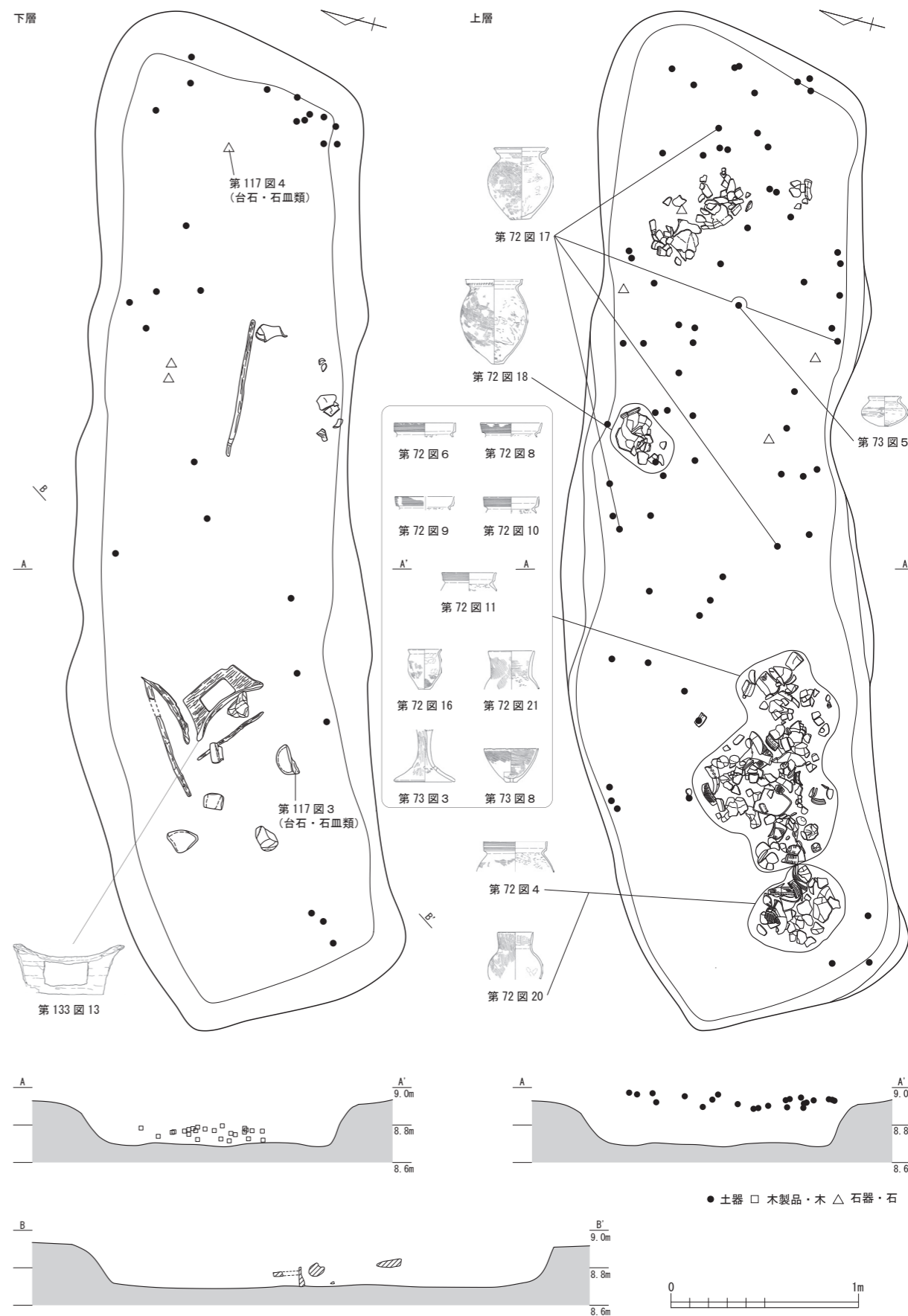
K・L-4に位置する溝である。溝の大きさは長さ12.3m、幅0.3m、深さ8cmを測る。埋土は暗灰色・褐灰色粘質土が堆積する。

4) SD5 (第13図)

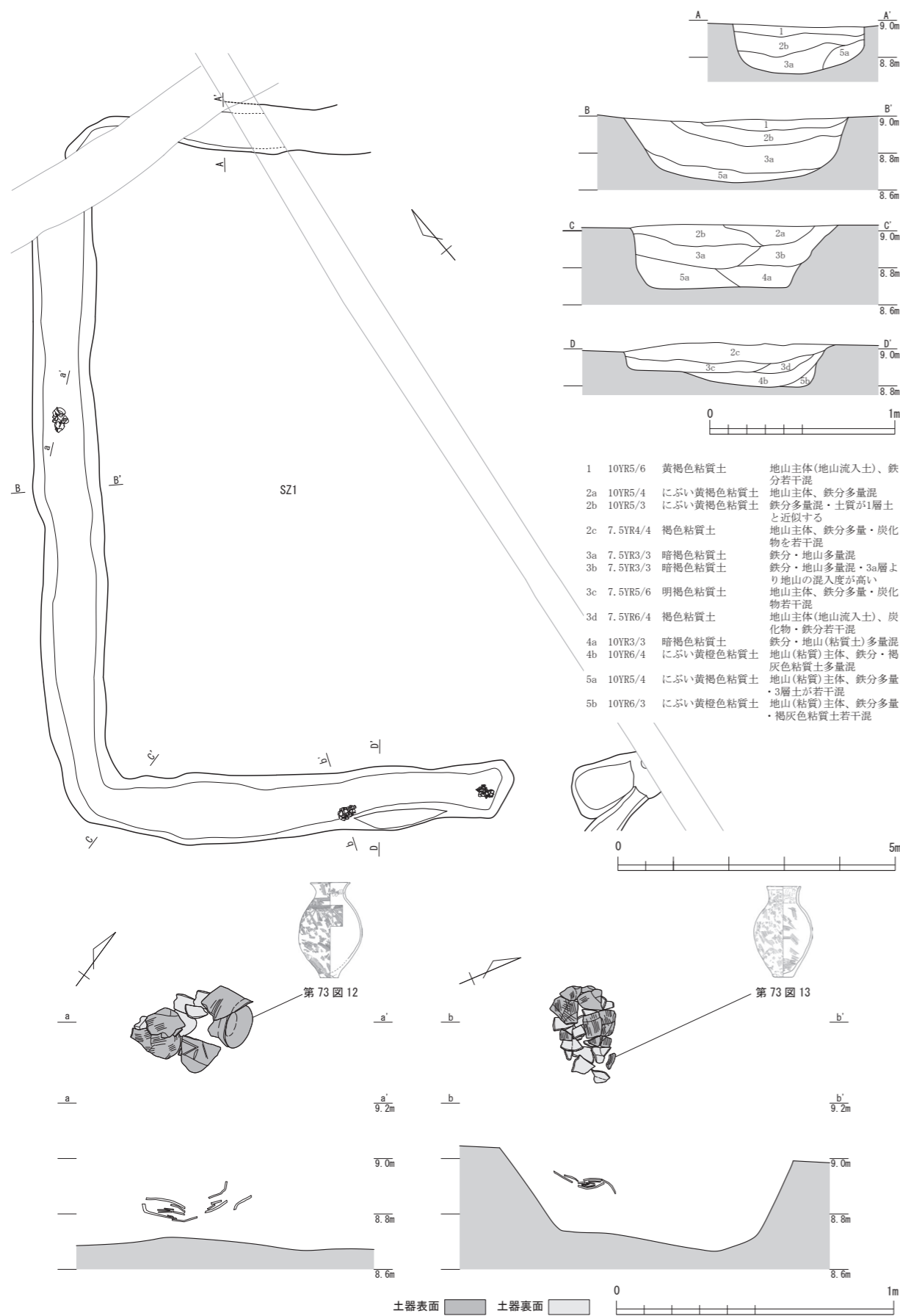
J-5、K-4・5、L-4に位置する溝である。北側のSD6とはほぼ平行する。溝はSR1に沿いながらやや弧状に延びている。溝の大きさは長さ22m、幅0.8~1.5m、深さ20~30cmを測る。溝底の標高値は西端から東端まで8.5~8.6mで推移しており、流路方向は明らかではない。埋土は、上層ににぶい黄褐色粘質土、下層に黒褐色粘質土が堆積する。溝西半では段状に底面が掘削された痕跡があり、また黒褐色粘質土も認めることができないため、この地点では再掘削されたと推定する。SR1に平行して掘削されていることから、SR1に関連する遺構といえる。排水溝の可能性があろう。埋土からは縄文土器（第54図1~3）や弥生土器（第73図14・15）が少数出土している。出土遺物から、弥生時代後期の溝と推定する。

5) SD6 (第13図)

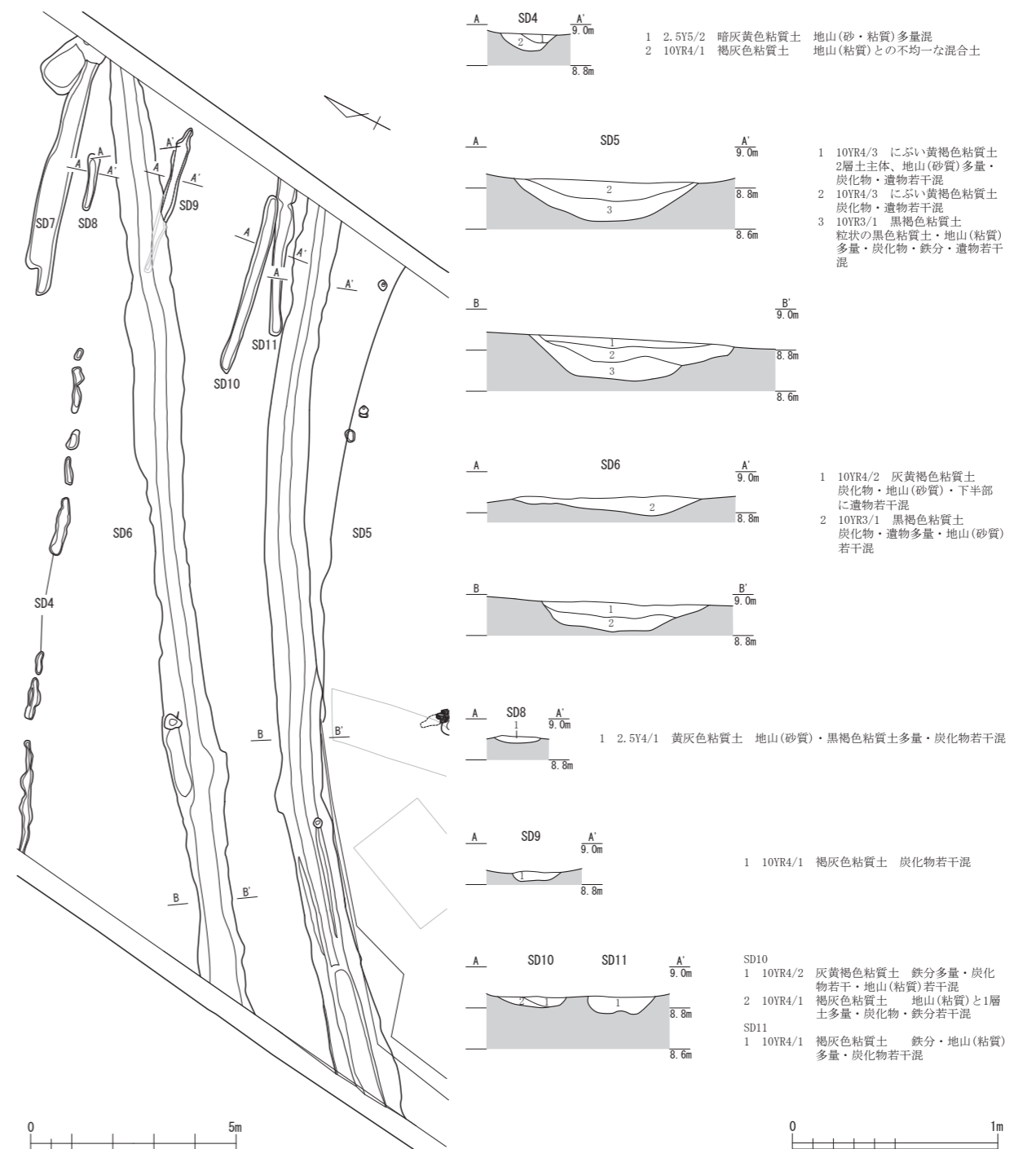
J-5、K・L-4に位置する溝である。南側のSD5とはほぼ平行するが、SD5よりも直線状に延びている。溝の大きさは長さ23m、幅0.8~1.4m、深さ8~14cmを測る。溝底の標高値は西端から東端まで8.7~8.8mで推移しており、流路方向は明らかではない。埋土は、上層に灰黄褐色粘質土、下層に黒褐色粘質土が堆積する。埋土からは、縄文土器（第54図4~6）や弥生土器（第73図16~20）が少量出土している。出土遺物から、弥生時代後期の溝と推定する。



第11図 I区SI1実測図-2 (縮尺1/30)



第12図 I区SZ1実測図 (縮尺1/100・1/30・1/20)



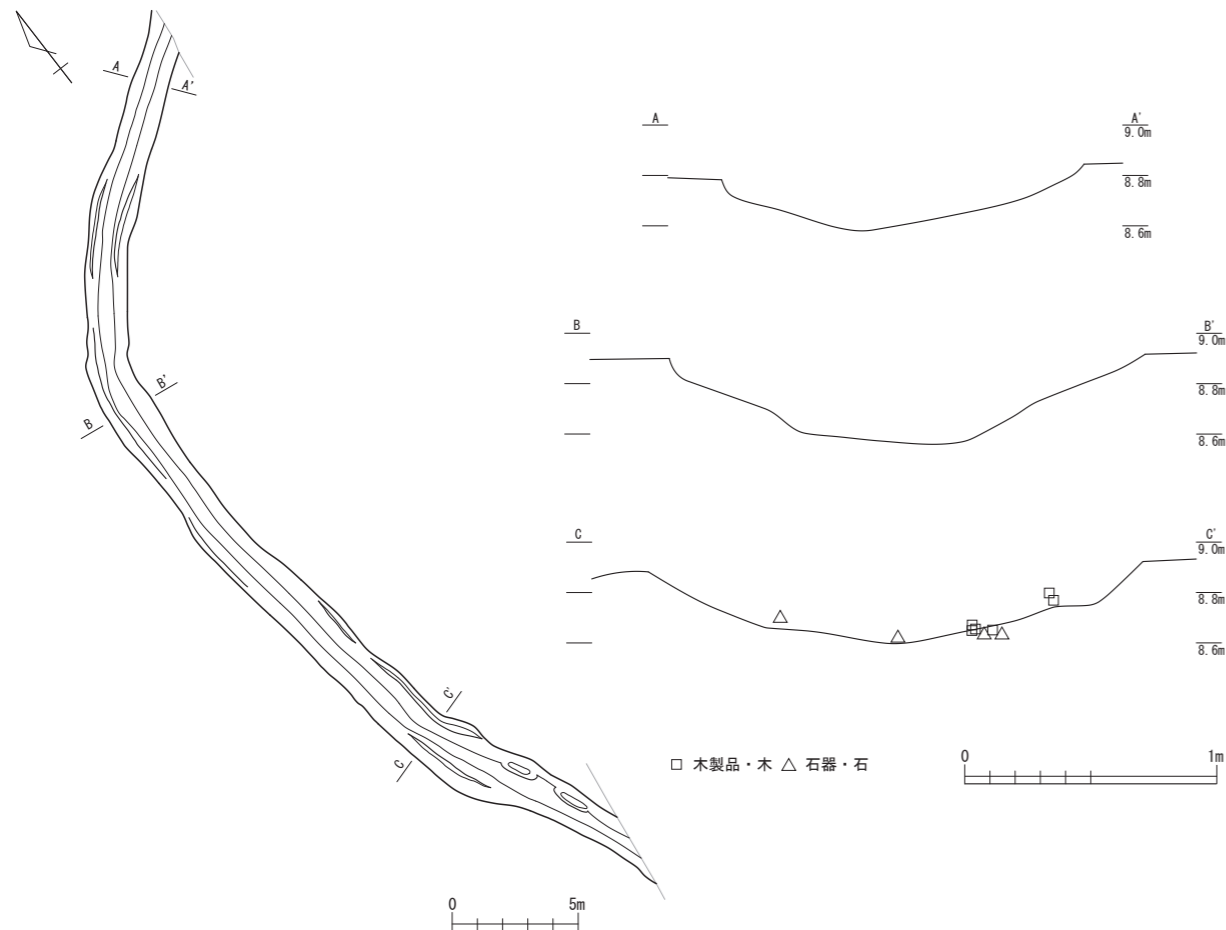
第13図 I区SD4~11実測図 (縮尺1/150・1/30)

6) SD7 (第13図)

L-4に位置する溝である。溝の大きさは長さ5.8m、幅0.7m、深さ3~8cmを測る。埋土はにぶい黄褐色~褐灰色粘質土が堆積する。

7) SD8 (第13図)

L-4に位置する溝である。SD8の西方延長上にはSD4が位置しており、SD4とは同一の溝である可能性がある。溝の大きさは長さ1.4m、幅0.2m、深さ3cmを測る。溝の中は黄灰色粘質土が堆積している。埋土からは、弥生時代の甕などが出土している(第74図1)。出土遺物から、弥生時代後期の溝と推定する。



第14図 I区SD12実測図(縮尺300・1/30)

8) SD9 (第13図)

L-4に位置する溝である。溝の大きさは長さ2.3~3.5m、幅22~35m、深さ4cmを測る。埋土は褐灰色粘質土が堆積する。

9) SD10 (第13図)

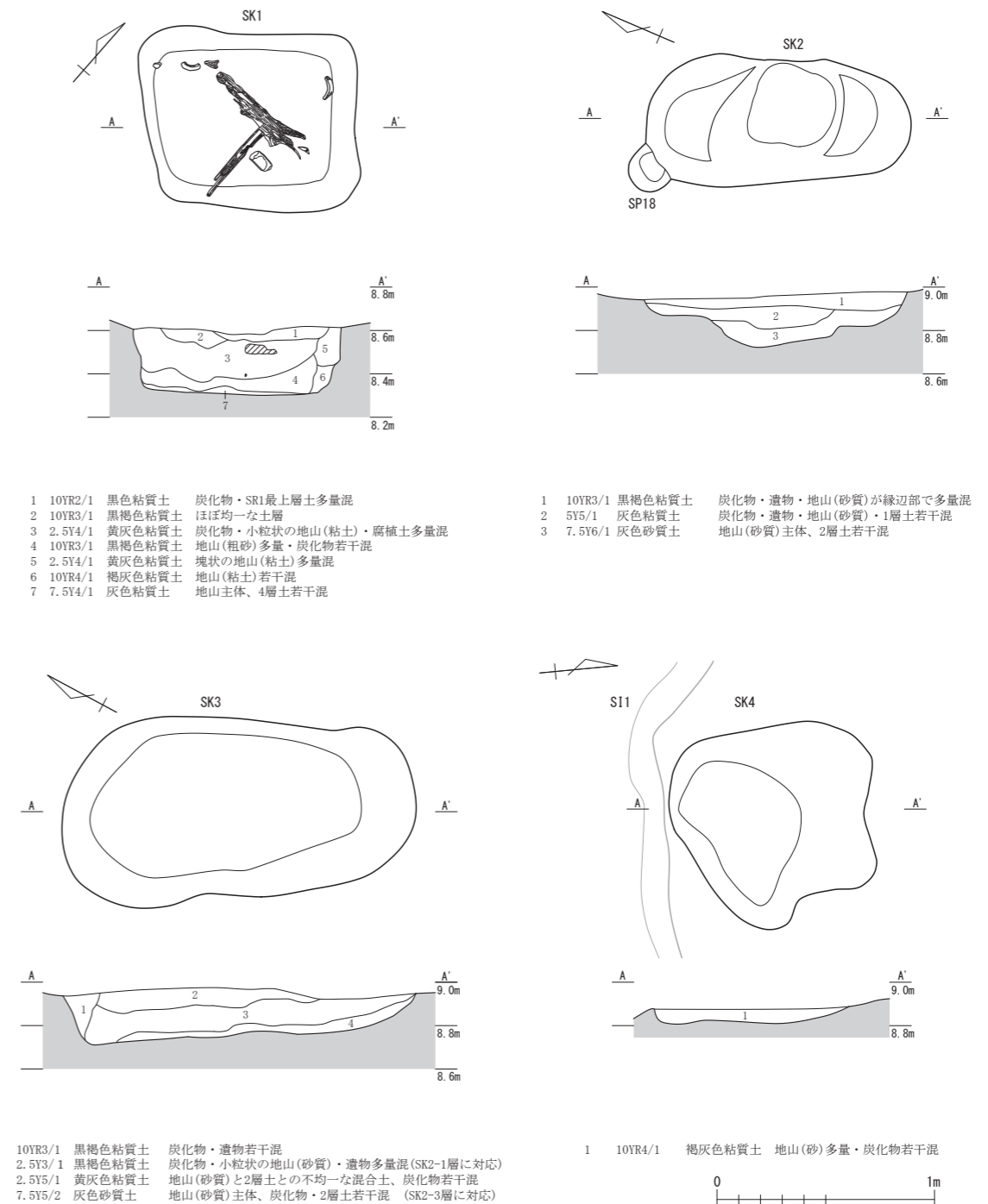
L-4に位置する溝である。溝の大きさは長さ4.5m、幅27~34m、深さ5cmを測る。埋土は灰黄褐色・褐灰色粘質土が堆積する。

10) SD11 (第13図)

L-4に位置する溝である。溝の大きさは長さ3.9m、幅27~45m、深さ8cmを測る。埋土は褐灰色粘質土が堆積する。

11) SD12 (第14図)

K-8~11、L-7に位置する溝である。SR1に沿うようにして、弧状に延びている。溝の大きさは長さ約42m、幅1.3~2.3m、深さ23~33cmを測る。溝底の標高値は南端から北端にかけて少しずつ下っており、流路方向は南から北と推定する。埋土からは、縄文時代晩期の土器(第54図7~20)や弥生時代後期の土器(第74図2~15)が出土している。特に、弥生時代後期の土器のうち、A-A'ラインから東側で第74図4~6、C-C'ラインから南側で第74図3・8・9・11~13が出土する。また、少量ながら弥生時代前・中期の土器(第74図2・15)や打製石斧(第113図8)、磨製石斧(第114図3)、磨石類(第115図12)も出土している。SR1に平行する溝であるため、SR1に関連する遺構であり、排水溝の可能性もある。出土遺物から、弥生時代後期の溝と推定する。



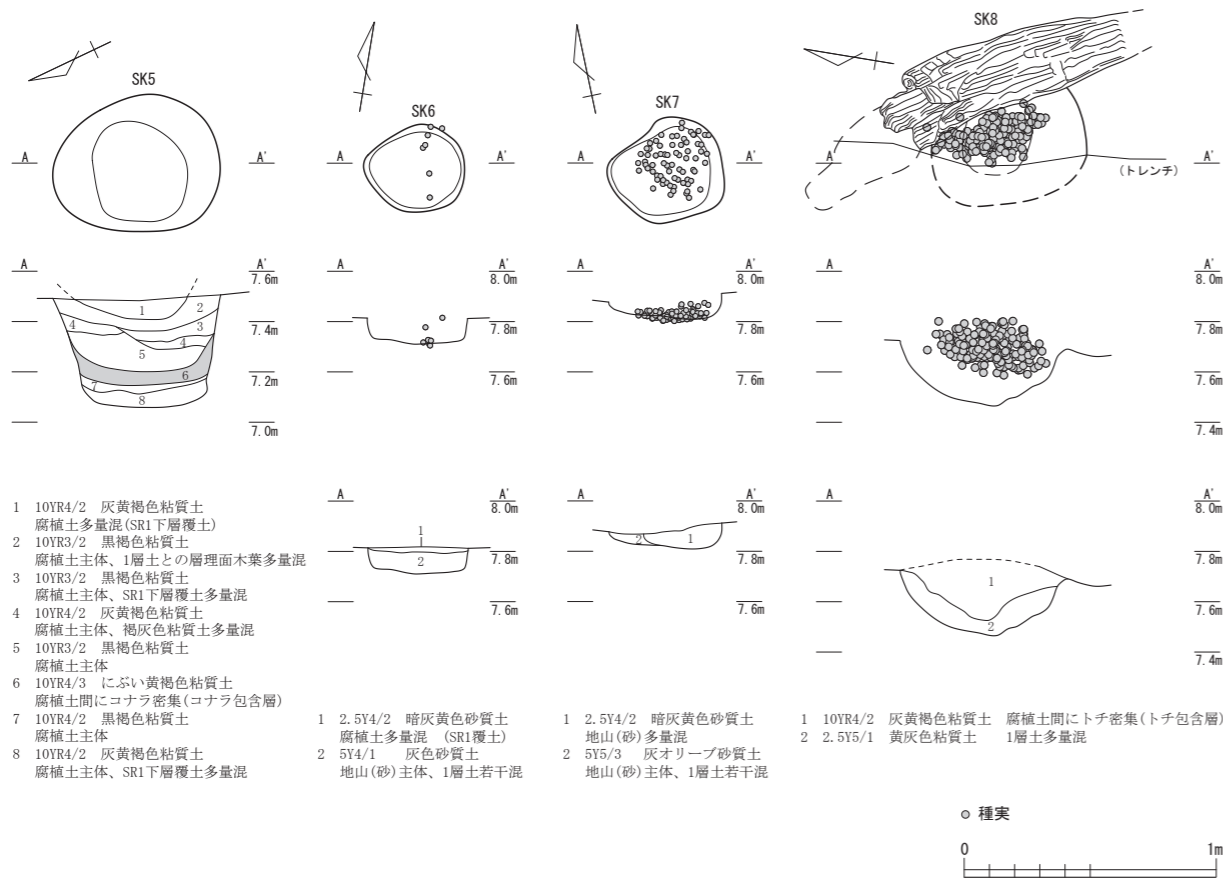
第15図 I区SK1~4実測図(縮尺1/30)

12) SK1 (第15図)

K-7に位置する土坑である。SD12上で検出している。平面形は隅丸方形で、長径96cm、短径80cm、深さ30cmを測る。埋土は上層から、黒褐色粘質土、黄灰色粘質土、黒褐色粘質土、灰色粘質土とやや互層状に堆積する。弥生時代後期の土器(第74図16・17)や木製の部材が出土している。出土遺物から、弥生時代後期の土坑と推定する。

13) SK2 (第15図)

L-9に位置する土坑である。平面形は楕円形で、底面は段状に掘削している。土坑の大きさは長径



第16図 I区SK5～8実測図(縮尺1/30)

120cm、短径55cm、深さ23cmを測る。埋土は上層に黒褐色粘質土、下層に灰色砂質・粘質土が堆積する。

14) SK 3 (第15図)

K-8・9に位置する土坑である。平面形は楕円形で、長径162cm、短径80cm、深さ23cmを測る。埋土は上層から、黒褐色粘質土、黄灰色粘質土、灰色砂質土が堆積する。

15) SK 4 (第15図)

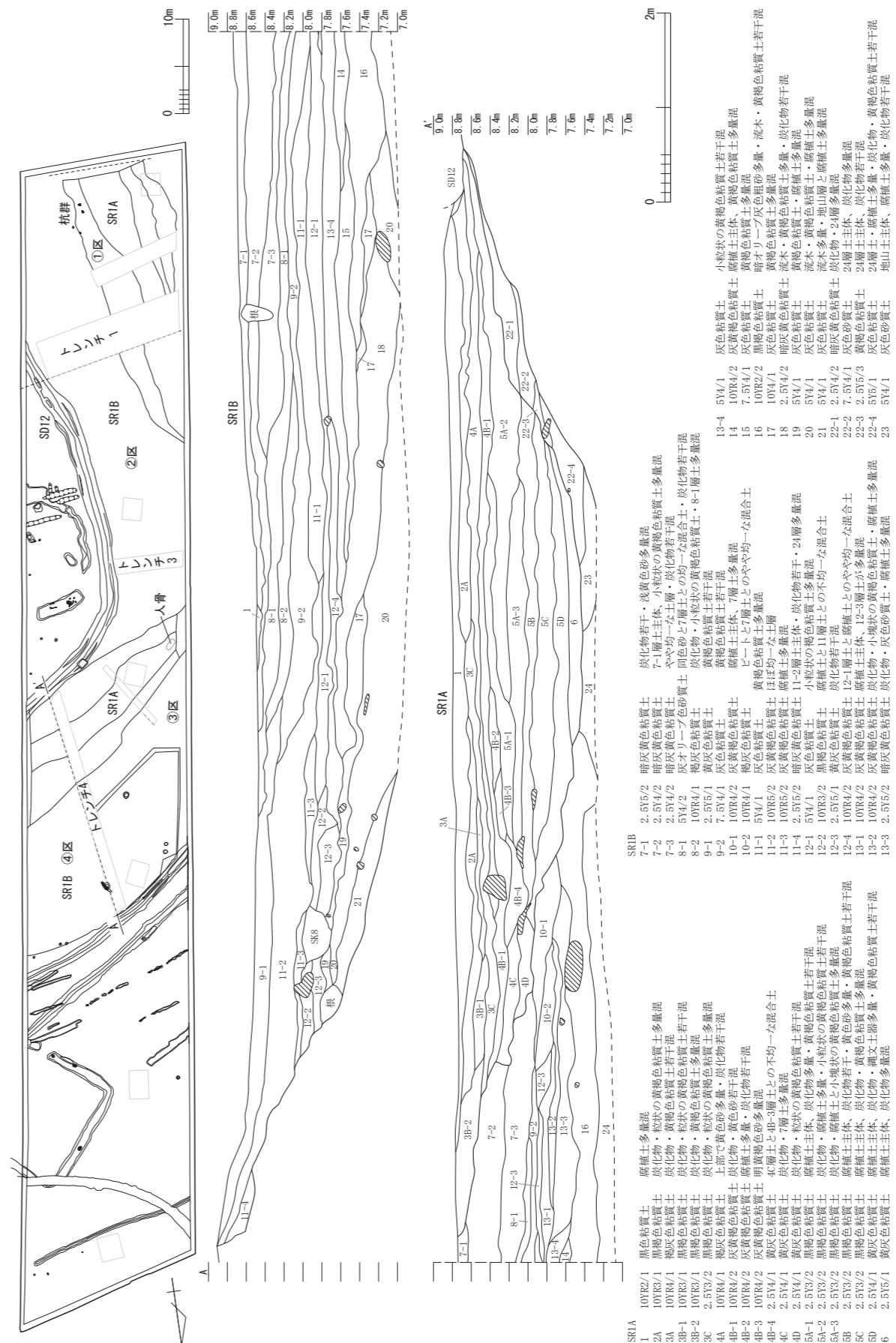
K-9に位置する土坑である。平面形は不整形で、長径10.3、短径8.8m、深さ11cmを測る。埋土は、褐灰色粘質土が堆積する。埋土からは弥生時代後期の土器が出土している(第74図18～20)。出土遺物から、弥生時代後期の土坑と推定する。

16) SK 5 (第16図)

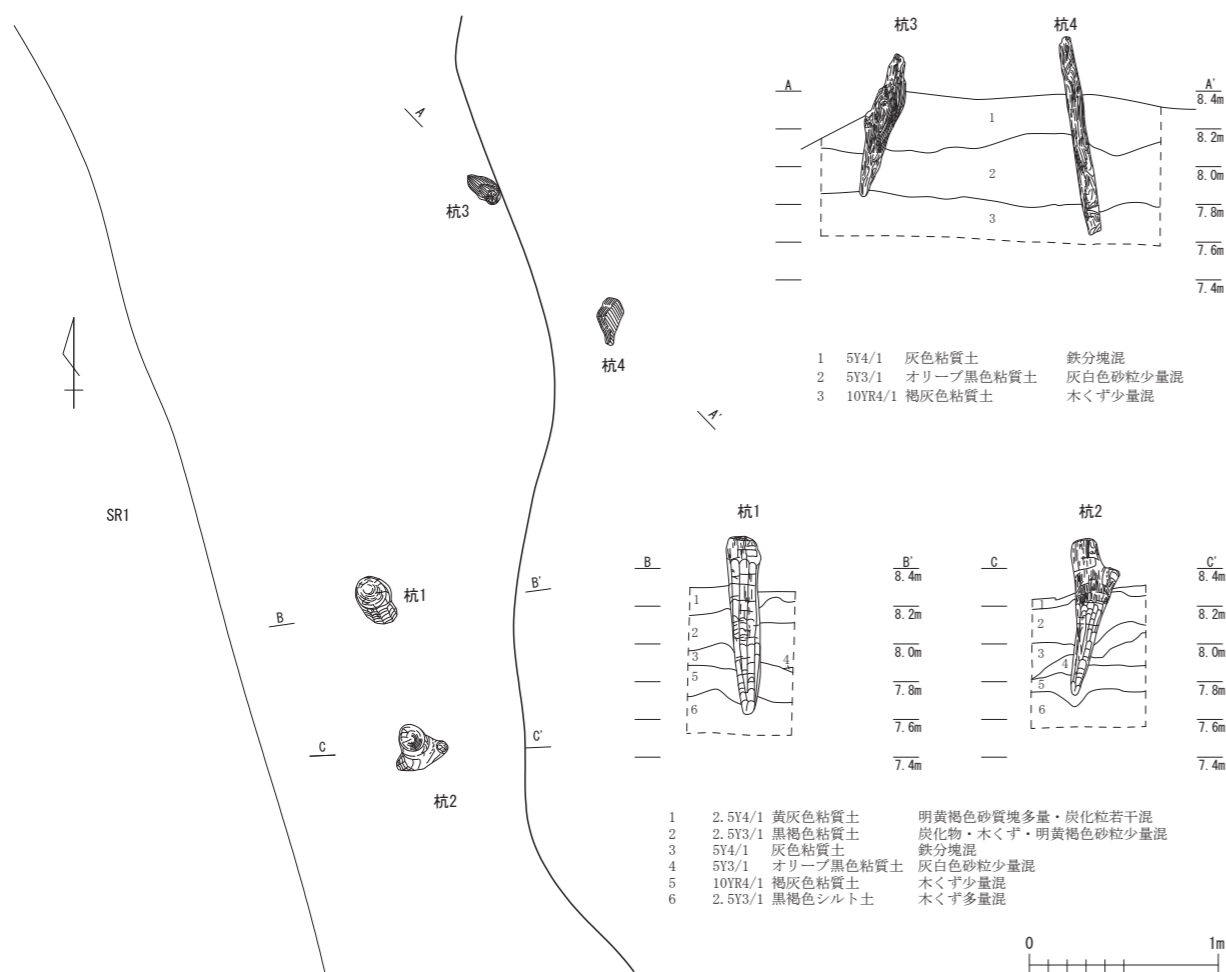
K-6に位置する貯蔵穴である。旧遺構名はSS1である。SR1Bの下層上面で検出されている。平面形は円形、断面形は平底形である。貯蔵穴の大きさは長径66cm、短径53cm、深さ42cmを測る。埋土は、上層から灰黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、にぶい黄褐色粘質土、黒褐色粘質土、灰黄褐色粘質土の互層になっており、そのうち底面から約8cm上で堆積する黄褐色粘質土から、貯蔵されたコナラの実が多量に出土している。遺構検出面から、弥生時代中期の貯蔵穴と推定する。

17) SK 6 (第16図)

K-5に位置する貯蔵穴である。旧遺構名はSS2である。SR1Bの下層上面で検出している。平面形は円形、断面形は平底形である。貯蔵穴の大きさは長径40cm、短径34cm、深さ10cmを測る。遺構上部は削平されたと推定する。埋土は主に灰色砂質土が堆積する。埋土からは貯蔵されたクルミが数点出土し



第17図 I区SR1実測図(縮尺1/600・1/60)

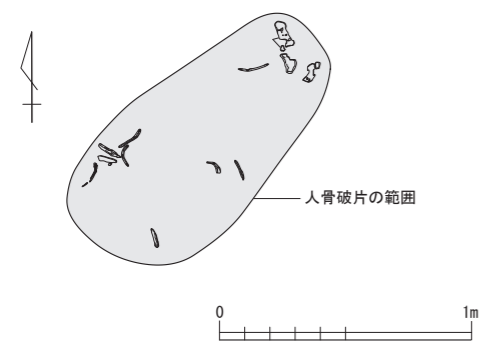


第18図 I区SR1 杭群実測図 (縮尺1/40)

ている。遺構検出面から、弥生時代中期の貯蔵穴と推定する。

18) SK 7 (第16図)

K-5に位置する貯蔵穴である。旧遺構名はSS 3である。SR 1 Bの下層上面で検出している。平面形は不整円形、断面形は平底形である。貯蔵穴の大きさは長径45cm、短径42cm、深さ9cmを測る。遺構上部は削平されたと推定する。埋土は暗灰黄色・灰オリーブ色砂質土が堆積する。埋土からは貯蔵されたクルミが多量に出土している。遺構検出面から、弥生時代中期の貯蔵穴と推定する。



第19図 I区SR1 人骨実測図 (縮尺1/30)

19) SK 8 (第16図)

K-5に位置する貯蔵穴である。旧遺構名はSS 4である。SR 1 Bの下層上面で検出している (第17図断面図)。貯蔵穴の検出面上からは自然木を確認している。平面形は円形、断面形は丸底形である。貯蔵穴の大きさは長径63cm、短径40cm以上、深さ30cmを測る。埋土は上層から、灰黄褐色粘質土、黄灰色粘質土が堆積する。灰黄色粘質土からは貯蔵されたトチの実が多量に出土した。遺構検出面から、弥生

時代中期の貯蔵穴と推定する。

20) SR 1 (第17~19図)

J・K-5~12、L-5~7に位置する自然流路である。流路方向は、南から北方向である。右岸にはSD12、左岸にはSD 5が掘削されており、両溝ともに自然流路に関連する遺構と推定する。流路はさらにSR 1 AとSR 1 Bに分けられ、前者の方が新しい流路である。発掘調査では主にSR 1 Aの埋土を掘削し、SR 1 Bについては上層埋土を一部の地区で掘削しているが、下層埋土については未掘削である。トレンチ1から南を①区、トレンチ1・3間を②区、トレンチ3・4間を③区、トレンチ4から東を④区に地区分けした。①~④区のうち、①・③区の掘削を重点的に進めている。

SR 1 Aは幅9~10mの規模を持ち、埋土の堆積はおおむね上層 (黒~黒褐色粘質土、第17図1~3層)、中層 (褐灰~黄灰色粘質土、第17図4層)、下層 (黒褐色粘質土以下、第17図5・6層) に区分できる。出土遺物や層位関係などから、おおむね中・下層は弥生時代中期、上層は弥生時代後期から古墳時代前期に堆積したと推定する。

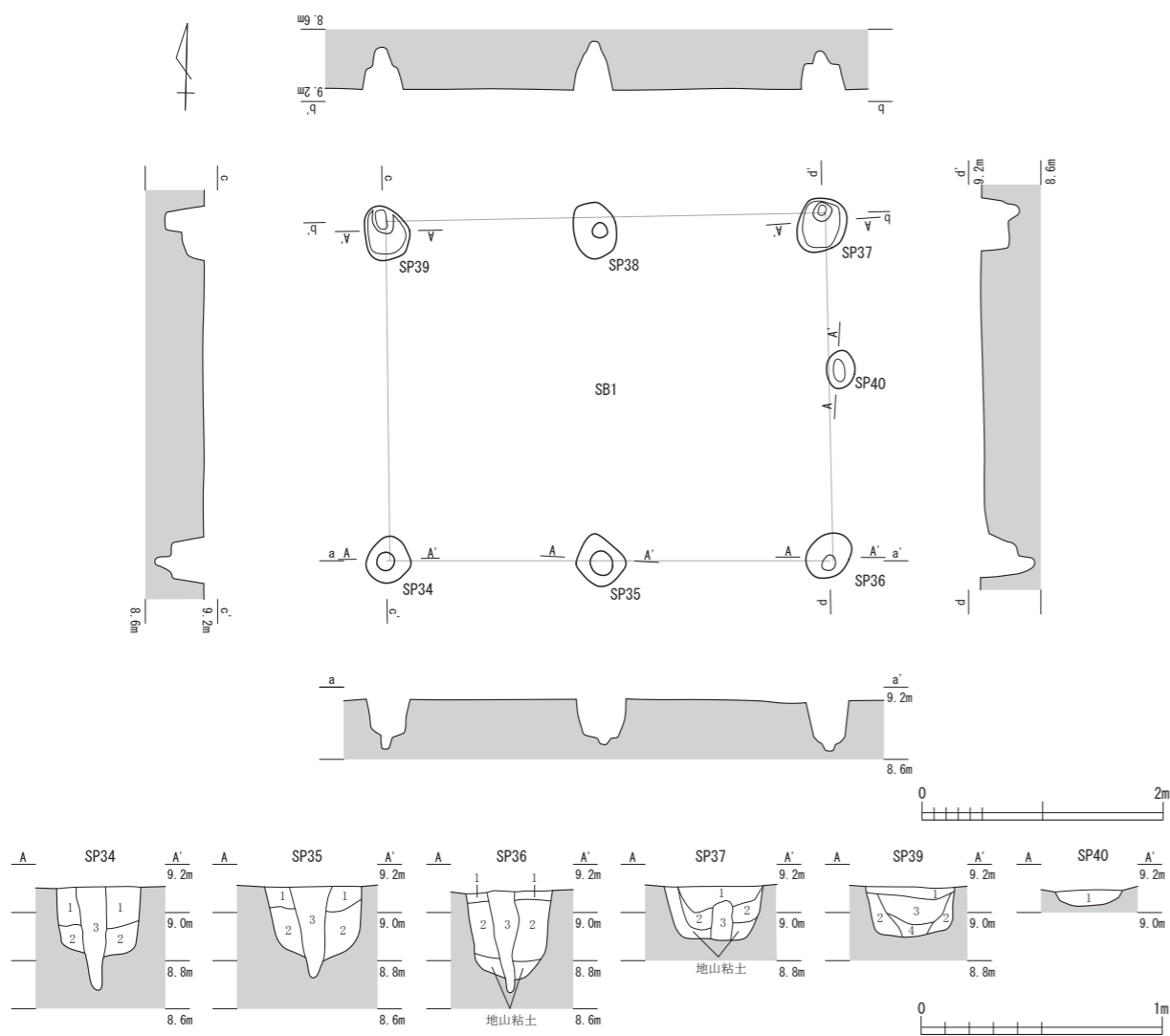
縄文時代晩期後葉の土器は中・下層から比較的出土しているほか (第55図1~第63図27)、弥生時代中期前葉 (第75図1・2) や同中期中葉 (第75図14、第76図1・5・6など)、同中期後葉 (第75図4~6、第78図1など) を含んでいる。中・上層は主に弥生時代後期~古墳時代前期の土器が多く出土している (第75~78図)。また、中・上層からは多量の木製品や自然木が出土し、鋏・田下駄・木庖丁・堅杵・弓・盾などのほかに、板材などの部材も多く出土する (第124図1~第133図7)。

また、①区の右岸には木製の杭群を検出している (第18図)。杭の径は10~15cm程度であり、杭1は長さ96cm、杭2は長さ84cm、杭3は長さ78cm、杭4は長さ107cmを測る。時期は明らかではないが、岸側で検出していることから、護岸施設や作業場に関連する遺構と推定する。③区の河床面からは人骨を集中して検出しているが、原状をほぼ留めておらず良好な残存状態ではない。おおむね一体分の人骨と考える (第19図)。

SR 1 Bは幅20m以上の規模を持ち、埋土は上層から下層 (第17図7層以下) にかけておおむね灰褐色系の粘質土から灰色系の粘質土が堆積する。先述したとおり、下層上面では貯蔵穴4基を検出しているが、未掘削の下層埋土下にはさらに貯蔵穴が検出できる可能性がある。出土した遺物は多くないが、縄文時代晩期の粗製深鉢などの土器破片が少量出土している。SR 1 Aの遺構形成面であることや出土遺物から、縄文時代晩期~弥生時代中期およびそれ以前に堆積した自然流路と考える。

2 II区の遺構

II区からは、主に掘立柱建物 (SB) 9棟、溝 (SD) 12条、土坑 (SK) 13基、自然流路 (SR) 4条、多数の柱穴を確認した。調査区北半では、主に西から東に流路方向がある3条の自然流路を検出した。SR 1内では護岸遺構が伴うSR 4や弥生時代の人骨を検出し、SR 3はI区SR 1の南延長線上に位置する。また、SR 2とSR 3の間にはSD 9をはじめとする溝や土坑、柱穴を確認しており、集落の存在を示唆する。調査区南半では、掘立柱建物9棟や溝6条を主に検出し、集落中心部の一部と想定できる。建物を構成しない多くの柱穴の存在から、9棟以上の建物があったことは容易に想像できよう。また、第3章で先述したように、SR 1・2直上やその周辺域 (グリッド14~17列) では、遺物を含む湿地状の粘質土 (SW 1) が堆積する。なお、SR 3については明らかに北隣のI区で検出したSR 1と同一遺構であるため、個別遺構図については略した。



SP34	1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br中量混
	2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量・鉄分中量混
	3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量・鉄分上層中量混
SP35	1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br中量混
	2 2.5Y5/3 黄褐色粘質土	鉄分中量・黒褐色粘質土Br少量混
	3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量・鉄分少量混
SP36	1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量・有機物微量混
	2 10YR4/6 褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br中量混
	3 2.5Y3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分少量・有機物微量混
SP37	1 2.5Y3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br少量・黒褐色粘質土Br・有機物・鉄分微量混
	2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br中量・鉄分少量混
	3 2.5Y3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・有機物微量・鉄分微量混
SP39	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・黄褐色粘質土Br少量・有機物微量混
	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分微量混
	3 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・有機物微量混
	4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br中量・鉄分少量混
SP40	1 0YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分中量混

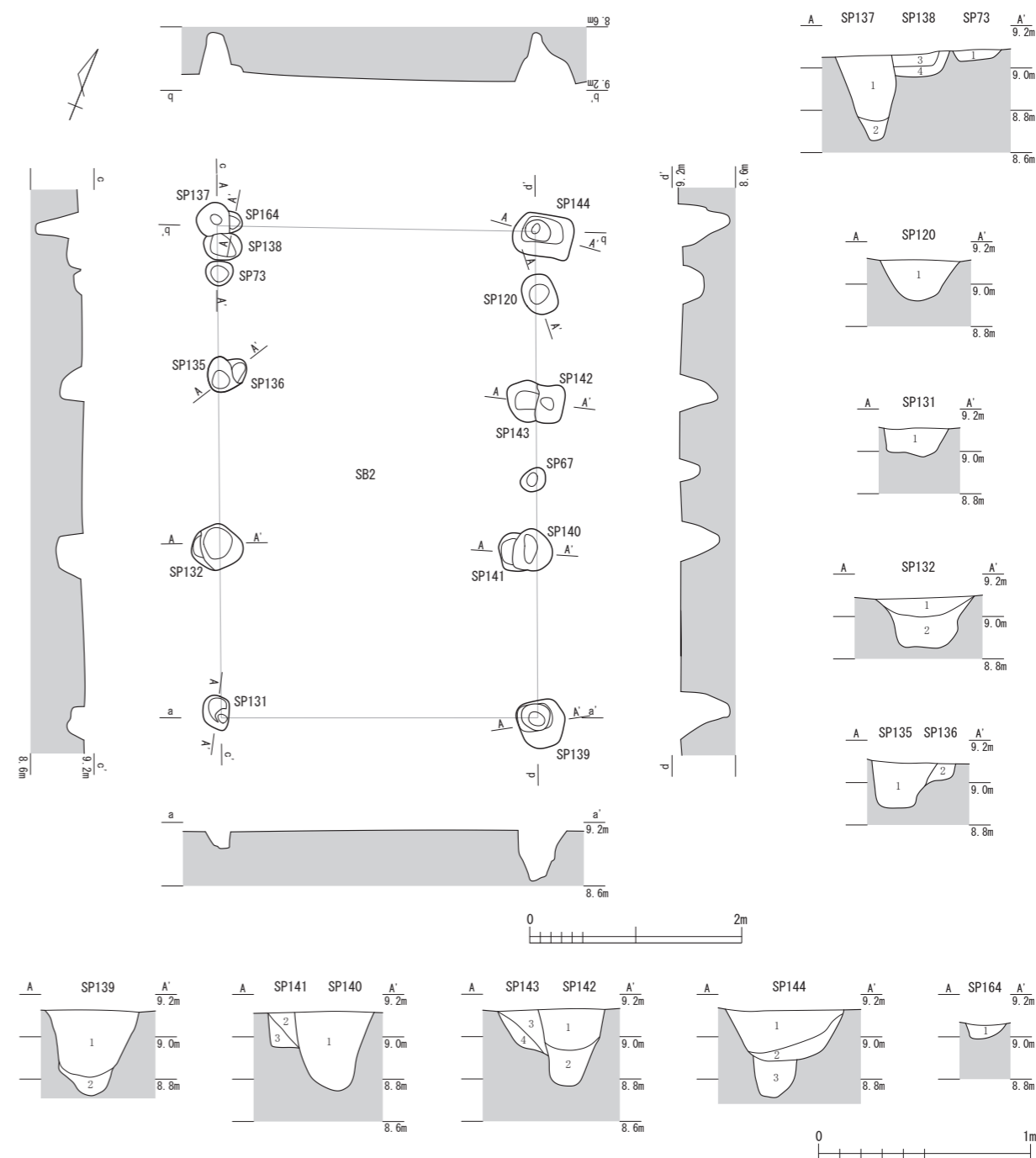
第20図 II区SB1実測図(縮尺1/60・1/30)

1) SB1 (第20図)

H-21・22に位置する掘立柱建物である。桁行2間(3.6m)、梁行1間(2.8m)の規模を持つ側柱建物である。建物の主軸方向はN-2°-Wである。柱間寸法は、SP34-35が1.80m、SP35-36間が1.85m、SP37-38間が1.85m、SP38-39間が1.80mである。柱穴の平面形は主に楕円形や隅丸方形があり、柱痕はSP34などで確認できる。柱穴深度は42~85cmを測る。

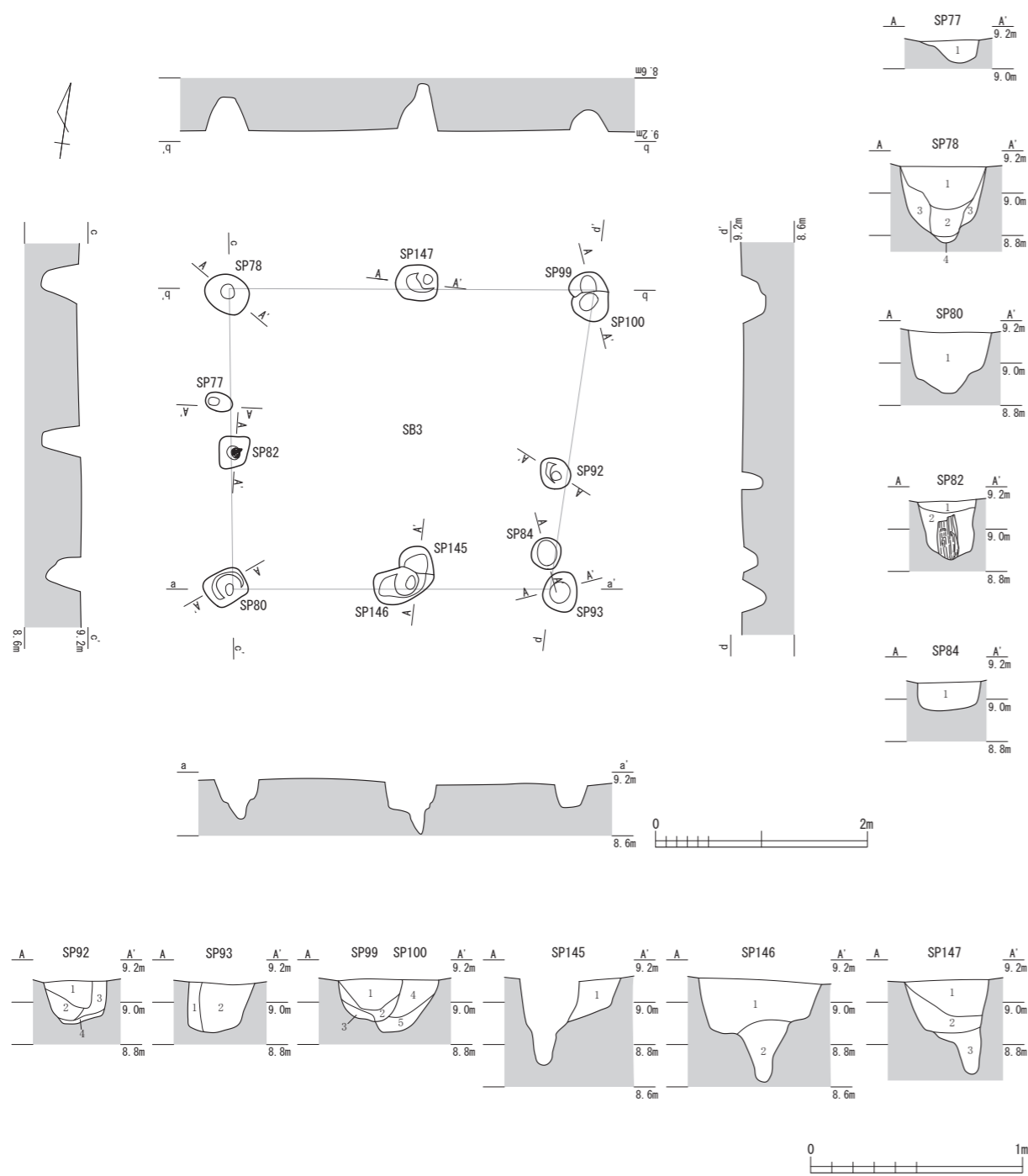
2) SB2 (第21図)

I-21・22に位置する掘立柱建物である。桁行3間(4.6m)、梁行1間(3.0m)の規模を持つ側柱建物である。SB8と遺構の切り合い関係にあるが、その前後関係は不明である。建物の主軸方向はN-22°-Wである。柱間寸法は、SP131-132間が1.65m、SP132-135間が1.55m、SP135-137間が1.45m、



SP137	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分中量・炭化物微量混
	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分少量混
SP138	3 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量・炭化物微量・鉄分少量混
	4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分微量混
SP139	1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br中量・鉄分少量混
SP140	1 10YR4/1 褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量・黒褐色粘質土Br少量・炭化物微量混
	2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分中量・褐色粘質土Br少量・炭化物微量混・全体的に土が赤みがかる
SP141	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量・鉄分少量・炭化物微量・鉄分で赤くなった黄褐色砂質土少量混
SP142	3 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量・鉄分中量・炭化物微量混
	4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分中量・黒褐色粘質土Br微量混
SP143	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量・炭化物微量・鉄分少量混
	2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br少量混
SP144	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量・炭化物微量・鉄分少量混
	2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br少量混
	3 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土・鉄分少量・炭化物微量混
SP164	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分多量・黄褐色粘質土Br中量・炭化物微量混

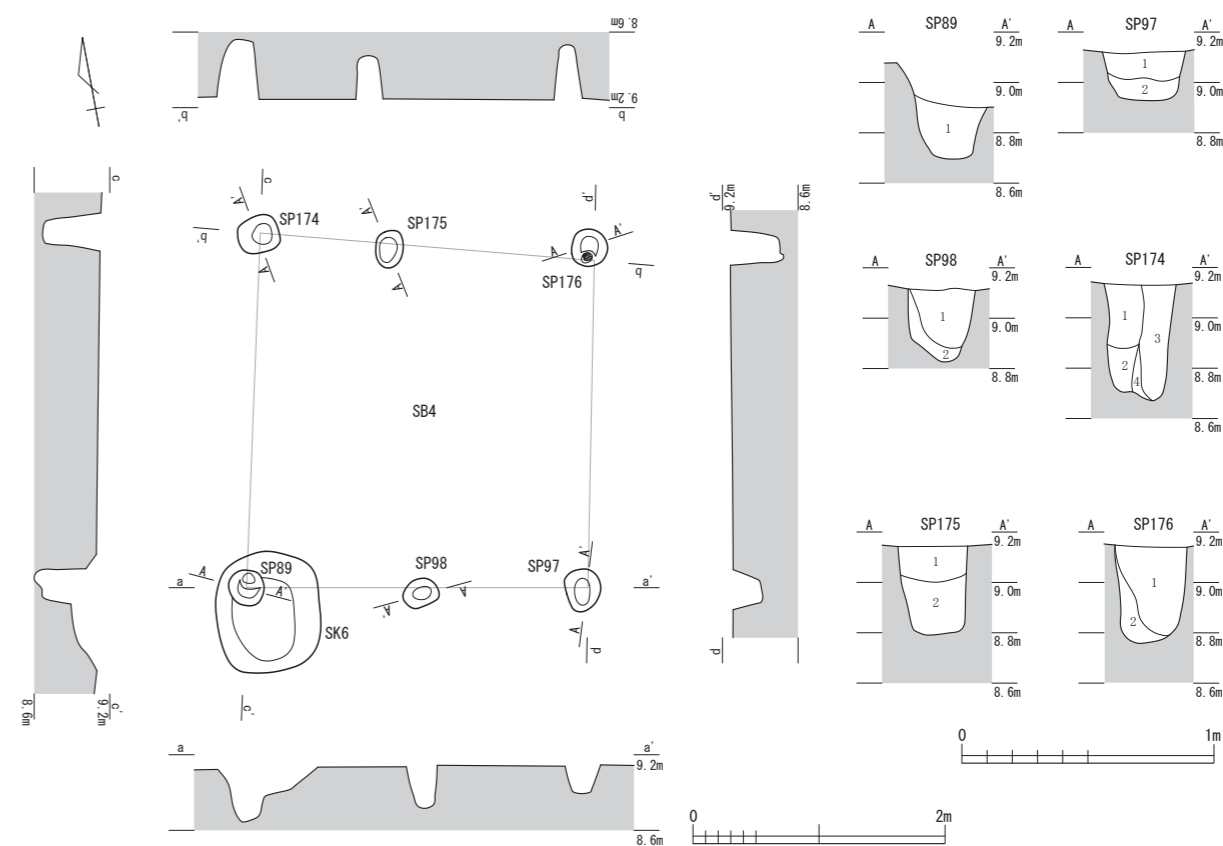
第21図 II区SB2実測図(縮尺1/60・1/30)



SP77	1 10YR3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量混
SP78	1 7.5Y4/1 褐灰色土	黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混
	2 10YR4/2 灰黄褐色粘質土	
	3 10YR6/4 にぶい黄褐色土	
	4 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量混
SP80	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量・炭化物微量
SP82	1 10YR3/2 黒褐色土	黄褐色土中量・炭化物微量混
	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	炭化物微量・遺物片1個混
SP84	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量・炭化物微量混
SP92	1 10YR3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混
	2 10YR2/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量混 (3層より大きなBr)
	3 10YR2/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量混
	4 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量混

第22図 II区SB3実測図 (縮尺1/60・1/30)

SP93	1 10YR3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br少量混
	2 10YR3/2 黒褐色粘質土	褐色粘質土Br中量・黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混
SP99・SP100	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量・炭化物微量混
	2 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土	褐灰色粘質土Br微量混
	3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br微量混
	4 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br中量・炭化物微量混
	5 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量混
SP145	1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分中量混
SP146	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分中量・炭化物微量混
	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土少量・鉄分微量混
SP147	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量・炭化物微量・鉄分少量混
	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	黒褐色粘質土Br微量・にぶい黄褐色粘質土Br・炭化物微量・鉄分少量混
	3 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分多量・黄褐色粘質土Br微量



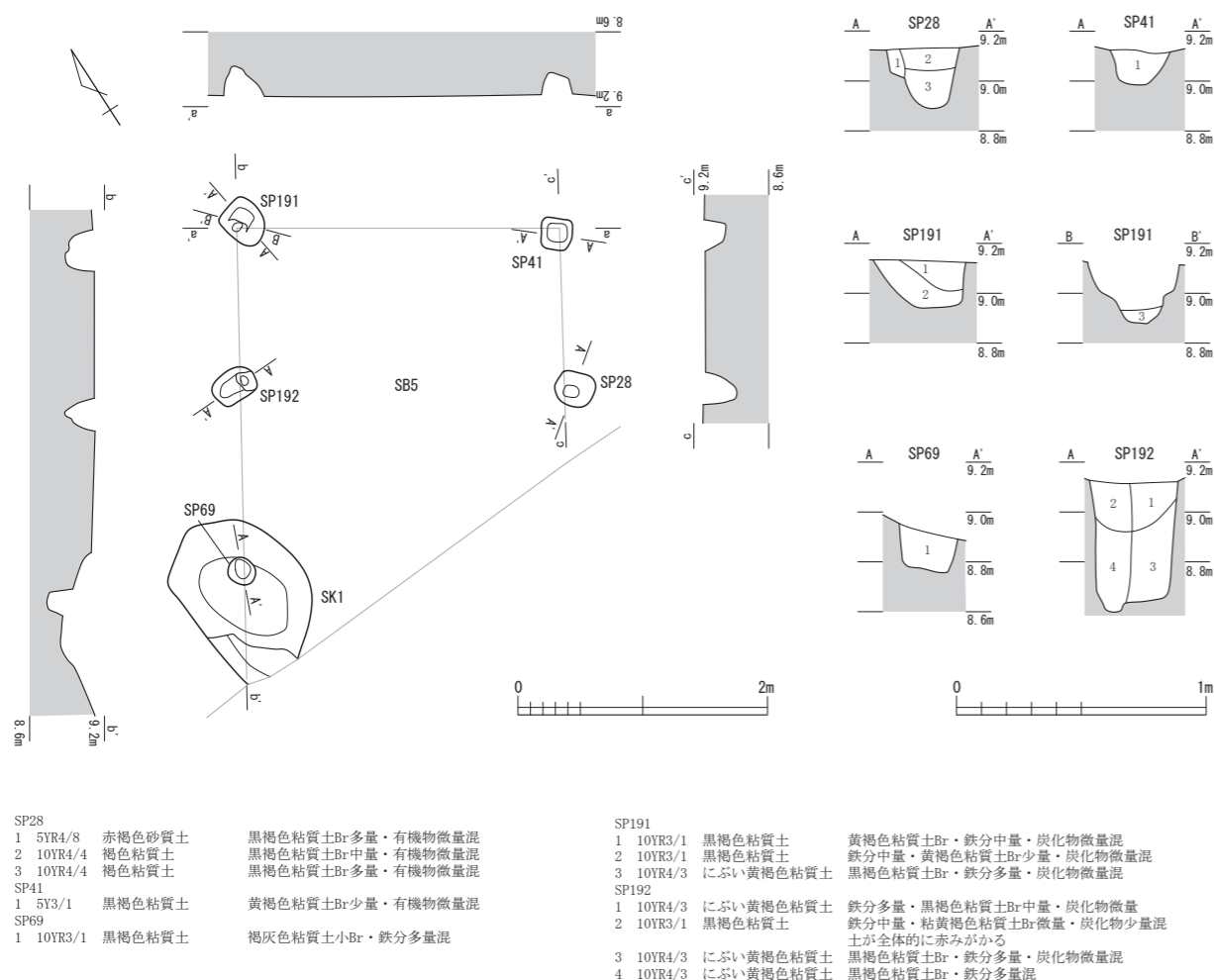
SP89	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	炭化物少量・黄褐色粘質土Br微量混	SP174	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・黄褐色粘質土Br・炭化物微量・石1個混
SP97	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分中量・炭化物少量混		2 10YR4/1 褐灰色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分微量混
	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分多量・黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混		3 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分多量・黄褐色粘質土Br中量混
SP98	1 10YR4/1 褐灰色粘質土	黄褐色粘質土Br・炭化物微量混		4 10YR3/1 黒褐色粘質土	褐灰色粘質土Br少量・鉄分少量混
	2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	褐灰色粘質土Br微量混	SP175	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分中量・褐灰色粘質土Br少量混
				2 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・黄褐色粘質土Br少量混
			SP176	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分中量・炭化物微量混
				2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分微量混

第23図 II区SB4実測図 (縮尺1/60・1/30)

SP139-140間が1.55m、SP140-143間が1.40m、SP143-144間が1.60mである。東側の桁行の柱間には、比較的小きな柱穴を認め (SP67・120)、補助的な柱の柱穴と推定する。柱穴の平面形は主に円形や隅丸方形があるが、明瞭な柱痕は確認できない。SP136・138などにあるように柱穴の付け替えが何度か行われていると推定する。支柱穴の柱穴深度は27~83cmを測り、特に東側の桁行の柱穴深度が深いことが特徴である。

3) SB3 (第22図)

I-21に位置する掘立柱建物である。桁行2間 (3.0~3.45m)、梁行2間 (2.85m) の規模を持つ側柱建物である。北側の桁行と南側の桁行を比べると、北側の桁行のほうが約50cm長い。建物の主軸方向はN-9°-Wである。桁行の柱間寸法は、SP78-147間が1.35m、SP147-99間が1.55m、SP80-146間が1.70m、SP146-93間が1.30mである。梁行の柱間寸法は、SP78-82間が1.55m、SP82-80間が1.30m、SP100-92間が1.80m、SP92-93間が1.05mである。柱穴の平面形は主に円形や隅丸方形があり、SP82では柱根を確認できる。SP99・100などにあるように、柱の付け替えが行われたと推定する。支柱穴の柱穴深度は42~98cmを測る。



SP28		SP191	
1 5YR4/8 赤褐色砂質土	黒褐色粘質土Br多量・有機物微量混	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分中量・炭化物微量混
2 10YR4/4 褐色粘質土	黒褐色粘質土Br中量・有機物微量混	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混
3 10YR4/4 褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量・有機物微量混	3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分多量・炭化物微量混
SP41		SP192	
1 5Y3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br少量・有機物微量混	1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br中量・炭化物微量混
SP69		SK1	
1 10YR3/1 黒褐色粘質土	褐色粘質土小Br・鉄分多量混	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・粘黄褐色粘質土Br微量・炭化物少量混 土が全体的に赤みがる
		3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分多量・炭化物微量混
		4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分多量混

第24図 II区SB5実測図(縮尺1/60・1/30)

4) SB4 (第23図)

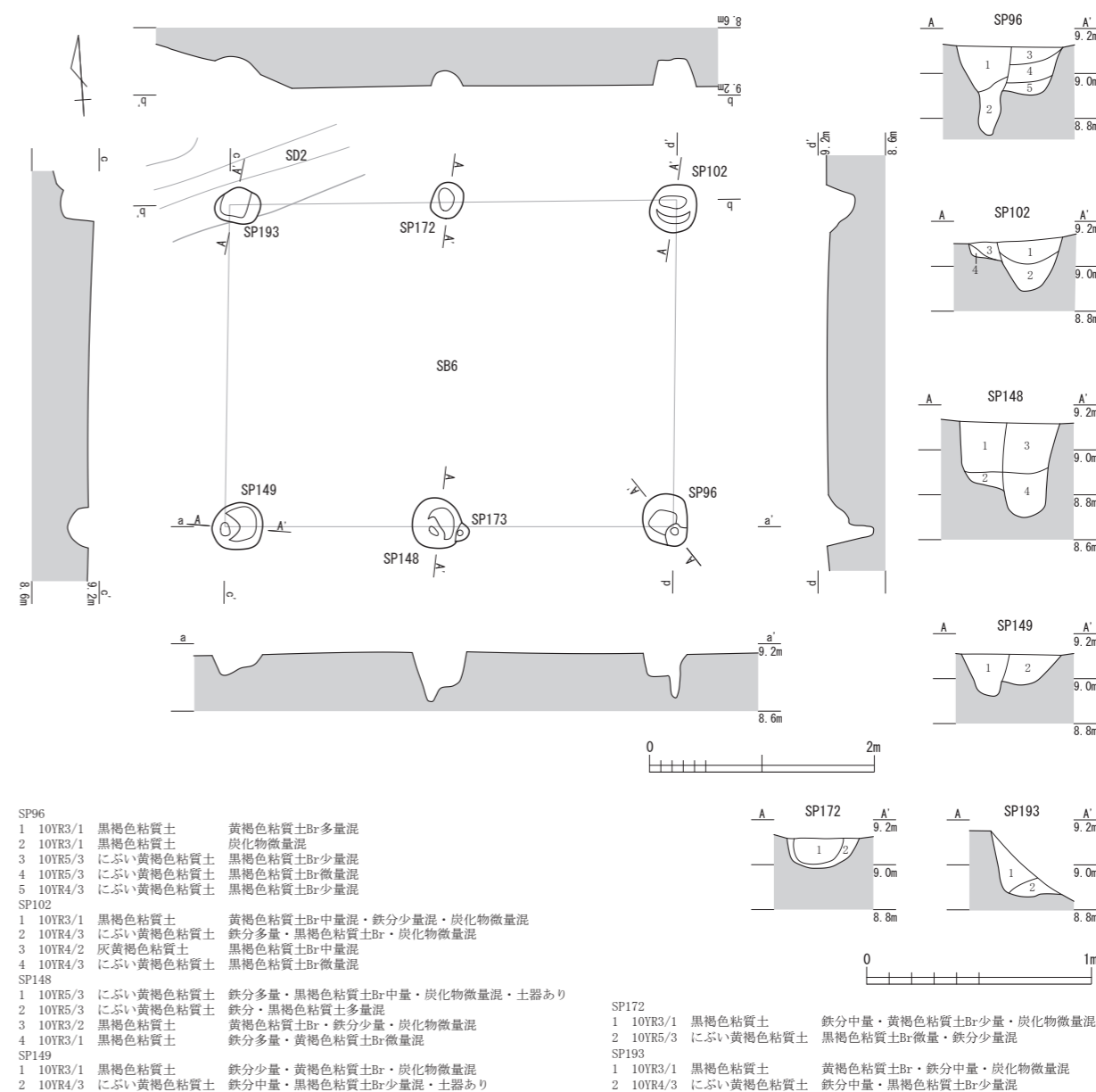
I・J-21に位置する掘立柱建物である。桁行2間(2.7m)、梁行1間(2.6~2.8m)の規模を持つ側柱建物である。西側の梁行と東側の梁行を比べると、西側の梁行のほうが約20cm長い。桁行と梁行の長さはほぼ等しい。建物の主軸方向はN-10°-Eである。柱間寸法は、SP174-175間が1.00m、SP175-176間が1.60m、SP89-98間が1.40m、SP98-97間が1.30mである。柱穴の平面形は主に円形や楕円形がある。主柱穴の柱穴深度は38~75cmを測る。

5) SB5 (第24図)

H・I-23に位置する掘立柱建物である。桁行3間以上(3.7m以上)、梁行1間(2.6m)の規模を持つ側柱建物である。建物の南半分は調査区外にあるため、建物の全体は不明である。建物の主軸方向はN-33°-Eである。柱間寸法は、SP191-192間が1.25m、SP192-69間が1.55m、SP41-28間が1.35mである。柱穴の平面形は主に円形や隅丸方形がある。主柱穴の柱穴深度は28~104cmを測る。

6) SB6 (第25図)

I-21に位置する掘立柱建物である。桁行2間(4.0m)、梁行1間(2.9m)の規模を持つ側柱建物である。SD2埋土下からはSP193を検出した。建物の主軸方向はN-4°-Eである。柱間寸法は、SP193-172間が1.95m、SP172-102間が2.05m、SP149-173間が1.85m、SP173-96間が2.15mである。柱穴の平面形は主に円形や隅丸方形がある。主柱穴の柱穴深度は38~84cmを測る。



SP96		SP172		SP193	
1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量混	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分中量・炭化物微量混
2 10YR3/1 黒褐色粘質土	炭化物微量混	2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br・炭化物微量混	2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分中量・黒褐色粘質土Br少量混
3 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br少量混	3 10YR3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分少量・炭化物微量混		
4 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br微量混	4 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分多量・黄褐色粘質土Br微量混		
5 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br少量混	SP149		SP192	
SP102		SP148		SK1	
1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br中量混・鉄分少量混・炭化物微量混	1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br中量・炭化物微量混・土器あり	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混
2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br・炭化物微量混	2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分・黒褐色粘質土多量混	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・黄褐色粘質土Br少量・炭化物微量混
3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br中量混	3 10YR3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分少量・炭化物微量混	3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量・有機物微量混
4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br微量混	4 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分多量・黄褐色粘質土Br微量混	4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br多量・有機物微量混
SP148		SP173		SP192	
1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br中量・炭化物微量混・土器あり	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分少量・黄褐色粘質土Br・炭化物微量混	1 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分多量・黒褐色粘質土Br中量・炭化物微量混
2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分・黒褐色粘質土多量混	2 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	鉄分中量・黒褐色粘質土Br少量混・土器あり	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分中量・粘黄褐色粘質土Br微量・炭化物少量混 土が全体的に赤みがる
3 10YR3/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分少量・炭化物微量混			3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分多量・炭化物微量混
4 10YR3/1 黒褐色粘質土	鉄分多量・黄褐色粘質土Br微量混			4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分多量混

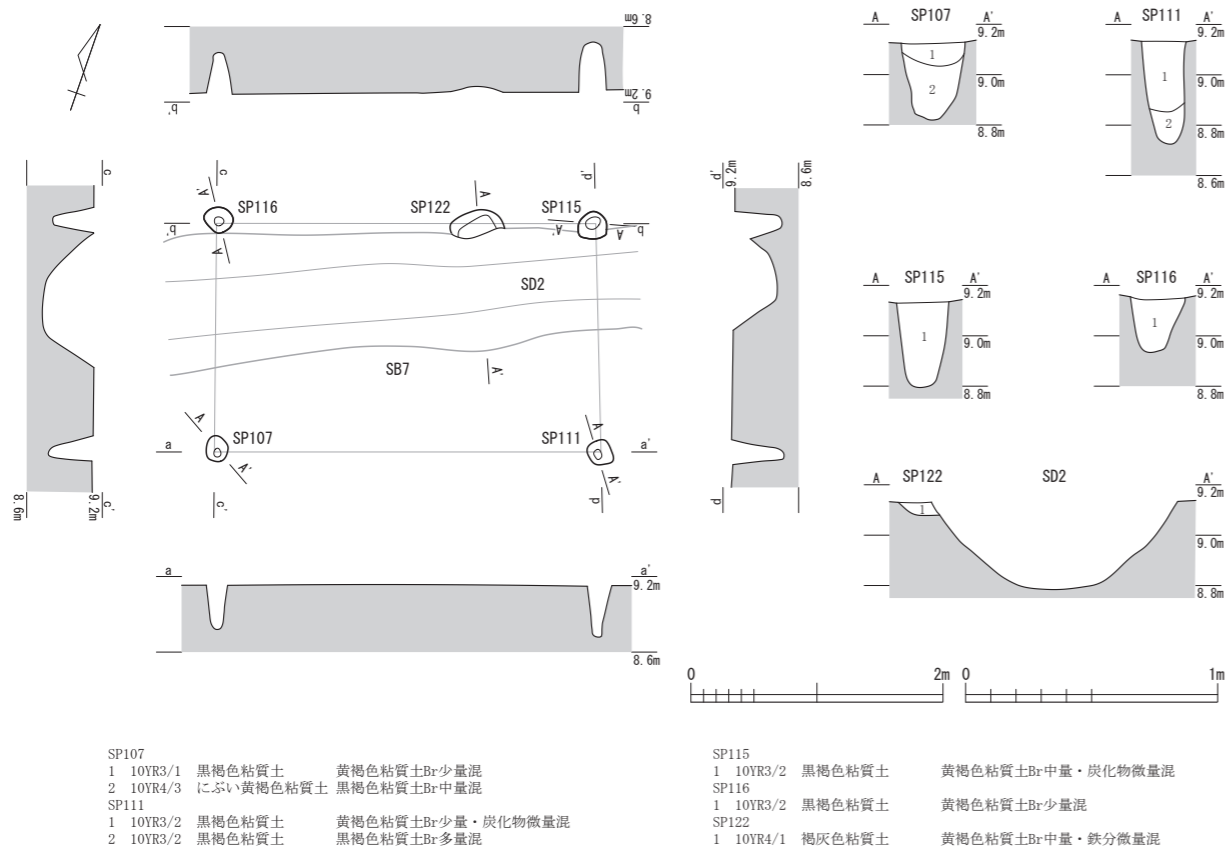
第25図 II区SB6実測図(縮尺1/60・1/30)

7) SB7 (第26図)

I・J-20に位置する掘立柱建物である。桁行1間(3.0m)、梁行1間(1.8m)の規模を持つ側柱建物である。梁行はSD2をまたいで検出したが、遺構切り合い関係は不明である。建物の主軸方向はN-19°-W、柱穴平面形は主に円形や隅丸方形がある。主柱穴の柱穴深度は42~82cmを測る。

8) SB8 (第27図)

I-22に位置する掘立柱建物である。桁行2間(3.75m)、梁行1間(3.05m)の規模を持つ側柱建物である。SB2と遺構の切り合い関係にあるが、その前後関係は不明である。建物の主軸方向はN-4°-Eである。柱間寸法は、SP133-66間が1.70m、SP66-72間が2.05m、SP129-61間が1.80m、SP61-65間が1.95mである。柱穴の平面形は主に円形や隅丸方形がある。柱穴の柱穴深度は35~75cmを測る。特に、四隅の主柱穴は柱穴の深さや掘方の規模が大きい。



第26図 II区SB7実測図（縮尺1/60・1/30）

9) SB9（第28図）

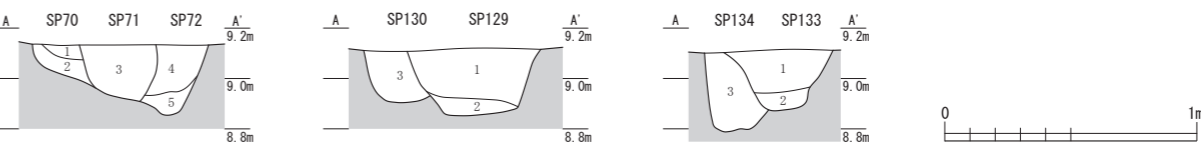
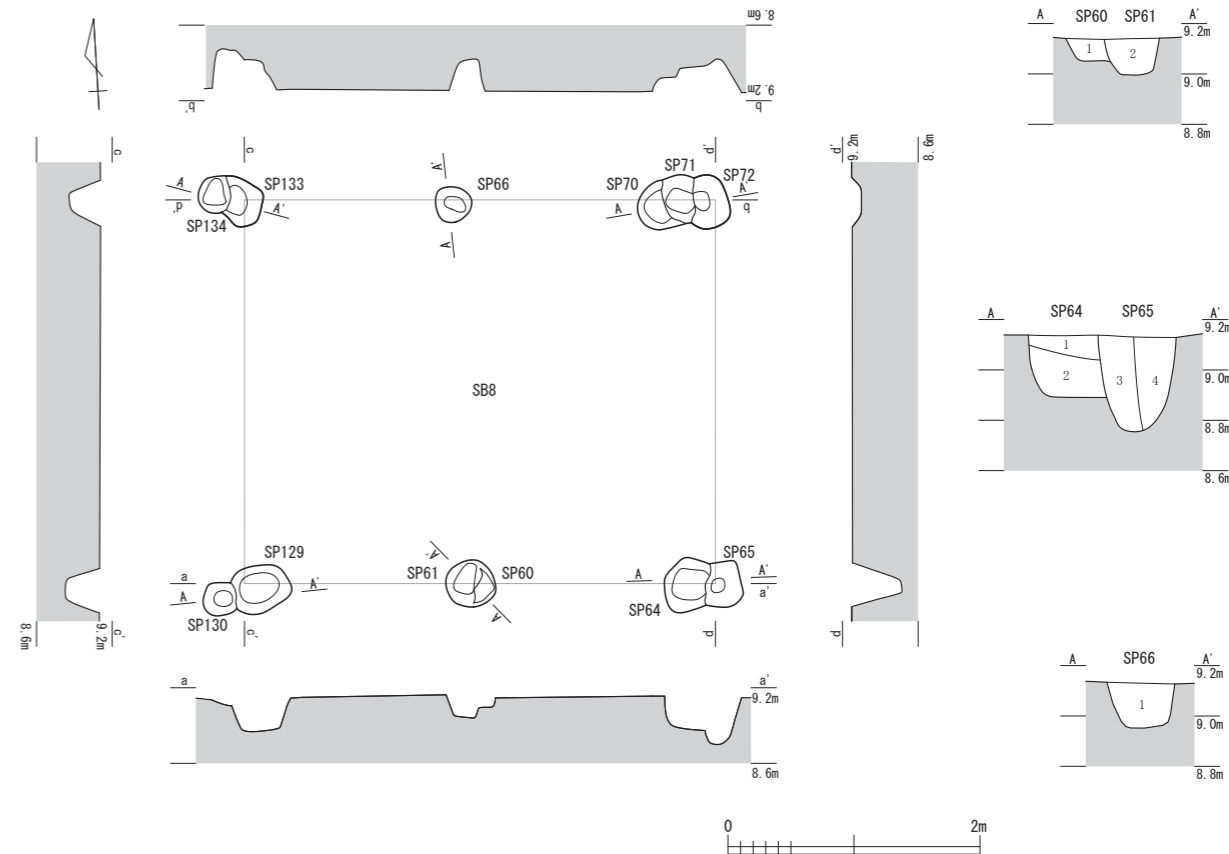
H-20に位置する掘立柱建物である。桁行1間（2.7m）、梁行1間（2.4m）の規模を持つ側柱建物である。周囲のSD3・4・6に囲まれているが、建物の平面規模や柱穴深度から小規模な建物と推定できるため、周溝を伴うような平地建物とは判断しなかった。建物の主軸方向はN-7°-Wである。柱穴の平面形は主に円形や楕円形がある。柱穴の柱穴深度は12~25cmを測る。隅丸方形のSK9が重複するが、建物との関係は不明である。

10) SD2（第29・30図）

I-20・21、J-20に位置する溝である。南西から北東にかけて直線状に伸び、南西端はSD3・7と重複し、SD3に切られている。溝の大きさは長さ13.0m、幅0.8~1.0m、深さ30~36cmを測る。溝底の標高値は西端から東端まで標高8.8mで比較的安定している。埋土は、上層に灰黄褐色粘質土、下層に褐灰色粘質土が堆積する。埋土からは、弥生時代中・後期の土器が少数出土している（第85図1・2）。出土遺物から、弥生時代中・後期の溝と推定する。

11) SD3（第29・30図）

H-21、I-20・21に位置する溝である。平面形は弧形をなし、南端はSD2・6・7と重複し、SD2を切りSD7に切られている。溝の大きさは長さ約13.0m、幅0.8~1.0m、深さ30~36cmを測る。流路方向は北から南へ方向である。埋土は、上層に褐灰色粘質土、下層ににぶい黄褐色粘質土が堆積する。埋土からは、弥生時代後期の土器（第85図3・4）や砥石（第120図7）が出土している。遺構の位置関係から、SD2・6と関連する遺構と考える。出土遺物から、弥生時代後期の溝と推定する。



SP70	1 10YR2/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分微量混
	2 10YR2/2 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分少量・炭化物微量混
SP71	3 10YR3/3 暗褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・炭化物・鉄分多量混・土器混
SP72	4 10YR3/3 暗褐色粘質土	黄褐色粘質土・炭化物少量混
	5 10YR5/6 黄褐色粘質土	暗褐色粘質土多量混
SP129	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量・鉄分中量・炭化物微量混
	2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土	黒褐色粘質土Br・鉄分少量混
SP130	3 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br・鉄分少量混
SP133	1 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br多量・鉄分少量・炭化物微量混
	2 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br少量・炭化物・鉄分微量混
SP134	3 10YR3/1 黒褐色粘質土	黄褐色粘質土Br少量（2層より少ない）・炭化物・鉄分微量混

第27図 II区SB8実測図（縮尺1/60・1/30）

12) SD4（第29図）

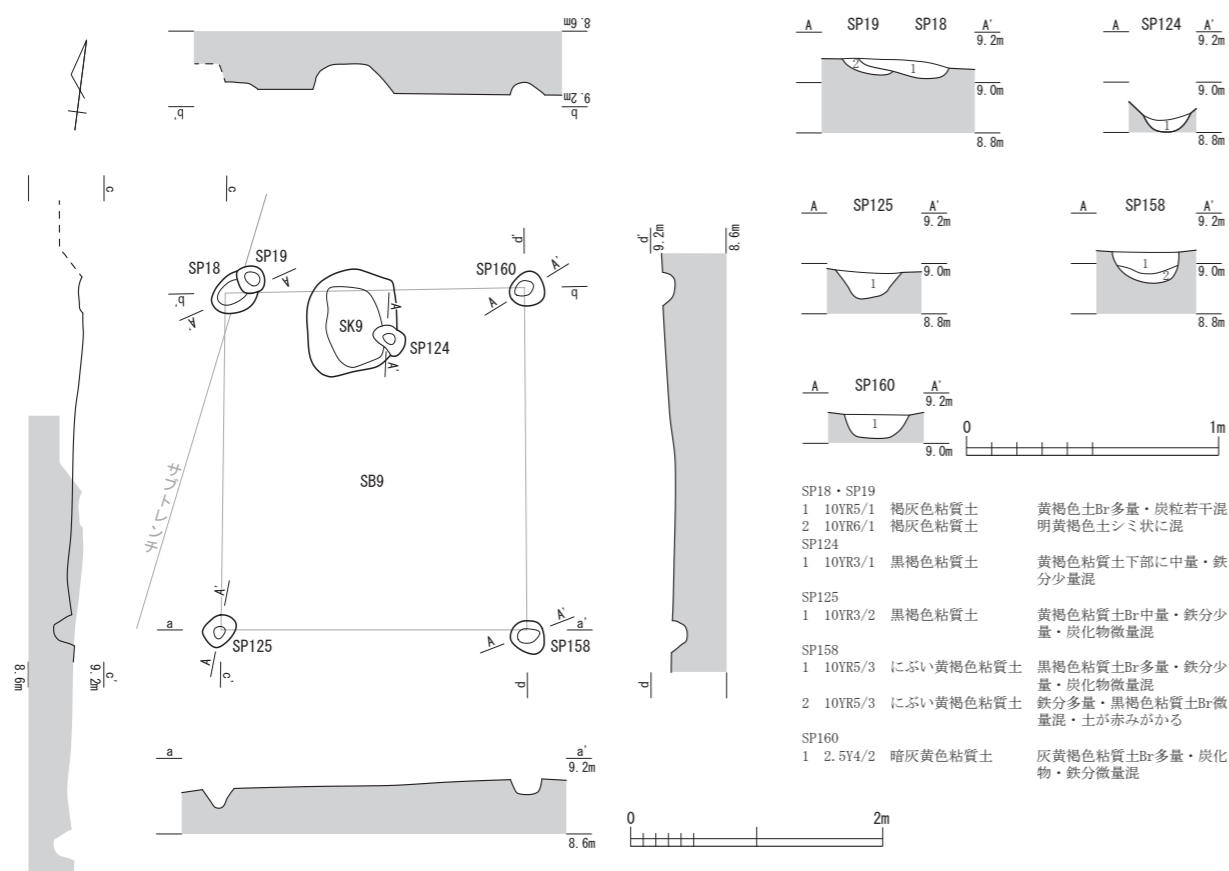
H・I-20に位置する溝である。平面形は直線形をなす。溝の大きさは長さ5.2m、幅0.3~0.5m、深さ9cmを測る。埋土は、褐灰色粘質土が堆積する。

13) SD5（第29図）

J-19・20に位置する溝である。平面形は蛇行形をなす。溝の大きさは長さ6.5m、幅0.5~0.9m、深さ6cmを測る。埋土は、にぶい黄褐色粘質土が堆積する。

14) SD6（第29・30図）

H-21に位置する溝である。南西から北東にかけてほぼ直線状に伸び、東端はSD3・7と重複している。



第28図 II区SB9実測図(縮尺1/60・1/30)

溝の大きさは長さ6.8m、幅0.5~0.7m、深さ36cmを測る。溝底の標高値は西端から東端まで標高8.8mで比較的安定している。埋土は、上層から下層に向けて黒褐色粘質土から黄褐色粘質土に変化していく。溝の平面形態や溝底の深さから、SD2と一連の溝であると推定する。

15) SD7 (第29・30図)

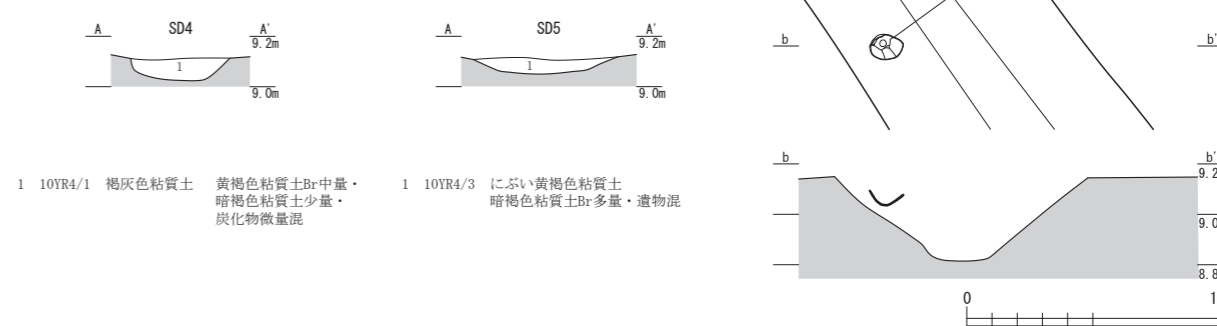
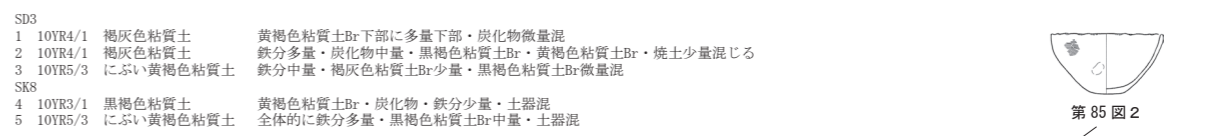
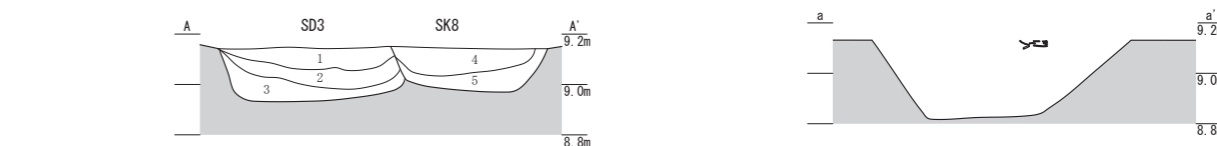
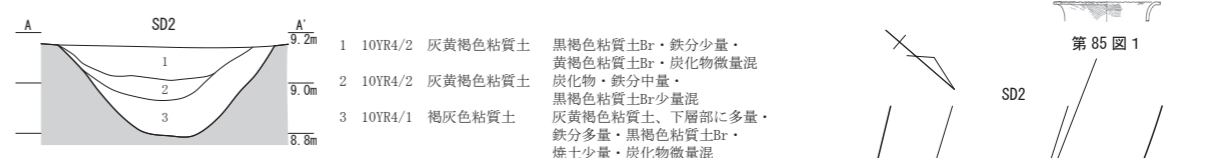
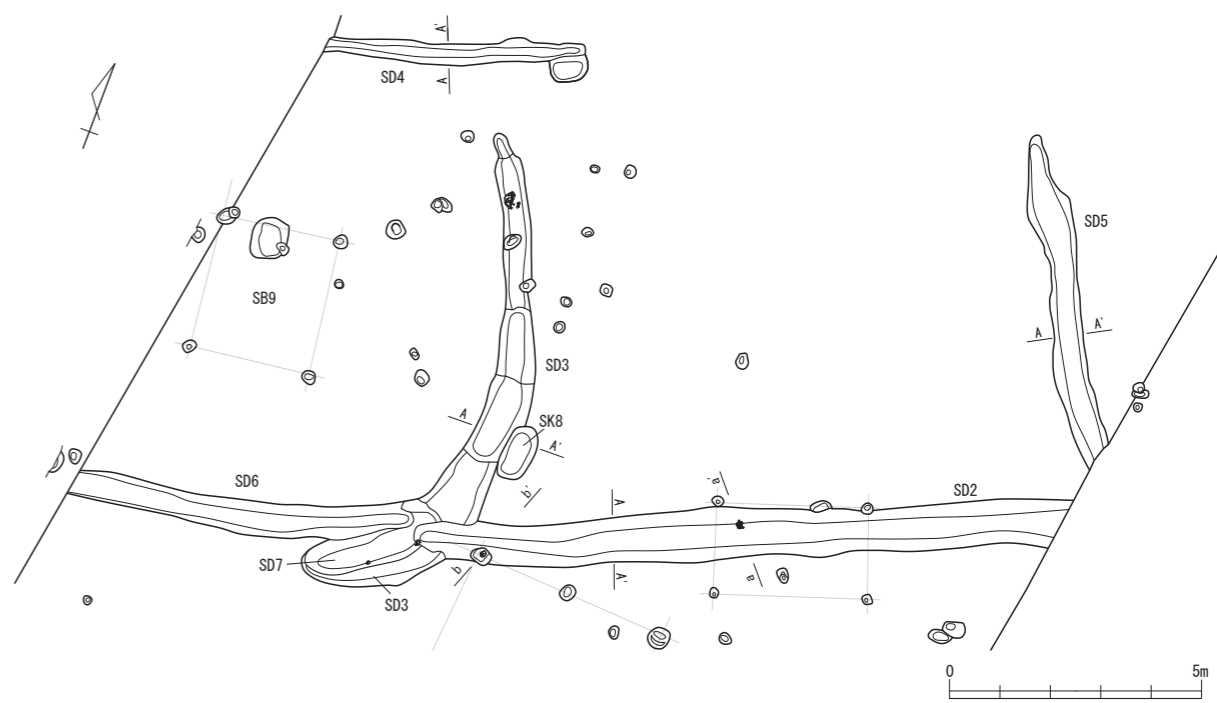
I-21に位置する溝である。SD3の南端に重なるように位置し、SD2・6とも一部重複している。これらの溝を切っていることから、溝の再掘削に伴う遺構と考える。溝の大きさは長さ2.8m、幅約0.9m、深さ36cmを測る。埋土は、黒色粘質土と黄褐色粘質土の互層を示していることから、廃棄土坑というよりも溝の機能維持のために溝底の掘削を数度重ねていると推定する。

16) SD8 (第38図)

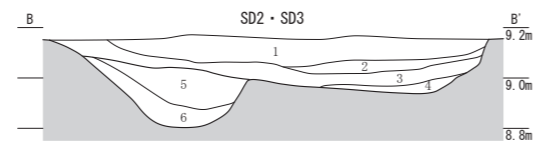
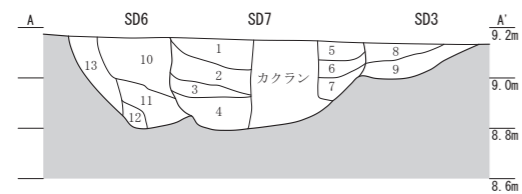
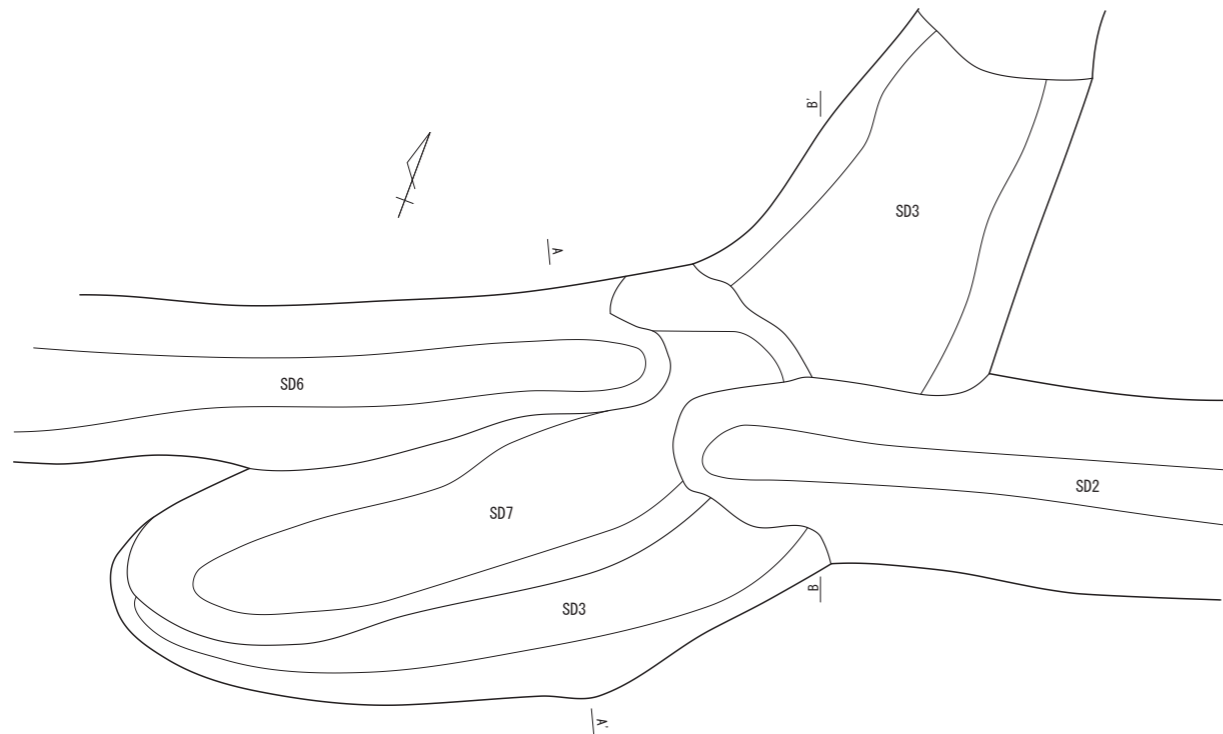
I-20・21、J-20に位置する溝である。南西から北東にかけて直線状に延びる。溝の大きさは長さ13.0m、幅0.8~1.0m、深さ30~36cmを測る。溝底の標高値は西端から東端まで標高8.0mで比較的安定している。埋土は、上層に灰黄褐色粘質土、下層に黒褐色粘質土が堆積する。埋土からは、磨石類(第119図10)などが出土している。

17) SD9 (第31図)

I-15、J-14・15に位置する溝である。北から南にかけておおむね直線状に延びている。途中で二又に分岐し、もう一方の溝はSR2に接している。溝の大きさは長さ16.7m、幅0.9~1.4m、深さ4~18cmを測る。溝底の標高値から、流路方向は南から北の方向である。埋土は、上層に灰黄褐色粘質土、下層に褐灰色粘質土が堆積する。埋土からは、古墳時代前期の土器が出土している(第85図5~8)。出土遺物から、古墳時代前期の溝と推定する。



第29図 II区SD2~7実測図(縮尺1/150・1/30)



- SD7
- | | | | |
|---|---------|-----------|-------------------|
| 1 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 | 4層大Br・鉄分多量・炭化物少量混 |
| 2 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色粘質土 | 1層・鉄分多量・4層Br少量 |
| 3 | 10YR2/1 | 黒色粘質土 | 鉄分多量・4層Br少量混 |
| 4 | 10YR7/2 | にぶい黄褐色粘質土 | 鉄分多量・3層小Br中量混 |
| 5 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質土 | 6層・炭化物・焼土中量混 |
| 6 | 10YR8/3 | 浅黄褐色粘質土 | 5層Br・鉄分中量混 |
| 7 | 10YR5/2 | 灰黄褐色粘質土 | 鉄分中量・5層少量混 |
- SD3
- | | | | |
|---|---------|---------|-----------|
| 8 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質土 | 炭化物・6層少量混 |
| 9 | 10YR5/2 | 灰黄褐色粘質土 | 8層・鉄分中量混 |
- SD6
- | | | | |
|----|---------|-----------|-------------|
| 10 | 10YR3/2 | 黒褐色粘質土 | 鉄分中量・炭化物少量混 |
| 11 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 | 鉄分多量混 |
| 12 | 10YR5/1 | 褐灰色粘質土 | 鉄分中量混 |
| 13 | 10YR5/2 | 褐灰色粘質土 | 鉄分多量混 |

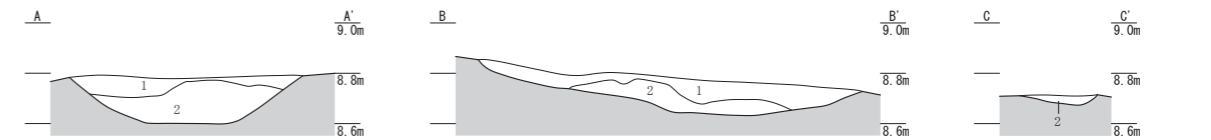
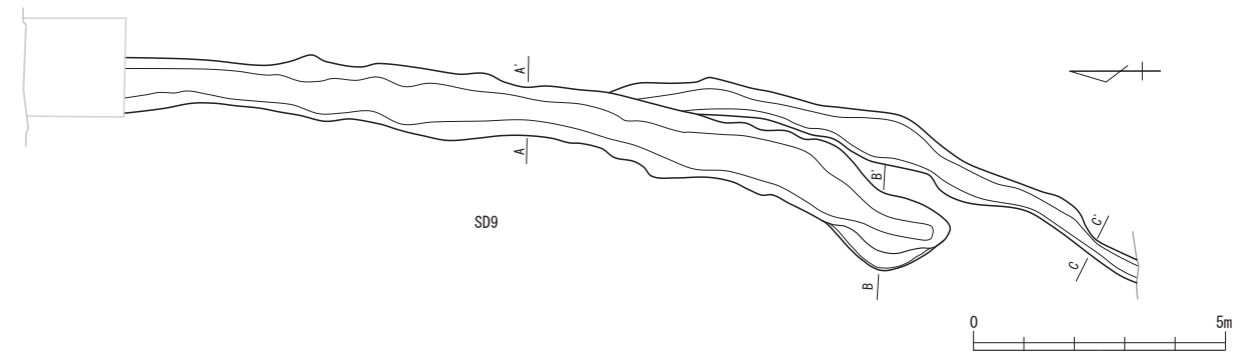
第30図 II区SD2・3・6・7実測図(縮尺1/30)

18) SD10 (第38図)

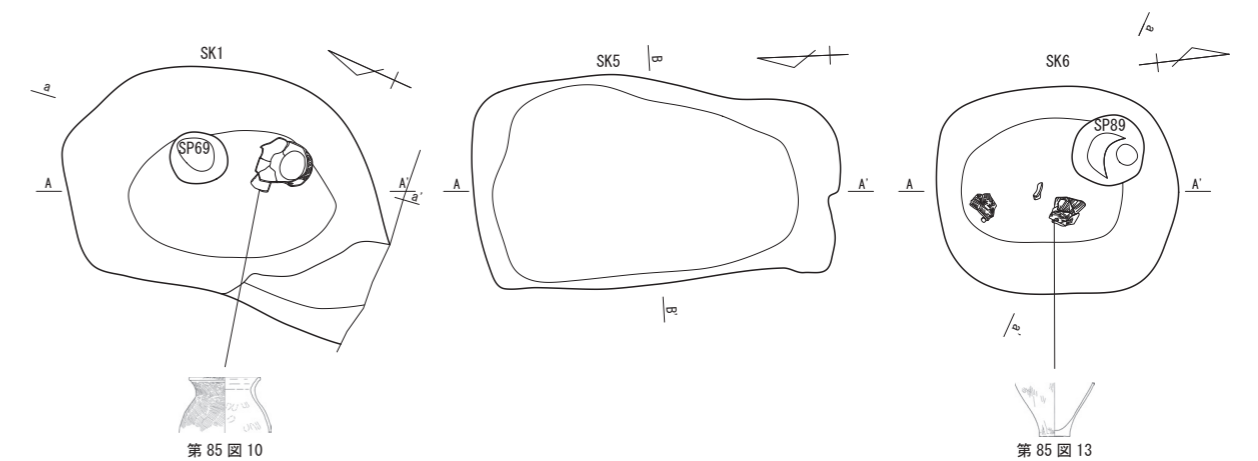
J・K-16に位置する溝である。西から東にかけておおむね直線状に延びる。溝の大きさは長さ10.0m、幅0.5~1.6m、深さ1~5cmを測る。埋土からは、弥生時代後期の土器が出土している(第85図9)。出土遺物から、弥生時代後期の溝と推定する。

19) SD12 (第38図)

I-16に位置する溝である。平面形は弧形をなし、遺構の配置関係からSD9と同一遺構の可能性はある。SR2の埋土下から検出しており、SR2によって上部が失われていると推定する。溝の大きさは長さ3.0m、幅0.4m、深さ約5cmを測る。埋土は黄灰色粘質土が堆積する。

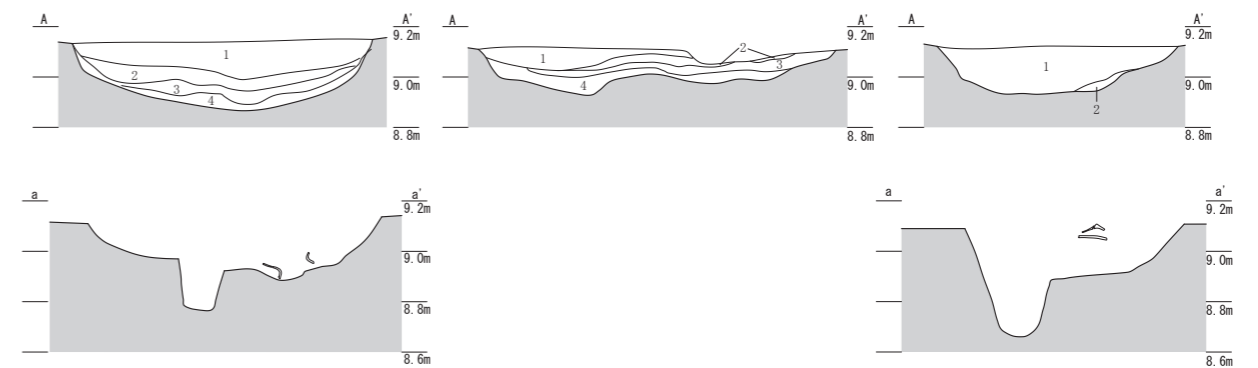


- | | | | |
|---|---------|---------|-------------------------------|
| 1 | 10YR4/2 | 灰黄褐色粘質土 | 腐植土主体、炭化物・小粒状の灰色粘質土(SR1覆土)若干混 |
| 2 | 10YR4/1 | 褐灰色粘質土 | 小粒状の灰色粘質土(SR1覆土)多量・炭化物を若干混 |



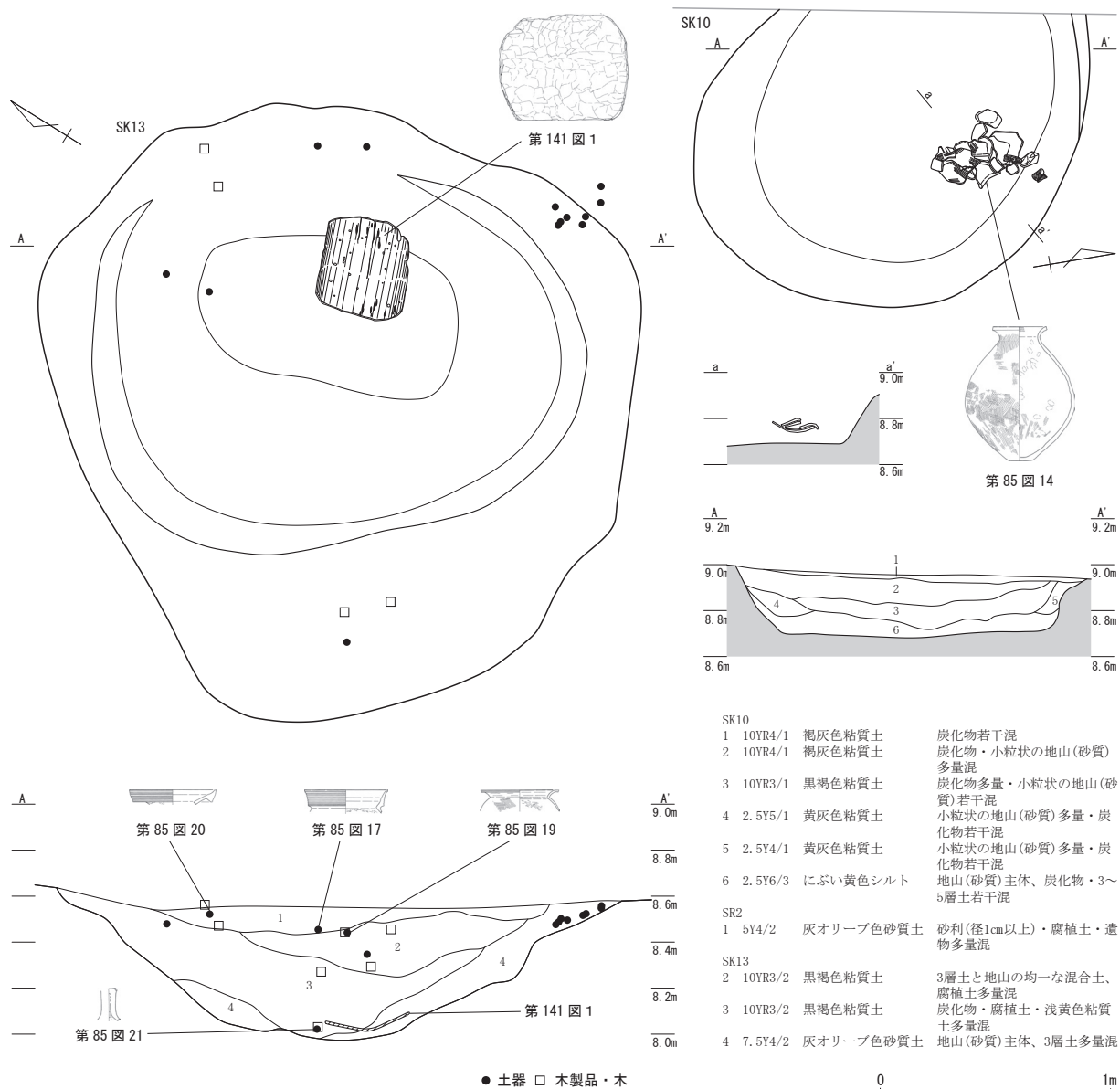
第85図10

第85図13



- | | | | | | | | |
|---|----------|-----------|--------------------|---|----------|--------|----------------------|
| 1 | 2.5YR2/1 | 赤黒色粘質土 | 黄褐色粘質土Br・鉄分中量混 | 1 | 10YR3/3 | 暗褐色粘質土 | 褐色粘質土Br・炭化物微量・遺物混 |
| 2 | 2.5YR2/1 | 赤黒色粘質土 | 暗褐色粘質土Br・有機物・鉄分中量混 | 2 | 10YR3/3 | 暗褐色粘質土 | 有機物中量混 |
| 3 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色粘質土 | 赤黒色粘質土・有機物少量混 | 3 | 7.5YR3/1 | 黒褐色粘質土 | 褐色粘質土Br少量混 |
| 4 | 10YR3/1 | 黒褐色粘質土 | 褐色粘質土少量混 | 4 | 7.5YR3/1 | 黒褐色粘質土 | 褐色粘質土Br層中量・炭化物少量・遺物混 |

第31図 II区SD9、SK1・5・6実測図(縮尺1/150・1/30)



第32図 II区SK10・13実測図(縮尺1/30)

20) SK 1 (第31図)

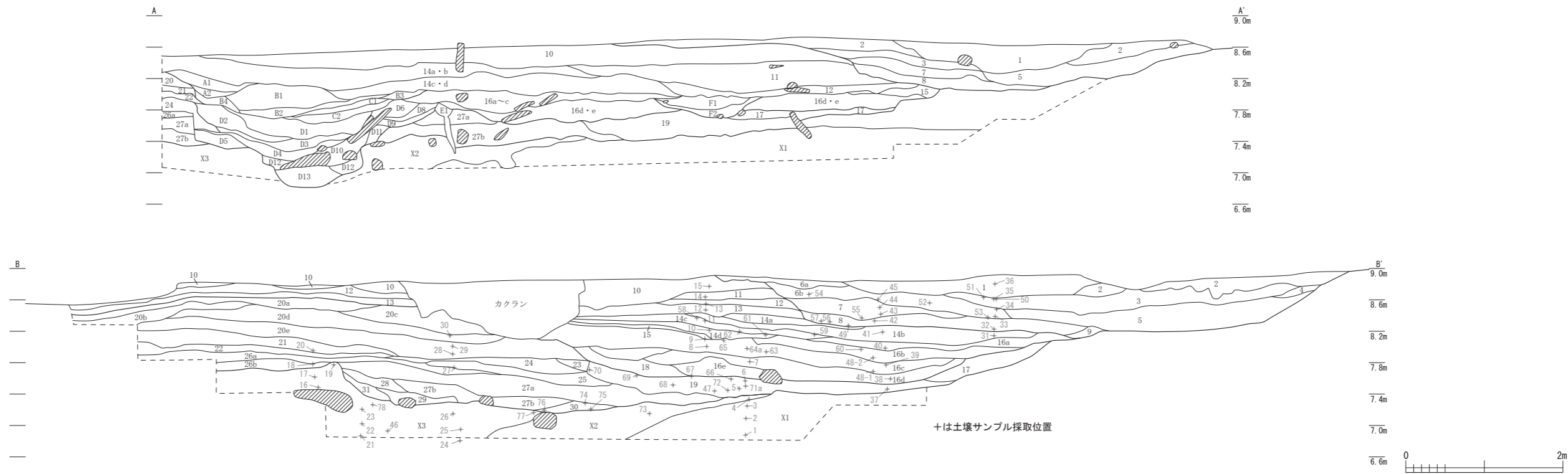
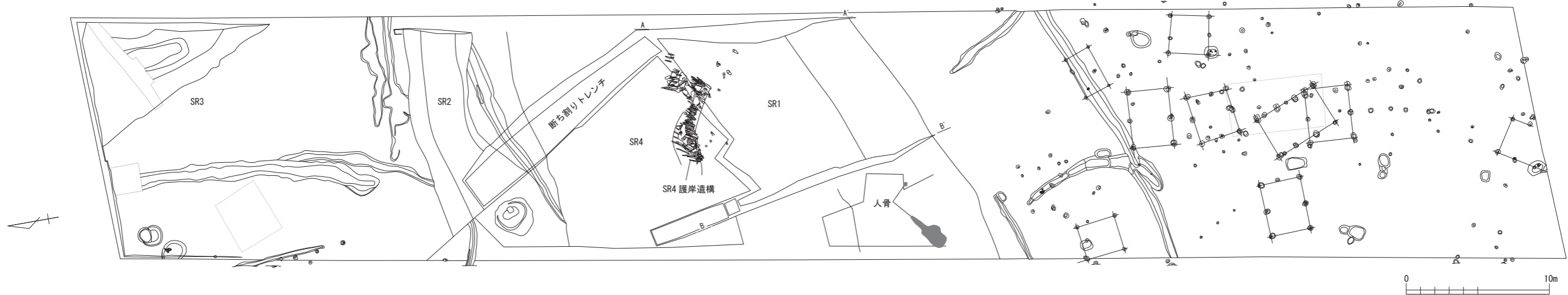
H-23に位置する土坑である。土坑南西側の底は段状に掘削されている。平面形は楕円形で、長径130cm以上、短径89cm、深さ28cmを測る。埋土は上層から、赤黒色粘質土、にぶい黄褐色粘質土、黒褐色粘質土が堆積する。底面付近から、弥生時代中期後葉の土器の破片が出土している(第85図10・11)。胴部以下が失われており、意図的に廃棄したものと推定する。SB5と遺構の切り合い関係にあるが、出土遺物から弥生時代中期の土坑と推定できるため、SB5以前に形成された遺構といえる。

21) SK 5 (第31図)

H-22に位置する土坑である。平面形は隅丸長方形で、長径145cm、短径86cm、深さ19cmを測る。埋土は上層から、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土が堆積する。底面はやや不整形な形状である。弥生時代後期の土器破片が出土している(第85図12)。出土遺物から、弥生時代後期の土坑と推定する。

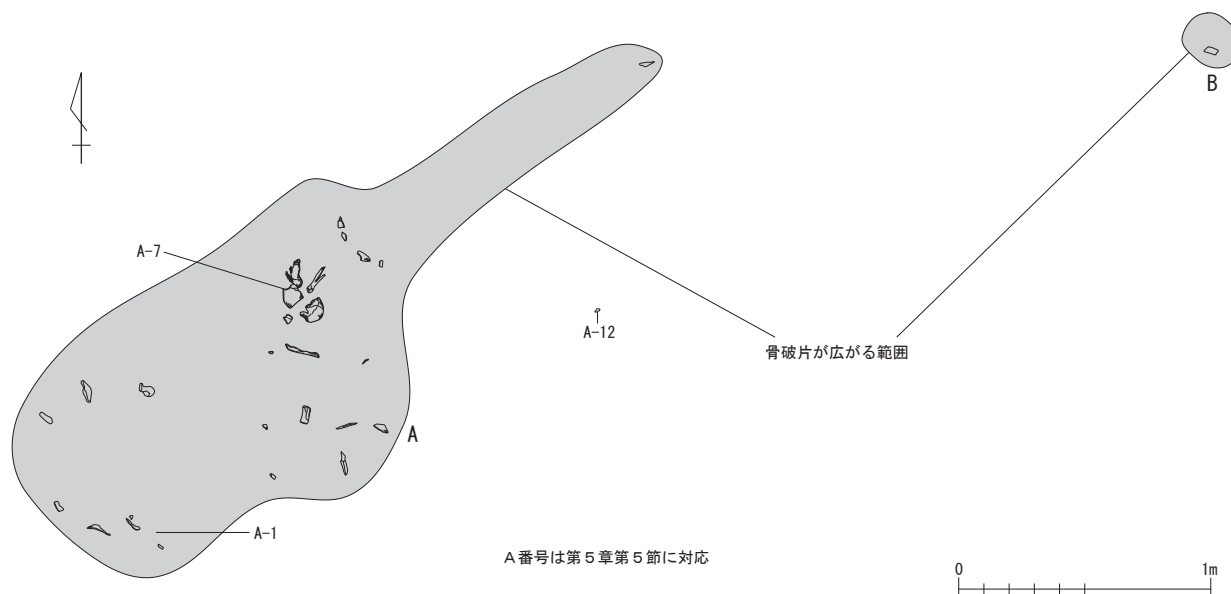
22) SK 6 (第31図)

I-21に位置する土坑である。平面形は隅丸方形で、長径95cm、短径81cm、深さ19cmを測る。埋土は



SR1・A層	1	10YR2/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、ほぼ均一な土層	18	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	灰色粘質土主体、腐植土多量・小粒状灰白色粘質土若干混	SR4	A1	10Y4/1	灰色粘質土	同色細砂・14層土多量混
	2	10YR4/1	褐灰色粘質土	3層土・小塊状の黄灰色粘質土多量混	17	5Y4/1	灰色粘質土	16層土多量混		A2	5Y4/1	灰色粘質土	20層土多量混
	3	10YR2/3	黒褐色粘質土	腐植土主体、小粒状の褐灰色粘質土多量混	19	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土・灰色砂・小塊状の灰白色粘質土・流木多量混		B1	5Y4/1	灰色砂質土	小塊状の灰白色粘質土・灰色粘質土若干混
	4	10YR2/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、褐灰色粘質土多量混	20a	5Y4/1	灰色粘質土	20c層土に近似する、小粒状の灰白色粘質土多量混		B2	5Y4/1	灰色砂質土	B1層より灰色粘質土・小塊状の灰白色粘質土多量混
	5	10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、1層土若干混	20b	10Y5/1	灰色粘質土	小粒状の灰白色粘質土多量混		B3	10YR6/6	明黄褐色砂質土	粗砂主体
	6a	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体	20c	5Y4/1	灰色粘質土	炭化物・腐植土若干混		B4	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土・3層土多量混
	6b	10YR4/1	褐灰色粘質土	腐植土主体、1層土多量混	20d	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土若干混		C1	5Y5/1	灰色粘質土	灰色砂質土・小塊状の灰白色粘質土多量混
	7	10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、小粒状の黄灰色粘質土若干混	20e	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土多量混		C2	5Y5/1	灰色粘質土	C1層より灰色粘質土の混入度低い
	8	10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、小粒状の黄灰色粘質土・遺物多量混	21	7.5Y4/1	灰色砂質土	鉄分・腐植土多量混		D1	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土・小塊状の灰白色粘質土多量混
	9	10Y4/1	灰色粘質土	5・8層土多量混	22	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土多量混		D2	7.5Y4/1	灰色粘質土	腐植土・小塊状の灰白色粘質土若干混
SR1・B層	10	10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、炭化物若干混	23	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体、灰色砂・小粒状灰白色粘質土若干混		D3	7.5Y4/1	灰色粘質土	同色砂・腐植土多量・小塊状の灰白色粘質土若干混
	11	10YR4/1	褐灰色粘質土	腐植土主体、炭化物・13層土若干混	24	10YR4/1	褐灰色粘質土	腐植土主体		D4	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土・灰色粘質土との不均一な混合土
	12	10YR2/1	黒色粘質土	腐植土主体	25	10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土多量・オリブ灰色細砂・小粒状灰白色粘質土若干混		D5	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土若干混
	13	7.5Y5/1	灰色粘質土	炭化物・腐植土多量・小粒状灰白色粘質土若干	26a	5Y4/1	灰色粘質土	小粒状の灰白色粘質土多量・腐植土若干混		D6	10Y6/1	灰色粘質土	炭化物・腐植土多量混
	14a	10Y4/1	灰色砂質土	腐植土が不均一に多量・炭化物若干混	26b	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土多量・小塊状の灰白色粘質土若干混		D7	2.5Y5/2	暗黄褐色粘質土	炭化物・腐植土多量混
	14b	10Y4/1	灰色砂質土	炭化物・腐植土と同色細砂多量混	27a	2.5Y4/2	暗黄褐色粘質土	腐植土多量・小塊状の灰白色粘質土若干混		D8	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体、D7層土多量混
	14c	10Y4/1	灰色砂質土	土質が14a層土に近似する	27b	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	小塊状の灰白色粘質土多量混		D9	5Y4/1	灰色粘質土	D8層土多量混
	14d	10Y4/1	灰色砂質土	土質が14b層土に近似する	28	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土・オリブ灰色細砂多量・小塊状灰白色粘質土若干混		D10	2.5Y4/2	暗黄褐色粘質土	腐植土主体
	15	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	14b層土と腐植土若干混	29	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土多量・小粒状灰白色粘質土若干混		D11	2.5Y4/2	暗黄褐色粘質土	D10層土主体、27層土多量混
	16a	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	17層より腐植土多量・小塊状の灰白色粘質土若干混	30	10Y5/1	灰色粘質土	X3層土主体、小塊状の28・29層土多量混		D12	7.5Y4/1	灰色粘質土	D13層土主体、D10層土多量混
	16b	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	16d層土に近似する、小塊状の灰白色粘質土が16c層より多量混	無遺物層	X1	2.5Y4/2	暗黄褐色粘質土	無遺物層	D13	7.5Y4/1	灰色粘質土	腐植土とD10層土多量混
	16c	10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土・小粒状の灰白色粘質土多量混	X2	7.5Y5/1	灰色粘質土	腐植土多量混、無遺物層		E1	2.5Y4/2	暗黄褐色粘質土	土質が27b層と近似する、杭跡
	16d	10YR4/1	褐灰色粘質土	腐植土・小粒状の灰白色粘質土・小塊状の灰色粘質土多量混	X3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体、流木多量混、無遺物層		F1	5Y5/1	灰色粘質土	同色細砂多量・3層土若干混
	16e	10YR4/1	褐灰色粘質土	小粒状の灰白色粘質土・灰色粘質土・腐植土多量混						F2	10YR4/1	褐灰色粘質土	16層土多量混

第33図 II区SR1・4実測図(縮尺1/300・1/60)



第34図 II区SR1人骨実測図（縮尺1/30）

主に黒褐色粘質土が堆積する。埋土上位から、弥生時代の甕破片が出土している（第85図13）。SB4との遺構の切り合い関係は明らかではない。出土遺物から、弥生時代の土坑と推定する。

23) SK10（第32図）

I-14に位置する土坑である。平面形は円形で、長径150cm以上、短径152cm、深さ28cmを測る。埋土は上層から、褐灰色粘質土、黒褐色粘質土、にぶい黄色シルトが堆積する。にぶい黄色シルト直上から、弥生時代中期後葉の壺（第85図14）などが出土している。出土遺物から、弥生時代中期の土坑と推定する。

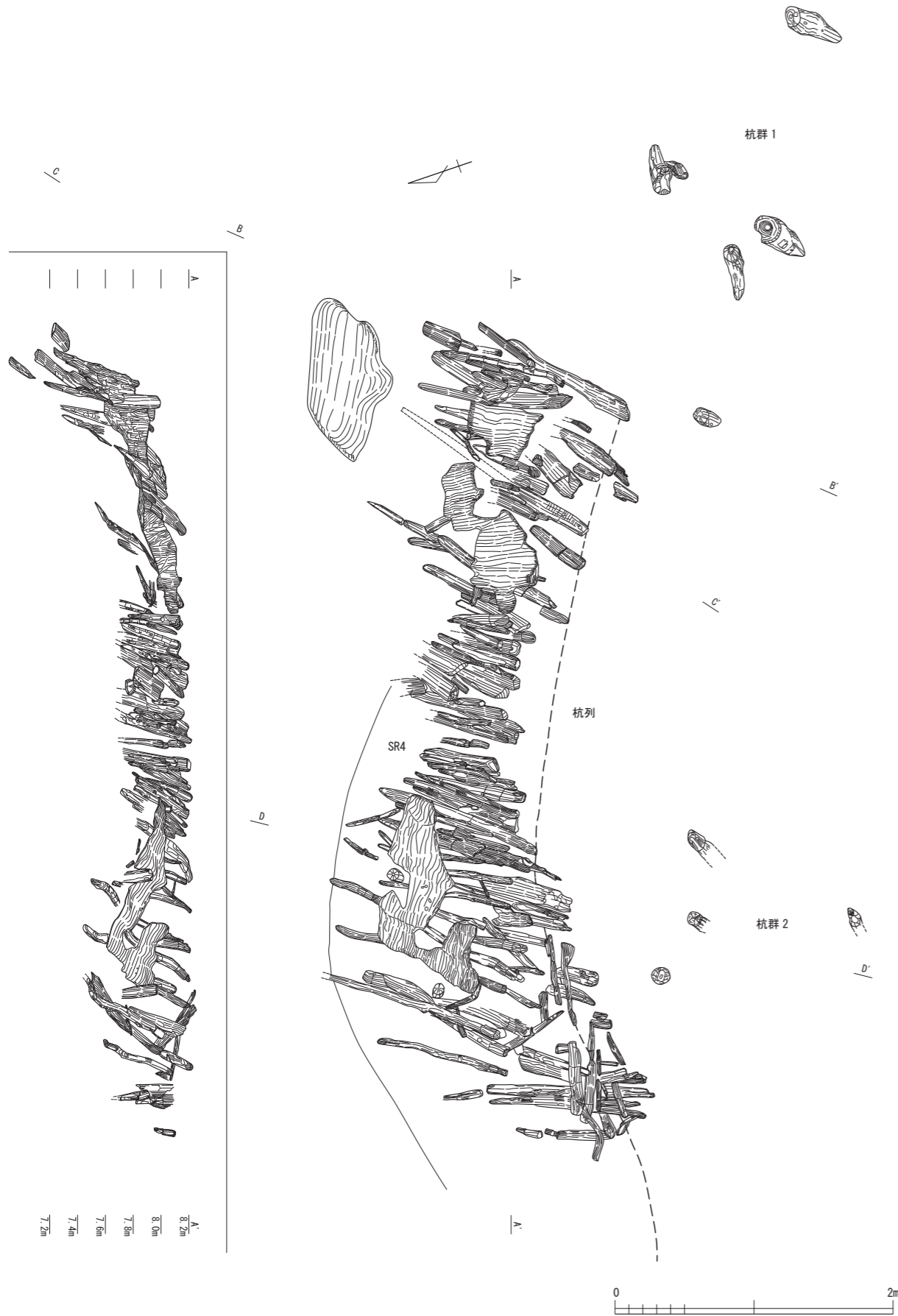
24) SK13（第32図）

I-16に位置する土坑である。平面形は不整形円で、長径270cm、短径262cm、深さ68cmを測る。埋土上位はSR2によって削平されており、その下には黒褐色粘質土、灰オリーブ色砂質土の順に堆積する。遺物は主に黒褐色粘質土上位において出土している。埋土上層から遺構底面にかけては弥生時代後期終末～古墳時代初頭の土器が出土する（第85図15～21）。底面からは木製盤（第141図1）や自然木などが出土している。底面付近から出土する第85図21から、弥生時代後期の土坑と推定する。

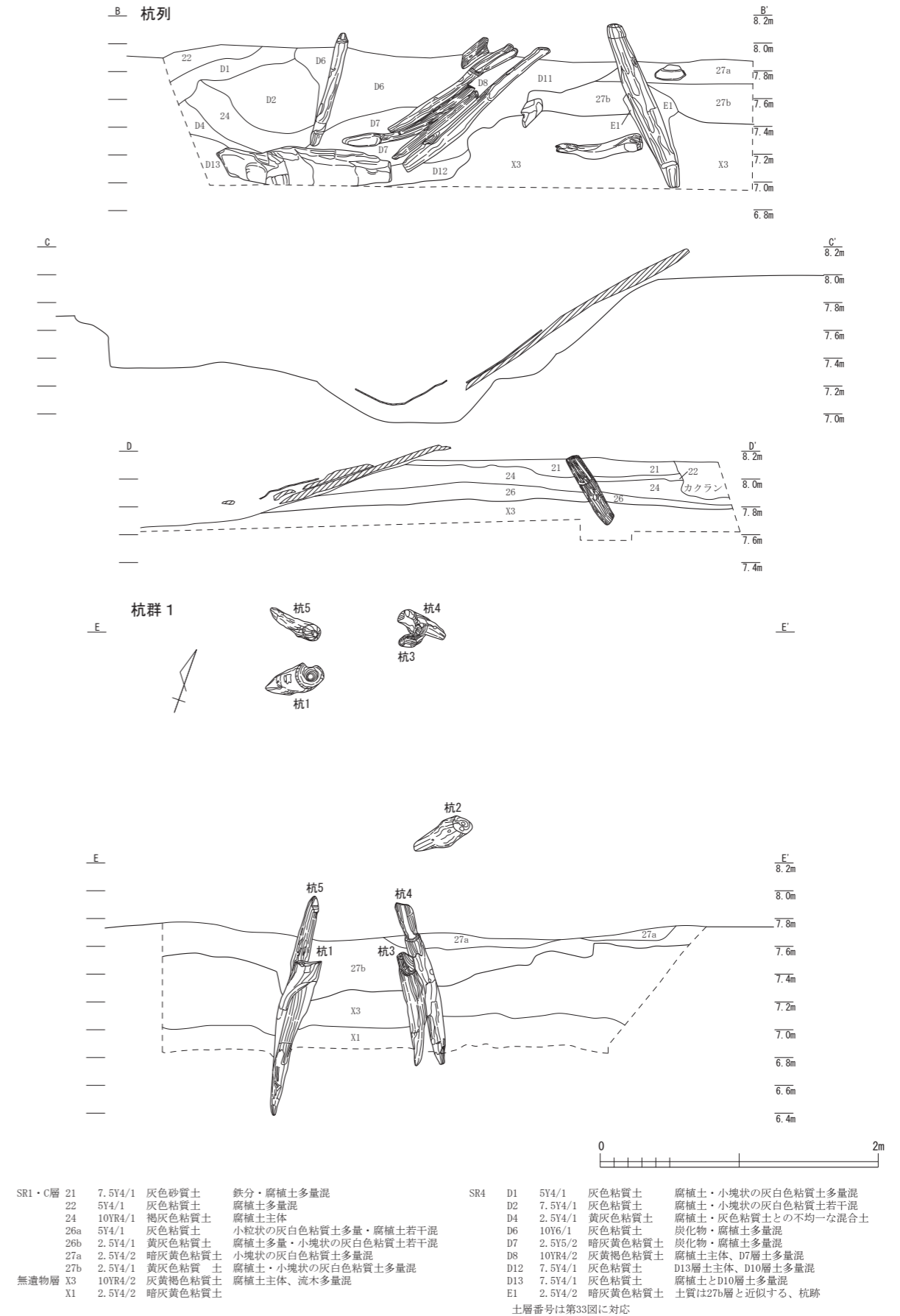
25) SR1（第33・34図）

H-18・19、I-17～19、J-16～19に位置する自然流路である。流路方向は、南西から北東方向である。SR2の断ち割りトレンチを確認したところ、SR2の下層から本遺構を確認しているため（第38図）、流路左岸はグリッド15列付近まで広がる可能性がある。自然流路の大きさは、長さ18m以上、幅35～40m（推定）、深さ1.7mを測る。埋土は、上層からA層（主に黒褐色粘質土）、B層（黒褐色～黄灰色粘質土、腐植土の土質）、C層（灰色～黄灰色粘質土）に堆積しており（第33図）、出土遺物や層位関係などから、おおむねC層は弥生時代中期、B層は弥生時代中期以降、A層は弥生時代後期から古墳時代前期に堆積したと推定する。各層底面に3回の河床面があり、この河床は新しい時期ほど南側に移動する。

3回目流路の河床面から人骨が出土したほか、護岸遺構を伴うSR4を検出した。2体分の人骨が出土しているが、遺存状況は良好ではなく広範囲に広がっており、この位置で検出された背景は明らかではない（第34図 A：人骨の範囲、B：鹿角）。人骨は弥生時代中期後半の時期と推定している（第5章



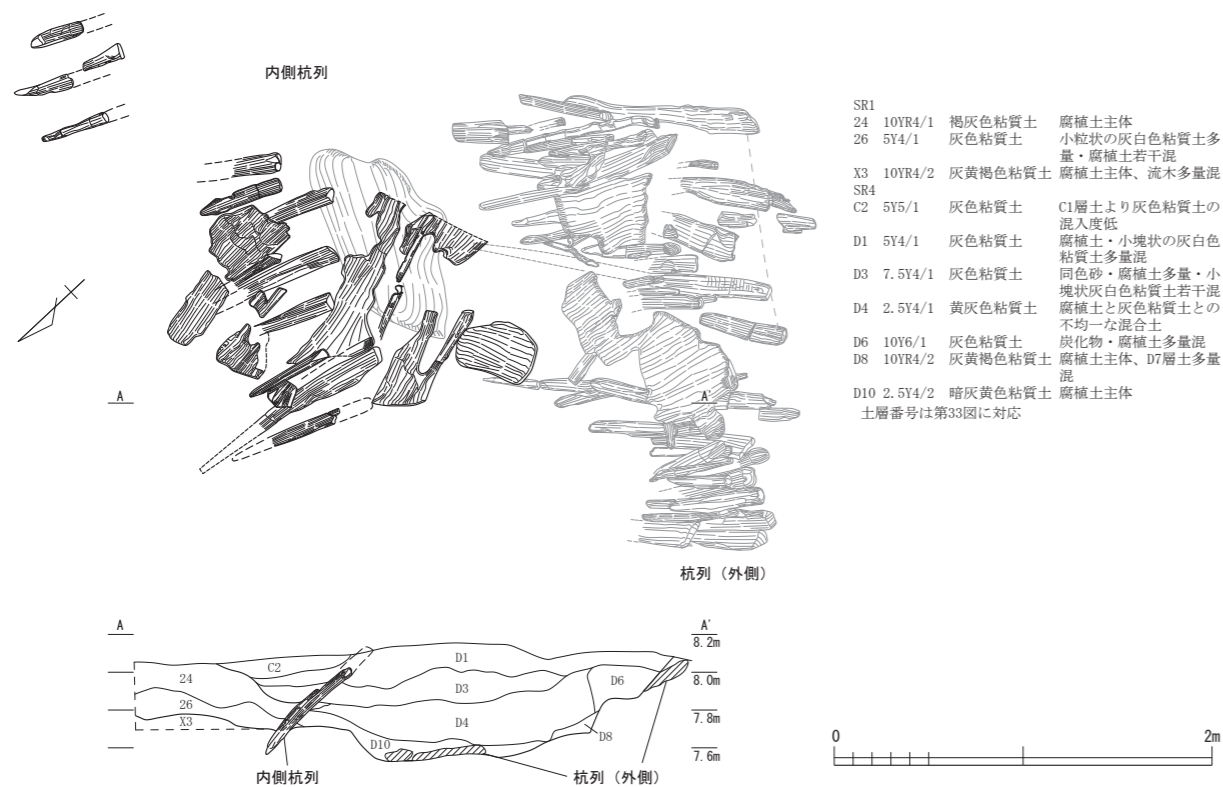
第35図 II区SR4護岸遺構実測図-1 (縮尺1/40)



第36図 II区SR4護岸遺構実測図-2 (縮尺1/40)

SR1・C層	21	7.5Y4/1	灰色砂質土	鉄分・腐植土多量混	
	22	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土多量混	
	24	10YR4/1	褐色粘質土	腐植土主体	
	26a	5Y4/1	灰色粘質土	小粒状の灰白色粘質土多量・腐植土若干混	
無遺物層	26b	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土多量・小塊状の灰白色粘質土若干混	
	27a	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	小塊状の灰白色粘質土多量混	
	27b	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土・小塊状の灰白色粘質土多量混	
	X3	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体、流木多量混	
	X1	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土		
SR4	D1	5Y4/1	灰色粘質土	腐植土・小塊状の灰白色粘質土多量混	
	D2	7.5Y4/1	灰色粘質土	腐植土・小塊状の灰白色粘質土若干混	
	D4	2.5Y4/1	黄灰色粘質土	腐植土・灰色粘質土との不均一な混合土	
	D6	10Y6/1	灰色粘質土	炭化物・腐植土多量混	
	D7	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	腐植土主体、D7層土多量混	
	D8	10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体、D10層土多量混	
	D12	7.5Y4/1	灰色粘質土	D13層土主体、D10層土多量混	
D13	7.5Y4/1	灰色粘質土	腐植土とD10層土多量混		
E1	2.5Y4/2	暗灰黄色粘質土	土質は27b層と近似する、杭跡		

土層番号は第33図に対応



第37図 II区SR4 護岸遺構実測図-3 (縮尺1/40)

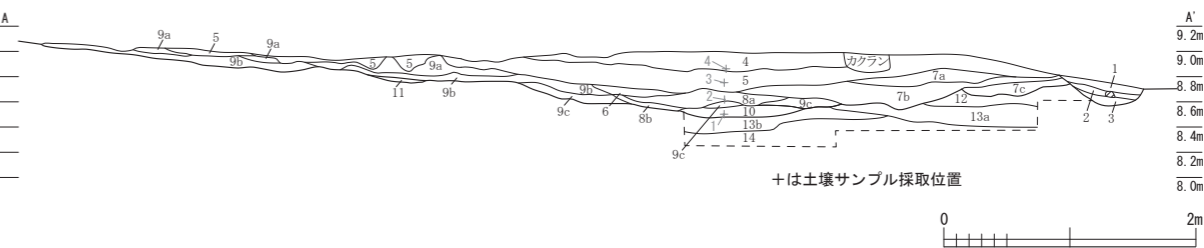
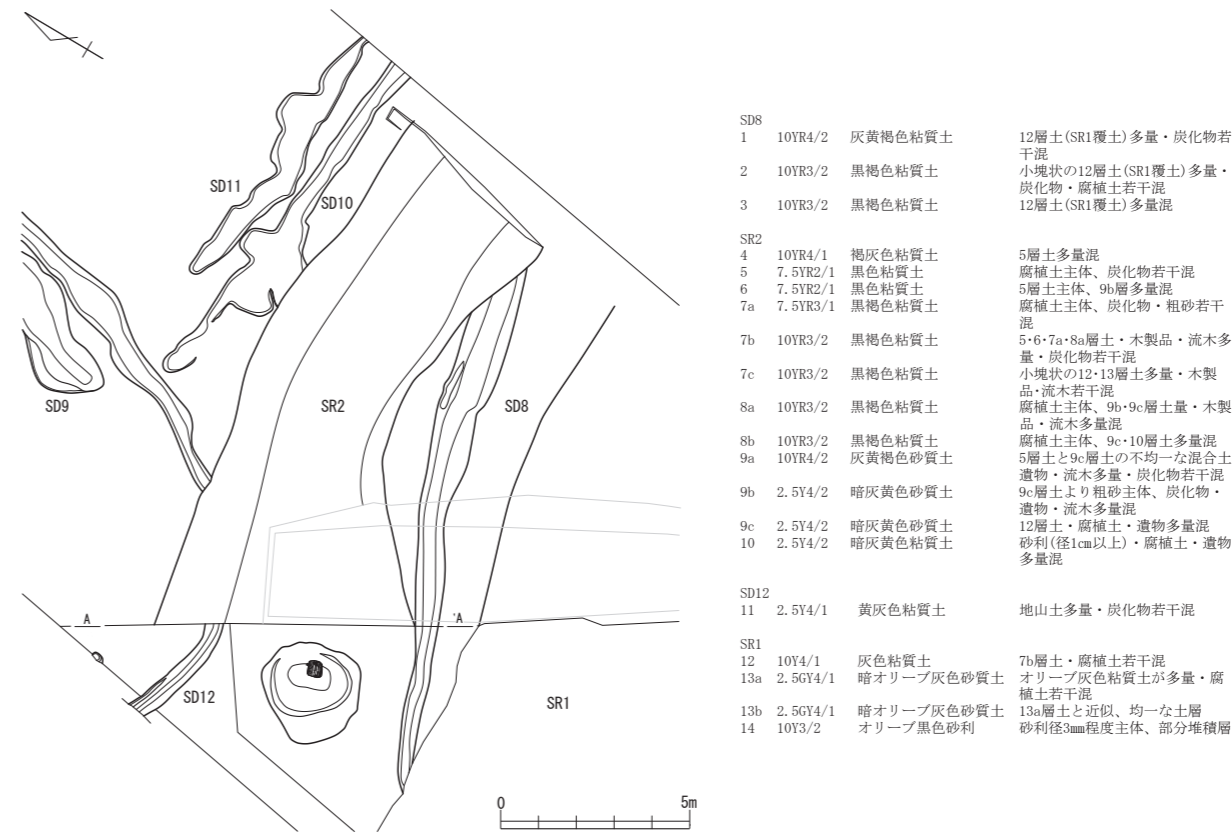
第5節)。SR4については後述する。また、2回目流路内に堆積するB層の途中には小流路が形成されている(第33図F層)。

3回目流路内に堆積したA層からは多量の木製品(農耕具や部材など)が出土する。未成品は多くはなく主に完成品が占める。また、出土地点は右岸から流路中央で出土するものが多い。弥生時代後期から古墳時代前期の木製用具が廃棄されたり、二次的に流れ着いたものと推定する。

出土遺物は縄文時代晩期(第64図1~第65図1)や弥生時代中期中・後葉、弥生時代後期、古墳時代前期の土器が出土しており、特に弥生時代後期の土器が多量に出土している(第86図1~第89図24)。縄文土器も比較的良好な状態で出土したのも少なくはなく、第64図2はSR4護岸遺構の遺構面下から出土している(写真図版9-3)。また、石器は打製石斧・磨石類が多く出土したほか、砥石・石冠・石棒も出土している(第118図1~6、第119図2~5・7、第120図2、第121図1・2)。石冠や石棒のほかに打製石斧や磨石類の一部は縄文時代晩期の所産と考える。木製品は鋏・田下駄・木庖丁・布巻具・盾・弓・梯子・部材など多種多様なものが出土し、主に弥生時代後期から古墳時代前期のものと考え(第134図1~第137図5)。

26) SR2 (第38図)

I-16・17、J-16に位置する自然流路である。SR1断ち割りトレンチにより、SR1の上に形成されていることが判明している。自然流路の大きさは、長さ17m以上、幅7.0m、深さ0.5mを測る。埋土は、上層から褐灰色粘質土、黒色粘質土、黒褐色粘質土、暗灰黄色粘質土が主に堆積する。出土遺物は、縄文時代晩期(第66図1~16)や弥生時代中期前葉、弥生時代後期、古墳時代前期の土器が出土しており、特に弥生時代後期の土器が多い(第90図1~第92図10)。また、玉製作関連遺物・磨石・砥石などの石器(第118図8、第119図1、第120図1・4~6・10)や鳥形・舟形・田下駄などの木製品(第138図1



第38図 II区SR2・SD8・10~12実測図(縮尺1/200・1/60)

~8)も出土している。

27) SR3 (第7図)

J-14、K-14・15に位置する自然流路である。遺構の大きさは、長さ14m、幅8.0mを測るが、遺構の位置関係から北隣のI区SR1と同一の遺構であるため、遺構の詳細はI区SR1の記述に譲る。調査区壁面に近いため、埋土の深掘りは行っていないが、埋土上層からは、木鎌・杓子・高坏・武器形・線刻板・網枠・各種部材などの木製品が多量に出土している(第139図1~第140図6)。出土層位から、これらは弥生時代後期~古墳時代前期と推定する。

28) SR4 (第33・35~37図)

I-17・18、J-17・18に位置する自然流路である。SR1のC層上面で検出している。自然流路の大きさは、長さ11m以上、幅3.4m、深さ1.4mを測る。埋土は上層から、灰色粘質土(A層)、灰色砂質土(B層)、灰色粘質土(C層)、腐植土を多量に含む灰色粘質土(D1~3・6層)や黄灰~暗灰色粘質土(D4・5・7~13層)が堆積する。

流路右岸には木製の護岸遺構を検出しており(第35図)、この護岸遺構は黄灰~暗灰色粘質土上に構



第39図 III区SD1南端部実測図（縮尺1/40）

築されている。護岸遺構は杭列と杭群から構成される。杭列は一度流路堆積層によって埋没した後、再度作り直されている（内側杭列：第37図）。杭列は流路右岸の法面に沿うようにして敷き並べており、その原材は木製の杭や棒状部材、自然木を使用している。また、杭列の上に樹皮を敷いた痕跡をいくつか認めるため（第35図）、実際には杭列全面に樹皮を被せていたと推定する。

また、杭列南側の右岸側には杭群1・2を確認している。位置関係から、杭列に沿う遺構群と考える。杭群は流路側とは反対側から斜めに打たれている。杭列を固定するための施設と推測する。内側杭列に伴う杭群であるかどうかは明確に確認することはできなかった。

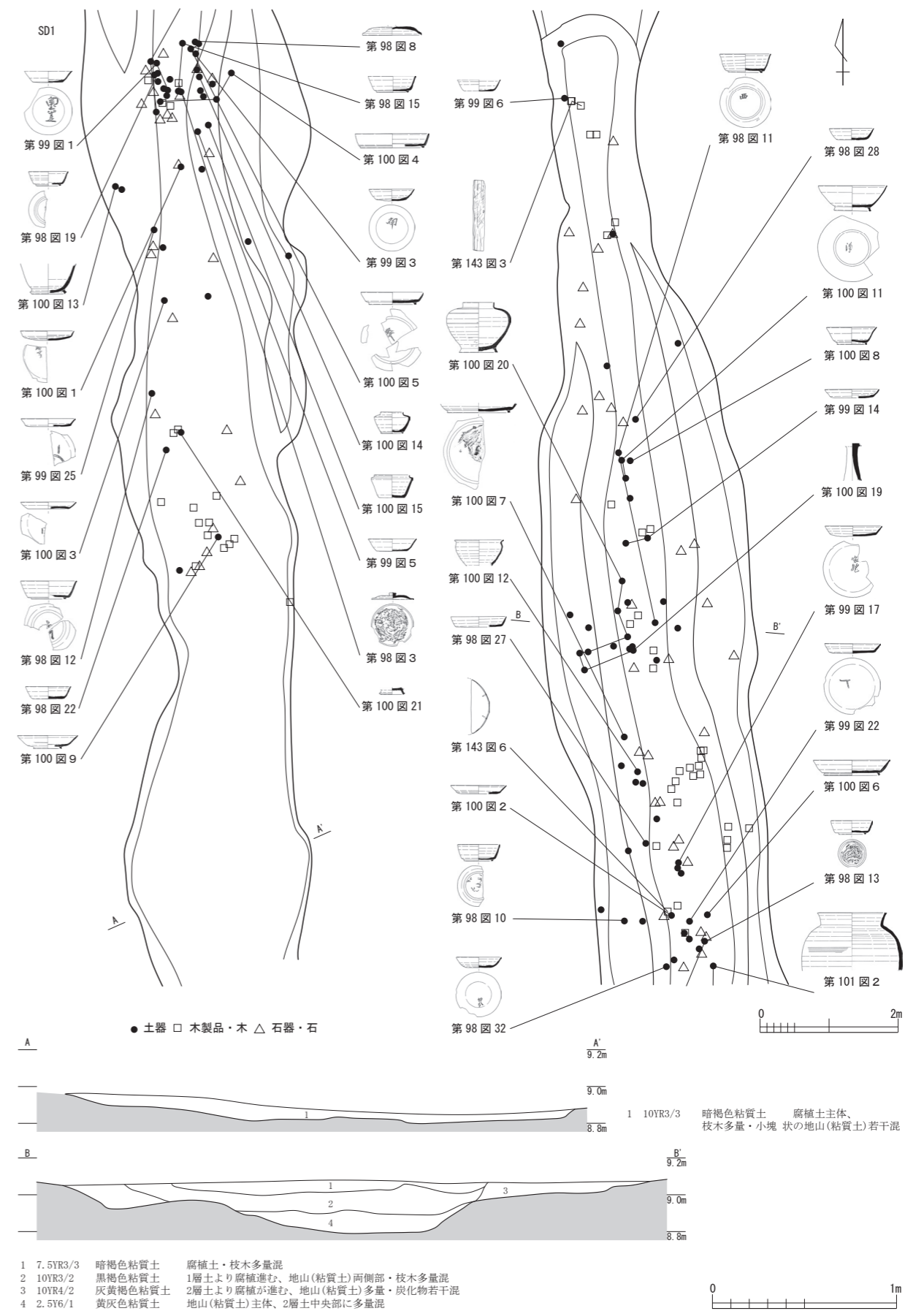
本遺構の遺構面となる、SR1のC層からは、弥生時代中期以前の土器が出土している。また、SR4埋没後に形成されるSR1の3回目流路の河床からは、先述したように弥生時代中期後半の人骨が出土している。このことから、SR4やそれに伴う護岸遺構の時期は、弥生時代中期の時期におさまるものと推定するが、より新しい時期の可能性もある。

3 III区の遺構

III区からは、主に溝（SD）2条、方形周溝（SX）1基、自然流路（SR）2条を確認した。調査区北半では、蛇行形のSR2を検出した。調査区中央から南半にかけては、SD1が南北を縦貫する。その他にSX1やSR1を検出したが、I・II区に比べると遺構の分布は密ではない。

1) SD1（第8・39～41図）

G-27～31、H-29～31に位置する溝である。おおむね南北方向に直線形に延びており、北端では途

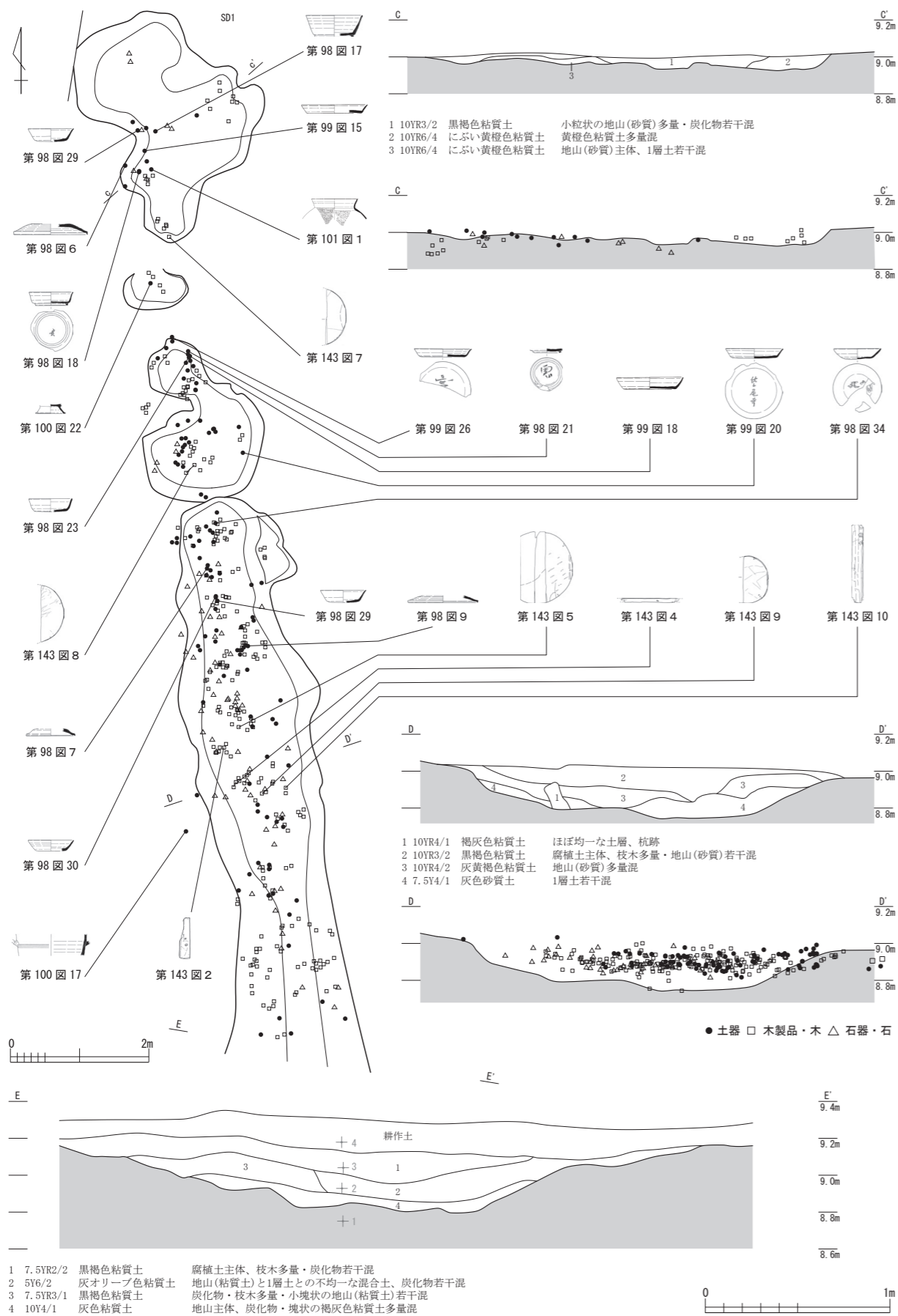


第40図 III区SD1中央部実測図（縮尺1/80・1/30）

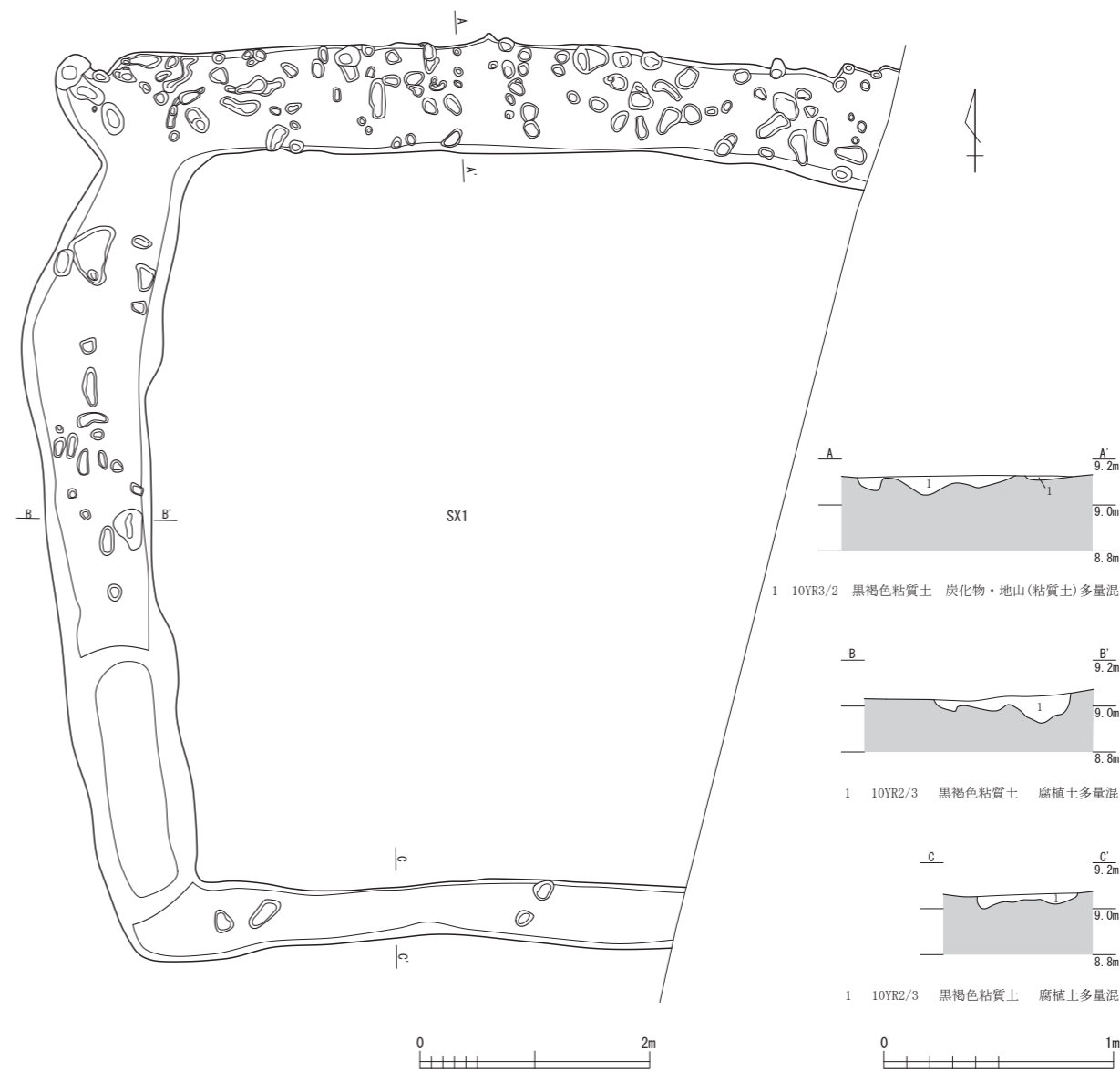
● 土器 □ 木製品・木 △ 石器・石

1 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 腐植土・枝木多量混
 2 10YR3/2 黒褐色粘質土 1層土より腐植進む、地山(粘質土)両側部・枝木多量混
 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 2層土より腐植が進む、地山(粘質土)多量・炭化物若干混
 4 2.5Y6/1 黄灰色粘質土 地山(粘質土)主体、2層土中央部に多量混

1 10YR3/3 暗褐色粘質土 腐植土主体、枝木多量・小塊状の地山(粘質土)若干混



第41図 III区SD1北端部実測図 (縮尺1/80・1/30)

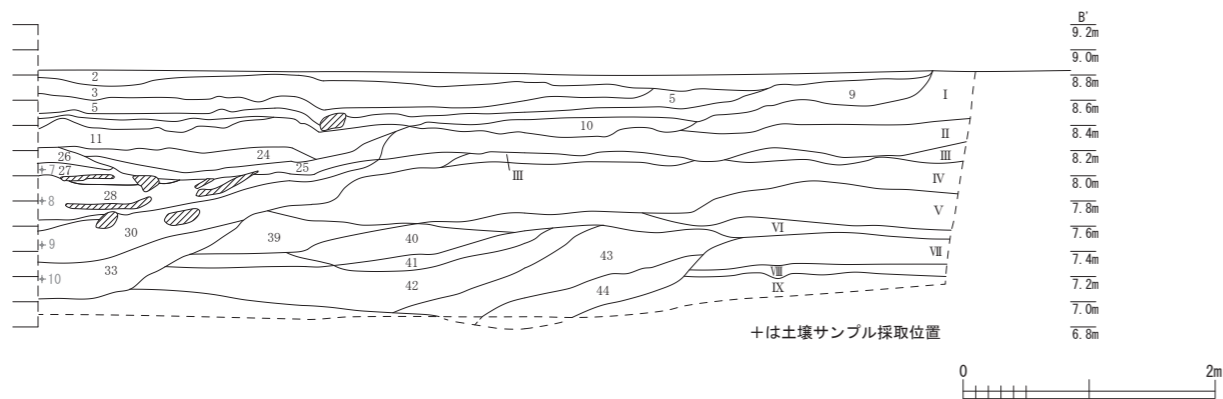
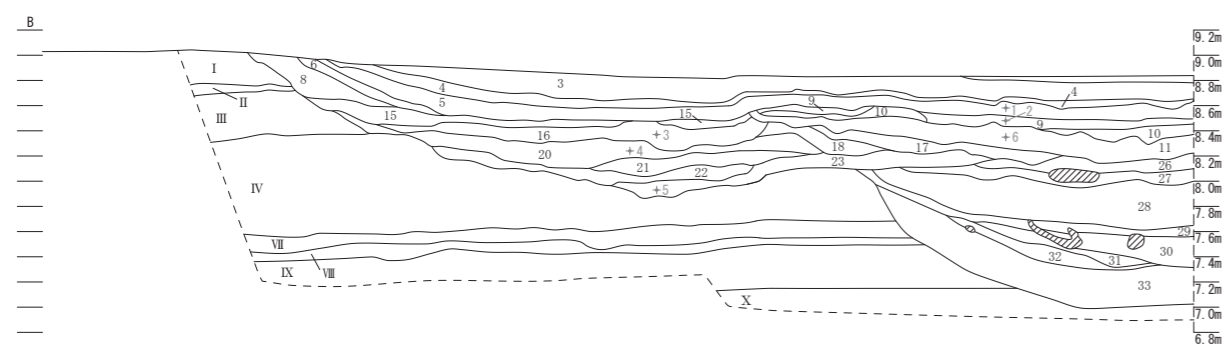
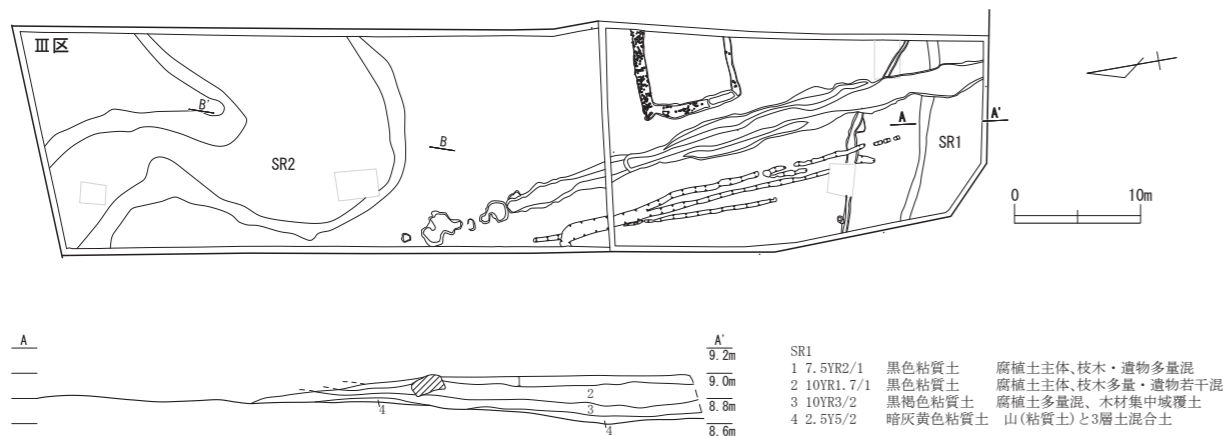


第42図 III区SX1実測図 (縮尺1/60・1/30)

切れ状に、南端はSR1の埋土を掘り込んで溝が掘削されている。北端も南端も調査区外にあるため、溝の先端を確認することはできなかった。溝の規模は長さ48m以上、幅1.2~3.0m、深さ5~33cmを測る。グリッド28・29列で溝底が最も深くなり、段状の掘り込みを認める。埋土は上層から、暗褐色粘質土、黒褐色粘質土(枝葉などの植物遺体を多く含む)、灰黄~灰色粘質土が堆積し、暗褐色粘質土は溝南側のみで確認できる。埋土からは9世紀代を中心とする須恵器(第98図1~第101図6)や木筒・曲物・火鑽白など(第142図9・10、第143図1~10)の木製品が多く出土している。墨書文字が記された須恵器も少なくはなく、「南」と記された文字もある。木製品は主に溝南端で出土しているが、製品以外にも一部炭化した割砕材も出土している。打ち割られた須恵器や重なって出土した須恵器の存在などから、これらの遺物は廃棄に伴うものとする。その他に磨石類(第123図1)も出土している。出土遺物から、律令期に機能していた溝と推定する。

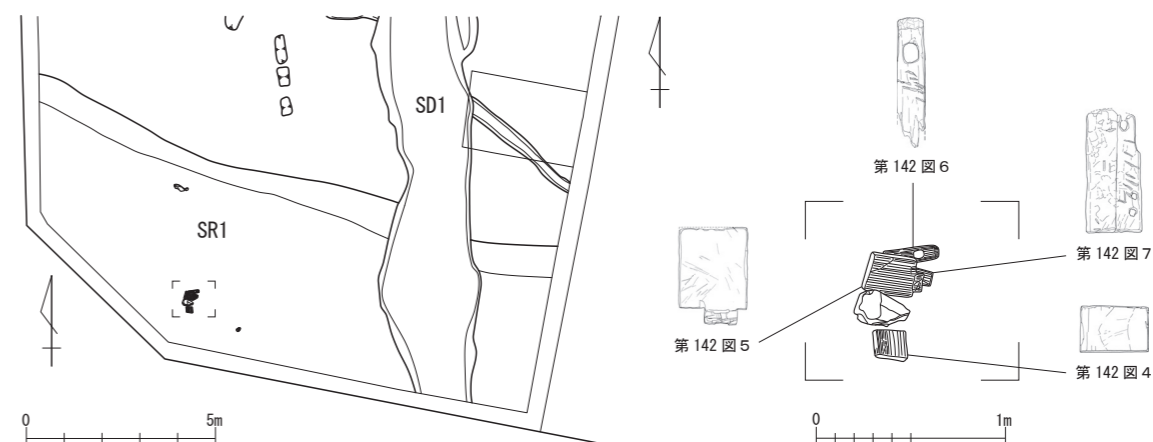
2) SX1 (第42図)

H-29・30に位置する方形の周溝である。周溝のみを確認しており、また東側周溝は調査区壁外にあ



SR2	SR2・A層	2 7.5YR4/1	褐灰色粘質土	均一な土層、炭化物若干混、弥生後期土器若干出土	間層2 (洪水層)	26 2.5Y6/4	にぶい黄色砂質土	同色細砂主体、灰色粘質土多量、植物遺体若干混
		3 7.5YR3/1	黒褐色粘質土	炭化物・I層土多量混、弥生後期土器若干出土	SR2・C層	27 10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体、流木26・28層土多量混
		4 7.5YR2/2	黒褐色粘質土	炭化物若干混		28 2.5Y4/1	黄灰色粘質土	灰色砂と腐植土混合土、流木多量混
		5 10YR2/1	黒色粘質土	腐植土層、流木多量混		29 2.5Y4/1	黄灰色粘質土	28層土主体、IV層土多量混
		6 10YR4/1	褐灰色粘質土	5層土土壌化層、炭化物・8層土多量混		30 7.5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	粗砂主体、流木・腐植土多量混
	間層1 (洪水層)	8 2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	I層土主体、均一な土層、炭化物・焼土粒若干混		31 7.5Y3/1	オリーブ黒色砂質土	粗砂主体
		9 10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体		32 10YR5/2	灰黄褐色粘質土	均一な土層
		10 10YR6/2	灰黄褐色粘質土	炭化物・腐植土多量混		33 2.5Y4/1	黄灰色粘質土	灰色砂と腐植土とIV層土の不均一な混合土
		11 2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	均一な土層、炭化物多量混、縄文晩期土器若干出土	SR2・D層	39 2.5Y4/1	黄灰色砂質土	流木・28・29層より腐植土多量混
		15 10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土主体、暗灰黄色粘質土多量混		40 2.5Y4/1	黄灰色砂質土	灰色砂質土と腐植土不均一な混合土
		16 10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土層		41 10YR4/2	灰黄褐色粘質土	39層より腐植土多量混
		17 10YR4/2	灰黄褐色粘質土	23層土多量		42 2.5Y4/1	黄灰色砂質土	腐植土主体
		18 10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体		43 10YR4/2	灰黄褐色粘質土	腐植土と灰色細砂やや均一な混合土
		20 10YR4/1	褐灰色粘質土	19層主体、植物遺体・流木多量混、19層より多くIII層土混、縄文晩期土器若干出土	基礎層	44 10YR5/2	灰黄褐色粘質土	灰色細砂主体、流木・腐植土多量混
		21 10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体	I	10YR6/2	灰黄褐色粘質土	均一な土層
		22 7.5Y5/1	灰色粘質土	炭化物若干、植物遺体多量混	II	2.5Y6/2	灰黄色粘質土(シルト)	均一な土層、I層より粒子粗い
		23 5Y4/1	灰色粘質土	流木・同色砂・20・21層土多量混、縄文晩期土器若干出土	III	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土	均一な土層、粒子細かい、炭化物若干混
		24 10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、灰色細砂多量混	IV	7.5Y4/1	灰色粘質土	均一な土層、植物遺体多量混
		25 10YR3/2	黒褐色粘質土	腐植土主体、オリーブ黄色粗砂多量混	V	5Y4/1	灰色粘質土	均一な土層、植物遺体多量混
					VI	7.5Y4/1	灰色砂質土	V層土若干混
					VII	10YR4/1	褐灰色粘質土	ほぼ均一な土層、腐植土層
					VIII	7.5Y4/1	灰色粘質土	上部にVIII層土多量・植物遺体若干混
					IX	5Y5/1	灰色粘質土	灰色粗砂多量・植物遺体若干混
					X	7.5Y3/1	オリーブ黒色粘質土	浅黄色粘質土と灰色粗砂多量混

第43図 III区SR1・2実測図(縮尺1/600・1/60)



第44図 III区SR1実測図(縮尺1/200・1/40)

るため、全容は明らかではなく遺構の性格も明らかではない。遺構の大きさは7.7mを測る。北側周溝は幅0.9m、深さ8cm、西側周溝は幅0.9~1.2m、深さ12cm、南側周溝は幅0.4~0.6m、深さ5cmを測る。後世の削平の影響により周溝の深さは全体に浅いが、西側周溝の南端のみやや深く掘削されている。また、周溝の底には北側周溝を中心に小穴を多く確認しているが、これは人や動物の足跡の可能性がある。周溝内には黒褐色粘質土が堆積する。周溝内からは須恵器(第102図18・19・22・24)や土師器がわずかに出土している。埋土から出土した遺物から9世紀代の遺構の可能性はあるが、出土遺物も少ないため時期は明らかではない。

3) SR1 (第43図)

G・H-31に位置する自然流路である。自然流路は片側の岸のみ検出しており、流路全体の状況は明らかではないが、IV区SR1と同一の流路と考える。自然流路の大きさは、長さ14m以上、幅5m以上、深さ0.4m以上を測る。埋土は、上層から黒~黒褐色粘質土、暗灰黄色粘質土が堆積している。埋土からは、須恵器(第102図1~17)や木製の人形や部材(第142図1~7)がわずかに出土している。出土遺物から、平安時代以降の自然流路と推定する。

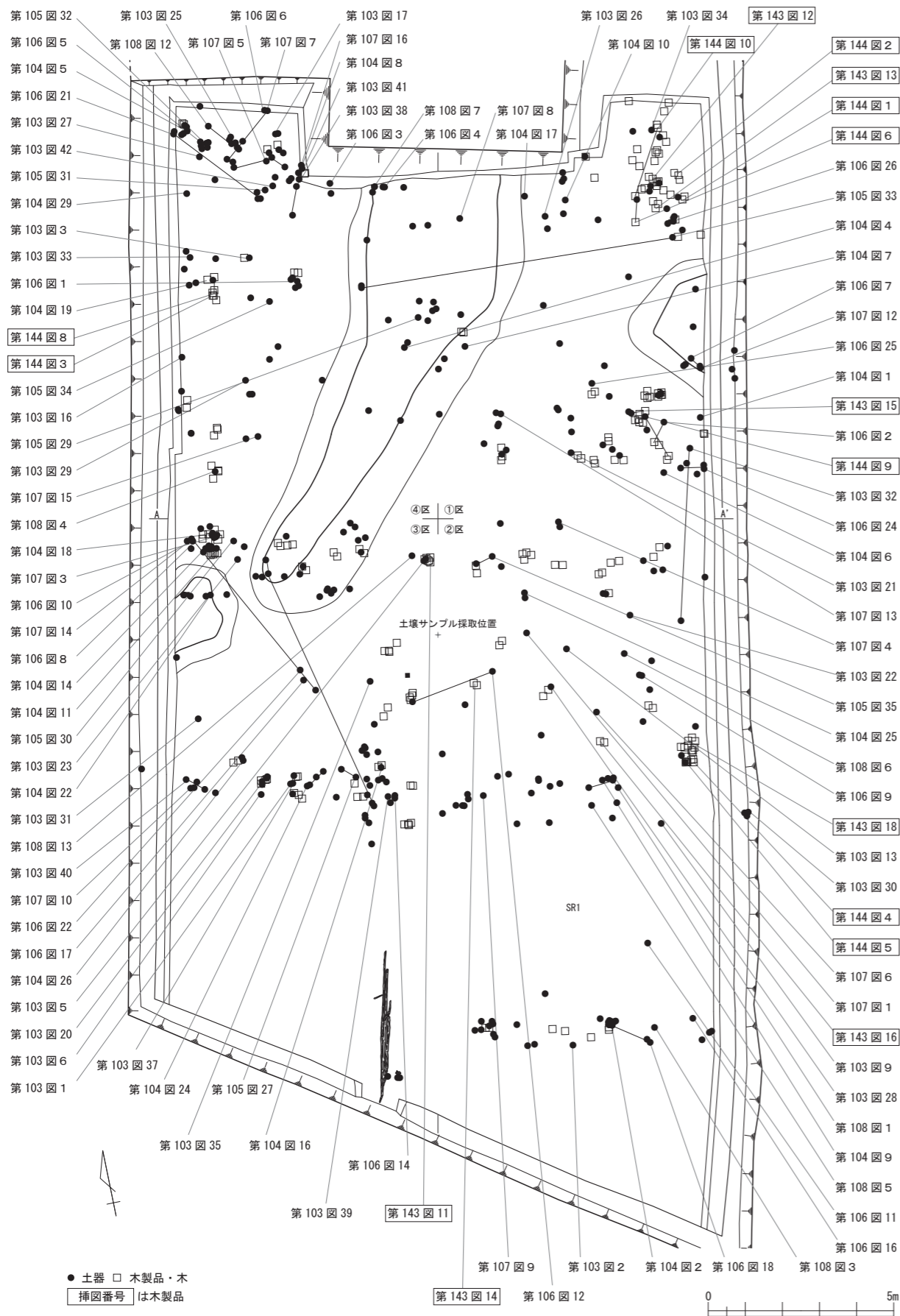
4) SR2 (第43図)

G-26、H-24~27、I-25~27に位置する自然流路である。II区SR1と同じ流路の一部と考える。自然流路の幅は7~15m、深さはB層河床面まで0.9m、D層河床面まで2.0mを測る。埋土は、上層からA層(黒褐~褐灰色粘質土)、間層1(暗灰~黄灰色粘質土、洪水層)、B層(黒褐~黄灰色粘質土)、間層2(灰黄褐色粘質土、洪水層)、C層(灰色~黄灰色粘質土)、D層(黄灰~灰黄褐色粘質土)に堆積している。間層2およびC・D層は無遺物層であり、出土遺物や層位関係などから、おおむねB層および間層1は弥生時代中期、A層は弥生時代後期から古墳時代前期に堆積したと推定する。ただし、出土遺物からB層は縄文時代晩期にさかのぼる可能性がある。

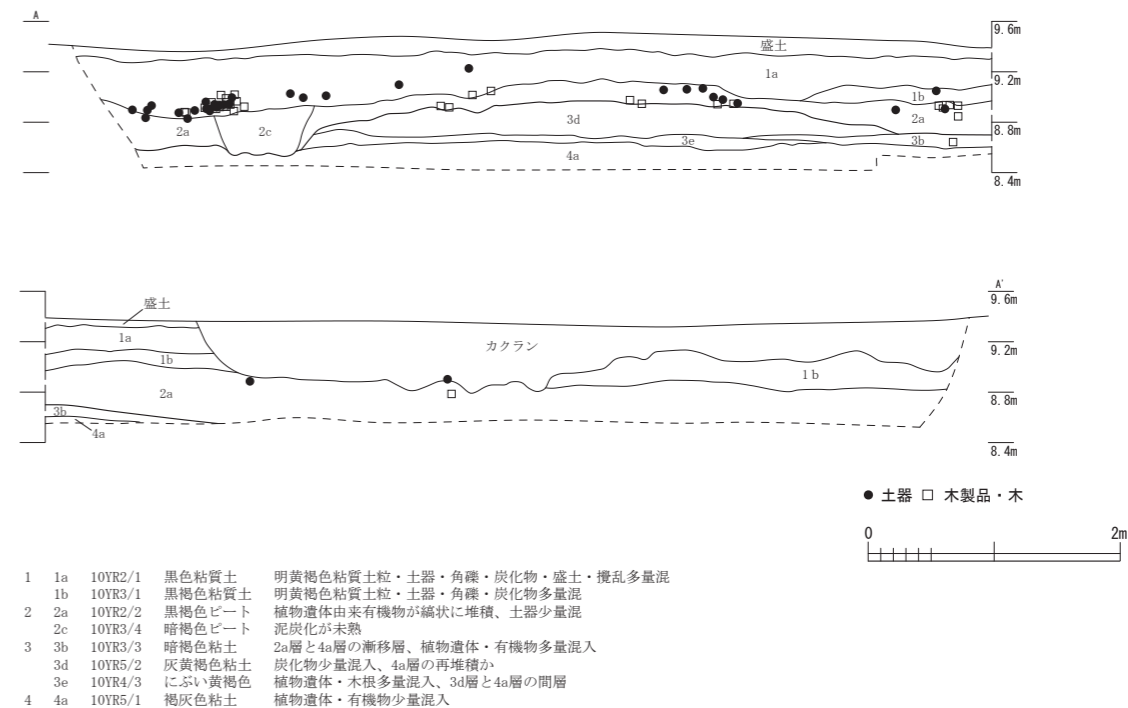
間層を除けば、各層底面に4回の河床面があり、新しい時期ほど河床面が北側から南側に移動するが、A層の時期には広い河床面を形成する。発掘調査では、遺物が出土するB層以上を掘削している。出土遺物は、主にB層から縄文時代晩期の土器(第67図1~13)や木製の弓(第142図8)、A層から弥生時代後期から古墳時代前期の土器(第96図1~6)が出土している。

4 IV区の遺構

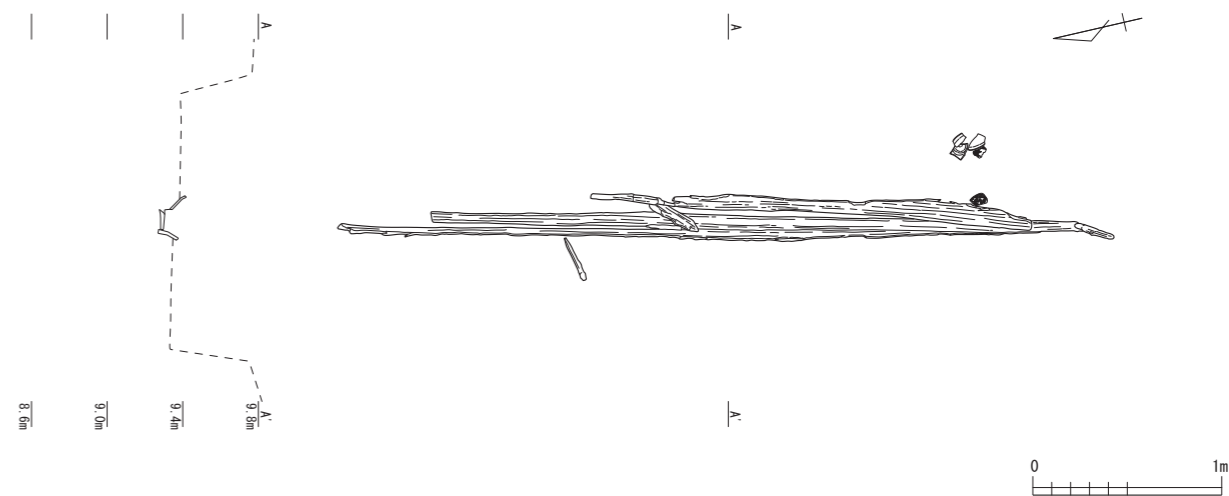
IV区は、上段部(調査区南半)と下段部(調査区北半)に分かれる。上段部では遺構を確認すること



第45図 IV区SR1 実測図-1 (縮尺1/150)



第46図 IV区SR1 実測図-2 (縮尺1/60)

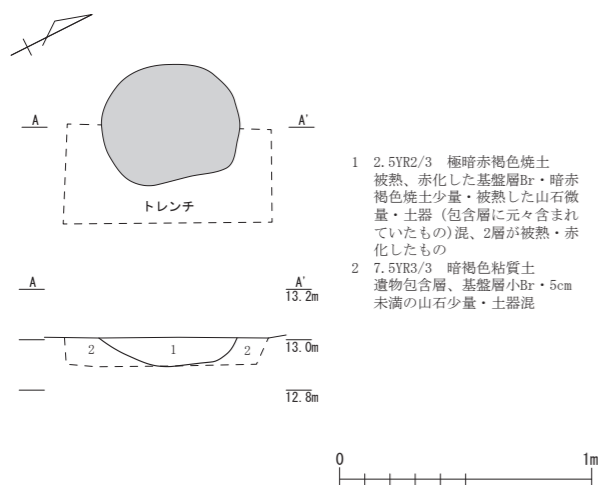


第47図 IV区SR1 樋実測図 (縮尺1/40)

はできず、下段でのみ自然流路・湿地 (SR) 1 条を確認した。上段部と下段部との境には、排水施設と推定する木製樋を確認していることから、上段部にも遠からず当時の集落跡があったと想定できるが、後世の削平などによって既に失われたと考える。

1) SR1 (第45~47図)

F・G-32~35に位置する自然流路・湿地である。調査区下段全域に広がるため、その具体的な大きさは明らかではないが、3層上面までの深さは0.5~0.9m、8層上面までの深さは1.6mを測る。埋土は、1層 (黒~黒褐色粘質土)、2層 (黒褐色ピート層)、3層 (暗褐~灰黄褐色粘土)、4層 (褐灰色粘土)、5層 (にぶい黄褐色粘土)、6層 (にぶい黄褐色粘土)、7層 (褐灰色粘土)、8層 (にぶい黄褐色粘土) である (5~8層は第5章第154・161図参照)。2層以下はピート層あるいは粘土層であり、極めて水



第48図 V区SX1 実測図 (縮尺1/30)

気のある土質である。遺物は1・2層で出土しており、3層以下では遺物は出土しない。

出土遺物は、主に8世紀後半から9世紀にかけての須恵器や土師質土器のほか(第103図1～第108図13)、木製品(人形・板材など)も多量に出土している(第143図11～第144図10)。1層からは中・近世の遺物も出土する。停滞した水域であるため、多くの遺物は上流から流れてきたものではなく、人為的に廃棄されたものであろう。近接するⅢ区SR1との関係については、本遺構の堆積土が泥炭層と呼ぶべき様相を呈しているとはいえ、両者の位置関係や廃棄された木製品の出土レベルなどを考慮すると、両者は同じ遺構である可能性が高い。下段部と上段部との境には木製の樋を確認しており、上段部からの排水施設の一部と推測する(第47図)。

なお、調査区の北東部を①区、南東部を②区、南西部を③区、北西部を④区に設定して出土遺物を取上げている。

5 V区の遺構

V区は、上段部(調査区南端)と下段部に分かれる。調査区上段部は近現代以降の削平面、下段では焚火跡(SX)1基を確認した。下段部では遺構のほかに、遺物包含層(黒褐色粘質土)を検出しており、範囲は12m×6mの範囲に及ぶ。遺物包含層からは、弥生時代・平安時代・室町時代の土器破片が少量出土している。第3章で触れたように、丘陵面上の集落域の一端が確認されたⅥ区に対して、V区は谷内の緩傾斜面に相当し、本調査区の遺物包含層は遺物の廃棄域と推定する。

1) SX1 (第48図)

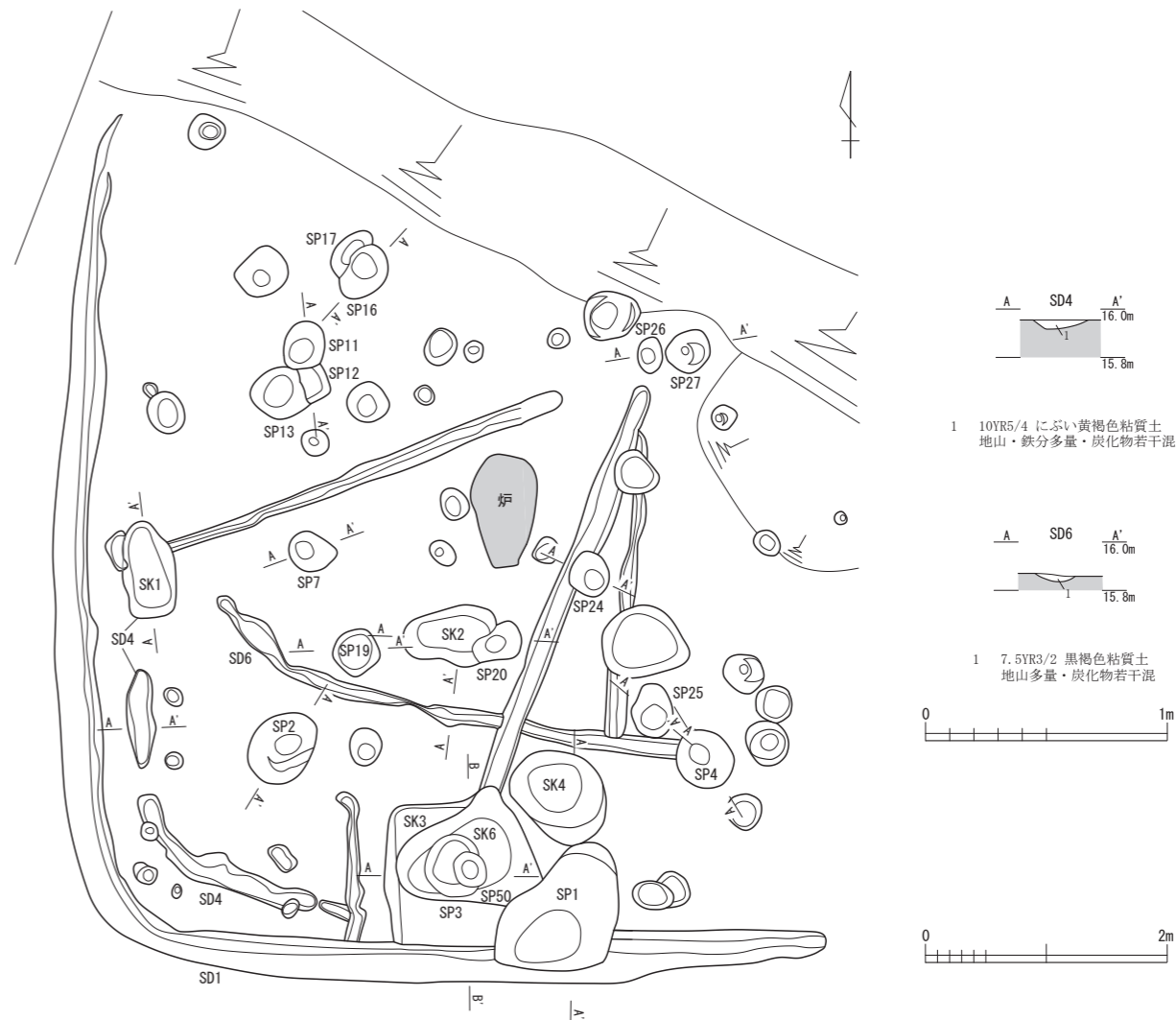
C-53に位置する焚火跡であり、遺物包含層上で検出している。平面形はほぼ円形で、長径55cm、短径47cm、深さ12cmを測る。底面はレンズ形にへこんでいる。埋土は極暗赤褐色焼土が堆積し、埋土周辺の遺物包含層は暗褐色に被熱している。

6 Ⅵ区の遺構

Ⅵ区は、上・中・下段部に分かれるが、中・下段は近現代以降の削平面である。調査区南端の上段部では竪穴建物(SI)2棟を確認したが、いずれも後世の削平によって遺構の多くが失われている。

1) SI1 (第49・50図)

Y-53・54、Z-53・54に位置する竪穴建物である。竪穴と竪穴内部の周溝・柱穴・土坑を検出しているが、北・東辺部は後世の削平により失われている。竪穴は隅丸方形の形状を示し、長さ7.5m(推定)、深さ約30cmの規模を持つ。西側周溝は長さ6.6m、幅0.2～0.3m、南側周溝は長さ6.0m、幅0.3mであり、周溝の深さは5cmを測る。周溝埋土は褐色粘質土が堆積する。竪穴内には多数の柱穴を確認でき、遺構の配置関係から、主柱穴はSP2・4・11・27と考える。SP2は径約60cm、深さ91cm、SP4は径約50cm、深さ70cm、SP11は径約40cm、深さ61cm、SP27は径約40cm、深さ31cmを測る。SK3・4・6は竪穴の南側で検出している。SK3は一辺0.5m前後の平面方形の形状で、深さ約10cmと浅い。SK4は平面円形で柱穴に類似するが、深さ約30cmで浅い。SK3の埋土を切るSK6はSK3と範囲が重複することから、



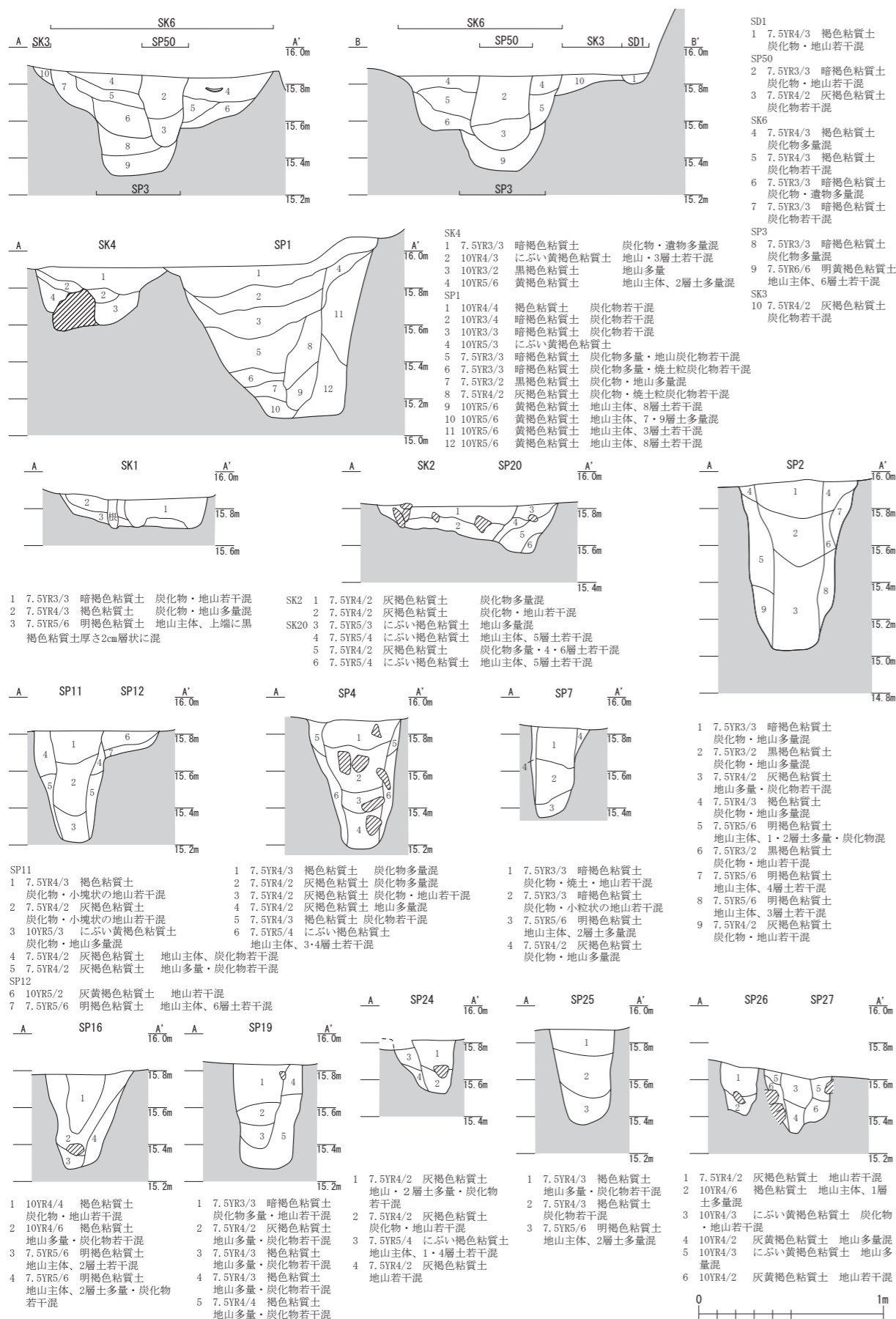
第49図 Ⅵ区SI1 実測図-1 (縮尺1/60・1/30)

SK3を再掘削した遺構と理解できる。これらの遺構の性格は不明である。

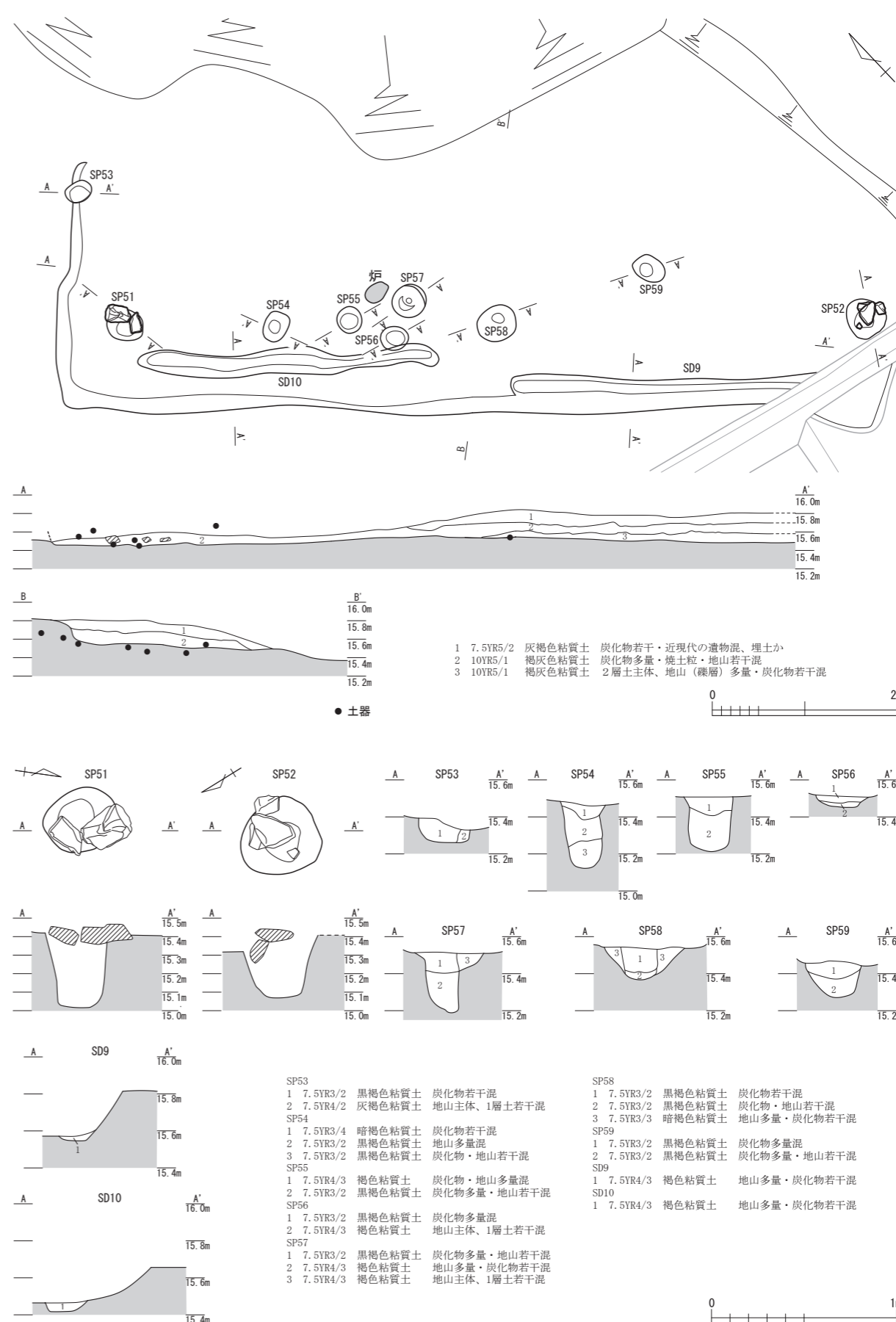
また、竪穴内は先述した周溝以外にも複数の細い溝を検出でき、特にSD4・6は本遺構形成前につくられた竪穴建物の周溝の可能性もある。その近辺の小規模な柱穴であるSP7・12などは、SD6に伴う建物の柱穴である可能性がある。出土遺物には弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器(第97図1～9)や石鏃(第123図3)が出土している。特に、竪穴西半の埋土上層から第97図1・2・5～9、SP50から第97図4が出土する。出土遺物から、弥生時代後期末～古墳時代初頭の建物と推定する。

2) SI2 (第51図)

Z-A-54に位置する竪穴建物である。竪穴とそれに伴う周溝および柱穴を検出しているが、建物の半分以上が後世の削平により失われている。竪穴は方形の形状を示し、長さ約9m、深さ30cmの規模を持つ。南西辺に平行する周溝SD9・10は幅18～30cmである。柱穴はSP51～59の9基を検出している。竪穴隅に位置する主柱穴SP51・52は埋め立て後複数の礫によって蓋をしている。出土遺物には、弥生時代の土器(第97図10)や平安時代の須恵器・土師器(第109図2・4～6)、白磁(第111図53)が出土している。出土遺物から、平安時代以降の竪穴建物と推定する。



第50図 VI区SI 1実測図-2 (縮尺1/30)



第51図 VI区SI 2実測図 (縮尺1/60・1/30)

第2節 遺物

1 縄文時代の土器

調査区からは、自然流路を中心に縄文時代の土器が比較的多く出土している。土器の主体となるのが、縄文時代晩期後半、特に晩期末の土器であり、それ以外の時期の土器は基本的に認められない。これらの土器の記述に当たっては、これまでの糞置遺跡の土器分類（豆谷1994）を主に参照しつつ、器種による分類を行った上で、口縁部形態や文様などにより細分類を行った（第52・53図）。なお、越前地方では弥生時代前期の指標である遠賀川式土器は糞置遺跡を除いてほとんど出土しないため、原則的に弥生時代中期前葉以降を弥生時代、それ以前については縄文時代と捉えて記述した。

深鉢形土器（第52図）

A類 口頸部と胴部を形態や調整、区画沈線によって区分するもの。特に、調整によって区分するものが多い。口頸部は緩く外反するものや内傾するものも多く、胴部上半でやや張るものが多い。

A 1 類 口頸部が「く」の字気味に強く外反するもの。

A 2 類 口頸部がやや外反し、頸胴部界に幅の狭い段を作るもの。さらに、a：口頸部が立ち上がるもの、b：口頸部が内傾するものに分類する（A 3～6類も同様に細分類）。

A 3 類 口頸部がやや外反し、頸胴部界に沈線を巡らすもの。

A 4 類 口頸部がやや外反し、頸胴部界に稜を作るもの。

A 5 類 口頸部がやや外反し、頸胴部界に段や稜、沈線を作らないもの。

A 6 類 口頸部が外反せず、頸胴部界に段や稜、沈線を作らないもの。

A 7 類 口頸部が大きく開くもの。

B類 口頸部と胴部を形態や調整、区画沈線によって区分しないもの。このうち、口縁部がわずかに外反するものも本類に含めた。口縁部が立ち上がるものや「ハ」の字形に開くものなどがある。

B 1 類 口縁部が内湾もしくは立ち上がるもの。

B 2 類 口縁部が大きく開くもの。

B 3 類 口縁部がやや外反するもの。さらに、a：外反の幅が広いもの、b：外反の幅が狭いものに分類する。

C類 波状口縁を持つもの。

D類 口縁部外面に突帯文を巡らすもの。

壺形土器（第52図）

A類 頸部にケズリ調整を行うもの。主に細頸壺の形態を示す。

A 1 類 口縁部の突帯文や折り曲げられた口縁端部の上に押圧を施すもの。さらに、a：口縁端部から離して突帯文を巡らすもの、b：口縁端部に接して突帯文を巡らすもの、c：突帯文を巡らさず口縁端部を折り曲げるもの、d：突帯文を巡らさず口縁部が緩やかに外反するものに分類する。

A 2 類 口縁部内外面に沈線を巡らすもの。

A 3 類 口縁部に文様を施さないもの。さらに、a：口縁部が外反するもの、b：口縁部が立ち上がるものに分類する。

B類 外面に条痕調整を行うもの。

C類 浮線文を施すもの。

D類 沈線文を施すもの。

E類 頸胴部界の破片。

E 1 類 頸胴部界に段を作るもの。

E 2 類 頸胴部界に沈線を巡らすもの。

E 3 類 頸胴部界に稜を作るもの。

E 4 類 頸胴部界に段や稜、沈線を作らないもの。

E 5 類 頸胴部界に突帯文を巡らすもの。

鉢形土器（第53図）

A類 眼鏡状隆帯文を巡らすもの。

A 1 類 屈曲する肩部に眼鏡状隆帯文を巡らすもの。

A 2 類 屈曲する口縁部に眼鏡状隆帯文もしくは隆帯文を巡らすもの。

A 3 類 直立する頸部無文帯の下に眼鏡状隆帯文を巡らすもの。

A 4 類 直立する口縁部に眼鏡状隆帯文を巡らすもの。

B類 沈線によって作出される隆線を2条集束させるもの。

B 1 類 上の隆線と下の隆線を曲げて集束させるもの。

B 2 類 下の隆線のみ曲げて集束させるもの。

C類 沈線によって作出される隆線を主に4条集束させるもの。所謂糞置式文様におおむね相当する。

C 1 類 口縁部が緩やかに内湾するもの。さらに、a：4条の集束が欠け隆線が縦方向に展開するもの、b類：4条が集束部で結合し隆線が横方向に展開するものがあり、後者が主流を占める。

C 2 類 口縁部が内側に屈曲気味に内湾するもの。

C 3 類 口縁部が立ち上がるもの。

C 4 類 口縁部が大きく開くもの。

D類 C類の文様モチーフを沈線のみによって表示するもの。細分類はC類に準ずる。

E類 口縁部内面に隆帯文を巡らすもの。主に浅い鉢形の形状を有する。

E 1 類 隆帯文上に施文を施さないもの。

E 2 類 隆帯文上に施文を施すもの。

F類 口縁部内面に沈線文を巡らすもの。

F 1 類 直線状の沈線文を巡らすもの。

F 2 類 弧状の沈線文を巡らすもの。

G類 口縁部外面に直線状の沈線文を巡らすもの。

H類 口縁部外面に多重の方形文や楕円形文を施すもの。

I類 短斜線文を施すもの。

J類 口縁部に縄文帯を施すもの。

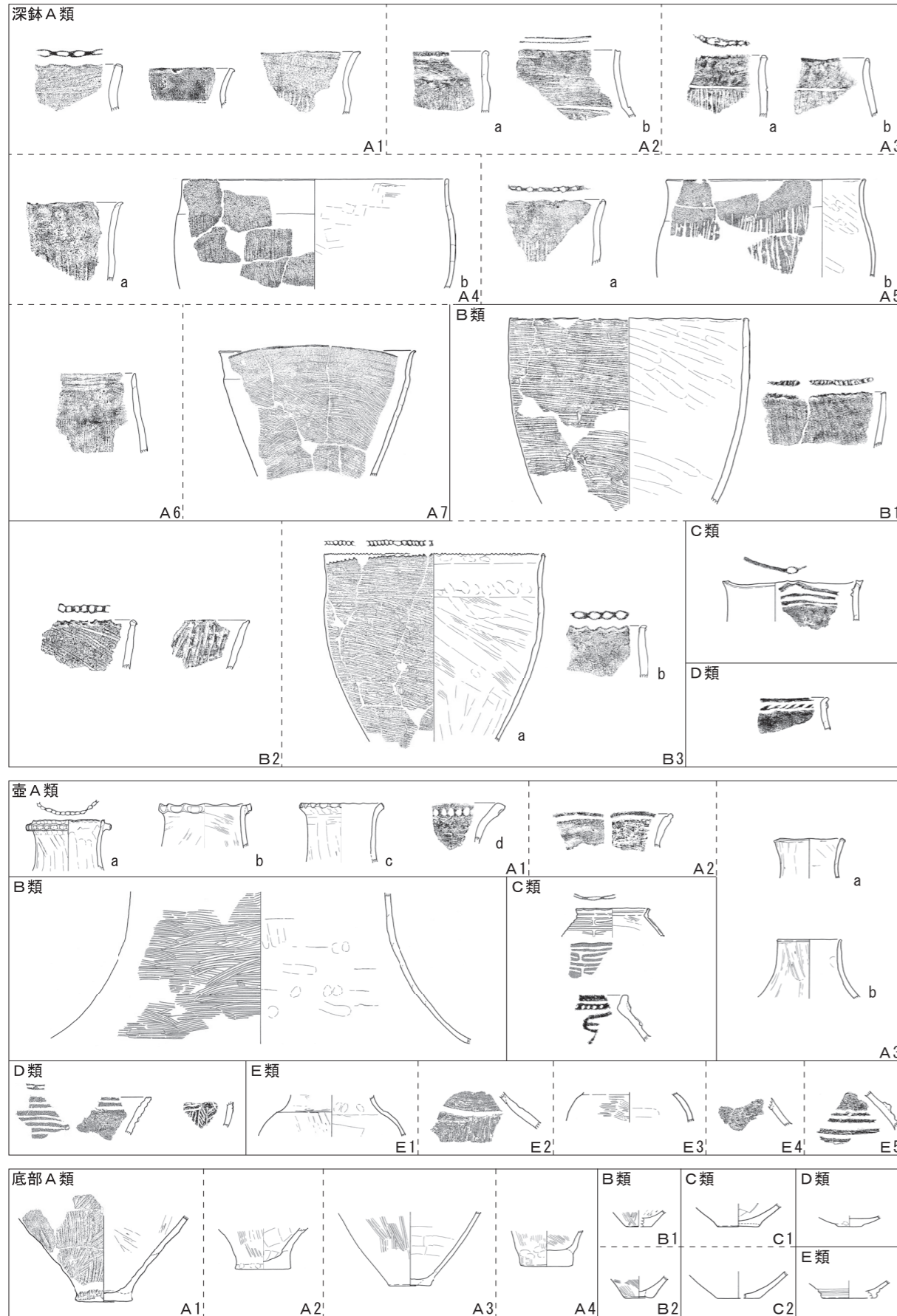
K類 無文鉢形土器で、口頸部が「く」の字形に屈曲するもの。

L類 無文鉢形土器で、口頸部が「ハ」の字形に屈曲するもの

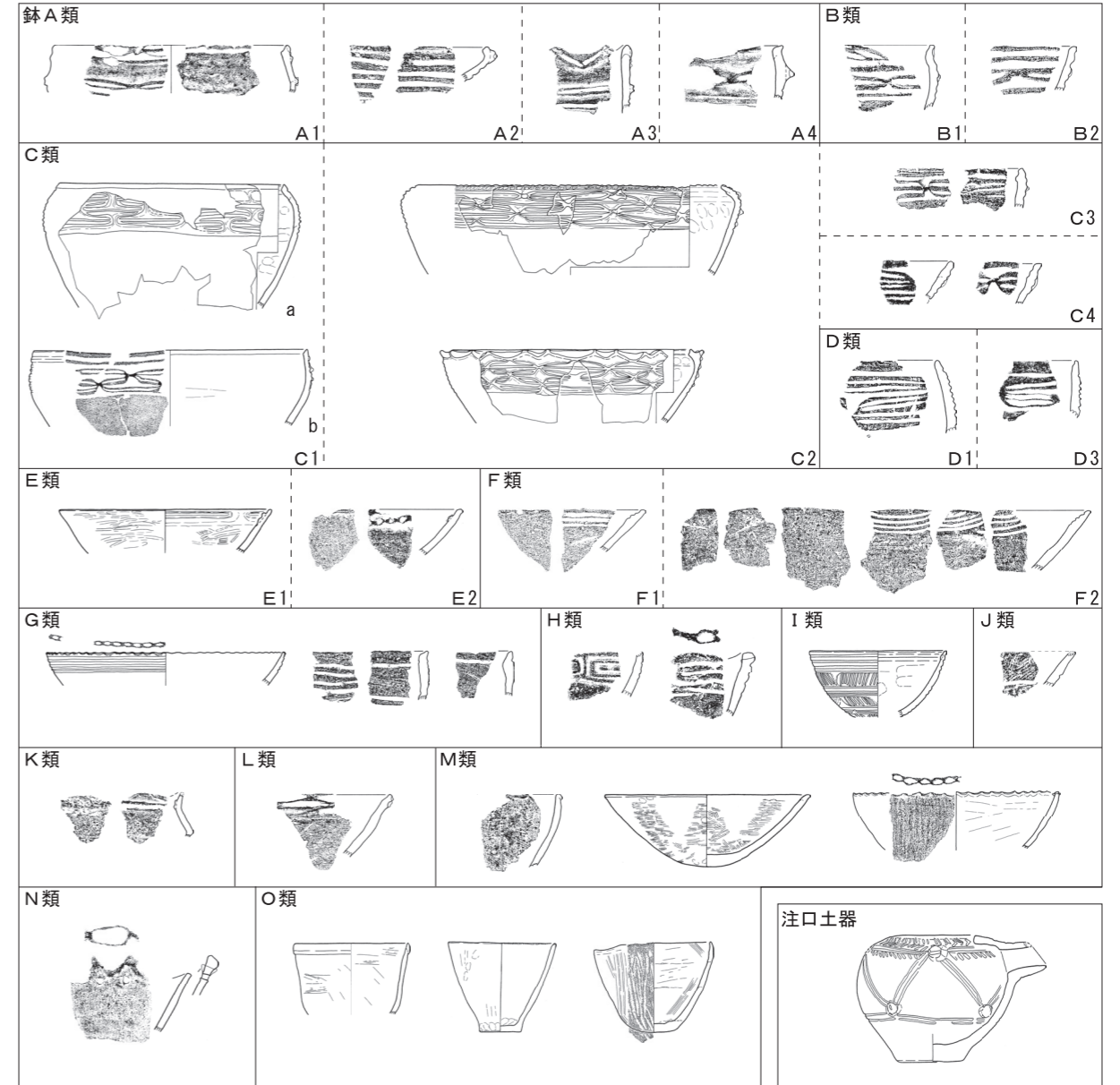
M類 無文鉢形土器で、口頸部が屈曲せず平縁口縁を持つもの。口縁部が立ち上がるものと開くものがある。

N類 無文鉢形土器で、口頸部が屈曲せず突起口縁を持つもの。

O類 小型の鉢形土器。



第52図 深鉢形土器・壺形土器・底部分類図 (縮尺1/8・1/6)



第53図 鉢形土器・注口土器分類図 (縮尺1/8・1/6)

注口土器 (第53図)

底部 (第52図)

A類 胴部下半から底部側縁にかけて条痕やケズリの調整を行い、底径が7cm前後と広いもの。主に深鉢形土器や壺形土器の底部である。

A1類 底部側縁が突出するもの。

A2類 底部側縁が幅広いもの。

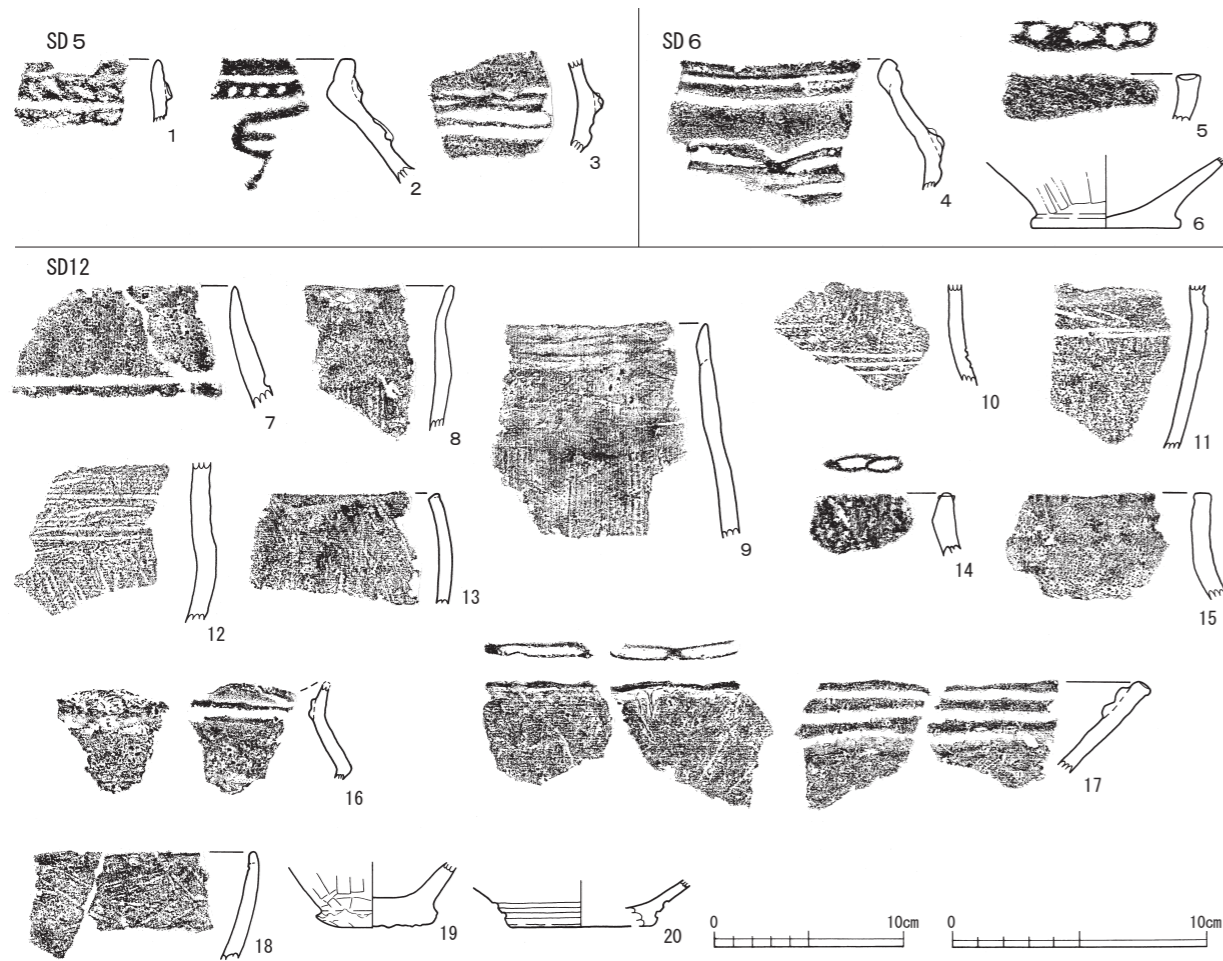
A3類 底部側縁から胴部にかけてそのまま開くもの。

A4類 厚底の底部を持つもの。

B類 胴部下半から底部側縁にかけて条痕などの調整を行い、底径が4cm前後と狭いもの。主に深鉢形土器や壺形土器の底部である。

B1類 底部外面が平坦であるもの。

B2類 底部外面がへこむもの。



第54図 I区SD5・6・12出土土器実測図（縮尺1/4：6・9・20、縮尺1/3：1～5・7～18）

C類 胴部下半から底部側縁にかけてミガキや丁寧なナデ調整を行うもの。主に鉢形土器の底部である。

C1類 底部側縁がくびれるもの。

C2類 底部側縁がくびれないもの。

D類 台状の底部を形成するもの。

E類 底部側縁に沈線を巡らすもの。主に鉢形土器の底部である。

1) I区SD5出土土器（第54図1～3）

深鉢D類（第54図1）や壺C類（第54図2）、鉢A1類（第54図3）がある。第54図1は摩耗が著しいが、篋状工具による斜め方向の刻目を施す。第54図2は口縁部に刺突列を入れた隆帯文を巡らし、胴部には3条の隆帯を集束させた文様を確認できる。鉢形土器の可能性もある。第54図3は眼鏡状隆帯文の下に平行沈線を2条引く。

2) I区SD6出土土器（第54図4～6）

深鉢B1類（第54図5）や鉢A1類（第54図4）、底部A1類（第54図6）がある。第54図5は口縁部が内湾し、口縁端部には円形の深い連続押圧を施す。第54図4は口縁部に上下沈線に挟まれた隆帯文を巡らし、肩部には眼鏡状隆帯文、その下に沈線を引いている。

3) I区SD12出土土器（第54図7～20）

深鉢はA2類（第54図11）やA3類（第54図7・10）、A4類（第54図8・12）、A6類（第54図9）、

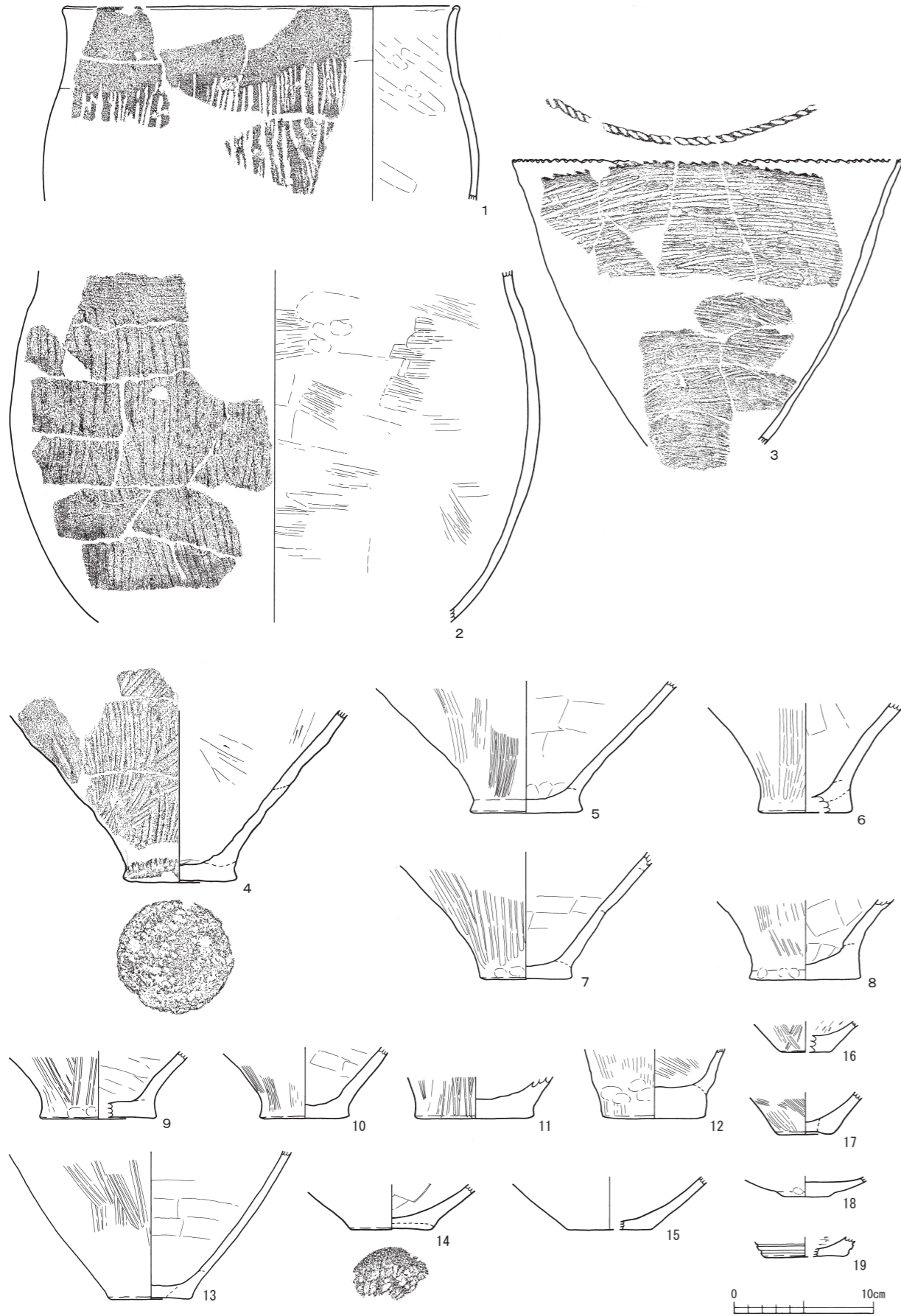


第55図 I区SR1出土土器実測図-1（縮尺1/4）

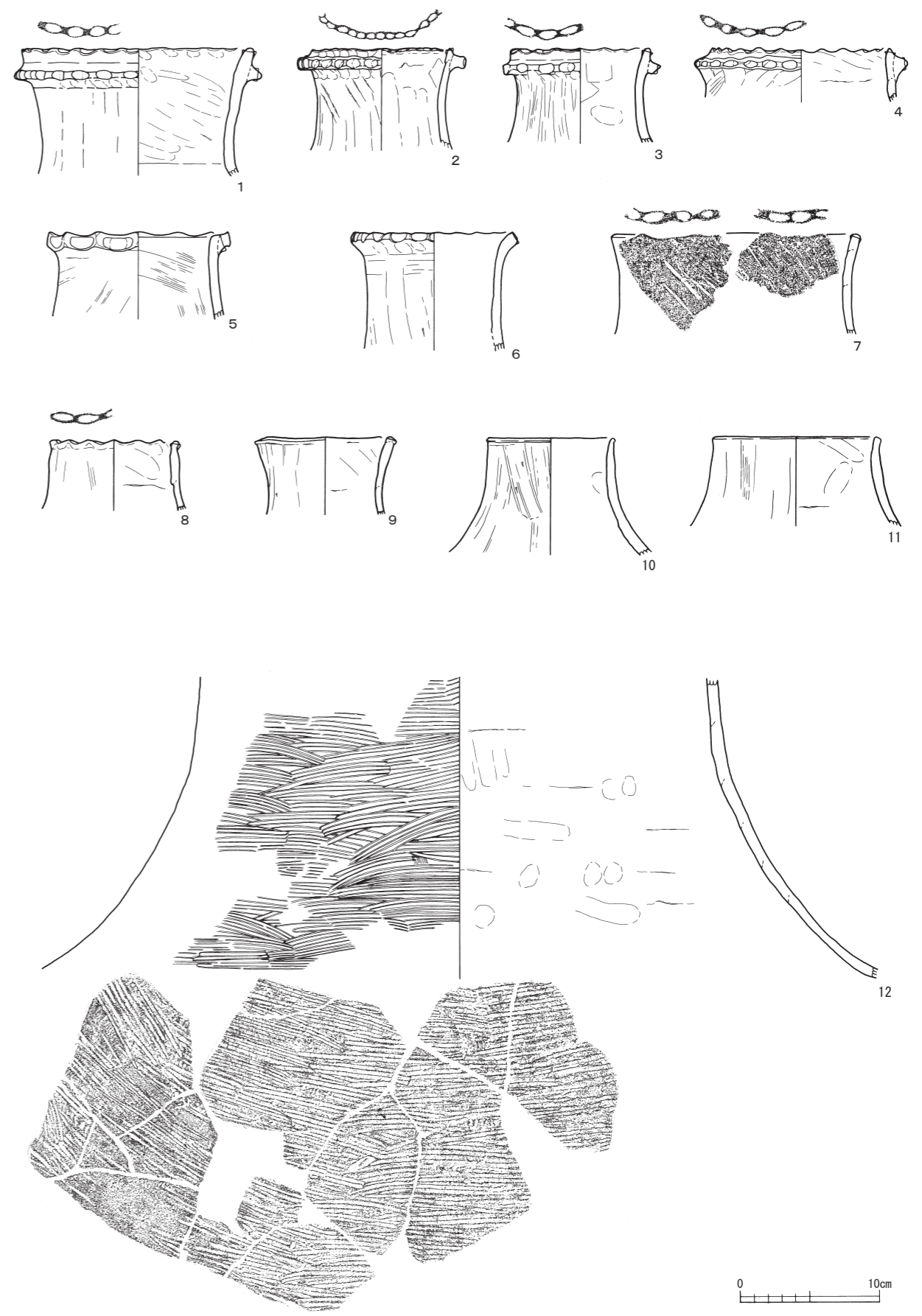
B1類（第54図13）があり、第54図14はB類、第54図15はA類に相当する。第54図7・8はともに口縁端部を細く成形する。第54図9は胴部への縦位条痕後に頸部に板状工具によって横位ケズリを行う。第54図10の頸胴部界には3条の沈線が走り、原体は二枚貝や櫛などの工具を想定する。第54図11の頸胴部界下にはかすかな短斜線と平行沈線が巡る。第54図14は胴部に縦位条痕、口縁部内面に鋭角の稜を作る。鉢はE1類（第54図17）やK類（第54図16）、M類（第54図18）がある。第54図16は口縁部に山形の突起を作り、内面には2条の隆帯文を巡らしている。第54図17は浅鉢形の器形をなし、口縁部内面に平行する2条の隆帯文を巡らす研磨調整は行われぬ。底部はA1類（第54図19）やE類（第54図20）がある。第54図20はやや深い沈線を2条引く。

4) I区SR1出土土器（第55図1～第63図27）

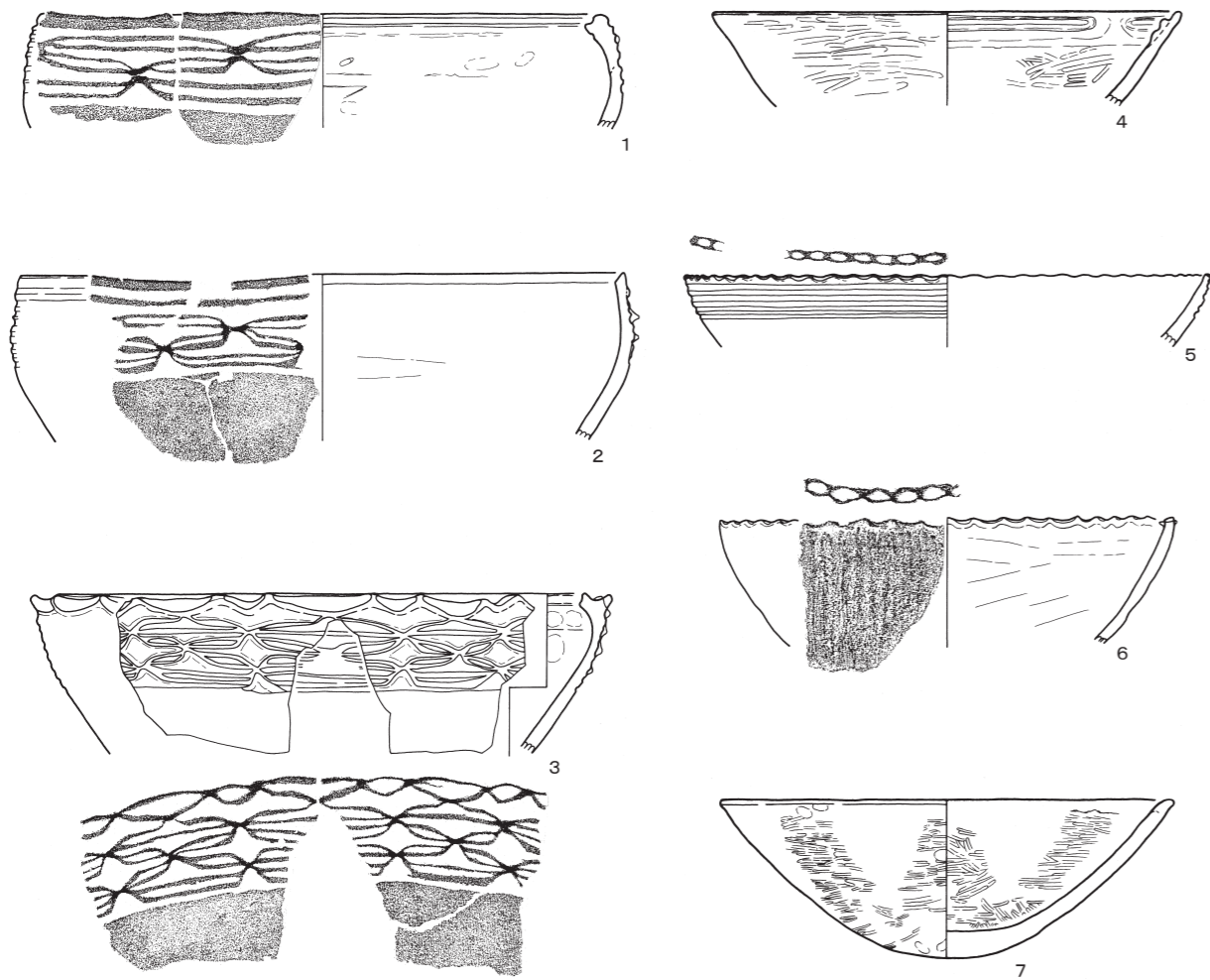
深鉢はA1類（第59図1～3）やA2a類（第59図9・10）、A2b類（第59図16・20）、A3a類（第59図4～7）、A3b類（第59図17～19）、A3類（第61図20～27）、A4b類（第56図2、第59図15）、A5a類（第59図12・13）、A5b類（第56図1、第59図14）、A5類（第61図28）、A6b類（第59図8・



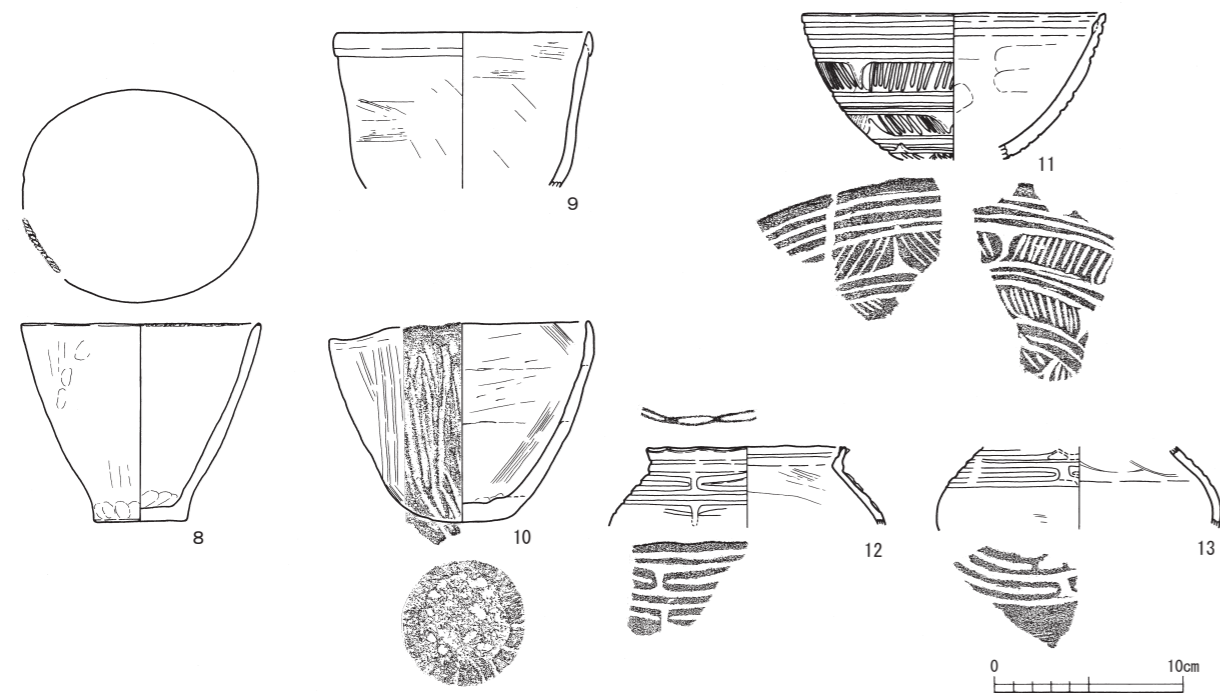
第56図 I区SR1出土土器実測図-2 (縮尺1/4)



第57図 I区SR1出土土器実測図-3 (縮尺1/4)



第58図 I区SR1出土土器実測図-4 (縮尺1/4)

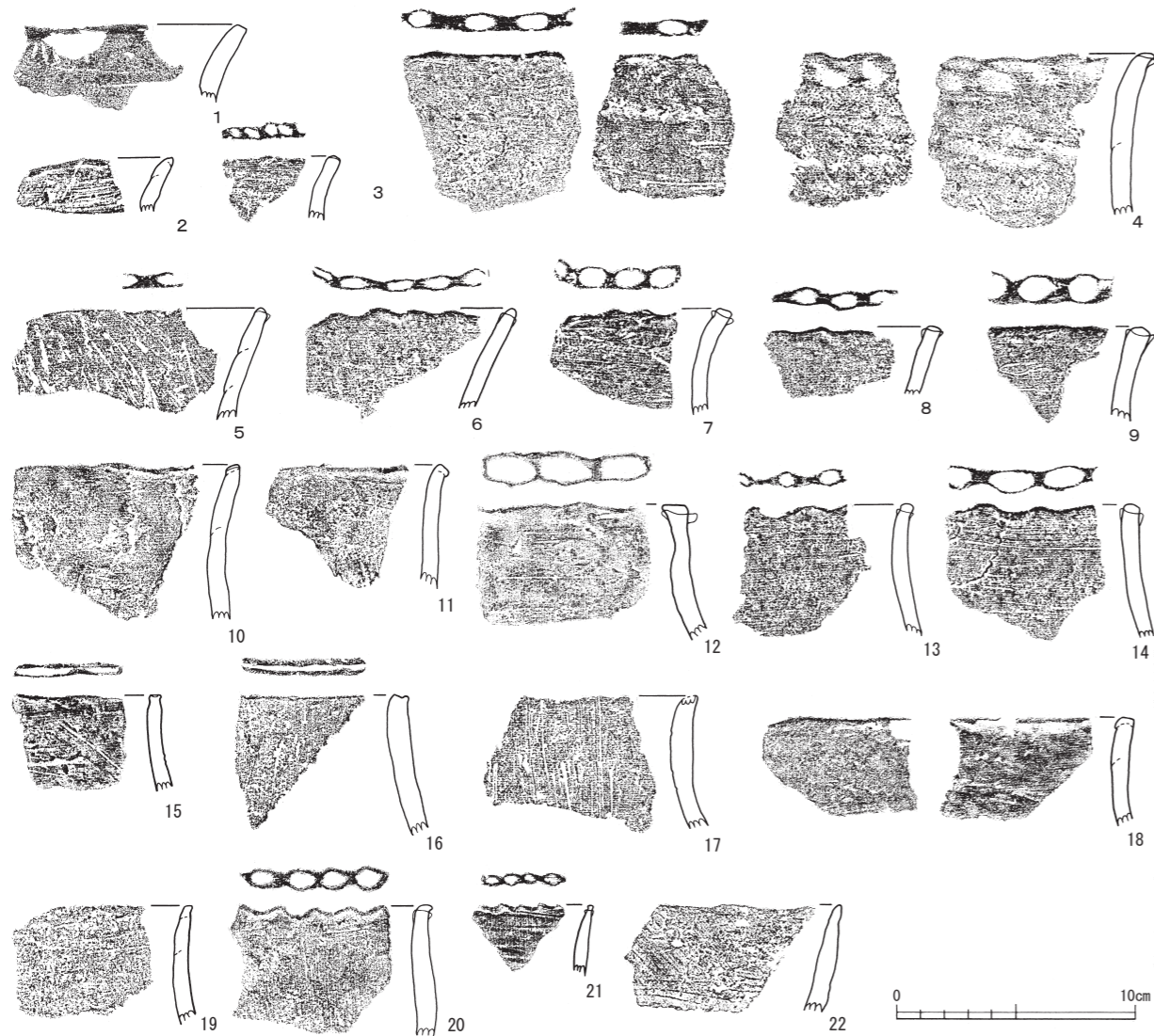


第59図 I区SR1出土土器実測図-5 (縮尺1/3)

11)、A 6類 (第61図29~32)、A 7類 (第56図3)、A類 (第60図1~19)、B 1類 (第55図3、第60図21・22、第61図6~12・16~18)、B 2類 (第61図1~4・13~15)、B 3a類 (第55図1・2、第61図5)、B 3b類 (第60図20)、C類 (第55図4)、D類 (第61図19) がある。

第55図1~3はいずれも二枚貝による横位条痕によって器面調整を行う。1・2のみ口縁部が幅広くわずかに外反し、口縁端部に篋状工具による刻目を施すが、1~3は条痕の単位幅や深さ、調整方向など非常によく似ている。3は胴部下半に横位条痕前の縦位条痕の痕跡を一部確認できる。第55図4は波状口縁をもち、波頂部には円形押圧を施す。第56図1は胴部に二枚貝と思われる工具で下から上方向に条痕調整を行う。胴部条痕は頸部ナデ後に行われる。第56図2は口縁部が欠けているが、比較的大型の深鉢である。胴部の縦位条痕の条線は幅が広いことが特徴である。条痕は頸部に至ってナデ消されている。第56図3はバケツ形に開く深鉢であるが、口頸部がわずかに外反傾向にあり、また口頸部の条痕の条線が太いのに対して、胴部の条線はやや細いことから、口頸部と胴部とは原体を使い分けている。

第59図1~20は口縁部から頸胴部界まで残る深鉢A類を図示した。第59図1・2は口縁部がやや直線状に外反する。第59図5は頸胴部界に沈線を引く。沈線内には細かな筋線を確認できる。第59図10・20は頸部の幅が狭く頸胴部界に浅い段を設けている。第59図13は口縁端部に篋状工具で刻目を施す。第59図16は口縁端部上をへこませ、頸部には板状工具でナデ調整をする。頸胴部界には幅の狭い段を作出し、



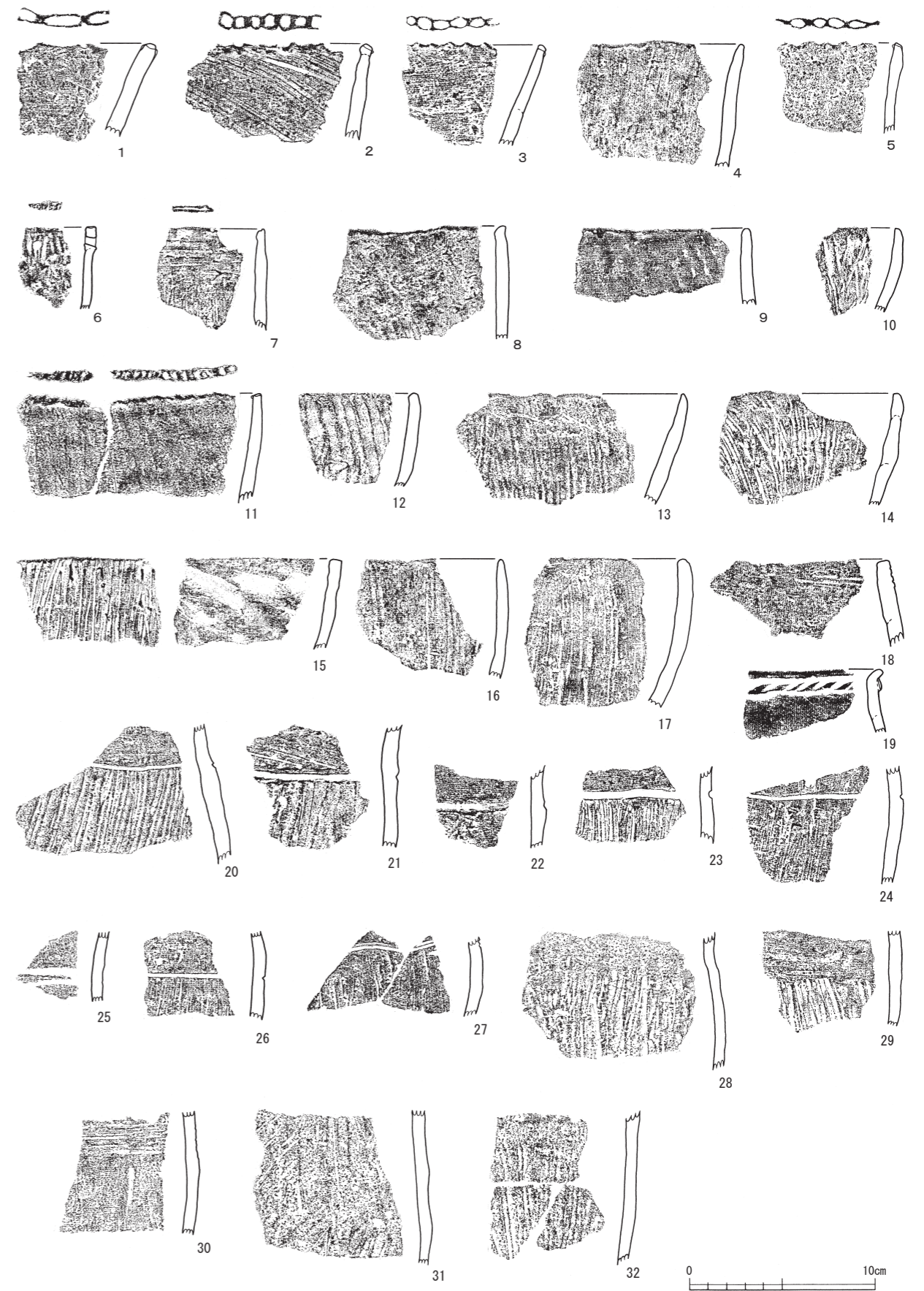
第60図 I区SR1出土土器実測図-6 (縮尺1/3)

段の中には筋状の痕跡が残る。

第60図は主に口縁部のみが残る深鉢A類を図示した。第60図1～19は深鉢A類であり、口縁端部上に施文される施文には、円形の押圧(4～9・12～14)、凹線(15・16)、篋刻目(3)がある。16・17は頸部に縦位削り、18は丁寧なナデによって調整されており、これらは壺の可能性もある。第60図20～22は深鉢B類に相当する。20は口縁部が幅狭く外反し横位板ナデが行われ、勝山市大島田遺跡に類似例がある。21は口縁端部に篋刻目、頸部に横位条痕が行われる。

第61図は深鉢B類および頸胴部界や胴部の破片を図示した。第61図4は口縁端部が小波状につくられている。第61図6は口縁部に焼成前穿孔を行う。第61図11は口縁端部に細かい刻目を施している。

第61図14は口縁部の一部の箇所がやや張りだしており、注ぎ口の可能性がある。第61図18は口縁部が内傾する器形である。第61図19は口縁端部を折り曲げ、その下に刻目突帯文を巡らす。刻目は篋状工具で斜め方向に加えている。第61図20～27は頸胴部界に沈線を施す。篋状工具による細い沈線(20・24・26)や断面U字形の沈線(21・25)、断面方形の沈線(23)、内部に細かな筋を残す沈線(27)がある。25は2条の沈線が引かれる。



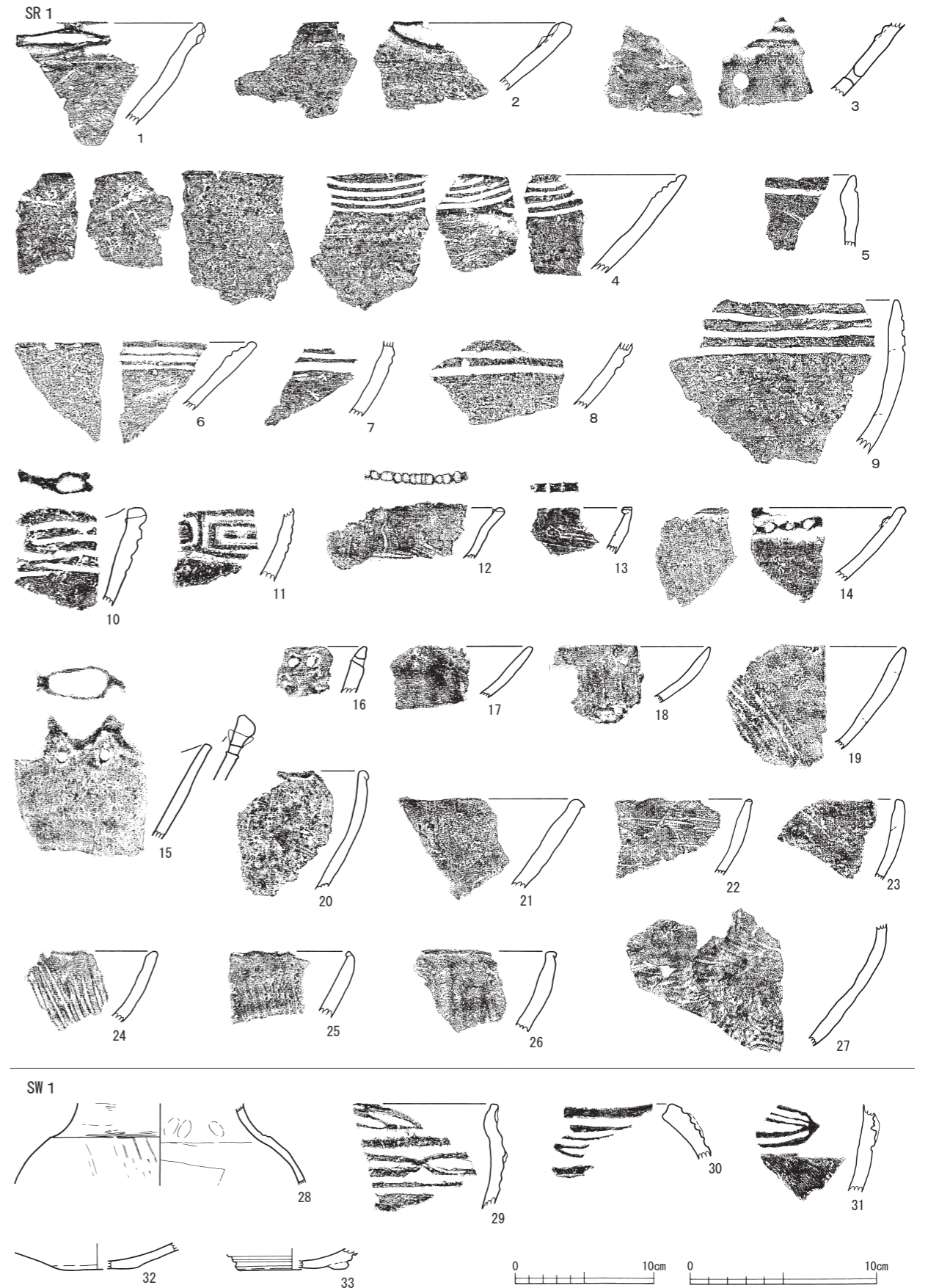
第61図 I区SR1出土土器実測図-7 (縮尺1/3)



第62図 I区SR1出土土器実測図-8 (縮尺1/3)

壺はA1a類(第57図1~4、第62図1~3)、A1b類(第57図5)、A1c類(第57図6)、A1d類(第62図4)、A2類(第62図5)、A3a類(第57図7・9)、A3b類(第57図8・10・11、第62図6・7)、B類(第57図12)、C類(第58図12・13)、D類(第62図11)、E1類(第62図9)、E2類(第62図8)、E4類(第62図10)、E5類(第62図12)がある。

第57図1~4は指頭によって口縁端部上および突帯文上に楕円形の連続押圧を施す。頸部には板状工具により縦方向のナデ調整が行われる。第57図5・6も1~4とほぼ同じ器面調整が行われる。第57図7は口径がやや幅広く、口縁部を少し外反させている。全体の形状が明らかではないが、口径がやや広く、頸部が緩やかに外反することが特徴である。突帯文を貼り付けないA3類のうち、第57図10は口縁端部を丸く作り出し、粗い削り調整を行う。第57図9・11は口縁端部を面取りしている。



第63図 I区SR1・SW1出土土器実測図(縮尺1/4:28・32・33、縮尺1/3:1~27・29~31)

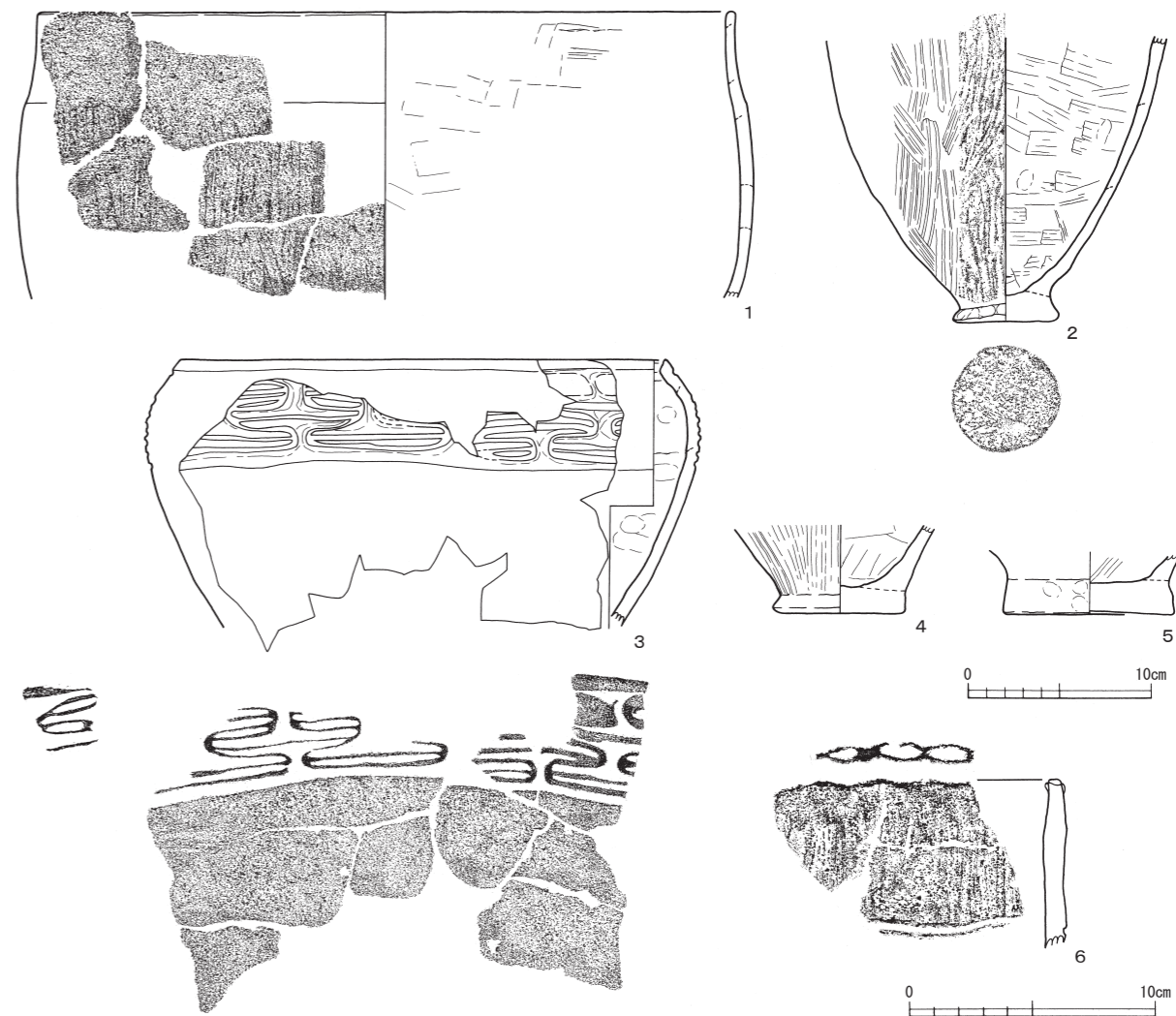
第62図1～3は円形押圧のある突帯文を巡らす。2・3は時計回りに押し引きしている。4はD字形の刻目を時計回りに施文している。第62図5は内外面に1条ずつ沈線を走らせている。第62図6・7は壺の口縁部、第62図8～10は壺の頸胴部界である。8～10の頸部と胴部の境目に内傾接合を確認できる。8・9の頸胴部界には横方向から沈線を引き、9は段部を作り頸部を斜めに立ち上がらせている。第62図11は口頸部に6～7条の沈線文を引き、下3条以下は弧線である。これらの沈線は拓本右端の円形押圧に集束すると推定する。中部地方に分布する弥生時代前期の沈線文系土器である。第62図12は頸部と胴部の境目に2条の隆帯文、その下に数条の沈線文を施文する。隆帯文上の拓本中央には刺突状の痕跡を一つ認めるが、文様ではない可能性がある。

鉢はA1類（第62図14・15）やA3類（第62図13）、B2類（第62図16）、C1b類（第58図1・2）、C2類（第58図3、第62図18・19）、C3類（第62図20・21）、C4類（第62図17・22）、C類（第62図23～25）、D1類（第62図28）、D3類（第62図20・26・27）、D類（第62図27・30）、E1類（第58図4、第63図2・3）、E2類（第63図14）、F2類（第63図4）、G類（第58図5、第63図5・7～9）、H類（第63図10・11）、O類（第58図8～10）、I類（第58図11）、L類（第63図1・12）、M類（第58図6・7、第63図13・16～27）、N類（第63図15）がある。

第58図1・2は4条の隆線を集束させて隆線は横方向に展開している。集束部は上下2段にあり、互い違いになっている。4条隆線のうち上2条の隆線は上段の集束部に接続し、下2条の隆線は下段の集束部に接続する。集束部は摘み上げられており、集束部の上下にはナデや工具によって整形された三角形の抉り文が施される。隆線そのものは沈線間隙を走る沈線によって作出されるが、狭義の浮線文土器に見られるような沈線内外の研磨は顕著に認められない。一方で、隆線間の沈線は少なからず断面「レ」字形を呈しており、これは隆線を浮線状に見せる工夫の一つと推測する。また、2は口縁部に1条の平行隆線を巡らしている点が特徴的である。第58図3も4条の隆線を集束させるモチーフであるが、第58図1・2が隆線を入り組み状に横展開しているのに対し、3は文様が二段に構成され集束部を境にして単位文を呈している点が異なる。また、1・2の隆線が曲線状に展開するのに対して、3の隆線は角状に整えられている点も特徴的である。また、強く内湾する口縁部には隆線集束部に対応する位置に双頭突起が作られているが、大小の押圧が連続する眼鏡状隆帯文のようにも見える。

第58図4は口縁部内面に長楕円形の隆線を巡らす。長楕円形文は6単位に巡る可能性がある。第58図5は口縁端部に円形の連続押圧、外面に4条の沈線を施す。内外面とも比較的丁寧な研磨が行われる。第58図6・7は浅い椀形の器形で、6は幅の広い条線が揃う縦位条痕を行い、7は丁寧に研磨される。第58図8～10は小型の土器で、8は口縁部から底部まで平面楕円形に作られる。9は口縁部に幅の広い粘土帯を積み上げる。この突帯文上は丁寧になでられているが、突帯文下辺と器面の境目は明瞭に確認できる。外面はナデ調整、内面には板状工具のナデがある。近畿地方の長原式土器に関連する可能性があるか。10は他の深鉢と同じように縦位の条痕で調整する。

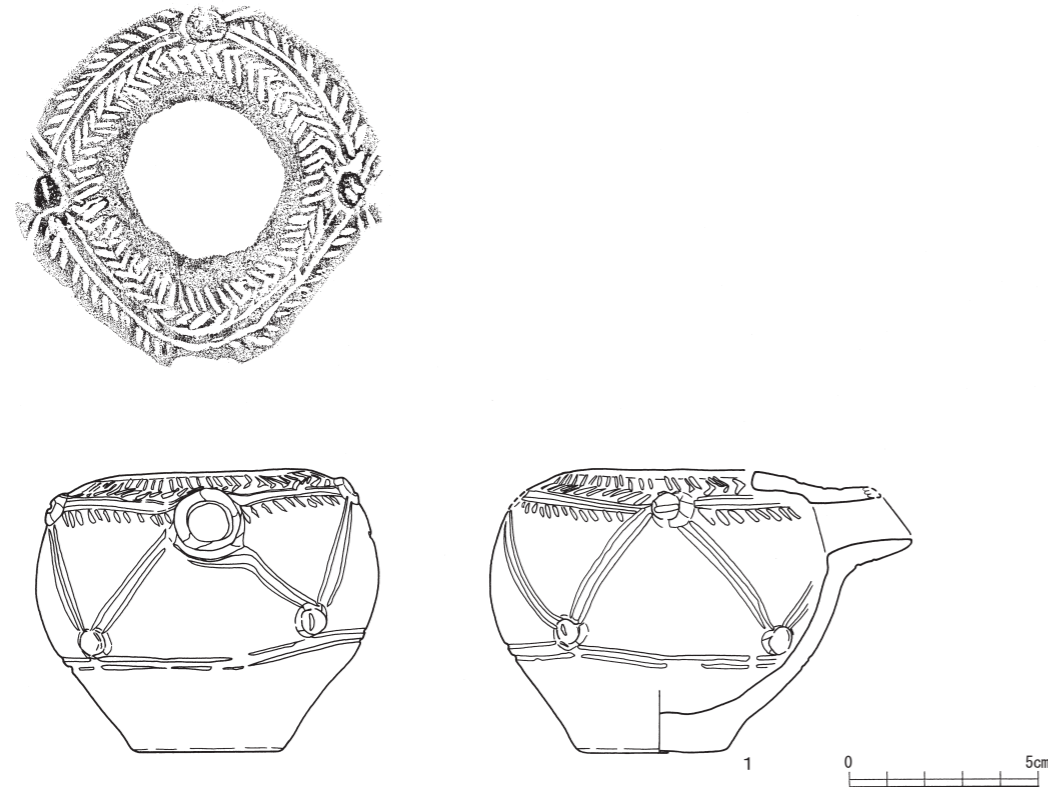
第58図11は口縁部に4条の平行沈線文、胴部に3段の短斜線文を施文する。短斜線文の途中には上下交互に配置される三叉状の抉り文を入れており、それを境にして短斜線の向きも変えている。第58図12・13は小型の短頸壺であり工字状文を胴部に描いている。器形や胎土などから両者は同一個体の可能性があるが、最下段の文様モチーフがやや異なることから別個体と判断した。東北地方の大洞A～A'式に系譜を持つ土器と考える。



第64図 II区SR1出土土器実測図（縮尺1/4：1～5、縮尺1/3：6）

第62図13は波状口縁に沿うように隆帯文と沈線文を巡らす。無文の口頸部下には隆帯文と数条の沈線文を施文する。隆帯文上はへこんでおり、眼鏡状文か凹線文と考える。第62図14は2条の隆帯文上に篋状工具で横方向の短沈線を入れる。鉢A1類としたが、他の器種である可能性もある。第62図15は口縁部に1条の沈線文、頸胴部界に歪んだ眼鏡状文、胴部に数条の弧線文が展開する。外面に赤色顔料が残る。第62図16は隆帯によって上段に匹字文、下段に集束される3条以上の隆帯が施される。第62図17～30は鉢C・D類に相当する。18は主文様の上に3条沈線が引かれる。20は口縁端部直下に文様が描かれる。沈線の幅が揃っていないため、D類にも近い。第62図21・22は3条の隆線を集束させる。第62図23～25は胴部破片で沈線によって4条の隆線を作出する。第62図26は上段に集束される3条隆帯、下段に匹字文、胴部には斜線文様を描いている。第62図27・28は4条の「レ」字形沈線を引くが、沈線間の隆帯の幅が揃っていない。第62図30は5条以上の長短の異なる沈線を引く、また集束部上下の三角区画内にも工具痕が粗く残る。

第63図1は口縁部がやや外反するが、口縁部と胴部との境は不明瞭である。口縁端部には眼鏡状文が巡る。第63図2は口縁部内面に弧状の隆帯文が巡り、半レンズ状の文様と推定する。第63図3は口縁部内面に2条の隆帯、また焼成前の穿孔をしている。第63図4は口縁部内面に弧状の沈線を引く。第63図5・7～9は口縁部外面に1条～数条の平行沈線文を描く。第63図10は口縁端部に指頭押圧、胴部に横沈線



第65図 II区SR1出土注口土器実測図（縮尺1/2）

を充填する楕円形文を描く。第63図11は口縁部に二重の方形文を施文している。第63図12は外反する口縁部にナデ調整、胴部にハケ状の痕跡が残る。第63図15は波頂部に双頭突起を作り、その下に焼成前の二つの穿孔を施す。第63図16も焼成前に二つの穿孔を行う。第63図17～27は外面にナデ（21など）や削り（23など）、条痕調整（24など）を行う。

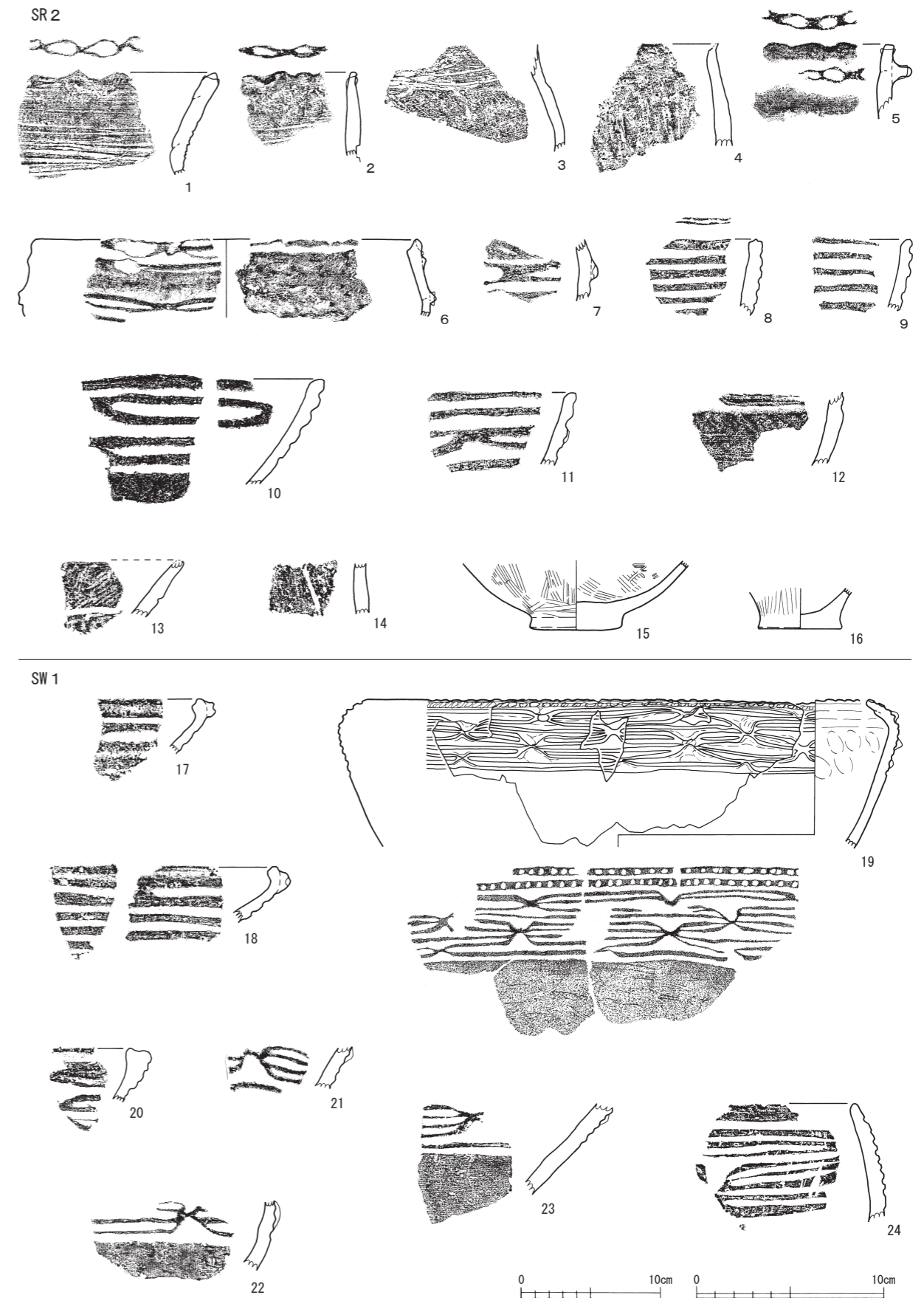
底部はA1類（第56図4～7、9～11）やA2類（第56図8）、A3類（第56図13）、A4類（第56図12）、B1類（第56図16）、B2類（第56図17）、C1類（第56図14）、C2類（第56図15）、D類（第56図18）、E類（第56図19）がある。第56図4は主に二枚貝で条痕調整を上から下方向に行う。条痕以外にもハケ状の調整痕なども確認できる。第56図5～12はおおむね条痕調整を行う。第56図14～17は外面にミガキ調整もしくは丁寧なナデ調整を行う。鉢や壺の底部である可能性がある。台状の底部をもつ第56図18や沈線を巡らす第56図19も鉢の底部である可能性が高い。

5) I区SW1出土土器（第63図28～33）

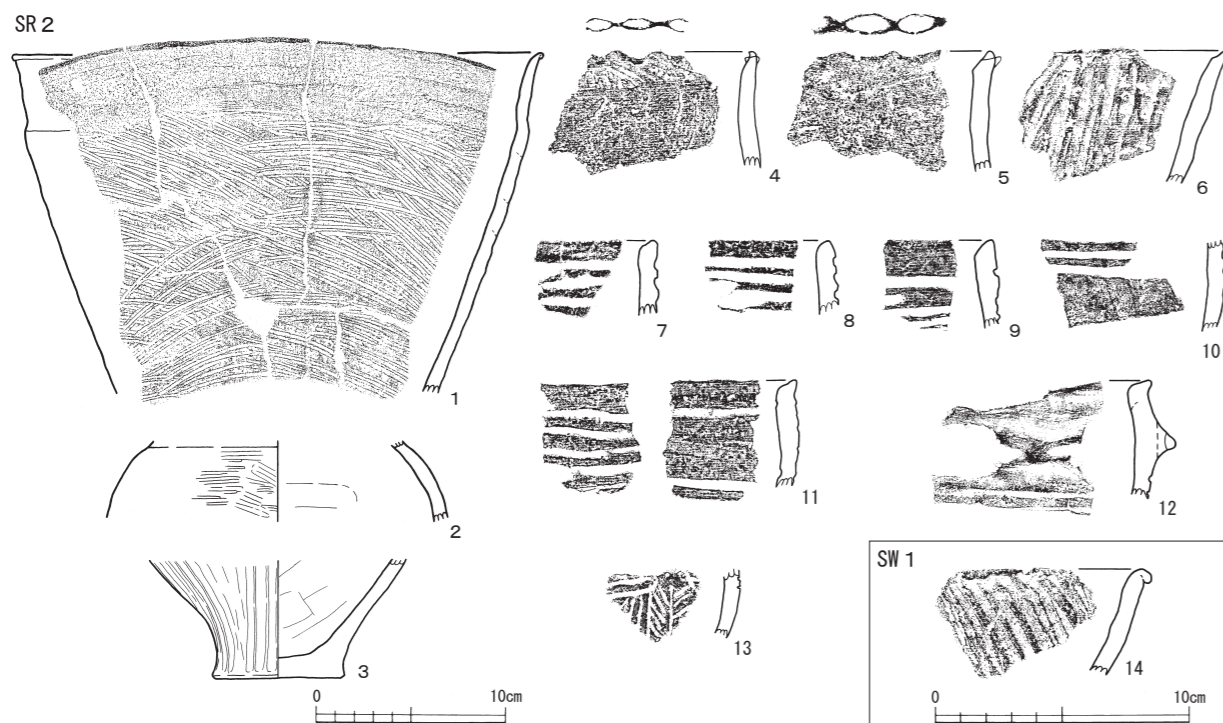
壺はE1類（第63図28）、鉢はB1類（第63図29）やC2類（第63図30）、C類（第63図31）、底部はC2類（第63図32）やE類（第63図33）がある。第63図28は頸胴部界に沈線を複数入れることで段を作っている。頸部には横位のナデ、胴部には板状工具による斜位のナデ調整を行い、胴部には煤痕が残る。第63図29は外反する口縁部と胴部に分かれ、口縁部には隆帯文上に斜めの短沈線、胴部には集束させた2条の隆線がある。第63図30は隆線を4条、第63図31は5条により集束部を作る。

6) II区SR1出土土器（第64図1～第65図1）

深鉢はA4類（第64図1）やA3a類（第64図6）、鉢はC1a類（第64図3）、注口土器（第65図1）、底部はA1類（第64図2・4・5）がある。第64図1は胴部に縦位条痕、その後に頸部に横位ナデ調整を行う。頸胴部界になだらかな稜がある。第64図2は上から下方向へ条痕調整を行い、底部側縁が強く



第66図 II区SR2・SW1出土土器実測図（縮尺1/4：15・16・19、縮尺1/3：1～14・17・18・20～24）



第67図 III区SR 2・SW 1出土土器実測図（縮尺1/4：1～3、縮尺1/3：4～14）

突出する。第64図3は流水状の隆線が縦方向に展開するモチーフを持つ。これらの各単位は文様帯下半を占める直線の横隆帯によって接続しており、4条の隆線同士が一度に接続する集束部を確認することはできない。口縁部の状況は激しい摩耗により状況が明らかではないが、同一個体の小破片への観察によれば、口縁部は直線の横隆帯ではなく「匹」字状の隆帯によって単位文様同士が接続するようである。また、隆線は丸みを帯び、上から押された痕跡が見られることから、沈線による隆線作出後にナデや研磨によって隆線を浮き立たせている。以上の点から他のC類の特徴とは大きく異なるといえよう。第64図6は頸部に縦位条痕を施している。第65図1は注口土器であり、注口端部がわずかに欠損しているほかは完形で残る。口縁部には矢羽根状文が巡り、胴部には2条1組の篋描沈線によって三角形区画文を描く。三角文様の接合部には円形浮文を配置させ、円形浮文上には刻文が施される。また、口縁部外面にのみ赤色顔料を塗布しており、顔料の色調から水銀朱の可能性がある。

7) II区SR 2出土土器（第66図1～16）

深鉢はA 2類（第66図3）やA 3 a類（第66図2）、A 6類（第66図4）、A類（第66図1）、壺はA 1 a類（第66図5）、鉢はA 1類（第66図6・7）やB 2類（第66図10・11）、D類（第66図12）、G類（第66図8・9）、J類（第66図13）、底部はA 1類（第66図16）やD類（第66図15）がある。第66図1は口頸部が直線状に外反し、頸胴部界は段状に作られるか胴部が大きく張るものと推定する。第66図4は口縁部が横位ナデ、胴部が縦位条痕で調整される。第66図6は口縁端部が一部欠損しているが、口縁端部と肩部隆帯文に眼鏡状文が巡る。また、口縁部には素文の隆帯文、肩部下には平行沈線文を確認できる。第66図8・9は多条の沈線文を引く。第66図10・11には匹字文があるが、10は隆帯文上に研磨が行われ、外面に赤色顔料が残るため、精製土器としての特徴を見せる。第66図12は篋状工具による数条の細い沈線および集束部下の三角形決りを確認できる。第66図13は沈線に区画された口縁部にLR縄文が施される。縄文時代晩期中葉の中屋式土器と推定する。第66図14は口縁部に斜め沈線文が引かれる。この例も縄文

時代晩期後葉以前の可能性がある。

8) II区SW 1出土土器（第66図17～24）

鉢はA 2類（第66図17・18）やC 2類（第66図19）、C 4類（第66図20）、C類（第66図21～23）、D 1類（第66図24）がある。第66図17・18は胴部に多条の沈線文を巡らす。第66図19は口縁部を胴部から強く折り曲げる。口縁端部外面にはD字形の2条の刻目列、肩部～胴部にかけては集束部と隆帯による文様が描かれる。集束部は主に上段・中段・下段に分けられ、縦並置される上段・中段の集束部、縦並置される中段・下段の集束部が互い違いに横方向に展開する。また、上段および下段の集束部は2～3条の隆線が集束し、中段の集束部は4条の隆線が集束する。第66図20～23は沈線で作出された隆線が4条集束するタイプである。第66図24は拓本ではわかりづらいが、各々の楕円形区画の中に2条の沈線を充填し、三角形決りを互い違いに配置する。

9) III区SR 2出土土器（第67図1～14）

深鉢はA 7類（第67図1）やA類（第67図4・5）、B 2類（第67図6）、壺はE 3類（第67図2）やD類（第67図13）、鉢はA 4類（第67図12）やC・D類（第67図7・8・10・11）、G類（第67図9）、底部はA 1類（第67図3）がある。第67図1胴部に左上・右上斜位の細密な条痕調整を交互に行い、頸部では板状工具で横位ナデしながら条痕をナデ消している。頸胴部界ではなだらかな稜が形成されている。第67図2は黒色の外面に丁寧な研磨痕が残る。赤色顔料も残り、精製土器の一つと考える。第67図6は口縁端部が摘み出され、胴部に縦位条痕で上から下方向に調整する。第67図7・8は多条沈線の途中で下向きの決り痕を確認できるため、鉢C類もしくはD類と考える。第67図9は口縁部1条沈線下に横位の短沈線があり、その下に3条の平行沈線を確認できる。第67図10は3条の沈線施文後に、三角形の決りを入れる。第67図11は口縁部が内湾する形状の鉢で、上から4条目の沈線の途中で三角形の決りがあり、また弧状の沈線の存在から、鉢D 1類の可能性もある。第67図12は長胴の鉢形土器であり眼鏡状隆帯文の下に2条の細い沈線文を確認できる。第67図13は横位の2条の沈線、その下に縦位の多条の沈線および縦位の矢羽根状文が描かれる。弥生時代前期の沈線文系土器の胴部破片である。

10) III区SW 1出土土器（第67図14）

深鉢B 2類（第67図14）は口縁端部が外側にはみ出し、外面に斜位の条痕調整をする。

2 弥生時代から古墳時代の土器

調査区からは、自然流路を中心に弥生時代から古墳時代にわたる多くの土器が出土している。土器の主体となるのが、弥生時代後期であり、そのほかに弥生時代中期後葉や古墳時代前期の土器も一定量出土し、わずかに弥生時代中期前半の土器も確認できる。これらの土器の記述に当たっては、これまでに刊行されている発掘調査報告書の土器分類を参考にしながら（福井県埋文2009）、器種による分類を行い、主に口縁部形態により細分類を行った。

甕形土器（第68図）

A類 口頸部が外反もしくは「く」の字形に屈曲し、口縁端部に広い面を作らないもの。胴部の張りは胴部中位からはじまるものが多い。主に弥生時代中期に属する。

A 1類 口縁部が緩く外反し、胴部が大きく張らないもの。

A 2類 口縁部が緩く外反し、胴部が大きく張るもの。

A 3類 口縁部がやや「く」の字形に屈曲するもの。胴部が張るものが多い。

B類 口頸部が「く」の字形に屈曲し、口縁端面に幅の狭い面を形成するもの。

B1類 口縁端面の面に凹線文を施すもの。

B2類 口縁端面の面が無文であるもの。

C類 有段形の口縁部を持ち、口縁部に擬凹線文やその他の文様を施すもの。

C1類 B類よりも口縁端面の面が広くなり、擬凹線文を施すもの。口縁部内面はやや受口形を呈する。

C2類 口縁部が内傾しながら立ち上がり、擬凹線文を施すもの。

C3類 口縁部が直立し、擬凹線文を施すもの。

C4類 口縁部が外傾もしくは外反しながら立ち上がり、擬凹線文を施すもの。

C5類 口縁部内外面の段が弱くなり、擬凹線文を施すもの。

C6類 口縁部に刺突文を施すもの。

D類 有段形の口縁部を持ち、口縁部に擬凹線文などの文様を施さないもの。

D1類 B類よりも口縁端面の面が広がるもの。口縁部内面はやや受口形を呈する。

D2類 口縁部が直立するもの。

D3類 口縁部が外傾もしくは外反しながら立ち上がるもの。

D4類 口縁部内外面の段が弱くなるもの。

E類 受口形の口縁部を持つもの。近江地方に系譜を持つものも含む。

E1類 口縁部内外面にハケ調整を行うもの。主に弥生時代中期に属する。

E2類 口縁部に刺突文を施すもの。

E3類 口縁部が無文であるもの。

F類 「く」の字形の口縁部を持つもの。胴部の張りは胴部上位からはじまるものが多い。

F1類 口縁部が内湾気味になるもの。

F2類 口縁部が外傾するもの。

F3類 口縁部が外反するもの。

G類 「く」の字形の口縁部を持ち、口縁部内面が肥厚するもの。所謂布留系土器を指す。

G1類 口縁部をわずかに摘み上げるもの。

G2類 口縁部部の平坦面が上方を向くもの。

G3類 口縁部部の平坦面が内面を向くもの。

H類 有段形の口縁部下端に突出した稜を持つもの。山陰地方に系譜を持つものも含む。

H1類 口径の長さが20cm以上のもの。

H2類 口径の長さが20cm未満のもの。

壺形土器 (第69図)

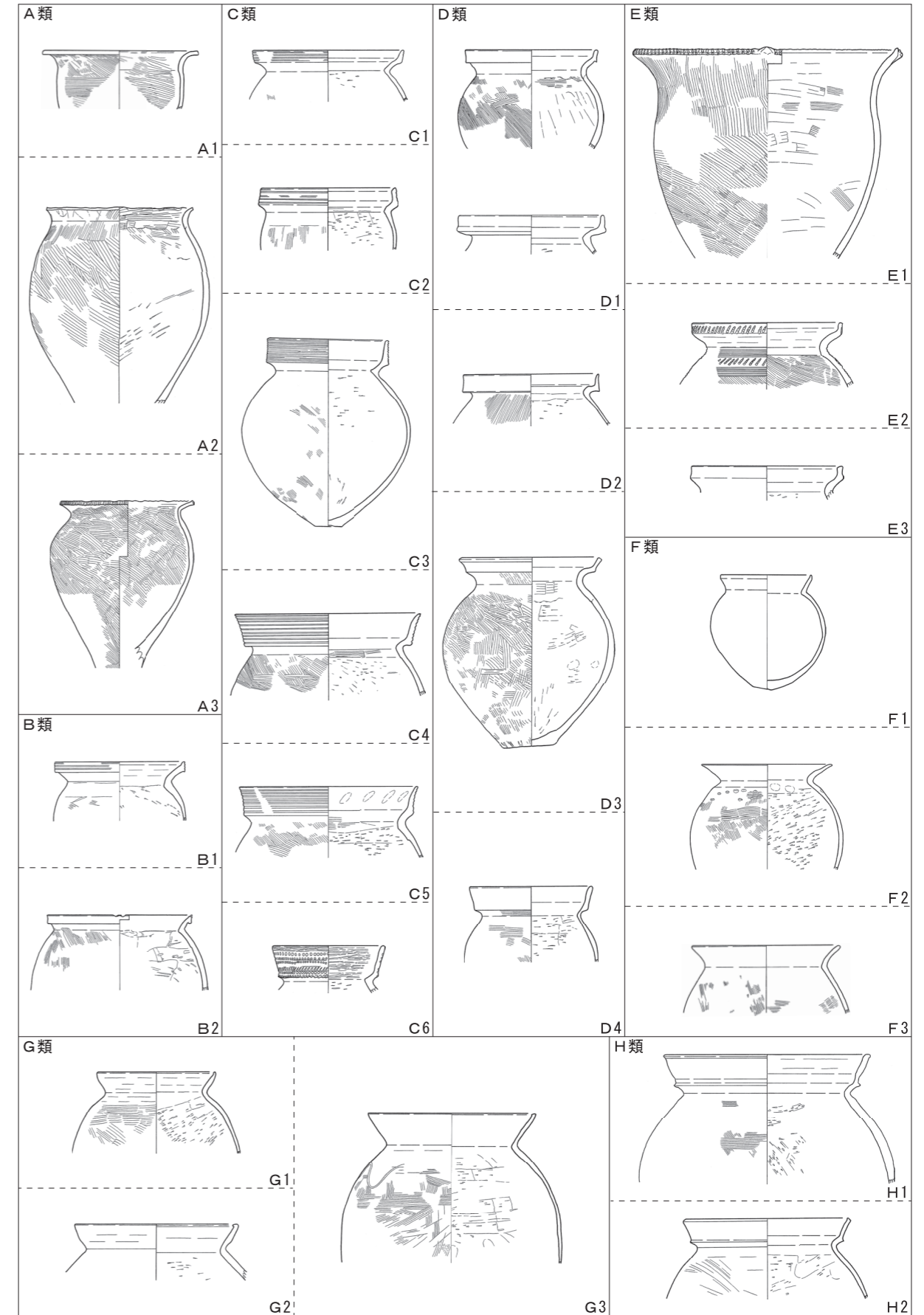
A類 口頸部が大きく外反するもの。口縁部や胴部には弧線文や記号文などの多彩な文様を施すことが多い。主に弥生時代中期に属する。

A1類 口径の長さが狭く、口頸部が長く外反する細頸形のもの。

A2類 口径の長さが広く、口縁部がやや「く」の字形に屈曲する広口形のもの。

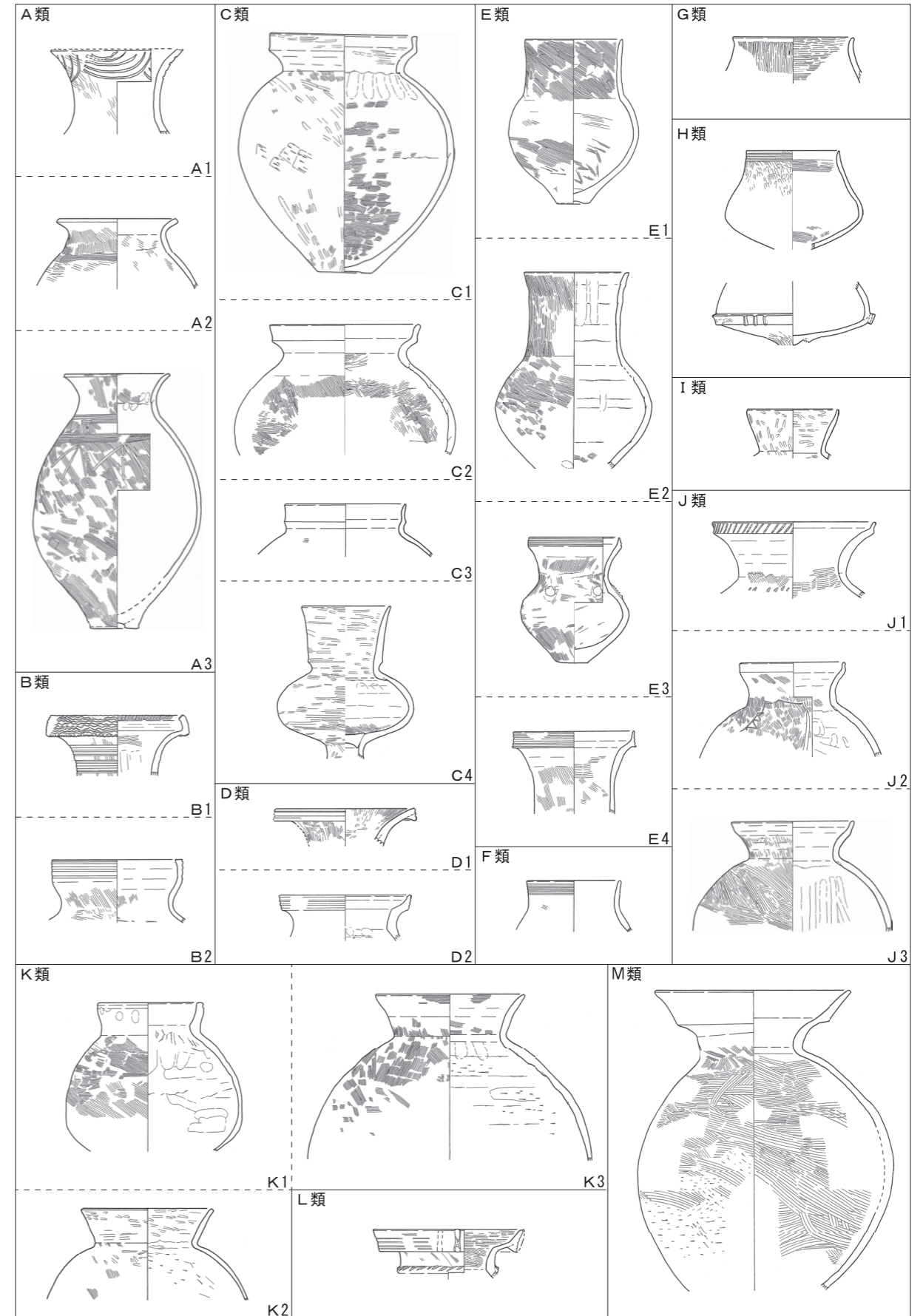
A3類 細頸形の口頸部を持つが、A1類よりも口頸部が短く外反するもの。

B類 口縁部が強く内湾するもの。口縁部には櫛描文や凹線文を施すことが多い。



第68図 甕形土器分類図 (縮尺1/6)

- B 1 類 口縁部が強く屈曲するもの。櫛描文を施すことが多い。
 B 2 類 口縁部が緩やかに内湾するもの。凹線文を施すことが多い。
 C 類 有段形の口縁部を持つもの。
 C 1 類 口縁部が直立するもの。
 C 2 類 口縁部が外傾もしくは外反しながら立ち上がるもの。
 C 3 類 口縁部内外面の段が弱くなるもの。
 C 4 類 脚部を持つもの。
 D 類 口縁部が外反し、口縁端部外面に広い面を形成するもの。口縁端部面には文様を施すものが多い。
 D 1 類 頸部が長く外反するもの。
 D 2 類 頸部が短く外反するもの。
 E 類 長い筒形の口頸部を持つもの。
 E 1 類 口縁端部が丸端もしくは尖端を呈するもの。
 E 2 類 口縁端部が面取りされるもの。
 E 3 類 口縁端部が摘み上げられるもの。
 E 4 類 有段形の口縁部を持つもの。
 F 類 直立する短い口縁部をもつもの。所謂短頸壺を指す。
 G 類 内傾する口縁部を持ち、頸部の括れを持たないもの。所謂無頸壺を指す。
 H 類 脚部を持つもの。
 I 類 細頸形の口頸部を持ち、口縁部が内湾するもの。胴部は球形に大きく張る。
 J 類 受口形の口縁部を持つもの。近江地方に系譜を持つものも含む。
 J 1 類 口縁部外面が横ナデによってへこむもの。
 J 2 類 口縁部が直立するもの。
 J 3 類 口縁部が外傾するもの。
 K 類 「く」の字形の口頸部を持つもの。胴部は球形に大きく張る。
 K 1 類 口縁部が内湾するもの。
 K 2 類 口縁部が外傾するもの。
 K 3 類 口縁部が外反するもの。
 L 類 口縁部が上・下方に拡張し、口縁部に凹線文や浮文などを施すもの。東海地方の赤彩壺に系譜を持つもの。
 M 類 口頸部が外傾し、有段形の口縁部を持つもの。所謂二重口縁壺を含む。
- 高坏形土器 (第70図)**
 A 類 口縁部が内湾するもの。口縁部に凹線文を施すことが多い。主に弥生時代中期に属する。
 B 類 有段形の坏部を持つもの。
 B 1 類 明瞭な段を持ち、文様を施すもの。
 B 2 類 明瞭な段を持ち、文様を施さないもの。
 B 3 類 明瞭な段を持ち、口縁部が幅広いもの。
 B 4 類 不明瞭な段を持つもの。
 C 類 口縁部と坏底部との境に稜や突出を持つもの。所謂有稜高坏と呼ぶもの。



第69図 壺形土器分類図 (縮尺1/6)

- C 1類 口縁端部がやや立ち上がるもの。
- C 2類 口縁端部がそのまま外傾し丸みを持つもの。
- C 3類 口縁端部がやや外反し細くなるもの。
- C 4類 口縁端部が面取りされるもの、もしくは面が拡張するもの。
- C 5類 口縁部が短く立ち上がるもの。
- C 6類 口縁端部が肥厚するもの。

D類 皿形の坏部を持つもの。

E類 平坦な坏底部から口縁部が内湾しながら開くもの。東海地方に系譜を持つものも含む。

器台形土器 (第70図)

A類 「ハ」の字形に開く受部と脚部を持つもの。口縁端部は面取りされるものや上下に拡張するものが多い。

B類 有段形の受部と脚部を持ち、文様を持つもの。

C類 有段形の受部と脚部を持ち、文様を持たないもの。

D類 筒形の受部に水滴形の透孔を持つもの。所謂装飾器台を指す。

E類 皿形の坏部を持つ小型の器台。

E 1類 坏部が内湾するもの。

E 2類 坏部が外傾するもの。

F類 口縁部から脚部まで筒形を呈するもの。

鉢形土器 (第71図)

A類 有段形の口縁部を持ち、口縁部に擬凹線文やその他の文様を施すもの。

A 1類 屈曲する口縁部から口縁端部が上下に拡張し、断面「T」字形を呈するもの。

A 2類 口縁部が断面三角形を呈するもの。

A 3類 口縁部が直立し、口縁部内面の段が明瞭であるもの。

A 4類 口縁部が外傾し、口縁部内面の段が明瞭であるもの。

B類 有段形の口縁部を持ち、口縁部に擬凹線文やその他の文様を施さないもの。

B 1類 口縁部が断面三角形を呈するもの。

B 2類 口縁部が直立し、口縁部内面の段が明瞭であるもの。

B 3類 口縁部が外傾し、口縁部内面の段が明瞭であるもの。

B 4類 口縁部の有段形が不明瞭であるもの。

B 5類 脚部を持つもの。

C類 「く」の字形の口縁部を持つもの。

C 1類 口縁端部が先細りするもの。

C 2類 口縁端部が丸みを持つもの。

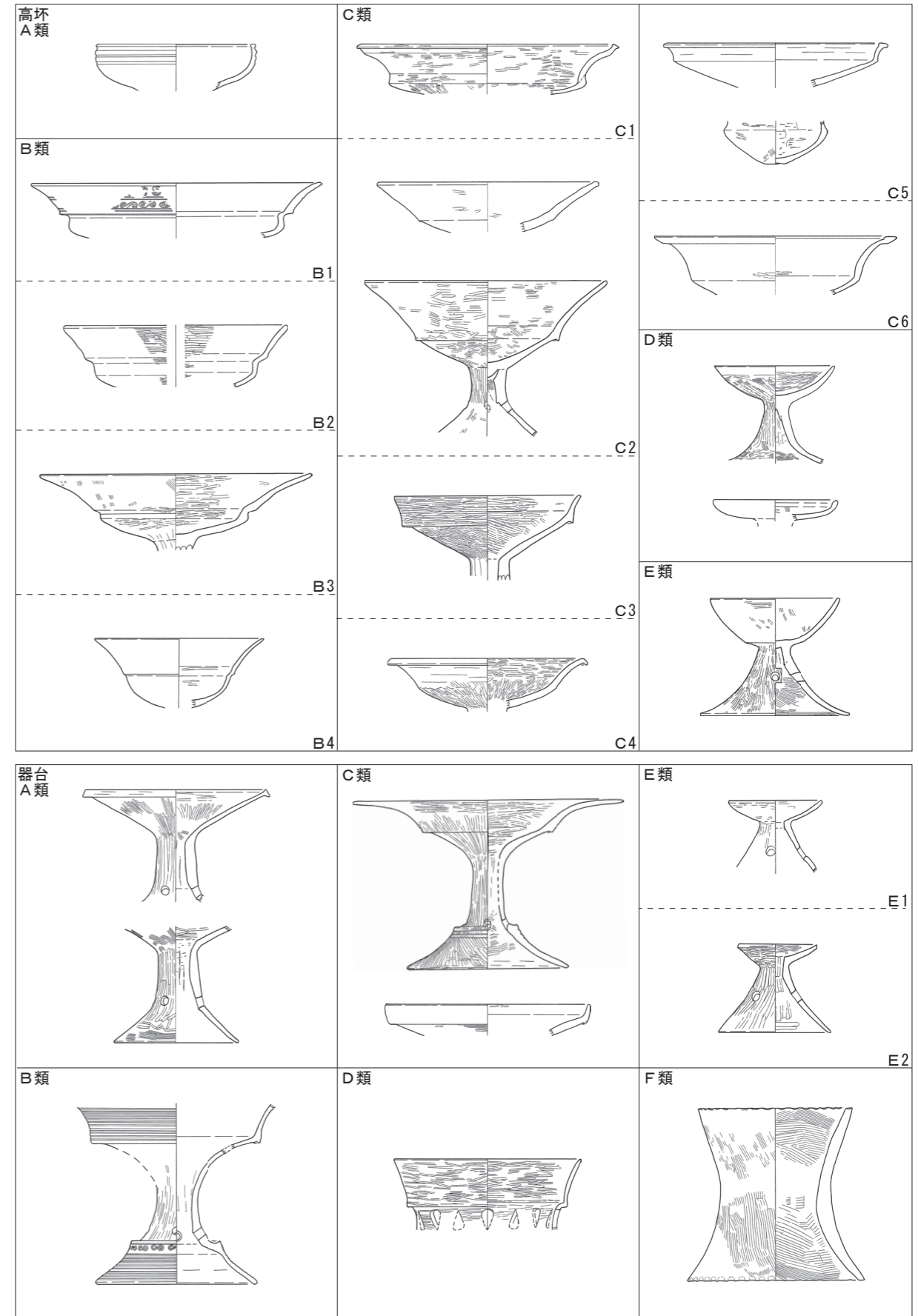
C 3類 口縁端部が面取りされるもの。

C 4類 脚部を持つもの。

D類 受口形の口縁部を持つもの。

E類 上記以外の小型の土器。

E 1類 口縁部が胴部から屈曲するもの。



第70図 高坏形土器・器台形土器分類図 (縮尺1/6)

E 2類 胴部から口縁部がそのまま立ち上がるもの。

E 3類 把手がつくもの。

F 類 胴部から口縁部がそのまま伸びるもの。底面を穿孔するものも多く、所謂有孔鉢を含む。

F 1類 口縁部が直立するもの。

F 2類 口縁部が直線状に開くもの。

G 類 口縁部が内湾するもの。

蓋形土器 (第71図)

A類 摘みの頂部が平坦であるもの。

B類 摘みの頂部がくぼむもの。

手焙形土器 (第71図)

脚部 (第71図)

A類 筒形の脚柱部から裾部が屈曲して広がるもの。

B類 筒形の脚柱部から裾部が大きく開き、無段であるもの。

B 1類 脚裾端部が丸みを持つもの。

B 2類 脚裾端部が面取りされ、はね上がるもの。

C類 有段形の脚裾部を持つもの。

C 1類 脚裾端部が面取りされ、はね上がるもの。

C 2類 脚裾端部が肥厚するもの。

C 3類 脚裾端部が段状を呈するもの。

D類 脚部が円錐形を呈するもの。

E類 脚高が低い脚柱部で、脚裾端部が面を持つもの。

F類 低平な脚部で、有段形の脚裾端部を持つもの。

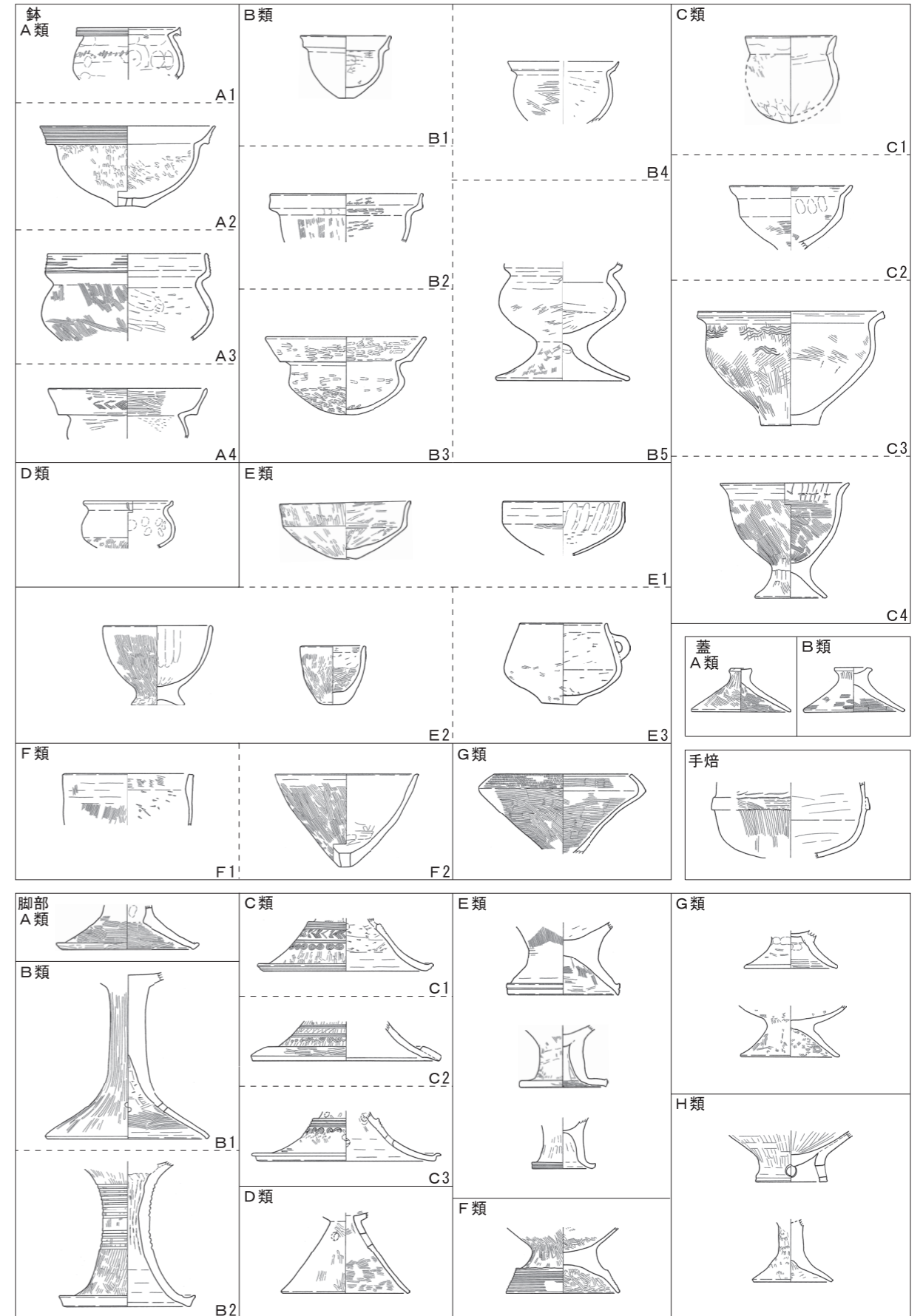
G類 低平な脚部で、無段形の脚裾端部を持つもの。

H類 上記以外の脚部。

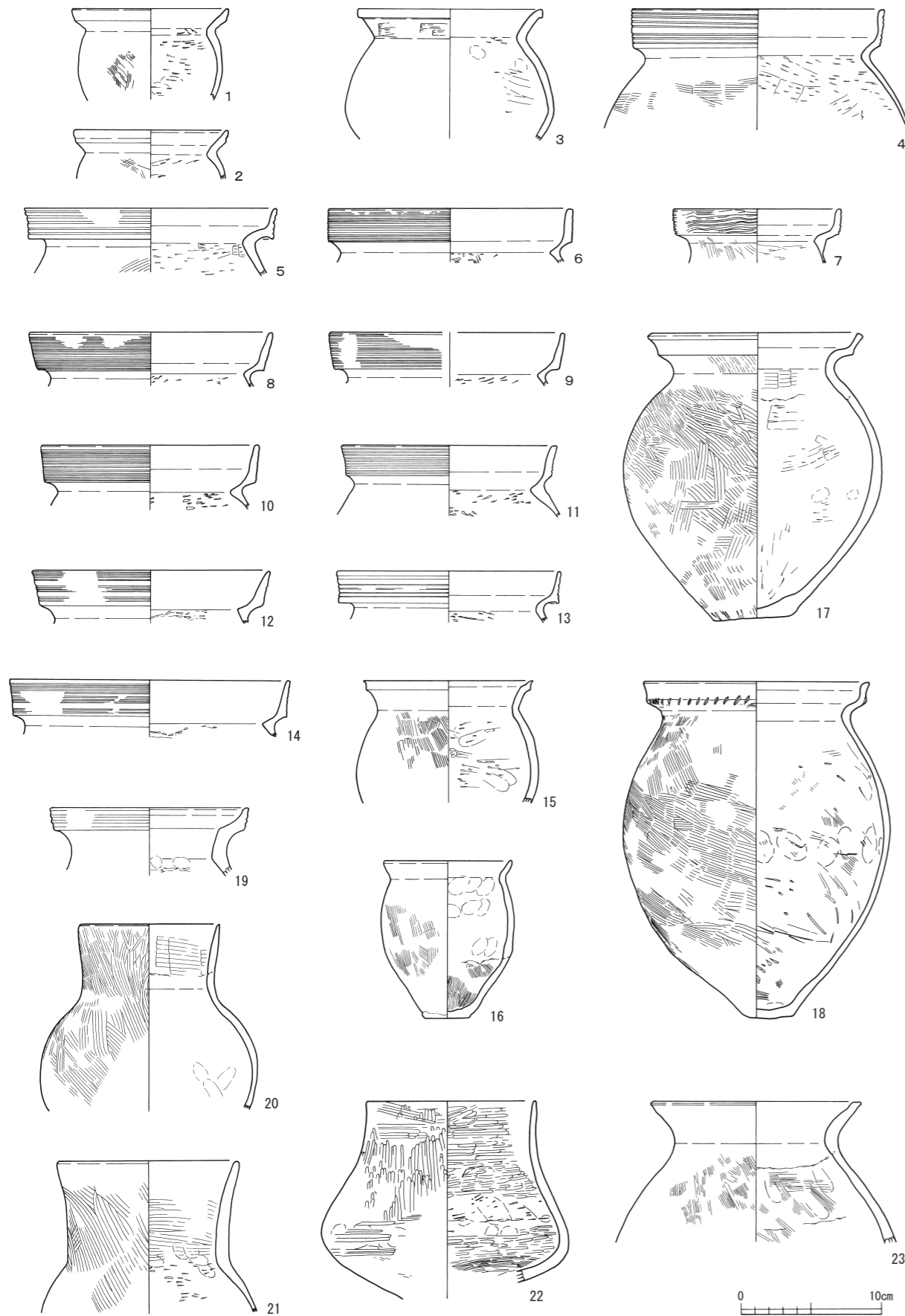
1) I 区SI 1 出土土器 (第72図 1～23、第73図 1～11)

甕はB 1類 (第72図 1・2) やB 2類 (第72図 1)、C 3類 (第72図 4～7)、C 4類 (第72図 8～14)、D 3類 (第72図 17)、E 2類 (第72図 18)、E 3類 (第72図 15)、F 2類 (第72図 16) がある。有段口縁を有するC類の中でも、C 4類が多くみられる。第72図 7は擬凹線を波状に巡らす小型の甕である。第72図 15は口縁部の内外面をなでて受け口状の口縁部を作る。第72図 17は口縁部を外側に傾斜させ、胴部にはハケ調整を行う。第72図 18は受け口の口縁に刻目列を巡らしている。壺にはE 1類 (第72図 20・21) やH類 (第72図 22)、K 3類 (第72図 23) がある。第72図 20は口縁端部上を波状に成形する。第72図 22は内外面ともに丁寧な研磨調整を行う。

高坏は坏部が有段であるB 2類 (第73図 1・2) のみであり、高坏もしくは器台の脚部はB 1類 (第73図 3・4) が出土している。鉢にはC 3類 (第73図 5) やD類 (第73図 6・7)、F 2類 (第73図 8) がある。第73図 5は口縁部が面取りされ、胴部が大きく張る。第73図 8は底面が穿孔され内外面ともにハケ調整が著しい。第73図 9～11は甕などの底部である。これらの土器は、主に弥生時代後期後半～後期末の時期と推定する。



第71図 鉢形土器・蓋形土器・手焙形土器・脚部分類図 (縮尺1/6)



第72図 I区SI1出土土器実測図(縮尺1/4)

2) I区SZ1出土土器(第73図12・13)

壺の完形品が2点出土しており、A3類(第73図12)やE2類(第73図13)が出土している。第73図12は頸部に浅い櫛描直線文を2帯巡らす。その下には傘形の記号文を並列させた篋描沈線文を施している。第73図13は器面全体にハケ調整を施している。弥生時代後期の長頸壺と比べると頸部は短い。これらの土器は、弥生時代中期後葉の時期と推定する。

3) I区SD5出土土器(第73図14・15)

甕にはC4類(第73図15)やD4類(第73図14)がある。ともに口縁部の有段部の屈曲がやや弱い。14は大型の甕と考えられる。これらの土器は、弥生時代後期後半の時期と推定する。

4) I区SD6出土土器(第73図16~20)

出土点数は少ないが、甕C2類(第73図16)、脚部G1類(第73図20)やG2類(第73図19)、底部(第73図18)が出土している。第73図17は小型壺の胴部片である。これらの土器は、弥生時代後期の時期と推定する。

5) I区SD8出土土器(第74図1)

甕C4類(第74図1)がある。第74図1は口縁端部を外反させながら細く成形している。弥生時代後期の時期と推定する。

6) I区SD12出土土器(第74図2~15)

甕はC4類(第74図3)やC5類(第74図4)、D3類(第74図5)、E2類(第74図6)がある。第74図2は口縁端部がやや屈曲し頸部に2条の沈線を確認できる。体部はやや張り気味になると考える。弥生時代前期の遠賀川系土器の甕の可能性もある。有段口縁の第74図3は口縁部が明瞭に直立する一方で、第74図4・5は口縁部が外傾し、屈曲も明瞭ではない。第74図6は直立する口縁部に環状の刺突文、胴部上半に環状の刺突文と櫛描波状文を施す。近江系土器と考える。壺はD1類(第74図7)やE4類(第74図8・9)、高坏はC2類(第74図10)がある。第74図7は口縁端部に縦位の棒状浮文3条を貼付け、口縁端部は広く拡張して垂下させる。第74図8は頸部に穿孔を3カ所開けている。第74図10は口縁部と坏部の境に粘土帯を貼り付けて成形している。器台の可能性もある。第74図12は鉢B4類であり、口縁部と胴部との境には弱い段をつくる。高坏の可能性もある。そのほかに、脚部B類(第74図11)や底部(第74図13~15)がある。第74図14・15は外面の胴部下半から底部側縁まで斜位や横位の条痕調整を行う。これらの土器は、弥生時代中期前葉の土器(第74図14・15)を含むが、主に弥生時代後期後半~後期末の時期と推定する。

7) I区SK1出土土器(第74図16・17)

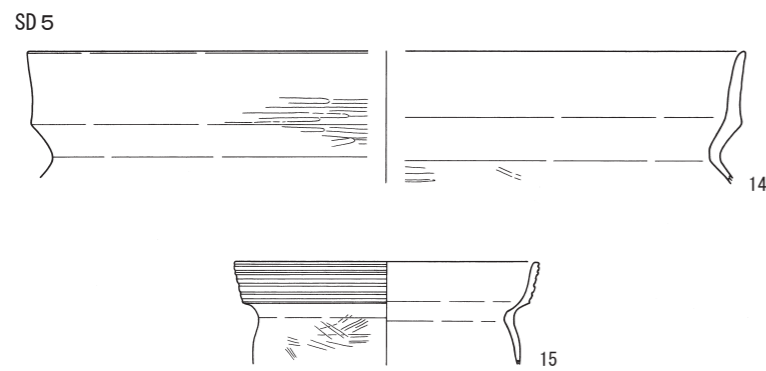
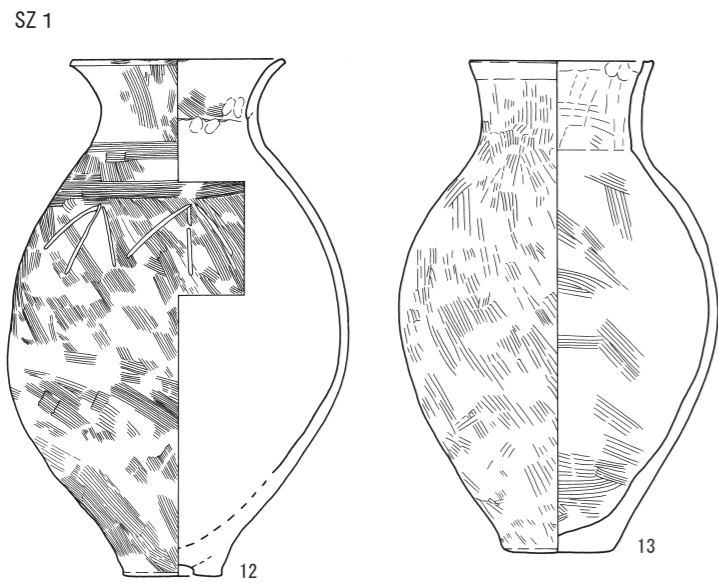
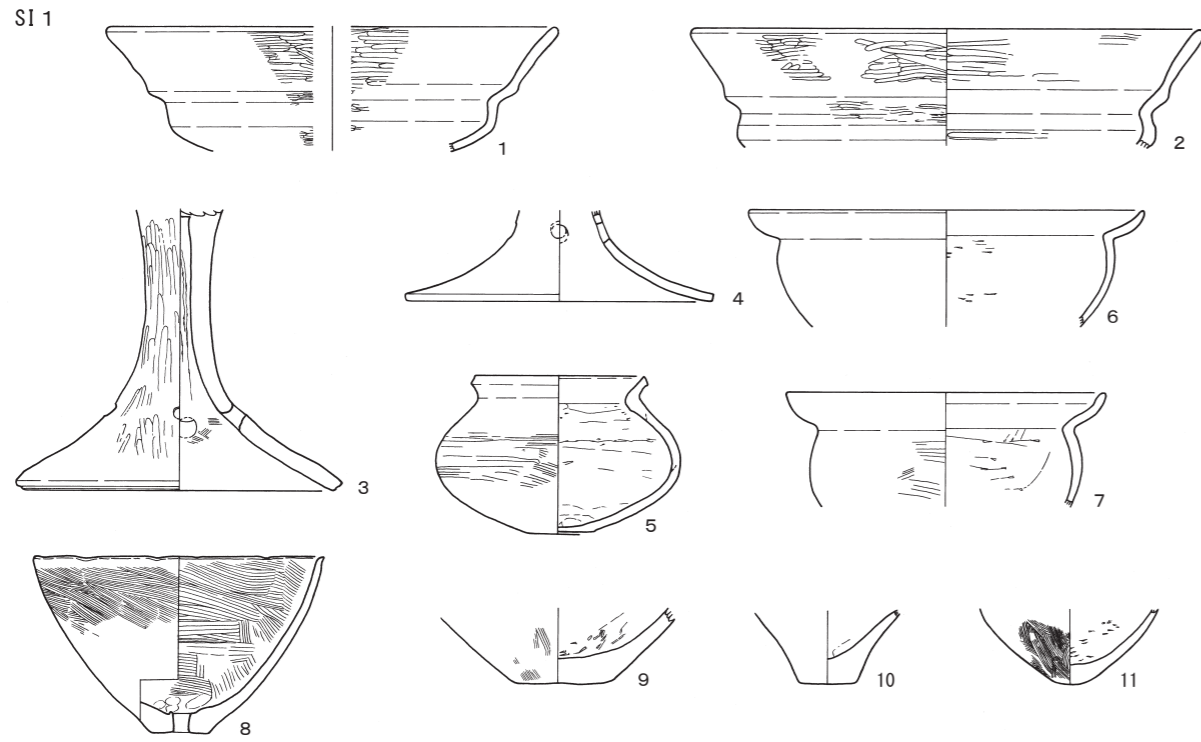
第74図16は高坏C5類で口縁端部が内外に突出している。第74図17は把手付の土器であり、断面円形で平面C字形の把手である。これらの土器は、弥生時代後期の時期と推定する。

8) I区SK4出土土器(第74図18~20)

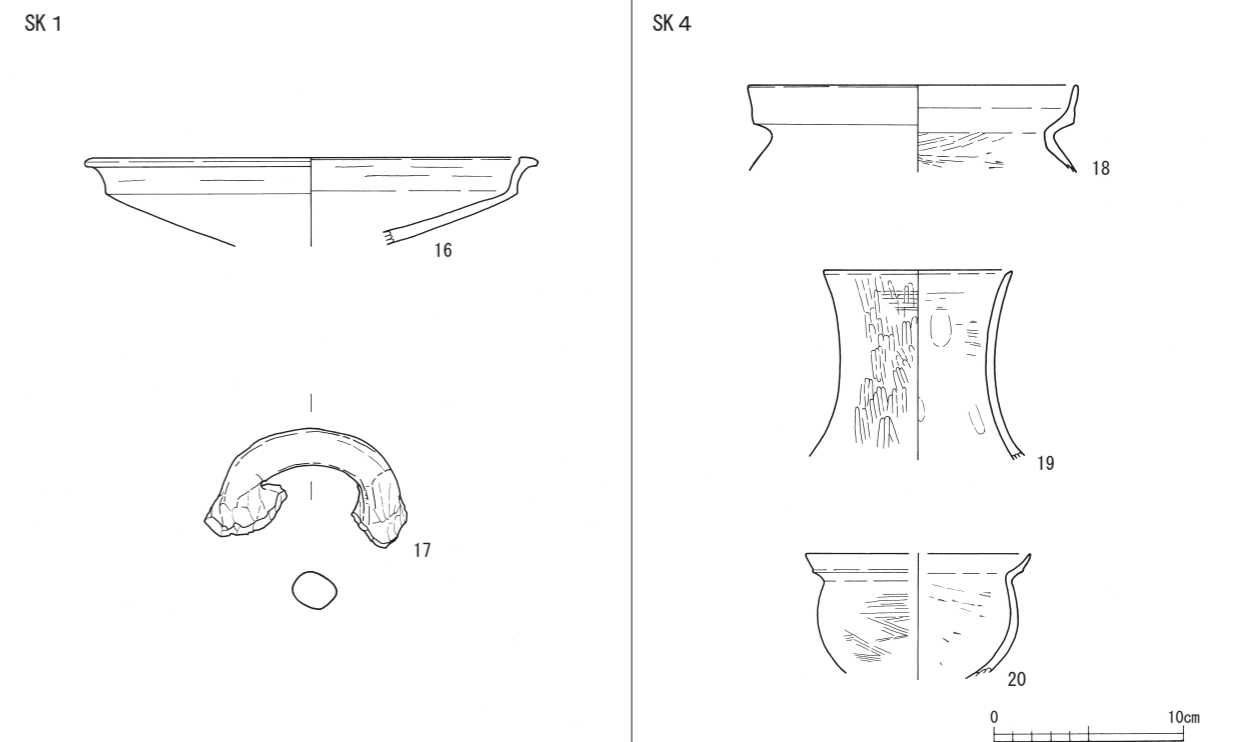
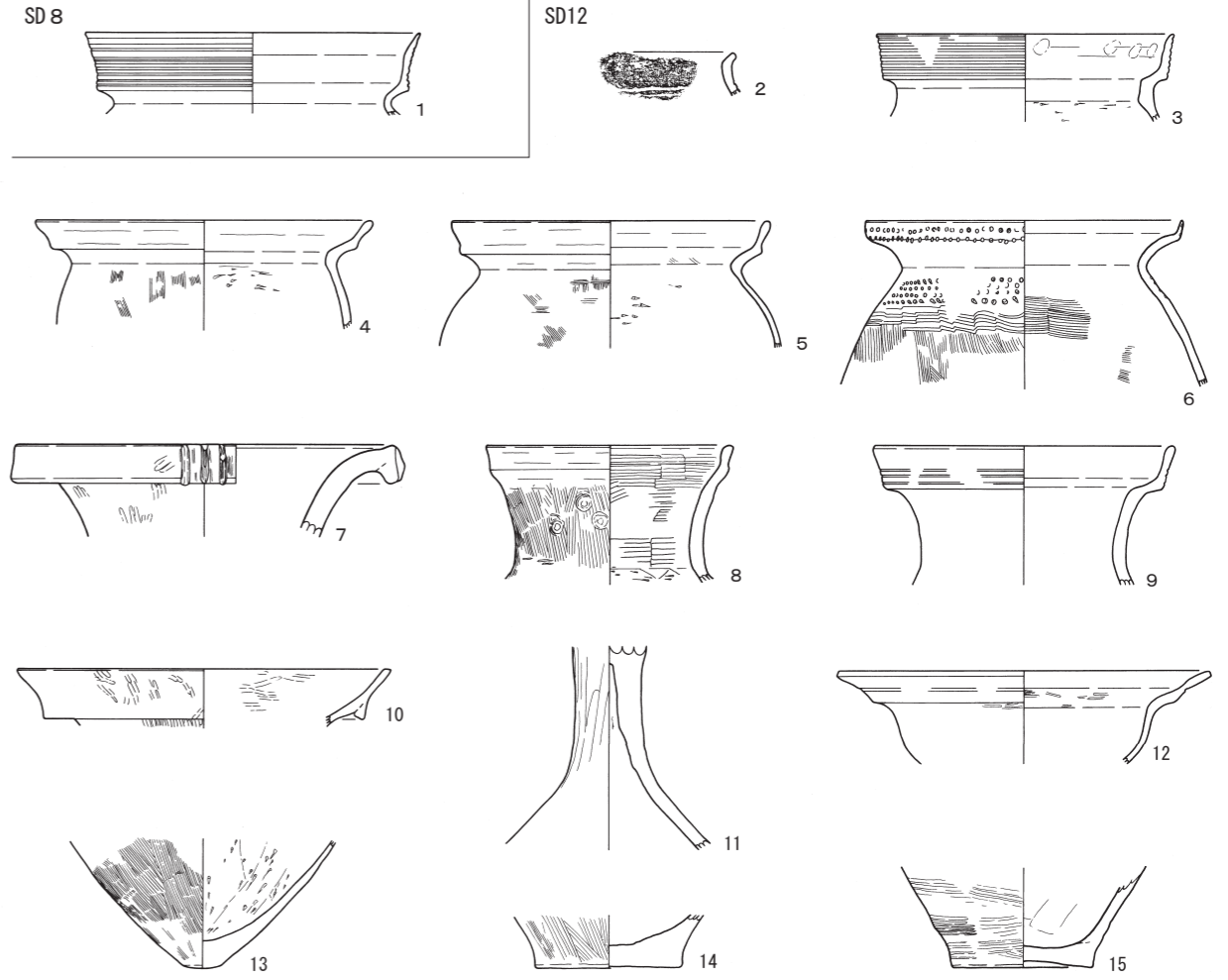
甕D3類(第74図18)や壺E1類(第74図19)、鉢B4類(第74図20)がある。第74図18は有段口縁の甕で口縁部は無文である。第74図19はやや細頸形を呈している。第74図20は口縁部途中に段があるが、内湾形の口縁形態を示す。これらの土器は、弥生時代後期末の時期と推定する。

9) I区SR1出土土器(第75図1~第78図35)

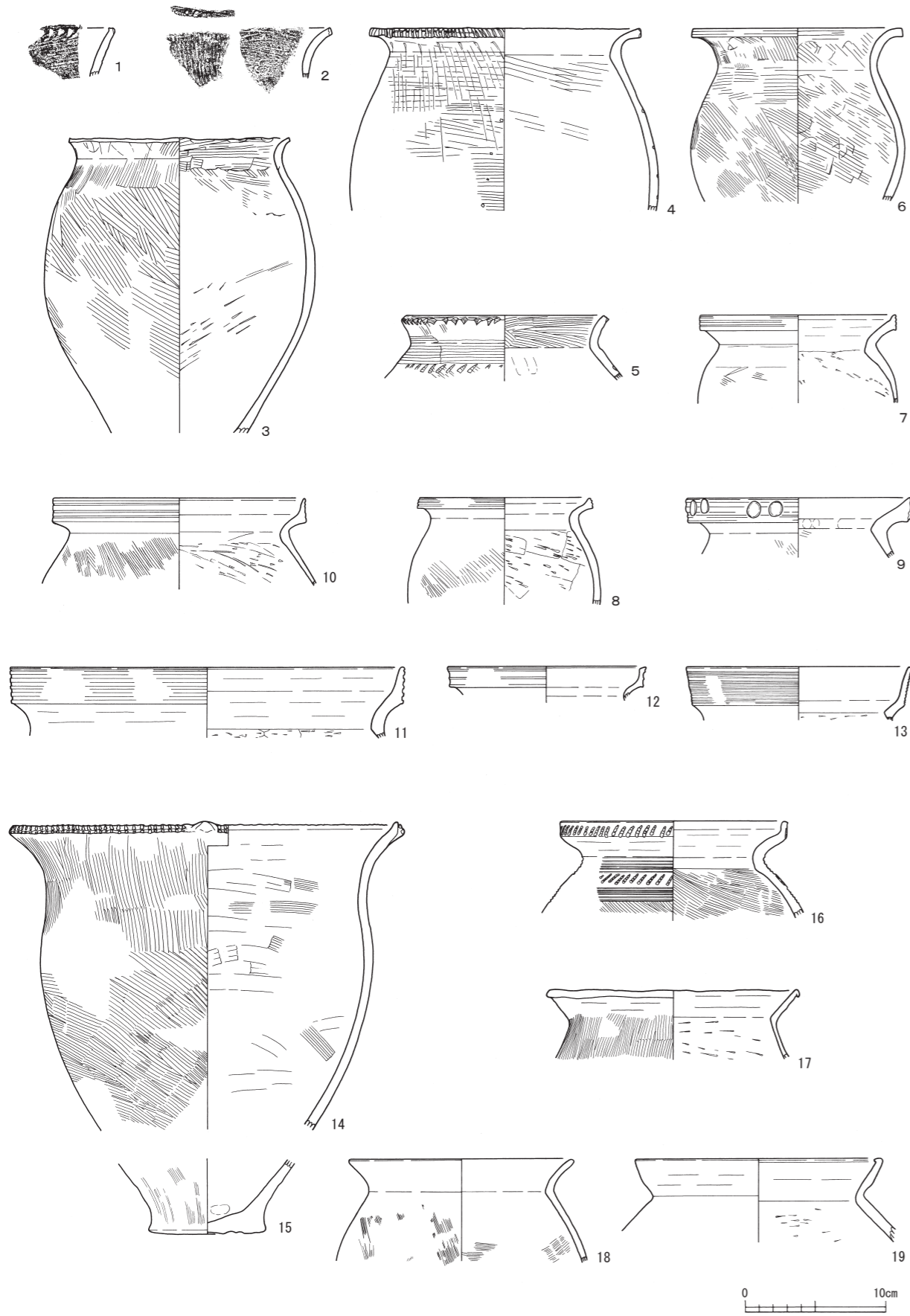
甕にはA1類(第75図1・2)やA2類(第75図3)、A3類(第75図4~6)、B1類(第75図7~9)、C3類(第75図10~12)、C4類(第75図13)、E1類(第75図14)、E2類(第75図16)、F2類(第



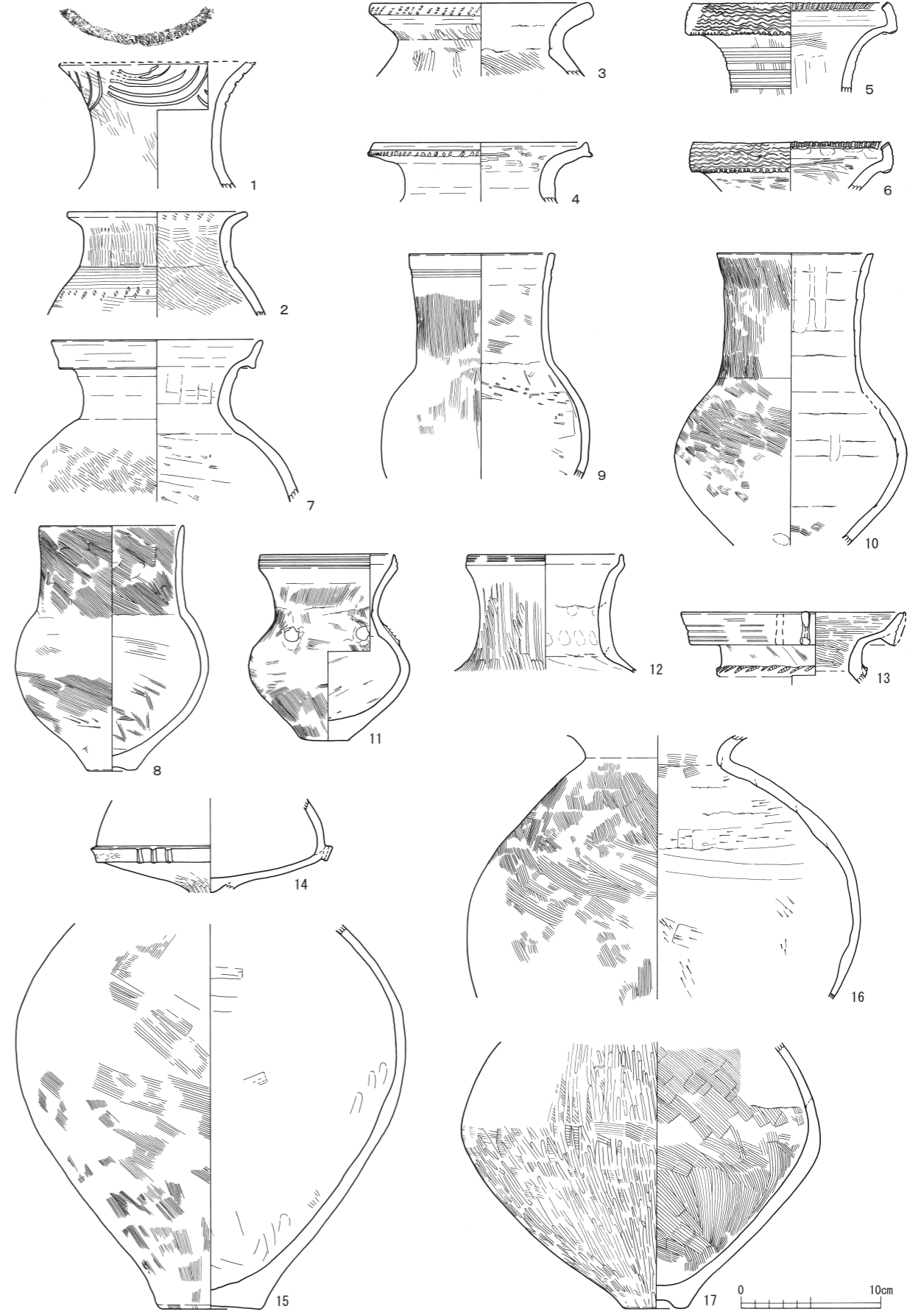
第73図 I区SI 1、SZ 1、SD 5・6出土土器実測図(縮尺1/4)



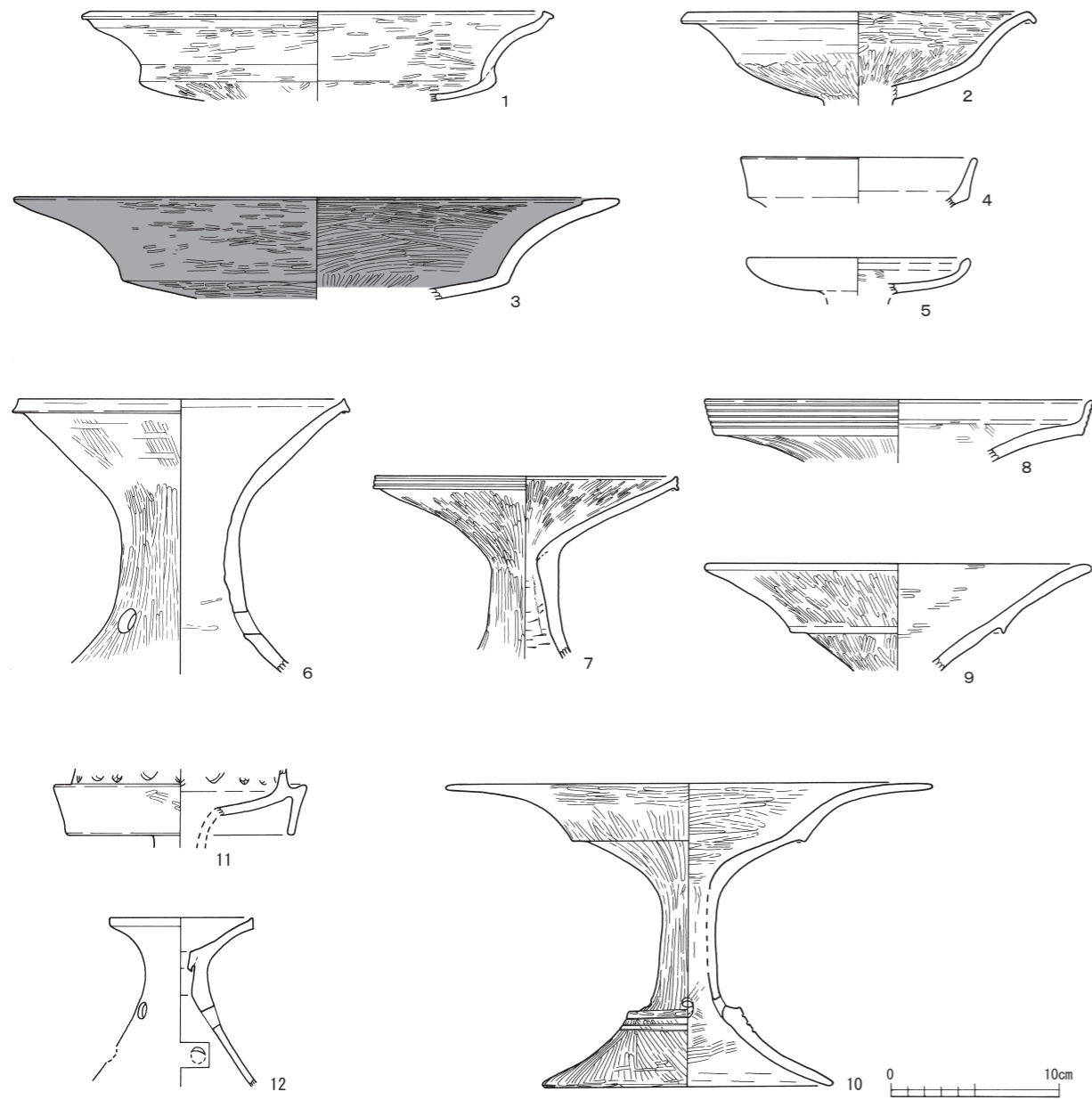
第74図 I区SD 8・12、SK 1・4出土土器実測図(縮尺1/4)



第75図 I区SR1出土土器実測図-1 (縮尺1/4)

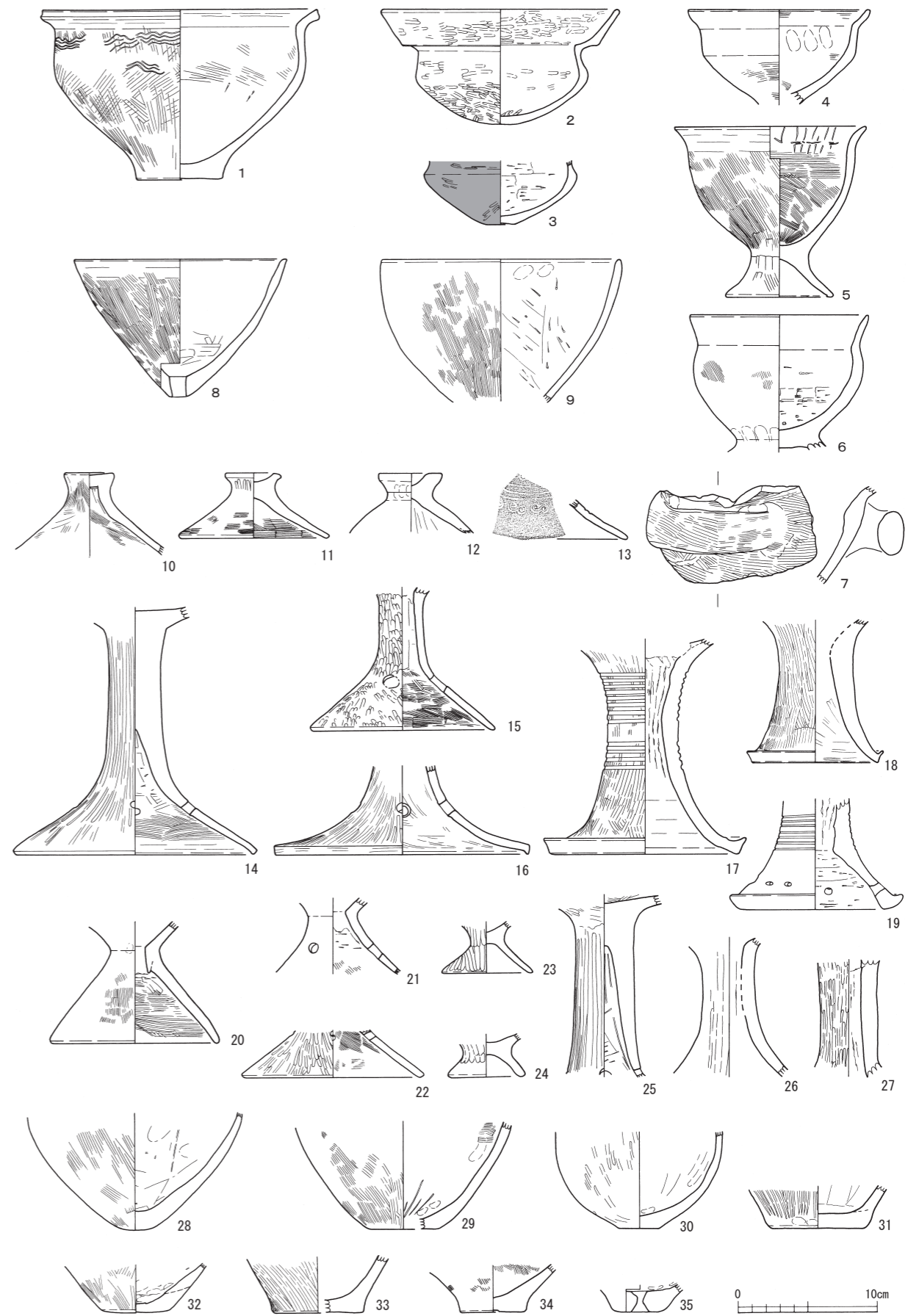


第76図 I区SR1出土土器実測図-2 (縮尺1/4)



第77図 I区SR1出土土器実測図-3 (縮尺1/4)

75図17)、F 3類 (第75図18)、G類 (第75図19)がある。第75図1は横位のハケ、第75図2は縦位のハケを口縁部に施している。第75図3は口縁部が短く外反し、胴部は球銅形に張る。第75図4は口縁部が強く屈曲し、面取りをした口縁端部には篋状工具による刻目を入れる。頸部から胴部にかけては縦・横位のハケ調整を行う。第75図6も第75図4と同じく口縁部を屈曲させ口縁端部に広い面を作るが、刻目を施していない。胴部上半には横位のハケ調整をする。第75図5は口縁部を斜め外方に屈曲させ、頸部には櫛描直線文と櫛状工具による刺突文を施す。第75図7～9はいずれも口縁端部に広い面と擬凹線文を施し、第75図9は2個1対の円形浮文を貼り付けている。第75図10～13は有段口縁を持つ甕で、口縁部が直立するものがやや多い (第75図10～12)。第75図14は直立する口縁部に刻目を施し、小さな山形突起を作る。頸部に縦位、胴部から底部までは斜位～縦位のハケ調整をしている。第75図15は第75図14の同一個体と考えられる底部である。第75図16は直立する口縁部と胴部上半に櫛状工具による刺突文や



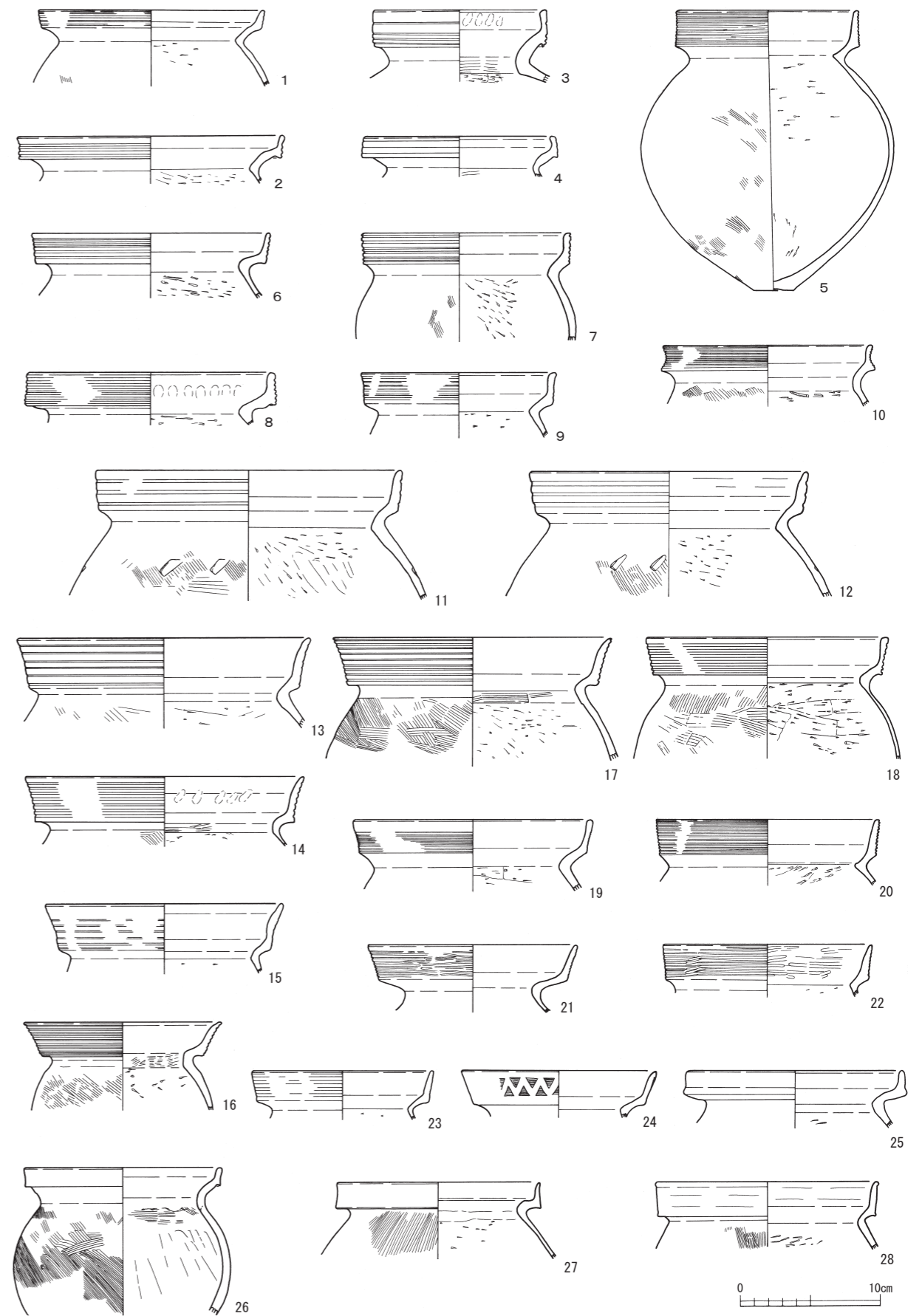
第78図 I区SR1出土土器実測図-4 (縮尺1/4)



第79図 I区SW1出土土器実測図-1 (縮尺1/4)

直線文を施している。第75図19は口縁部がやや内湾し、口縁端部が内側に肥厚する。

壺にはA1類(第76図1)やA2類(第76図2~4)、B1類(第76図5・6)、D2類(第76図7)、E1類(第76図8)、E2類(第76図9・10)、E3類(第76図11)、E4類(第76図12)、H類(第76図14)、L類(第76図13)がある。第76図1の口縁端面は摩耗により明瞭ではないが、刻目の痕跡が残る。頸部には5条1組の連続弧線文が巡っている。第76図2は外面胴部と口縁部内面に櫛状工具による連続刺突文を施す。第76図3・4にも口縁端部に櫛状工具や篋状工具によって刻目を施している。受け口状口縁を持つ第76図5・6は口縁部に櫛描波状文、口縁端部に刻目を巡らし、同一個体の可能性がある。長頸壺のE類は一定量出土しており、第76図9は口縁部に2条の沈線文、第76図11・12は口縁部に擬凹



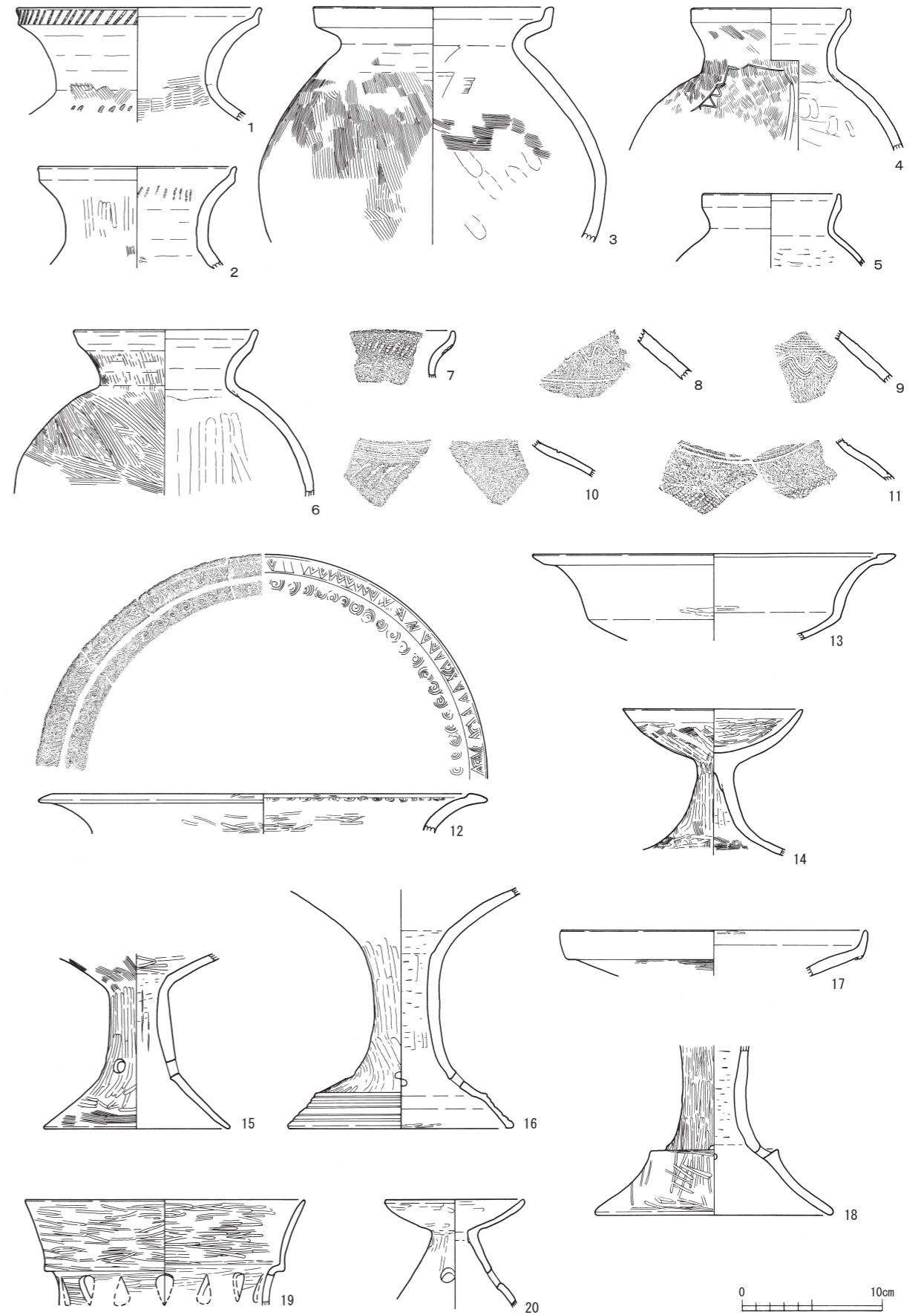
第80図 I区SW1出土土器実測図-2 (縮尺1/4)



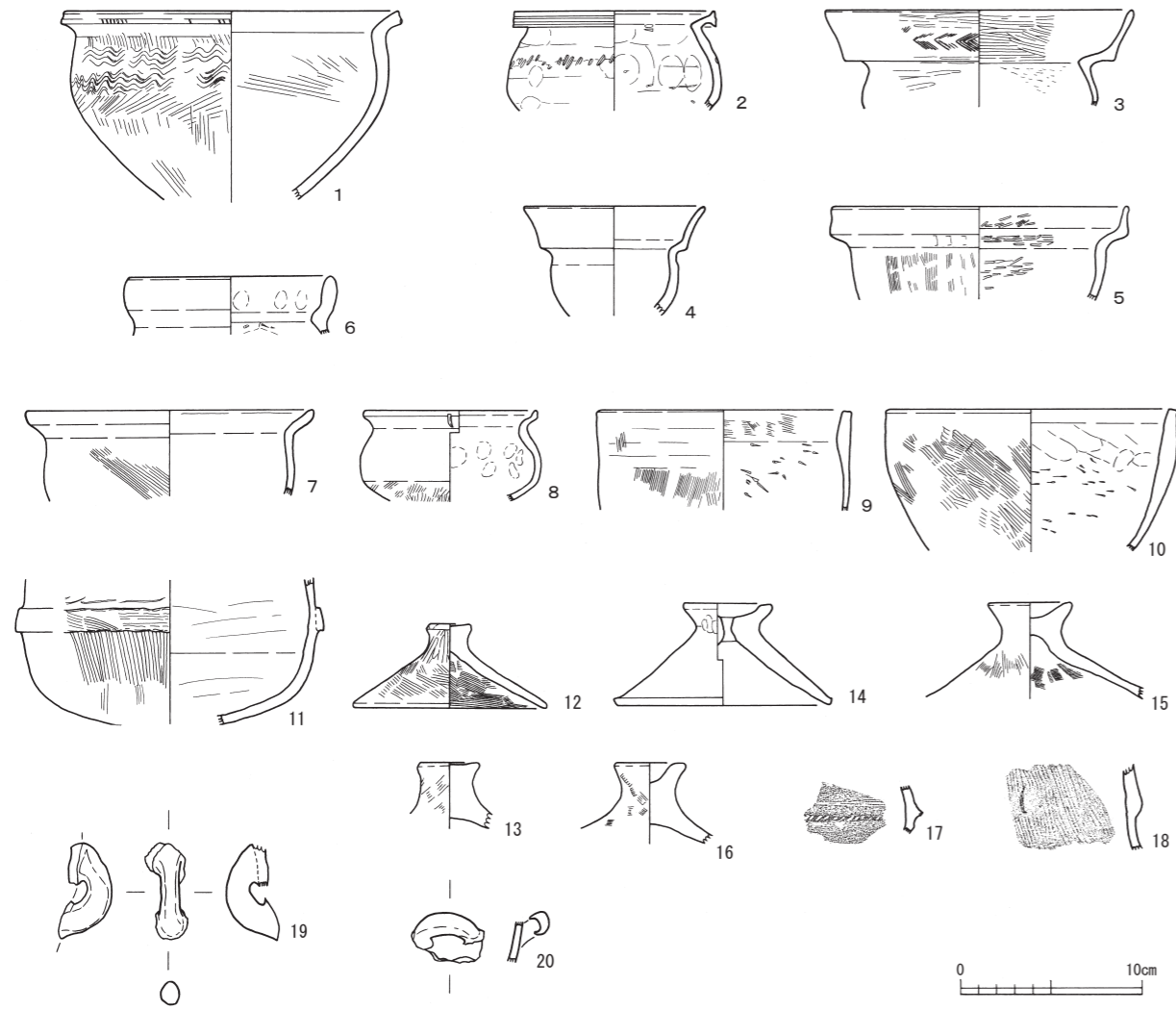
第81図 I区SW1出土土器実測図-3 (縮尺1/4)

線を施している。第76図8は口縁部から底部まで斜位のハケ調整を行い、底部は凹み底である。第76図13は口縁部に多条の沈線と棒状浮文によって加飾させ、頸部には楕状工具で刻んだ突帯文を巡す。第76図14は細頸の台付き壺と推定し、受け部には3個1対の棒状浮文で飾った突帯文を巡らしている。第76図15~17は頸部から胴部まで残る壺である。

高坏にはC1類(第77図1)やC4類(第77図2)、C5類(第77図4)、C6類(第77図3)、D類(第77図5)がある。第77図1は有稜のある坏部から頸部が外反し、口縁部でやや立ち上がる形態である。口縁端部は内外面ともに突出する。第77図3は大型の高坏で、内面に抉り沈線を入れる。第77図5は盤状の受け部を持つ高坏である。器台にはA類(第77図6・7)やB類(第77図8)、C類(第77図9・



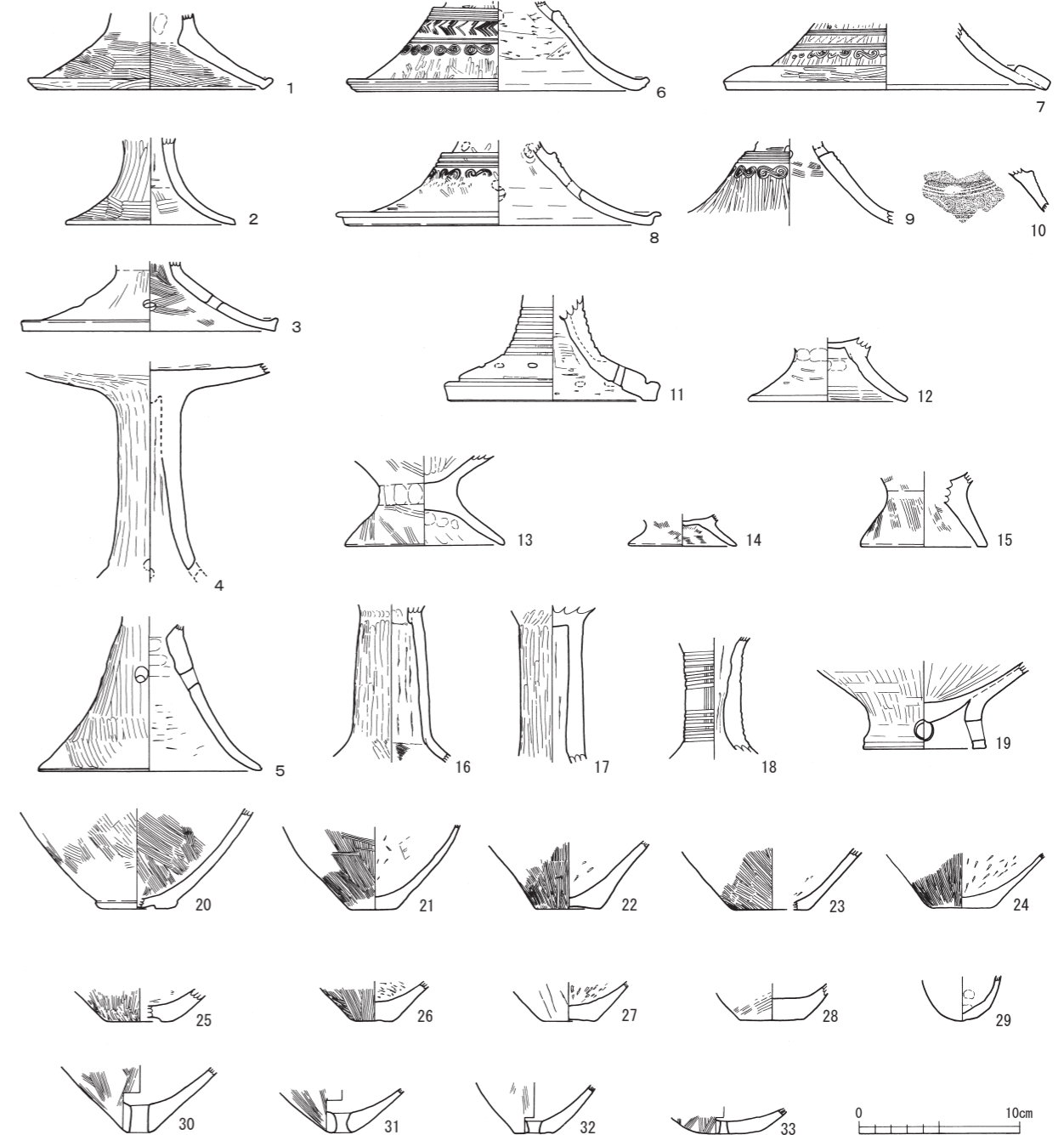
第82図 I区SW1出土土器実測図-4 (縮尺1/4)



第83図 I区SW1出土土器実測図-5 (縮尺1/4)

10)、D類(第77図11)、E2類(第77図12)がある。第77図6~8はともに口縁部に擬凹線文を巡らしている。第77図10は口縁部と脚部が有段になり、口縁部は大きく開く。また、器面全体に研磨調整が丁寧に行われる。第77図11は所謂裝飾器台であり、垂下部と受け部の一部を確認できる。受け部には透かしがある。第77図12は円形の透かし穴が上下に各3箇所ある。

鉢にはB3類(第78図2)やC2類(第78図4)、C3類(第78図1)、C4類(第78図5・6)、F2類(第78図8・9)がある。第78図1は口縁部が明瞭に屈曲し、口縁端部に面を持つ。胴部には楡描波状文が2段あることから、弥生時代中期後葉の鉢と考える。第78図2は有段の鉢で内外面ともに丁寧に研磨される。第78図3も有段の鉢の胴部と考える。第78図8は有孔鉢であり焼成前に底部穿孔されている。蓋にはA類(第78図10)やB類(第78図11・12)がある。S字形のスタンプ文を持つ第78図13は蓋か器台の端部の可能性がある。第78図7は断面円形の把手である。鉢の可能性はある。脚部にはB1類(第78図14~16・25~27)やB2類(第78図17・18)、D類(第78図20~22)、E類(第78図19)、G2類(第78図23・24)がある。第78図19は脚部裾に4個以上の穿孔をあけている。底部(第78図28~35)は甕(28・31・33など)や壺(30)、鉢(35)の器種がある。31は縦位の条痕が調整されており、弥生中期前葉の土器である。



第84図 I区SW1出土土器実測図-6 (縮尺1/4)

これらの土器は、弥生時代中期前葉(第75図1・2)や同中期中葉(第75図14、第76図1・5・6など)、同中期後葉(第75図4~6、第78図1など)が少量出土しているが、弥生時代後期前半~後期末が主体であり、古墳時代前期の土器(第75図19など)も一部含んでいる。

10) I区SW1出土土器(第79図1~第84図33)

甕にはA1類(第79図1)やA2類(第79図2・3・5)、A3類(第79図4・6~8)、B2類(第79図9)、C1類(第80図1~3)、C2類(第80図4)、C3類(第80図5~10)、C4類(第80図13~23)、C6類(第80図24)、D1類(第80図26)、D2類(第80図25・27・28)、E2類(第79図10・11)、E3類(第79図12~14)、F1類(第79図15)、F2類(第79図16・17)、F3類(第79図18~21)がある。

第79図2は口縁部と胴部との境に2条の沈線を引く。第79図3は小さい破片のため、A1類の可能性もある。第79図7は胴部に横位・縦位のハケ調整を行う。第79図9は口縁部外側に面を持ち、胴部はあまり張らない。口縁端部が直立するE類は口縁部の屈曲が明瞭なものも不明瞭なものもある(第79図10・11など)。第79図13は胴部外面が篋状工具によって逆U字形の範囲に密に刺突される。粘土の剥離痕も残ることから、U字形把手の剥離痕であろう。口縁部が「く」の字形に屈曲するF類は口縁部が直線状に外傾するものや緩やかに外反するものが主体的である。SW1からはC類が多く出土しており、特にC4類を多く確認できる。第80図3は口径が小さい甕で口縁部が明瞭に立ち上がる。第80図5は有段口縁に多条の擬凹線文を巡らし、胴部は球形に張る。第80図11・12は有段口縁に3条の凹線を引いている。第80図24は口縁部の擬凹線文をジグザグ状に磨り消している。

第81・82図は壺や高坏・器台である。壺にはB1類(第81図1)やB2類(第81図2)、C1類(第81図3・4)、C2類(第81図5～7)、E1類(第81図8)、E2類(第81図9)、F類(第81図10)、G類(第81図11)、H類(第81図12)、K2類(第81図13・14)、K3類(第81図15)、J類(第82図1～7)がある。第81図1は受け口形の口縁部に2条1組の棒状浮文と4列の刺突列を巡らしている。第81図2は口縁部に3条の凹線文を施文している。第81図4は器面に研磨やハケ調整を行っている。第81図7は小型の壺で有段の口縁部は幅広い。長頸壺の第81図8・9はいずれも器面全体にハケ調整を行い、第81図8は大きく外反する口縁部に2条の凹線を巡らしている。短頸壺の第81図10は口縁部に3条の沈線文を巡らし、無頸壺の第81図11は縦位の研磨を施している。第81図12は脚部がつくワイングラス形の壺である。第81図13は口縁部に2個1対の円形浮文を貼り付けている。受け口形の壺J類は比較的多く出土している(第82図1～7)。口縁部が明瞭に立ち上がるものもあるが(第82図3)、口縁部の立ち上がり弱いものが多い(第82図4～6など)。4は胴部に線刻をしている。第82図8～11は壺の胴部破片であり、櫛描直線文と櫛描波状文(第82図8・9)や櫛描直線文と櫛描刺突文(第82図10・11)がある。

高坏にはC6類(第82図12・13)やD類(第82図14)がある。12は口縁部内面にスタンプ文を巡らしており、面取りされる口縁端部に重三角文、その下に渦巻き文を施している。14は小振りな坏部を持ち、全体に研磨調整されている。

器台にはA類(第82図15)やB類(第82図16)、C類(第82図17・18)、D類(第82図19)、E類(第82図20)がある。16は有段の脚裾部に擬凹線文を引いている。17は口縁部が有段、18は脚部が有段に作られる。18には3箇所穿孔されている。19は所謂装飾器台の口縁部であり、方向の異なる涙滴形の透かしを互い違いに入れている。

鉢にはA1類(第83図2)やA3類(第83図3)、B2類(第83図4・5)、B4類(第83図6)、C2類(第83図7)、C3類(第83図1)、D類(第83図8)、F1類(第83図9)、F2類(第83図10)がある。第83図1は口縁部が「く」の字形に屈曲し、口縁端部は面取りされている。胴部には櫛描波状文のほか、口縁端部にも刺突文が施される。弥生時代中期後葉の土器である。第83図2は幅広い口縁端部に擬凹線文が巡る。第83図6は口縁部が受け口形になり、小型の鉢と考えられる。第83図9は肥厚気味の口縁部がやや直立する。第83図11は手焙形土器の胴部で、断面方形の突帯文が巡っている。蓋にはA類(第83図12・13)とB類(第83図14～16)がある。第83図14は摘み部に穿孔を入れている。第83図17は鉢、第83図18は壺の可能性もある。第83図19・20は壺や鉢などの胴部に取り付く把手である。

第84図は脚部と底部である。脚部にはA類(第84図1)やB1類(第84図2)、B2類(第84図3)、

B類(第84図5・16～18)、C1類(第84図6)、C2類(第84図7)、C3類(第84図8)、C類(第84図9・10)、D類(第84図5)、E類(第84図11)、G1類(第84図12)、G2類(第84図13～15)、H類(第84図19)がある。第84図1は脚部内面に明瞭な稜を有する。第84図6～9はS字形のスタンプ文と櫛描直線文を巡らしており、第84図6には矢羽根形の文様をさらに連ねている。第84図11は穿孔を5箇所あけている。低平な脚部であるが、櫛描直線文や透かしなどによって装飾の色合いが強い。第84図16は脚部がやや中膨らみをしている。第84図19は大きな円形の穿孔をした脚付きの鉢である可能性がある。第84図20～33は底部であり、甕(21～28)や小型土器(29)などがある。30～33は底部中央に穿孔をしており、鉢F類の可能性もある。

これらの土器は、弥生時代中期中葉(第81図1)や同中期後葉(第79図1～8、第81図2、第83図1)を含むものの、弥生時代後期前半から後半の土器が主体的であり、古墳時代前期(第82図20など)も一部含んでいる。

11) II区SD2出土土器(第85図1・2)

甕A1類(第85図1)と鉢E2類(第85図2)がある。第85図1は胴部に斜位の条痕調整を行う。第85図2は口縁端部が小波状になる。第85図1は弥生時代中期中葉、第85図2は弥生時代後期の時期と推定する。

12) II区SD3出土土器(第85図3・4)

第85図3は壺か鉢の胴部に取り付く把手と考えられる。第85図4は甕の底部である。これらの土器は、弥生時代後期の時期と推定する。

13) II区SD9出土土器(第85図5～8)

甕にはG類(第85図5)やH1類(第85図6)、H2類(第85図7)がある。第85図5は口縁部内面がわずかに肥厚し、近畿地方の影響を想定できる。第85図6・7は口縁部の有段が突出しており、山陰系の可能性がある。高坏にはC2類がある。これらの土器は、弥生時代後期から古墳時代前期の時期と推定する。

14) II区SD10出土土器(第85図9)

第85図9は小型の壺の胴部である。弥生時代後期の時期と推定する。

15) II区SK1出土土器(第85図10・11)

第85図10は甕A3類である。口縁部は「く」の字形に屈曲し、口縁端部は面取りされる。第85図11は甕の底部と考えられる。これらの土器は、弥生時代中期後葉の時期と推定する。

16) II区SK5出土土器(第85図12)

第85図12は壺の底部の可能性もある。弥生時代後期の時期と推定する。

17) II区SK6出土土器(第85図13)

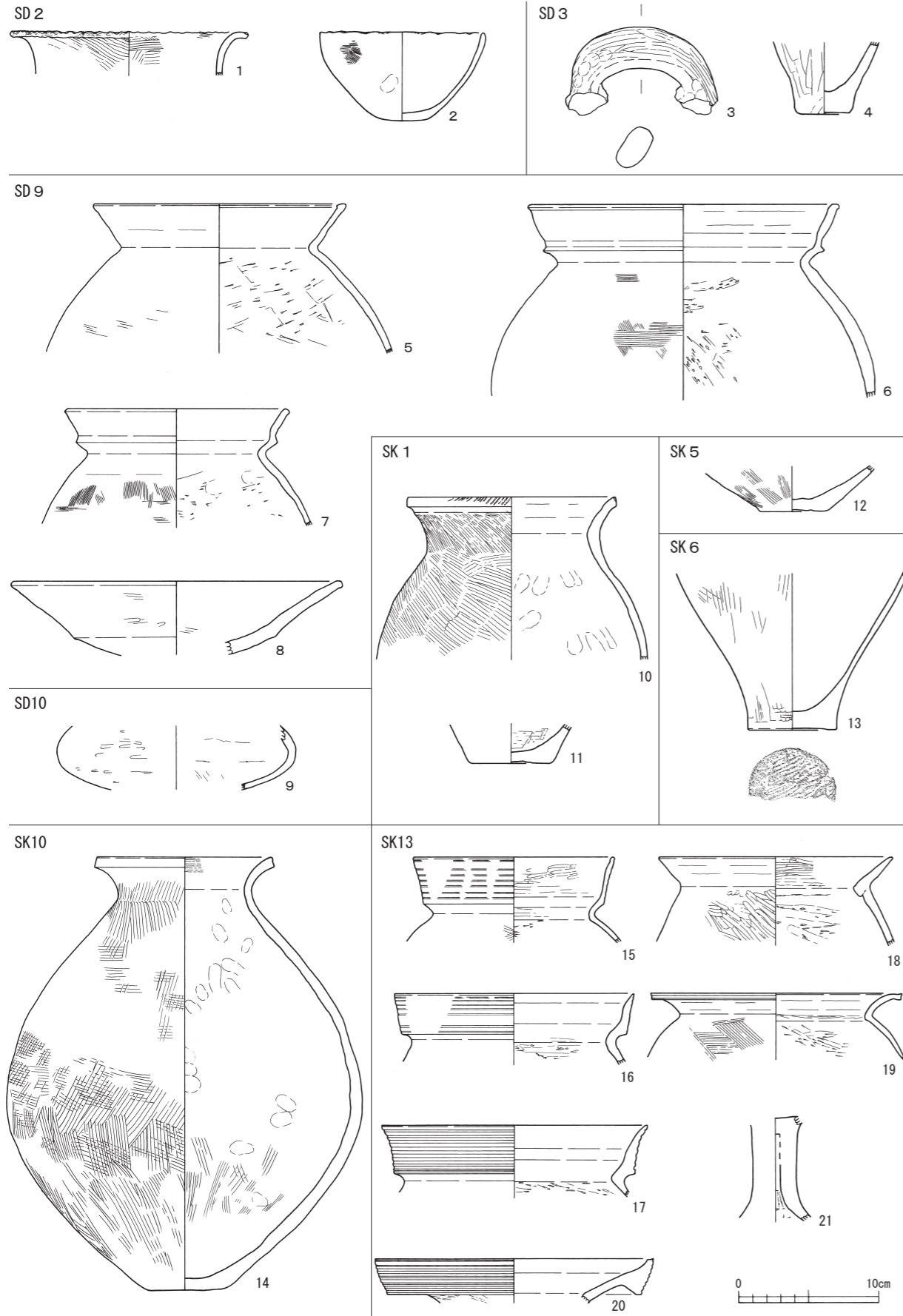
第85図13は甕の胴部から底部である。底部外面にハケが残る。弥生時代中・後期の時期と推定する。

18) II区SK10出土土器(第85図14)

第85図14は壺A3類である。口縁端部は面取りされ、口縁部は短く屈曲し胴部は大きく張る。外面全面にはハケ調整が行われる。弥生時代中期後葉の時期と推定する。

19) II区SK13出土土器(第85図15～21)

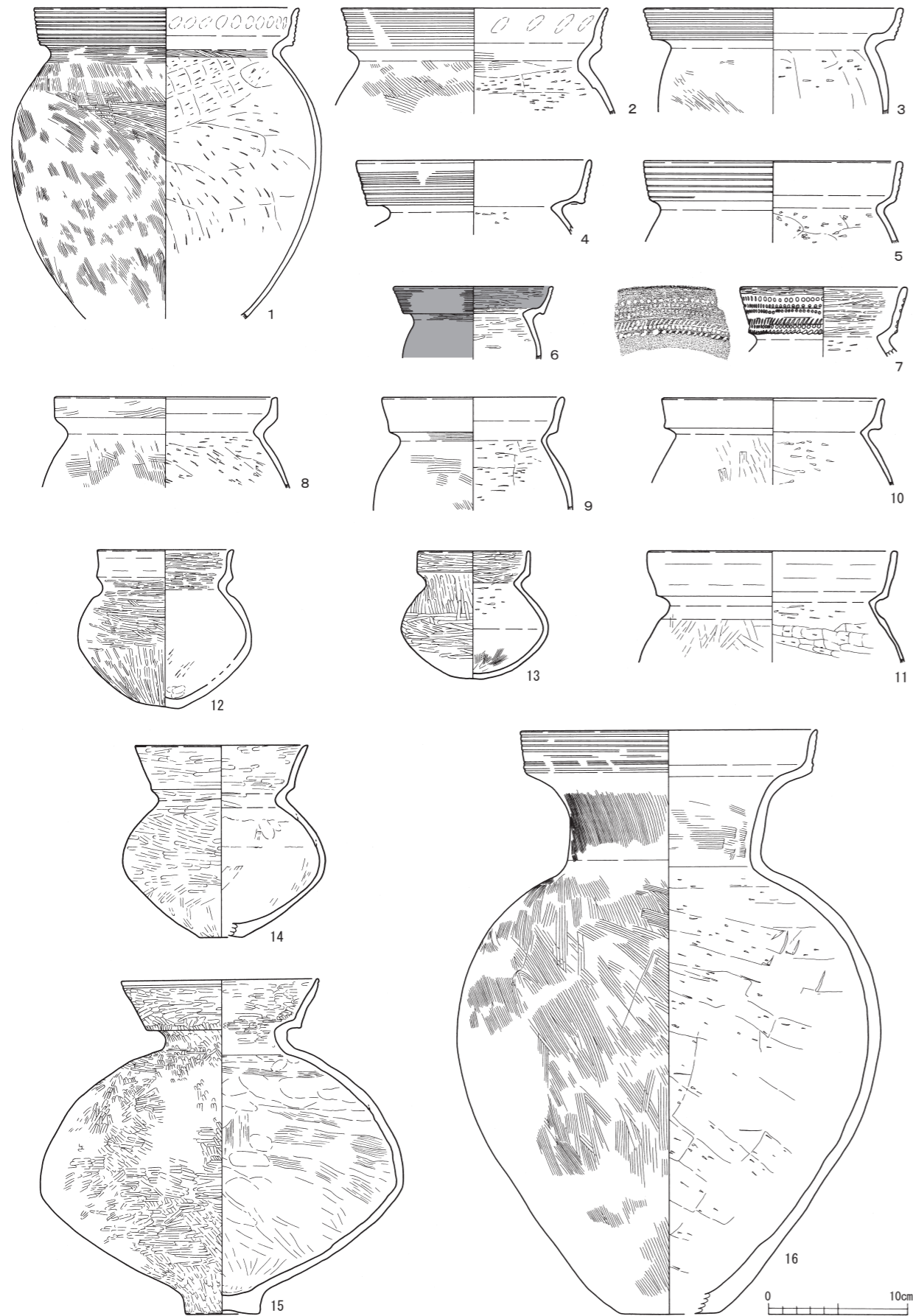
甕にはC4類(第85図15・16)やC5類(第85図17)、F2類(第85図18)、F3類(第85図19)がある。有段口縁の甕は口縁部が外傾するものが多い。第85図20は壺L類、第85図21は脚部B類である。こ



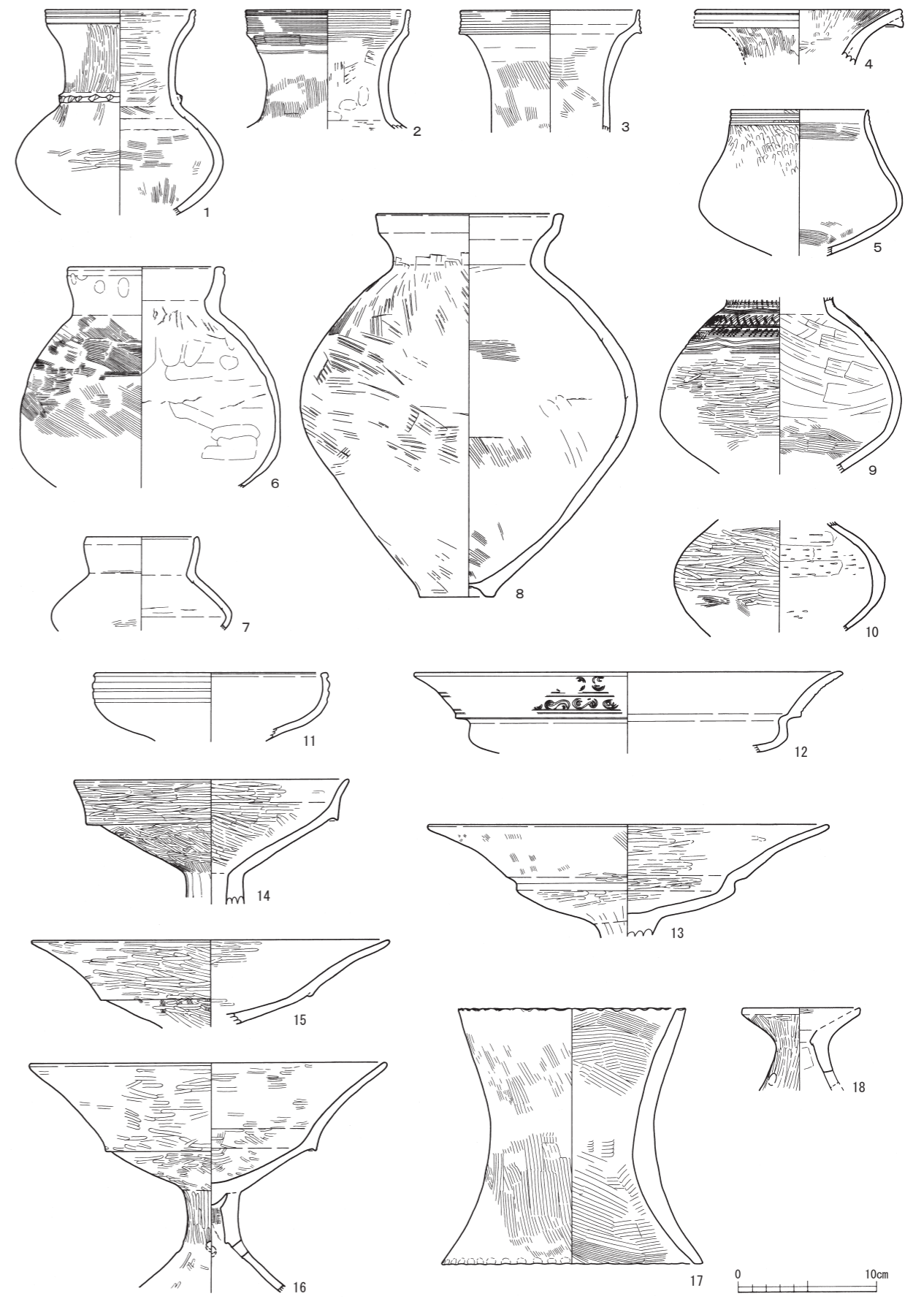
第85図 II区SD 2・3・9・10、SK 1・5・6・10・13出土土器実測図（縮尺1/4）



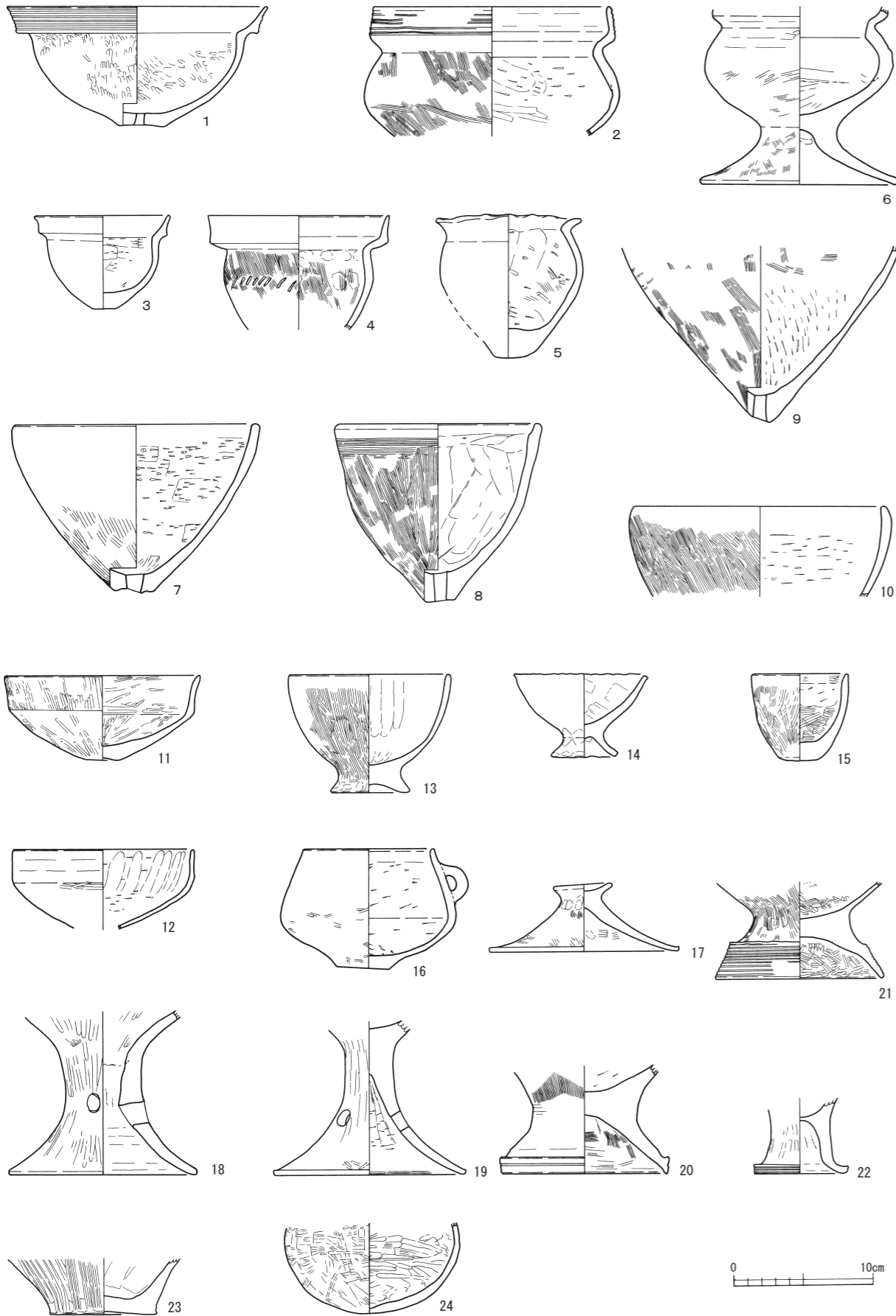
第86図 II区SR 1出土土器実測図-1（縮尺1/4）



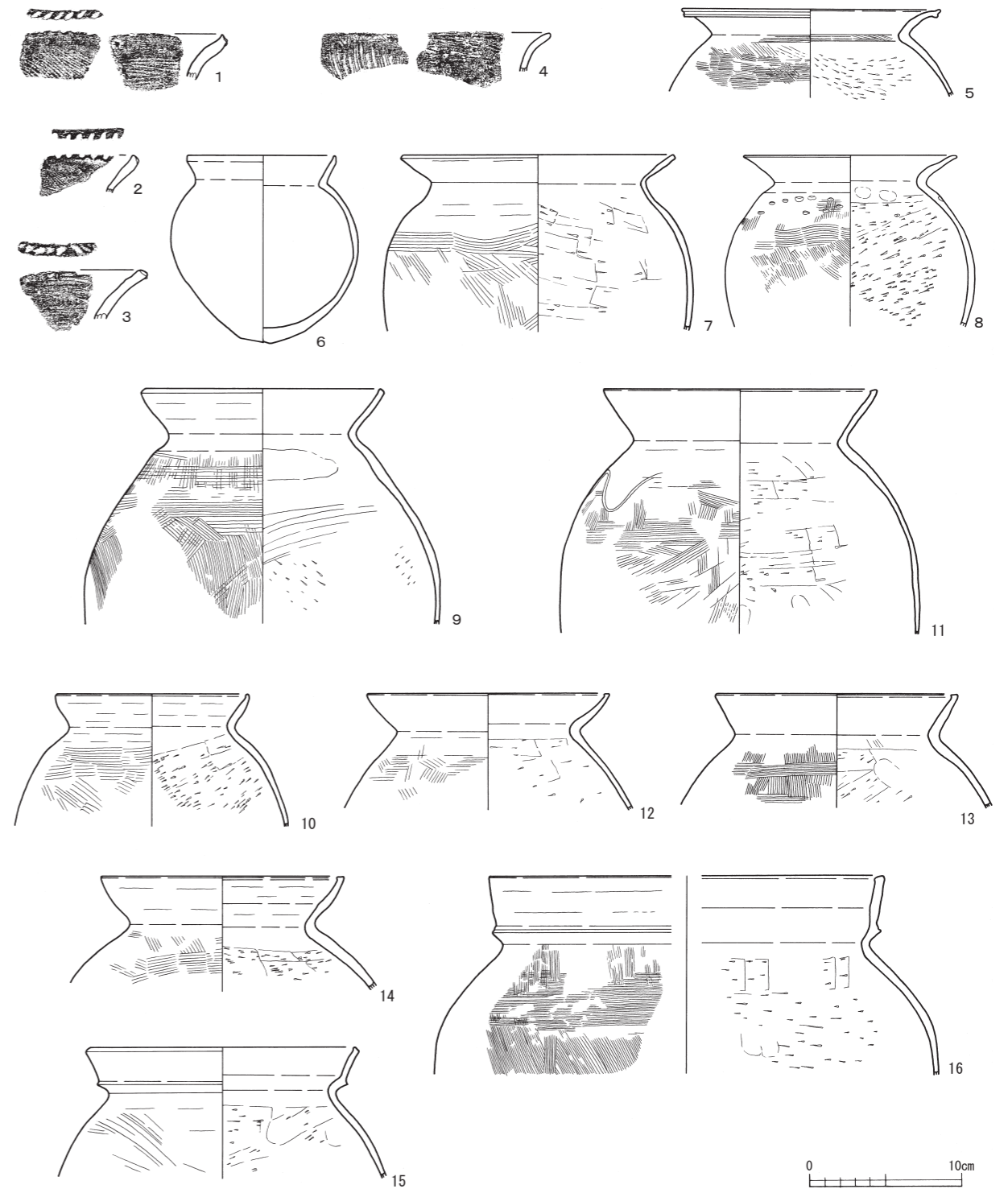
第87图 II区SR1出土土器实测图-2 (縮尺1/4)



第88图 II区SR1出土土器实测图-3 (縮尺1/4)



第89図 II区SR1出土土器実測図-4 (縮尺1/4)

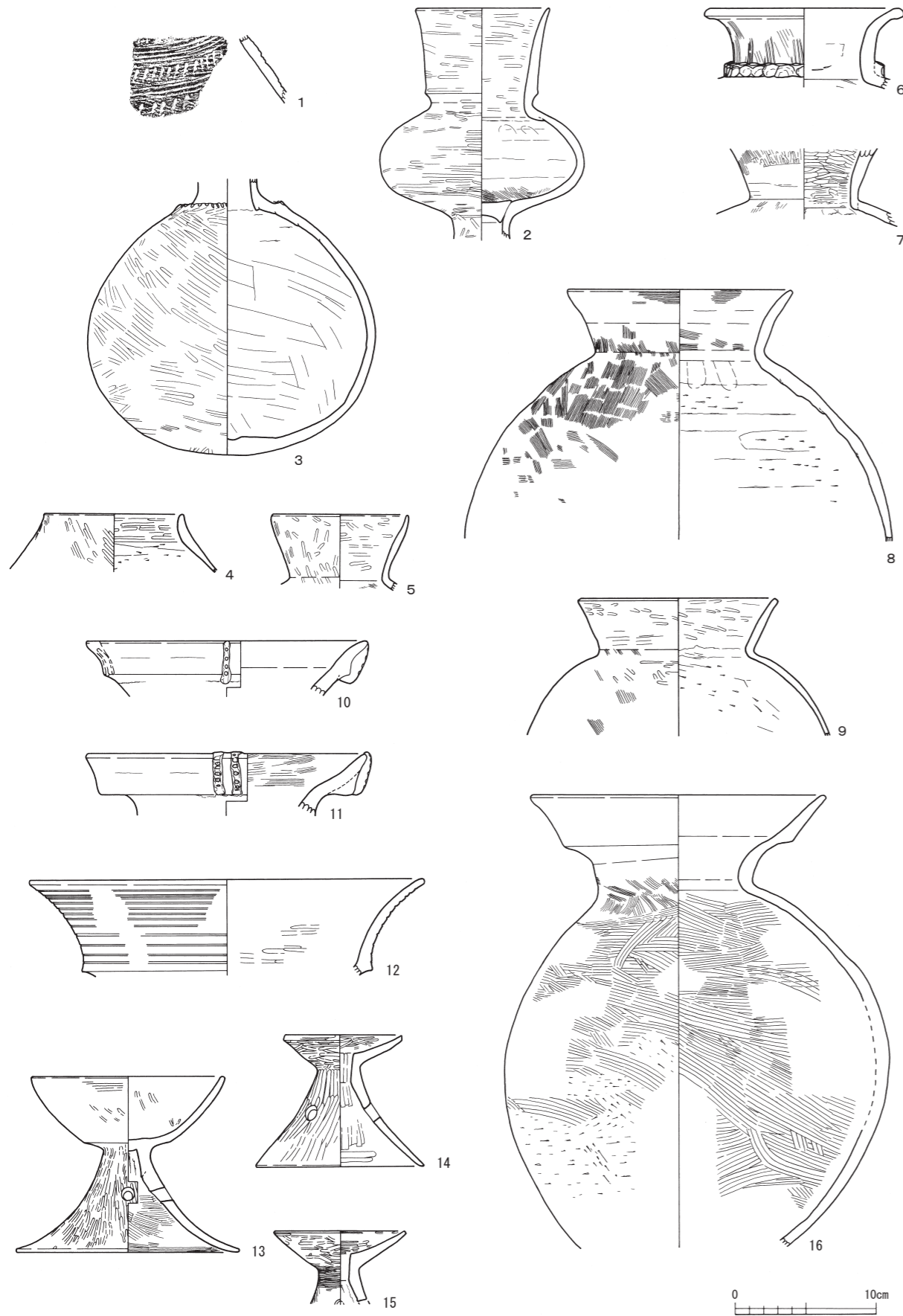


第90図 II区SR2出土土器実測図-1 (縮尺1/4)

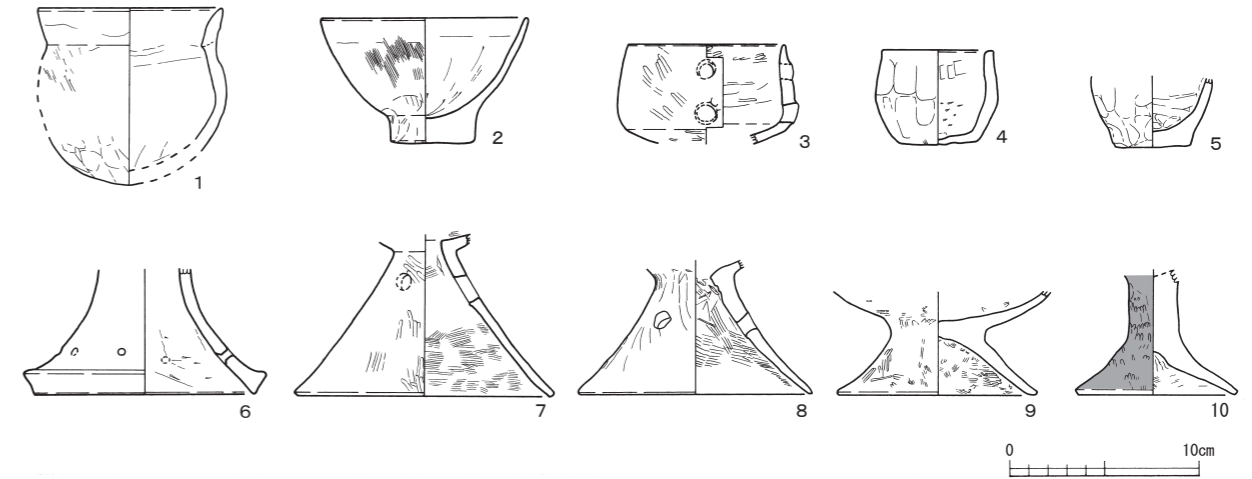
これらの土器は弥生時代後期末～古墳時代初頭の時期と推定する。

20) II区SR1出土土器 (第86図1～第89図24)

甕にはA1類(第86図1・2)やA2類(第86図3～5)、A3類(第86図6)、B1類(第86図7)、B2類(第86図8)、C1類(第86図9・10)、C2類(第86図11・12)、C3類(第86図13～16)、C4類(第87図1・3～6)、C5類(第87図2)、C6類(第87図7)、D2類(第87図8)、D4類(第87図9)、



第91図 II区SR2出土土器実測図-2 (縮尺1/4)



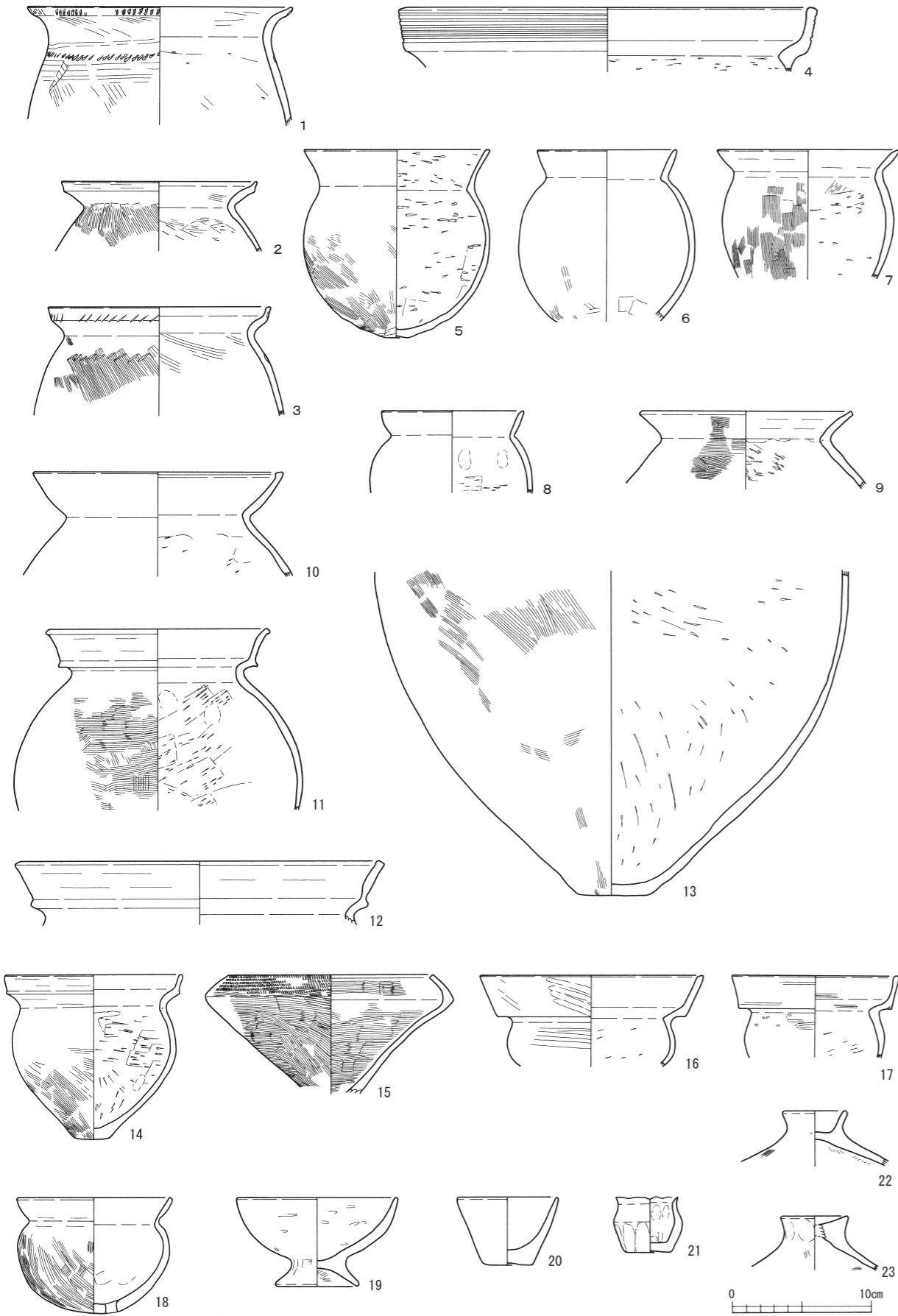
第92図 II区SR2出土土器実測図-3 (縮尺1/4)

H類(第87図10・11)がある。第86図1は胴部に楡描直線文を巡らしている。第86図3は胴部が大きく張り頸部には2箇所の穿孔を確認できる。第86図4・5は口縁部がやや強めに外反し、口縁端部には刻目、胴部には楡描直線文と楡状工具による刺突文がめぐらされる。4・5は弥生時代中期中・後葉の時期と推定する。第86図6は内傾気味の頸部から口縁部が「く」の字形に屈曲する。第86図7・8は口縁部が強く外反もしくは屈曲し口縁端部外側がへこんでいる。甕C類は比較的出土量が多く、特にC3・4類が多い傾向にある。有段口縁を持つ第87図7は棒状工具や竹管工具によって刺突列を巡らしている。第87図10・11は有段口縁の下端部が突出しており、山陰系の影響を受けている可能性がある。

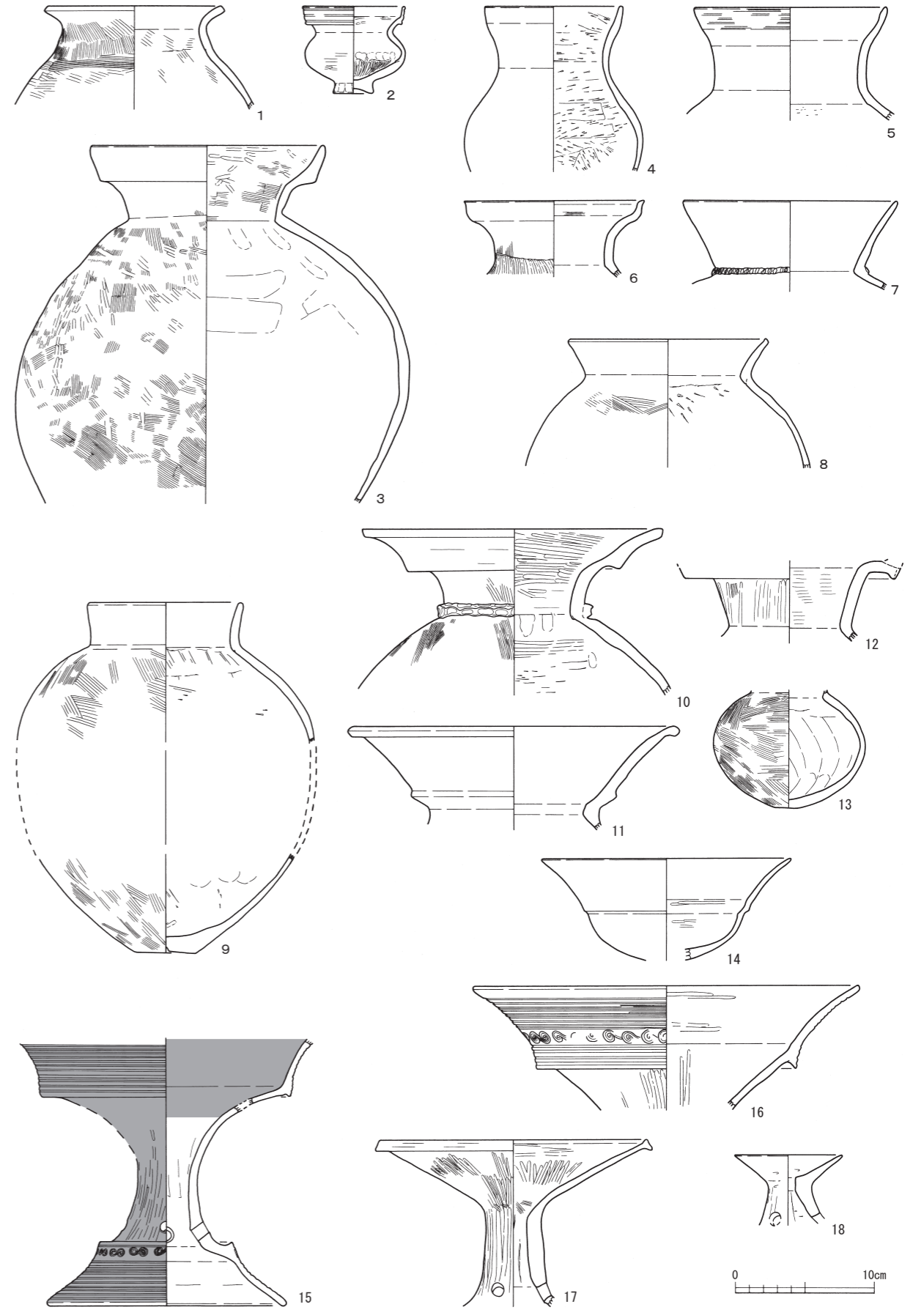
壺にはC1類(第87図12・13・16)やC2類(第87図14・15)、D1類(第88図4)、E4類(第88図1~3)、H類(第88図5)、K1類(第88図6・7)、J類(第88図8)がある。第88図9・10は小型壺の胴部である。本遺構からは小型壺など完形に近い壺が比較的多く出土している。第87図12・13は有段部が立ち上がる小型の壺である。第87図14・15は外傾する口縁部を有しているが、特に第87図15は胴部が大きく張りだし底部高が高い特徴的な形態を示している。第87図16は大型の壺で筒形の頸部に有段口縁部が立ち上がっている。胴部は外面にハケ調整、内面に削り調整を行っている。第88図1~3は長頸壺でありいずれも口縁部に擬凹線文を巡らしている。第88図8は口縁部が受け口形で胴部にハケ調整を行う。第88図9は楡状工具によって楡描直線文や刺突列が施される。丁寧に研磨調整されている。

高坏にはA類(第88図11)やB1類(第88図12・13)、C2類(第88図15・16)、C3類(第88図14)がある。第88図12は口縁部にS字形のスタンプ文を巡らしている。第88図15・16は口縁部が間延びして外反している。器台にはF類(第88図17)とE2類(第88図18)がある。第88図17は摩耗が激しいが、上・下端部に指頭によって連続押圧を施している。全体にハケ調整をしており、器台以外の用途も考えられる。

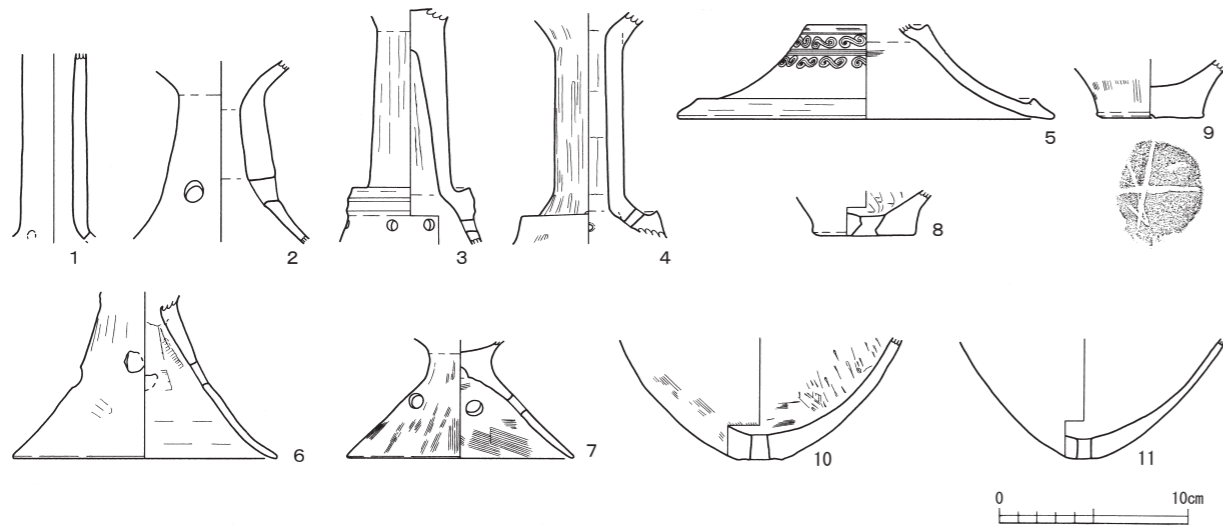
鉢にはA2類(第89図1)やA4類(第89図2)、B1類(第89図3)、B2類(第89図4)、B5類(第89図6)、C1類(第89図5)、E1類(第89図11・12)、E2類(第89図13・14)、E3類(第89図15)、F1類(第89図10)、F2類(第89図7・8)がある。第89図9はF類の胴部から底部である。第89図1・3は口縁部の外面を有段にして内面は内湾形に成形している。これに対して第89図2・4は口縁部の内外面ともに有段形に成形している。第89図6は脚付きの鉢で口縁部は有段になると考える。第89図7~9は有孔鉢で外面をハケで調整する。第89図11は口縁部が緩く外傾し、第89図12は口縁部が立ち上がる。



第93图 II区SW1出土土器实测图-1 (縮尺1/4)



第94图 II区SW1出土土器实测图-2 (縮尺1/4)



第95図 II区SW1出土土器実測図-3 (縮尺1/4)

第89図16は把手付きの鉢である。蓋にはB類(第89図17)がある。脚部にはB1類(第89図18・19)やE類(第89図20・22)、F類(第89図21)がある。第89図21は有段のある脚部に擬凹線文を巡らしている。第89図22は脚裾部を強く折り曲げる。第89図23・24は底部であり、第89図23は縦位の条痕が底部側縁まで調整される。弥生時代中期前葉の可能性がある。

これらの土器には、弥生時代中期中葉(第86図1・2)や同中期後葉(第86図3・6)などの土器が含まれるが、主に弥生時代後期前半から後期末の時期と推定する。

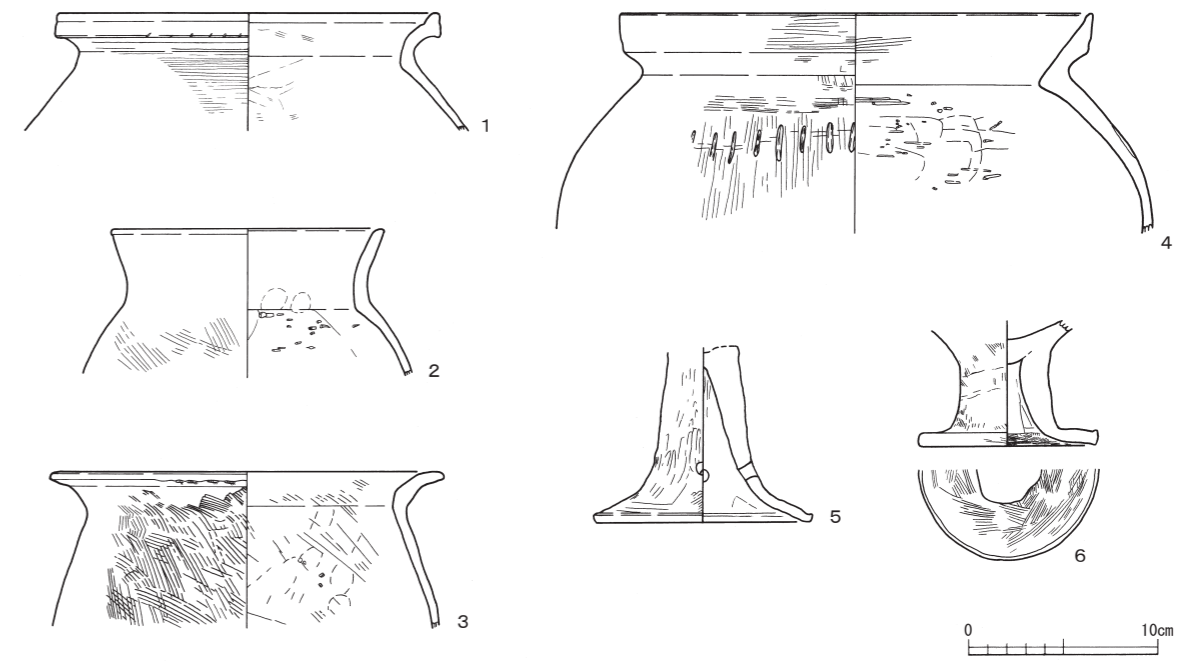
21) II区SR2出土土器(第90図1～第92図12)

甕にはA1類(第90図1～4)やF2類(第90図6～8)、F3類(第90図5)、G類(第90図9～14)、H類(第90図15・16)がある。第90図1～3は口縁端部に篋状工具で刻目を入れている。第90図1・2は口縁端部を内湾させ受け口形にしている。第90図1～4は弥生時代中期前葉の時期と推定する。F類(第90図5～8)は比較的主として出土しており、口縁部が外反する第90図5の口縁端部には沈線文が1条引かれる。G類(第90図9～14)も主として出土しており、口縁端部をわずかに摘み上げるもの(第90図9・10)や口縁端部に傾斜した面をもつもの(第90図11～14)がある。第90図15・16は有段口縁下端に突出部を設ける山陰系土器である。

壺には主にC4類(第91図2)やG類(第91図4)、I類(第91図5)、K2類(第91図9)、K3類(第91図6～8)、M類(第91図16)、L類(第91図10・11)がある。第91図1は櫛状工具による直線文と刺突文が巡る壺の胴部である。弥生時代中期前葉の時期と推定する。第91図2は頸部下端に段状の境目のある脚付き壺である。第91図3は口縁部が欠けているが頸部と胴部の境に刻目のある突帯文を巡らし球形の胴部を持つ。第91図5は頸部幅はやや短い口頸部上端がやや内湾する。K類の第91図6～9は比較的主として出土している。L類の第91図10・11は口縁に刻目付きの棒状浮文を貼り付ける。大型壺の第91図16は口縁部が有段になるが、内面の段は緩やかな形状を示す。

高坏にはC2類(第91図12)やE類(第91図13)がある。第91図12は坏部に多条沈線を巡らしている。第91図13は脚部の透かしが1箇所のみあけられている。器台にはE2類(第91図14・15)があり、いずれも坏部が小さい。

鉢にはC1類(第92図1)やE2類(第92図2～5)がある。第92図1は「く」の字形に屈曲する小



第96図 III区SR2出土土器実測図(縮尺1/4)

型の鉢である。第92図3は器面に円形の透かしを二つ上下に並べる。脚部にはB2類(第92図6)やD類(第92図7・8)、G2類(第92図9)、H類(第92図10)がある。第92図6には円形の透かしが6箇所確認できる。第92図10は柱状脚部から低平な脚裾部が広がる。

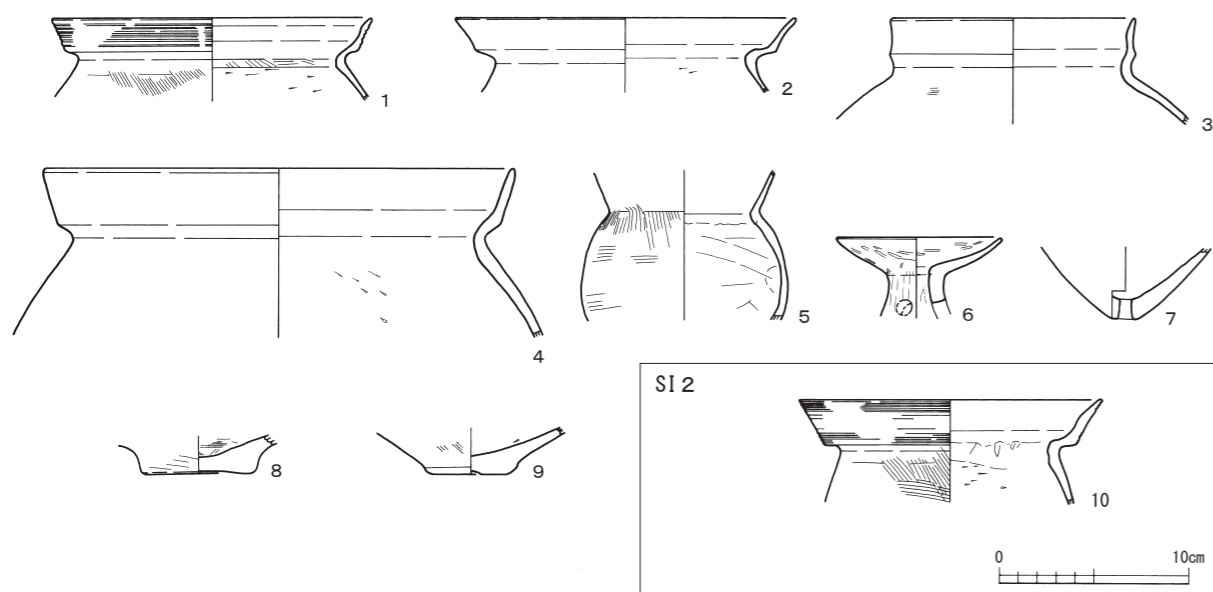
これらの土器は、弥生時代中期前葉の土器(第90図1～4、第91図1)が含まれるものの、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が主体であり、この中でも古墳時代前期の土器(甕や壺、器台など)を多く確認できる。

22) II区SW1出土土器(第93図1～第95図11)

甕にはA2類(第93図1)やB1類(第93図2)、C4類(第93図4)、E2類(第93図3)、F2類(第93図5～8)、F3類(第93図9)、G類(第93図10)、H類(第93図11・12・14)がある。第93図13は甕の胴部から底部である。第93図1は口縁部と頸部に櫛状工具による刻目を施し、頸部刻目列の下には櫛描直線文を巡らす。第93図3は受け口形口縁部と胴部上半に篋状工具による刻目列を巡らしている。F類は主として出土しており口縁部を直線状に外傾させるものが多い(第93図5～8)。G類の第93図10は近畿系、H類の第93図11・12・14は山陰系の系譜を持つ。

鉢にはB2類(第93図16・17)やB4類(第93図18)、E2類(第93図19～21)、G類(第93図15)がある。第93図15は口縁部に細かな刺突列を多段に巡らしている。弥生時代中期後半の台付き鉢の可能性もある。第93図21は手づくねの小型土器である。蓋にはB類(第93図22・23)がある。いずれも完形品ではないが、摘み部上面がへこんでいる。

壺にはA2類(第94図1)やC1類(第94図2)、C2類(第94図3)、E3類(第94図4)、K2類(第94図7～9)、J類(第94図5・6)、M類(第94図10・11)、L類(第94図12)がある。小型壺の第94図13は口縁部が欠けている。第94図1は口縁部が屈曲する広口壺であり、頸部から胴部にかけてハケ調整を行う。3は口縁部の有段部が外傾し内面の段も弱い。5は口縁部の受け口が内湾化している。第94図10は所謂二重口縁壺であり、頸部と胴部の境には突帯文を巡らしている。第94図11も同じ部類だが、口縁部の突帯文が括れ部近くで巡っている。



第97図 VI区SI 1・2出土土器実測図（縮尺1/4）

高坏にはB 4類（第94図14）、器台にはA類（第94図17）やB類（第94図15・16）、E 2類（第94図18）がある。第94図15は有段口縁部に多条の擬凹線文を引き、有段のある脚部裾には擬凹線文やS字形のスタンプ文を施文している。第94図16も口縁部に擬凹線文やスタンプ文を施している。第94図17は口縁部の面を拡張させている。

脚部にはA類（第95図1）やB類（第95図2）、C類（第95図3・4）、C 2類（第95図5）、D類（第95図6）、G 2類（第95図7）がある。第95図3～5は有段脚部を有する高坏や器台と考える。第95図8～11は底部である。第95図9は底部外面に「×」字形の線刻を認める。第95図8・10・11は底面を穿孔する有孔鉢である。

これらの土器は、弥生時代中期後半の土器（第93図1・15、第94図1）を含むものの、主に弥生時代後期から古墳時代前期の時期と推定する。

23) III区SR 2 出土土器（第96図1～6）

甕にはB 1類（第96図1）やD 1類（第96図4）、F 3類（第96図2・3）がある。第96図1は口縁端部を少し上方につまみ出している。第96図3は甕A類にも類似するが、口縁部の形状などにより古墳時代初頭の白江式と判断する。脚部はB 2類（第96図5）やE類（第96図6）がある。第96図6は脚部裾を強く折り曲げ、脚部内面にはハケ調整を行う。これらの土器は、弥生時代後期～古墳時代前期の時期と推定する。

24) VI区SI 1 出土土器（第97図1～9）

甕にはC 5類（第97図1）やD 4類（第97図2・4）、F 2類（第97図5）がある。C・D類は有段の口縁部が大きく外傾している。壺C 3類の第97図3は受け口口縁部が直立する。古墳時代前期以降の時期と推定する。ほかに、器台E 1類（第97図6）や底部（第97図7～9）がある。これらの土器は、弥生時代後期末から古墳時代初頭の時期と推定する。

25) VI区SI 2 出土土器（第97図10）

甕C 5類（第97図10）がある。擬凹線文が施され、口縁部は大きく外傾する。

3 律令期の土器

1) III区SD 1 出土土器（第98図1～第101図6）

須恵器

坏B蓋（第98図1～9） 第98図1は、突起度が高い宝珠摘みを呈する。第98図2・3は、やや擬宝珠形が崩れた形態を有する。なお、第98図2・3および5～9は、口縁端部形成の鋭さを欠く。また、3の内面には、墨が付着しており転用硯として使用されていたものと考えられる。第98図4は、無紐蓋で口縁端部は玉縁状を呈し、9世紀後葉～10世紀初頭の時期の製品と考えられる。

坏B身（第98図10～21） 第98図10・11は、やや深みを呈する器形を有し、8世紀中頃～後葉の時期に属する。第98図12～17は、10・11と比べるとやや扁平気味の器形で、口縁部が直線的に外側に伸びていく形態のものが多くみられる。帰属時期は8世紀後葉～9世紀初頭と考えられる。第98図18・19は、体部がやや薄手の作りを呈し、9世紀前葉以降の時期である。

坏A（第98図22～34、第99図1～11） 第98図22～24は、底部から体部にかけてやや丸みを持ち、深みのある器形を呈し、8世紀に属する。第98図25～34・第99図1～3は、底部から体部が開き気味に立ち上がる器形で、8世紀後葉～9世紀初頭の時期に属する。第99図4～7は、全体的に薄手の作りを呈し、帰属時期は9世紀前葉以降と考えられる。

盤A（第99図12～26、第100図1～3） 第99図12～26・第100図1は、器高が低く外側に直線的に開く口縁部を持ち、器壁がやや厚い器形を呈し、8世紀後葉～9世紀初頭の時期に属する。第100図2・3は、薄手の作りを呈し、9世紀前葉以降の時期である。

盤B（第100図4～7） 第100図4は、底部から体部が立ち上がり気味の器形を呈する。第100図5・6は、やや外側に開き気味に立ち上がる器形をもち、4～6の製品は、概ね8世紀後葉～9世紀初頭の時期に帰属する。なお、4の製品は、やや古い様相を呈する。第100図7の底部外面に墨が付着し、転用硯と考えられる。

椀B（第100図8～11） 第100図8は、高台はやや直線的に立ち上がり、口縁端部が外側に開き気味の器形を呈する。第100図9～11は、高台が外側にやや踏ん張り気味で、口縁端部は内湾する器形を呈する。ともに、9世紀後葉～10世紀初頭の時期に属する。なお、8の器種は、坏Bの可能性も否めない。

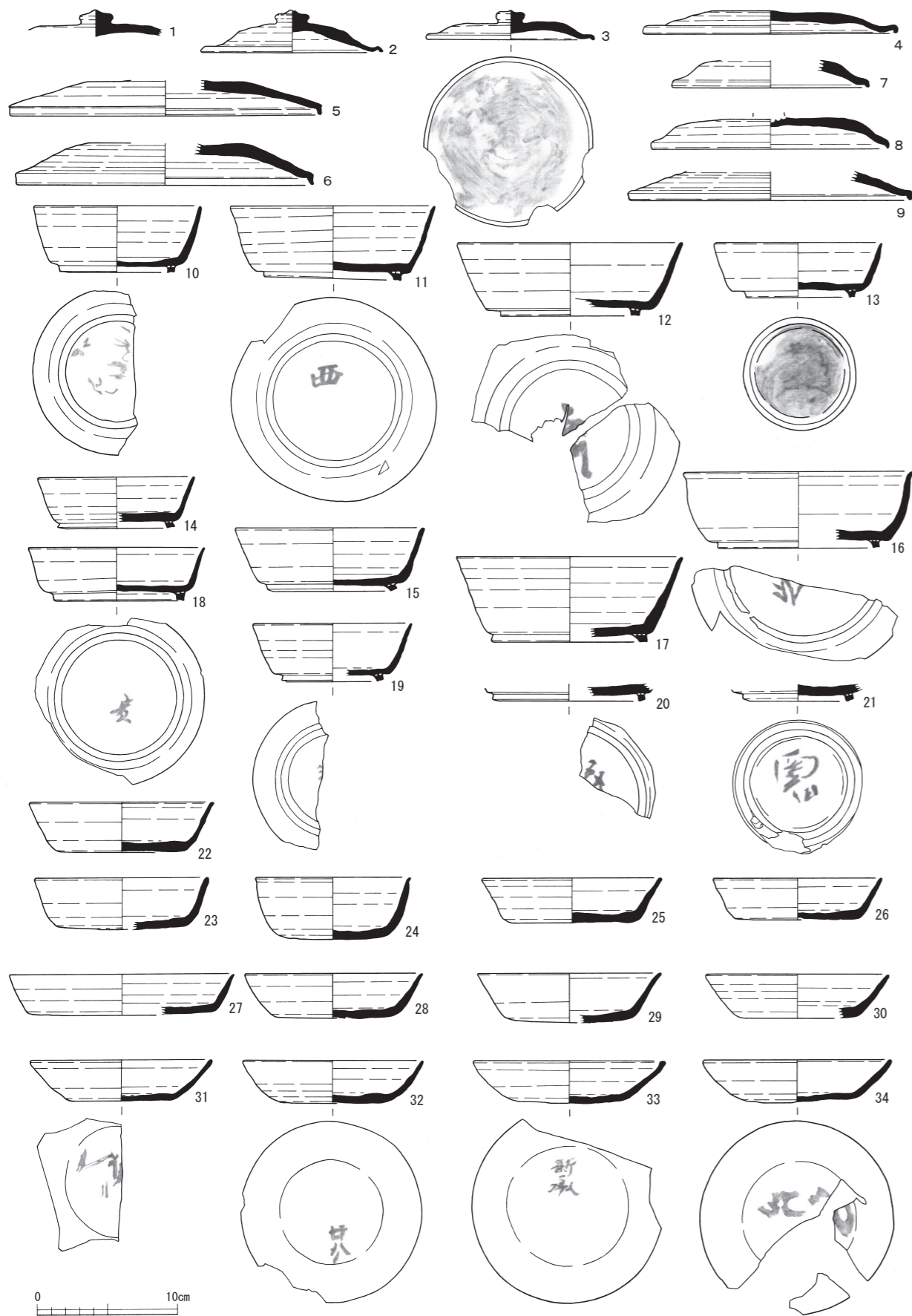
調理具・貯蔵具等類（第100図11～24・第101図1・2） 第100図12は、鉢で底部および体部下半が欠損している。ナデ調整を施す。第100図14・15・20は短頸壺で、20は高台が付く。13・16・23は壺で、底部や口縁部等の一部が欠損して全形の復元はできなかった。第100図18は、長頸瓶で体部以下は欠損している。また、第100図21・22は、瓶の高台部と考えられる。第100図17は、甗の体部と考えられる。把手の先端部が欠損している。第100図24・第101図1は甕の口縁部である。第100図19は、高坏の脚部の一部と考えられる。19の高坏と外面に波状文が施されている第100図24は、律令期以前の製品と考えられる。

土師器

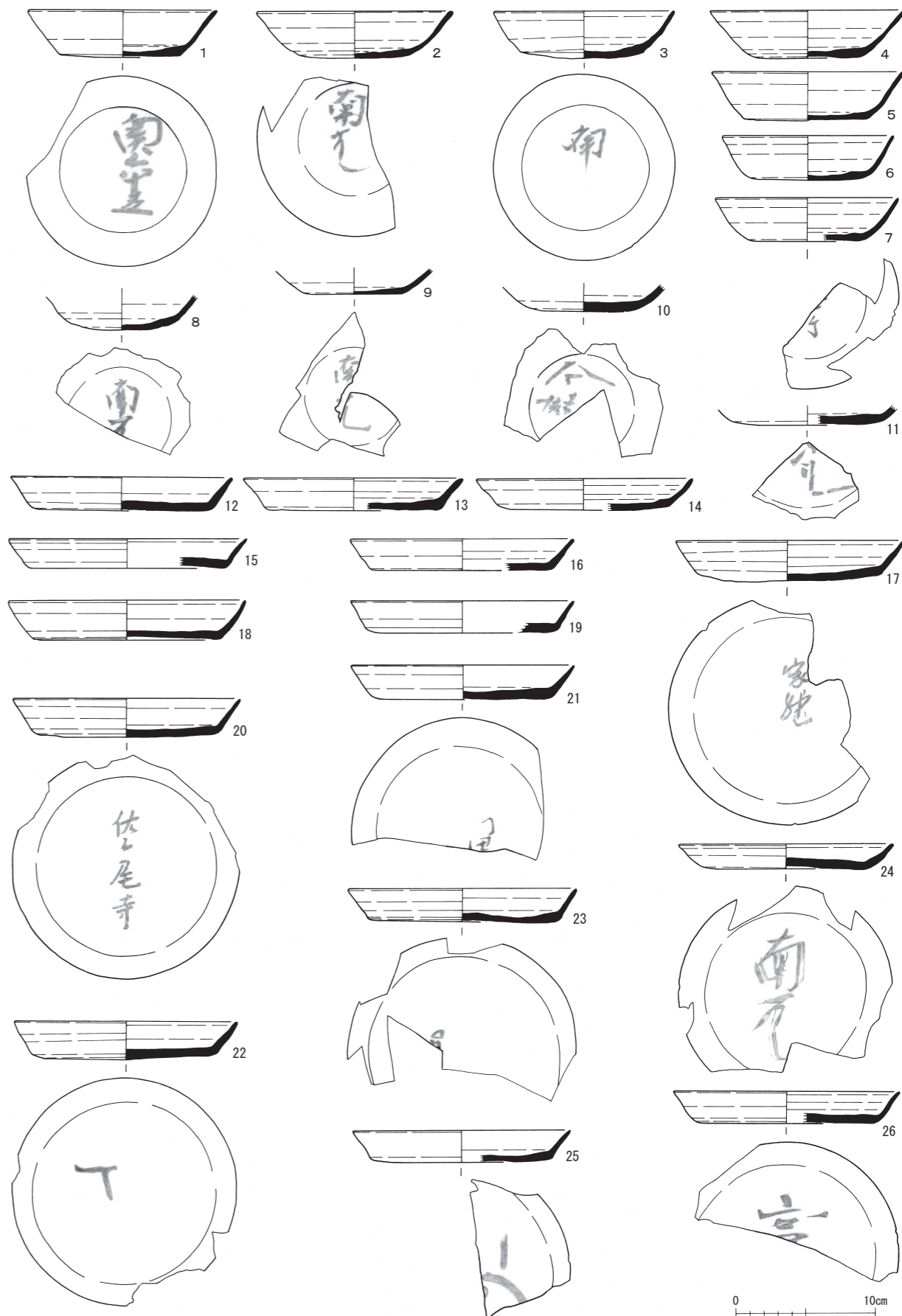
鍋（第101図3） 口縁部のみ残存。頸部の屈曲ははっきりしている。甕の可能性も考えられる。

甕（第101図4～6） いずれも体部上半から下が欠損している。口縁部は「く」の字状に外反し、5のみ口縁端部外面を押さえ面を持つ器形を呈する。

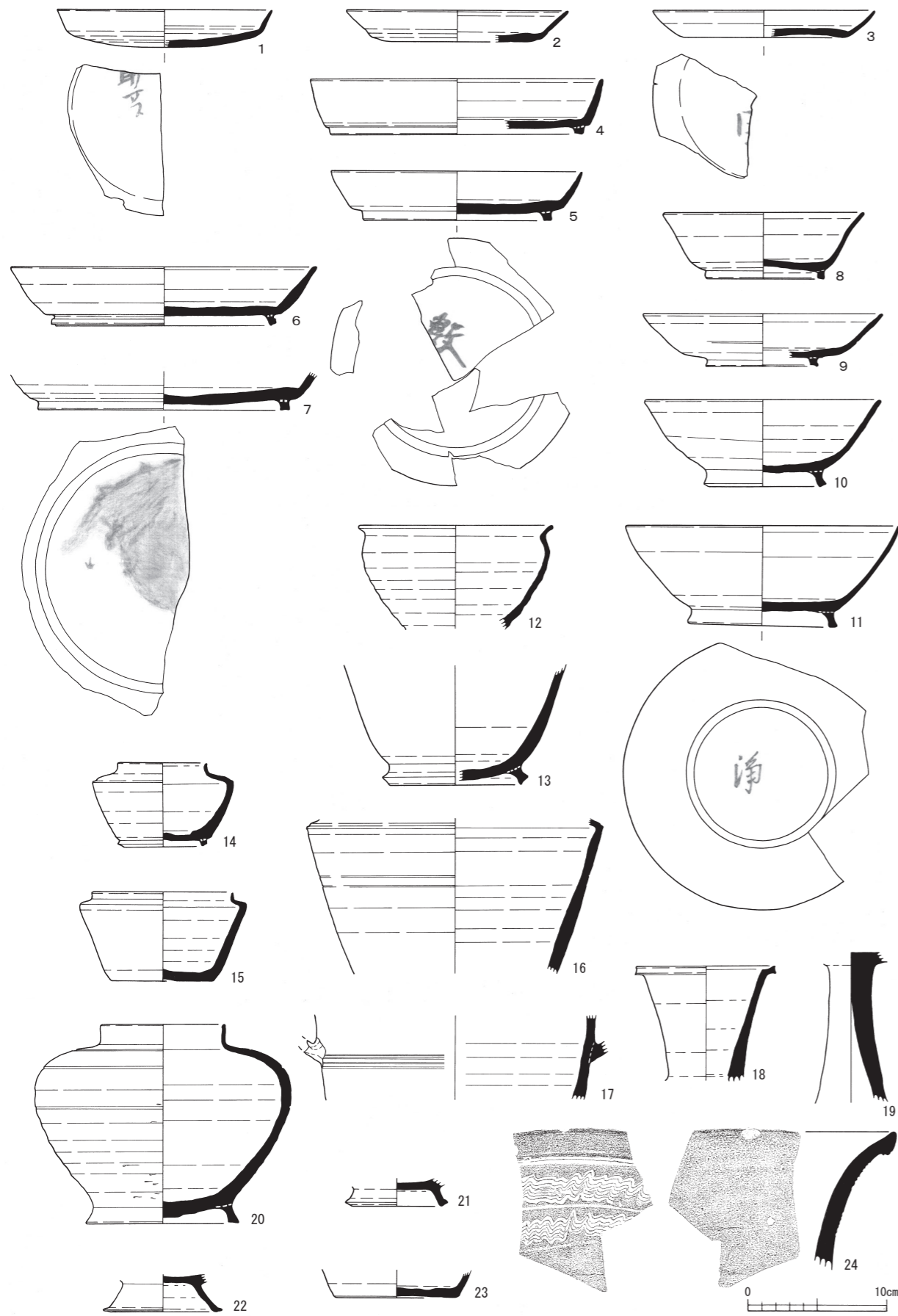
2) III区その他出土土器（第102図1～24）



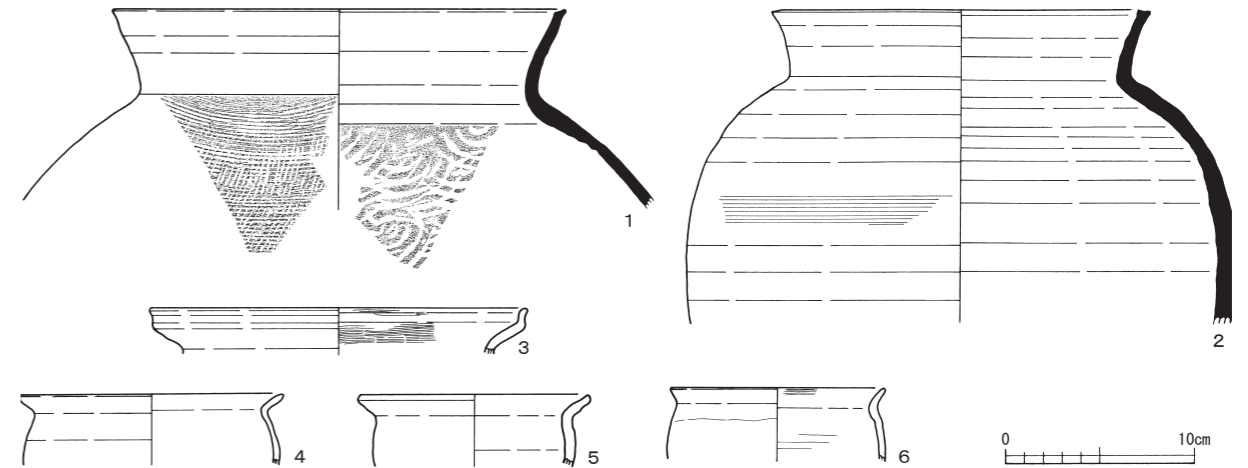
第98図 III区SD1出土土器実測図-1 (縮尺1/4)



第99図 III区SD1出土土器実測図-2 (縮尺1/4)



第100図 III区SD 1 出土土器実測図-3 (縮尺1/4)



第101図 III区SD 1 出土土器実測図-4 (縮尺1/4)

須恵器

1～4・21・22は坏B身で、1・2・22の器形はやや深みを呈し、4は、扁平気味の器形である。5～12・18～20は坏Aで、11・19は全体的に薄い作りを呈する。13～15・23・24は、盤Aである。16は、台付き壺で体部上半と高台が欠損している。体部下半には横方向のケズリ調整痕が残る。17は、宝珠摘みの付く壺の蓋である。宝珠摘みが欠損している。

3) IV区SR 1 出土土器 (第103図1～第108図13)

須恵器

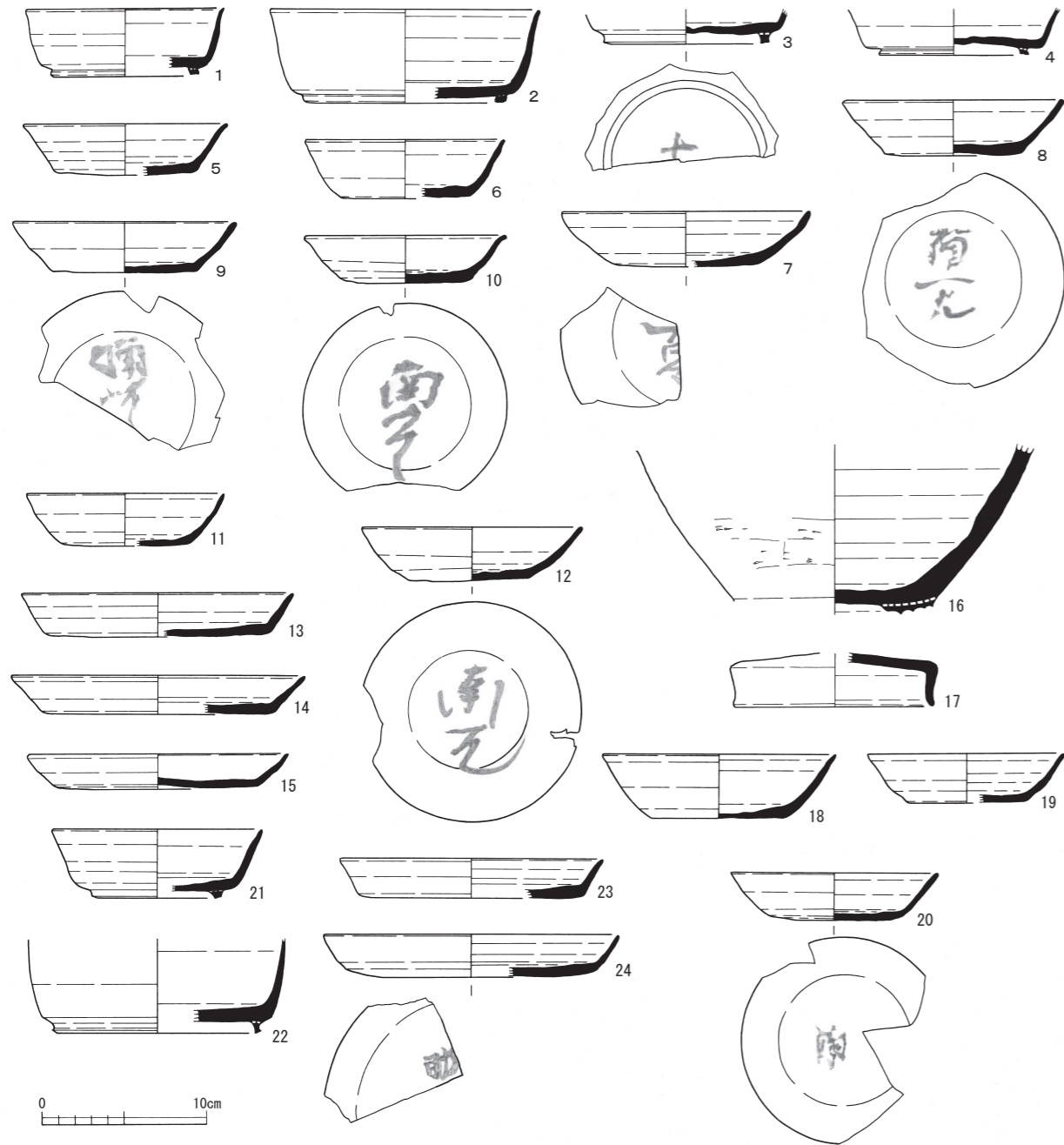
坏B蓋 (第103図1～21) 第103図1は、突起度が高い宝珠摘みを呈し、口縁端部の成形はやや鋭い。第103図2～6は、やや擬宝珠形が崩れた形態を有し、口縁端部は鋭さを欠く。第103図7～10は、無紐蓋で口縁端部は玉縁状を呈する形態が多い。9世紀後葉～10世紀初頭の時期に属する。

坏B身 (第103図22～36) 第103図22・23は、やや深みを呈する器形を有し、高台がやや外側に踏ん張り気味の形態をもつ。8世紀中頃～後葉の時期に属する。第103図24～32・34は、22・23と比べるとやや扁平気味の器形で、口縁上部がやや外側に伸びていく形態が多くみられる。帰属時期は8世紀後葉～9世紀初頭と考えられる。第103図33は、体部がやや薄手の作りを呈し、9世紀前葉以降の時期である。

坏A (第103図37～42、第104図1～33、第105図1～25) 第103図37～40は、底部から体部にかけてやや丸みを持ち、深みのある器形を呈する。帰属時期は8世紀代と考えられる。第103図41～42・第104図1～17は、底部から体部が開き気味に立ち上がる器形で、8世紀後葉～9世紀初頭の時期である。なお、第104図17は、内面全体に漆が遺存している。第104図18～21は、全体的に薄手の作りを呈し、帰属時期は9世紀前葉以降と考えられる。第104図22～33・第105図1～25は、坏もしくは盤の底部の一部で、外面に墨書を有する。

盤A (第105図26～40、第106図1) 第105図26～36は、器高が低く外側に直線的に開く口縁部を持ち、器壁がやや厚い器形を呈し、8世紀後葉～9世紀初頭の時期に属する。第105図37～40・第106図1は、薄手の作りを呈し、9世紀前葉以降の時期である。

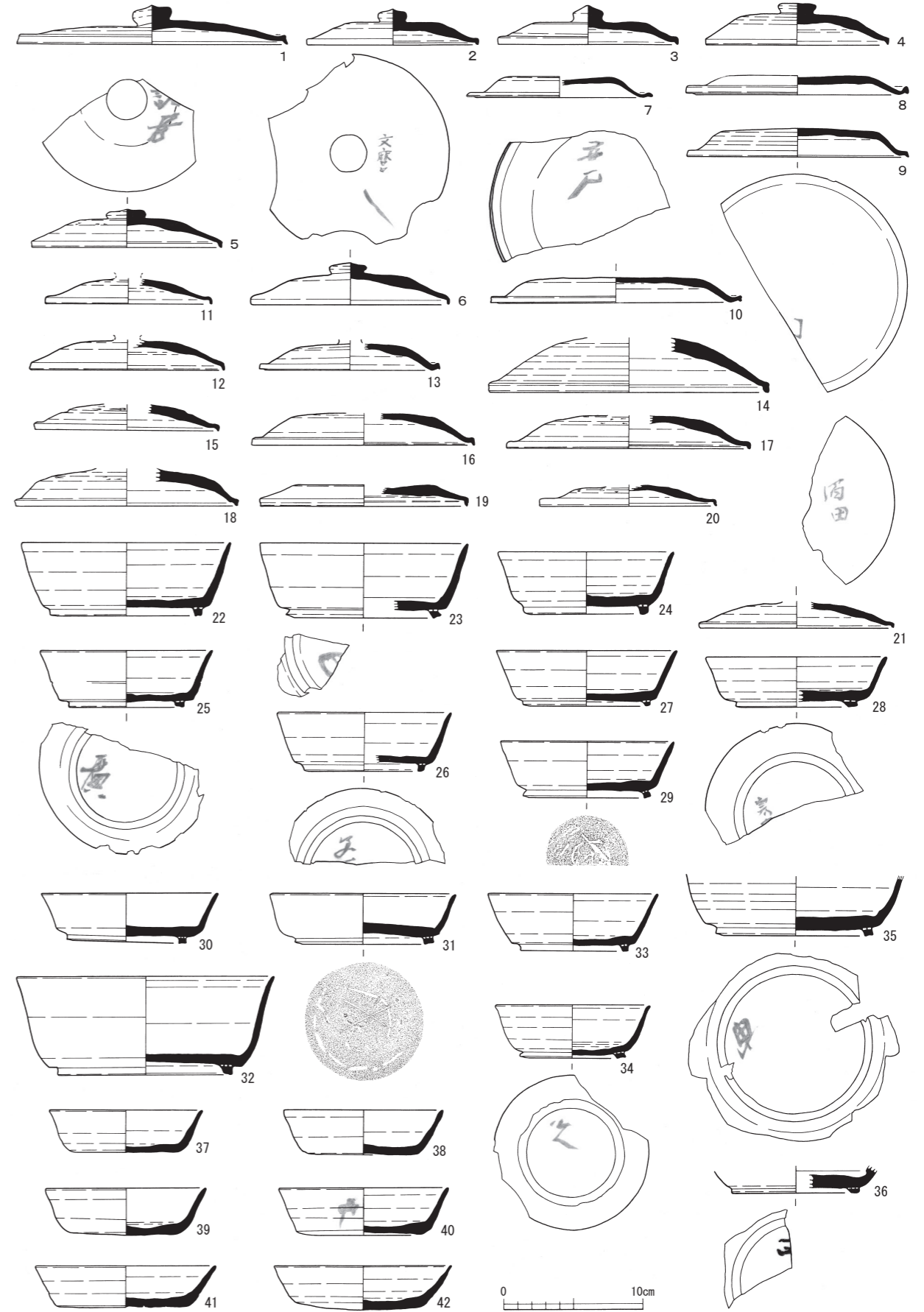
盤B (第106図2～6) 第106図2～5は、体部が外側に直線的に開く器形を呈する。第106図6は、口縁端部がやや外側に開き気味に立ち上がる器形をもつ。概ね8世紀後葉～9世紀後葉の時期に帰属する。



第102図 III区その他出土土器実測図（縮尺1/4）

椀B・大平鉢（第106図7～20） 体部がやや湾曲するタイプ（第106図7・10・11）と体部が直線的に伸びるタイプ（第106図8・9・12）がある。第106図18は、大平鉢である。ともに、9世紀後葉以降の時期である。

調理具・貯蔵具等類（第106図21～26・第107図1～16） 第106図21は、宝珠摘みを有する壺の蓋である。突起度が高い宝珠摘みを呈する。第106図22～24は、短頸壺で、体部下半はいずれも欠損している。第106図25・26・第107図1～3・6～8は、瓶に該当する。第107図2は、平瓶で頸部以上は欠損している。第107図3は、浄瓶の頸部と考えられる。第107図7は、横瓶で体部外面は叩き後カキ目調整を施す。第107図8は、双耳瓶で頸部上半は欠損している。第107図4・5は、高坏の脚部の一部と考えられる。第107図9～12は、甕の口縁部である。第107図13～16は、鉢で14は外面にカキ目調整を施す。



第103図 IV区SR1出土土器実測図-1（縮尺1/4）